

時 報

甲南山岳部創立40周年記念号

甲南山岳部・甲南山岳会



目 次

草創当時をしのびて……………	伏 見 義 夫……………	1
記念号発刊にあたりて……………	香 月 慶 太……………	3

I 40 年 の 歩 み

アルピニズム宣言……………		5
創 成 期……………	香 月 慶 太……………	6
アルピニズムの揺籃……………	近 藤 実……………	10
アルピニズムの開花 (第一期黄金時代)……………	伊 藤 収 二……………	22
〃 (第二期黄金時代)……………	福 田 泰 次……………	27
戦時下の山岳部……………	小 川 守 正……………	41
終戦と部の再建……………	河 崎 厚 二……………	51
学制改革と大学山岳部の発足……………	阿 部 公 義……………	56
大学山岳部……………	田 辺 潤……………	60
〃……………	越 田 和 男……………	63
〃……………	武 田 雄 三……………	67

II 主 た る 登 攀

小 槍……………	伊 藤 愿、檀 淳……………	73
瀧沢谷涸沢岳登攀……………	伊 藤 愿……………	78
劔岳・早月尾根……………	〃……………	85
錫杖烏帽子岩……………	秋 馬 晴 雄……………	91
奥穂高及ジャンダルム附近……………	伊 藤 愿……………	95
前穂高北尾根第4峯又白側……………	近 藤 実……………	100
穂高ジャンダルム第一テラス北面……………	伊 藤 収 二……………	103
北穂滝谷第一尾根……………	近 藤 実……………	104
穂高 〃……………	伊 藤 収 二……………	108

前穂高奥又側バットレス	伊 藤 収 二	111
春の南股合宿	伊 藤 新 一	114
春の鹿島槍東尾根	近 藤 実	116
三の窓チンネ	伊 藤 収 二	125
劔岳西面池の谷生活	奥 山 正 雄	126
天狗より穂高小屋へ	赤 松 二 郎	137
夏の荒沢	"	139
均子岳信州側	山 口 雅 也	143
春の白出沢生活	鷲 尾 顕	144
奥又白谷より北尾根登攀	小 川 守 正	151
白馬槍ヶ岳北山稜	広 瀬 健 三	159
冬の前穂Ⅳ峰バットレス	柏 敏 明	162
利尻岳	長谷川 恵 一	167
小窓尾根事故報告	雨 宮 宏 光	175

Ⅲ 山 岳 寮

甲南時代のことども	西 村 格 也	177
自分のこと山のこと	楠 木 正 夫	186
伊藤愿さんの思い出	田 口 二 郎	189
昭和7年涸沢の思い出	近 藤 実	198
北穂第一尾根の思い出	伊 藤 収 二	201
若き日の思い出によせて	赤 松 二 郎	203
私の甲南山岳部生活	伊 藤 文 三	206
夏奥又白谷・前穂東壁の思い出	福 田 泰 次	211
杓子東壁登攀裏話し	"	213
十年一昔	阿 部 純 一	216
白馬槍ヶ岳北山稜	広 瀬 健 三	217

Ⅳ 主要登攀記録	218
----------	-----

Ⅴ 会 員 短 信	221
-----------	-----

Ⅵ 会 員 名 簿	229
-----------	-----

草創当時をしのびて

伏 見 義 夫

歳月は流れるがごとく過ぎて、わが甲南山岳部も誕生してから、ここに40年という長い歴史を刻んだ。たとえ短時間ではあったが、いまだ立ち得ざる若年で初代部長という栄誉ある重責を課せられた私も、同様に年を重ねて今年はまさに古稀に達したことを思えば、働きざかりの人の一生にも匹敵する長さである。しかし山高きが故に尊からざるがごとく、歴史もながいばかりが能ではないが、わが甲南山岳部の踏みしめて来たこの40年を顧みると、そのことごとくが輝かしい業績の連続であって、関西山岳界における屈指の先達として残して来た足跡は、栄光に満ち満ちたもので、永くたたえられるに値いするものであったと思う。これ全く創立当初の部員諸君——今はなき伊藤愿・檀淳の両君をはじめ、西村格也・香月慶太らの諸君が第一線の指導者としてたゆまざる努力と研究を重ねられた賜にほかならぬことはいうまでもないが、それと同時に当時在阪の石川欣一氏や藤木九三氏らのごとき部外先覚者の温い御援助があずかって力のあったことを想い浮かべて心から感謝の意を表さぬわけにはいかない。

ここに甲南山岳部の過去40年の歩みをまとめられるにあたり、私にも貴重な誌面を割愛されて何か書けとのご注文ゆえ、いささか私事にわたって恐縮ではあるが、私が在任当時の草創時代の部内活動の一端をお伝えしたいと思う。

昭和初頭のわが部には1人の先輩もなく、在校部員自身が部の全体であって、ようやく高等科に進んだばかりのハイティーンの連中が夏はアルプスの縦走に、冬はスキーの練習に出かけて自からの技術を練り、平素は進んでリーダーとして尋常科に在籍する少年部員を教室に集めてクライミングの映画による手ほどきから、週末には芦屋のロックガーデンに合宿して登山技術の基本を手をとって教えるという有様で、いわば山岳部の幼稚園時代であった。それだけに上級生の負担は大きく、よほどの強い忍耐力と深い愛部精神がなくてはやって行けるものでは

なかった。おかげで散歩以外に何1つ能のなかった私までがチムニーの登攀やアップザイレンに少なからず興を覚えたほどであった。また上高地における尋常科のキャンプにも部員並みのバッグを背負って同行し、共に寝たまではよかったが、夜中に水がついてほうほうの態で宿に居を移したこともあった。さらにまた折悪しく坐骨神経痛になやみ、腰を擦りながら信州野沢におけるスキーの合宿にも同行した。しかし膝を没する雪中を強行してやっと宿にたどりついた私には、とてもゲレンデに出ての監督などは思いもよらず、万事を香月リーダーに任せ切りで私自身はもっぱら入浴と炬燵に明け暮れて、やっとなおったころには合宿の予定日数も無事に終り、すごすごと帰校せねばならなかった。

かようにあまり役立たぬ部長ではあったが、部員達はいくみしやすい兄貴としてよくなつてくれた。その春の学友会の予算査定会議では大いに奮闘して、当時最有力の部であった野球部に少しも劣らぬ500円という当時では最高の割当てを獲得したことは、部長としてせめてもの働きであったが、これというのもわが山岳部の活動があまりにもめざましくて校内全般によく知られていた結果にはかならない。ちょうどその年度に伊藤忠兵衛理事がわが部のためにヒュッテを建ててくださったのではなかったかと今思っている。

昭和4年の5月末に私は長崎高商教授に転出した。その節には部の幹部諸君が大変心配してくださった。そして全部員が集まって惜別の写真をとってくださるやら、マッターホーンをちりばめたバググルをくださるやら。私は今も甲南山岳部を思い出すごとに、これらの品々を取り出して、部の隆盛を念じつつ、あかづながめている。

(旧制甲南高等学校初代山岳部長)

記念号発刊にあたりて

香 月 慶 太

ひとくちに四十年と言えばそれまでだが、私にとっては長いようでもあり、また四十年前が昨日のことも思われる。甲南の山岳部が生れたのは大正十一年。それは旧制高校、その中でも日本に数少い七年制の高等学校として甲南が関西で最初の名乗りをあげた年であり、私が中学校から高校尋常科2年に編入された年でもあった。いくら生意気盛りのはずみだとは言え、少し歩けばすぐにアゴを出すその頃の私がどうして遠足部など作りましようかと提案したのか、今まで私自身納得がいけない。校友会総会の議場でただ何となく発言したくなった。動機はそれだけだが、それが私の人生に大きく作用するとは想像もしなかったことである。その後三年を出ずして私は幾人かの仲間と共に山霊に魅せられるところとなり、学業をさて置き山岳部作りに没頭する始末。お蔭で山仲間はグングン増え、山岳部として確固たる歩みを進め、遂に今日の姿まで四十年の歴史の頁を重ねることが出来た。然しその道は決して坦々たるものではなかった。全校生の二割近くを部員名簿に連ねる拡張時代があるかと思うと、解散壊滅に近いまでに打ちのめされた時もあり、近世日本史の歩みにも似て相当浮沈に満ちた足跡を残している。その間に部長の先生を含めて私達の仲間は全く献身的な努力を以て部の育成発展につとめてくれた。その功績の数々はきっとこの冊子の中で輝しい記録となって新しい光を放っているであろうが、想えば揺籃期から発展期にかけて不滅の活躍をした仲間の多くが、今は幽明境を異にしてしまっていることに私は限らない愛惜と哀愁を覚えるのである。

昨秋四十周年を記念してロックガーデンのリリーフの下で催した物故会員の慰霊祭に、私達は亡き仲間の俤をしのいで、更めてその偉大な足跡に心を打たれ、その霊が永久に山嶺に安らかに止りたまう様、深々と黙禱を捧げたことだった。

若い仲間が四昔前からの山岳部の在りし姿をふりかえり、明日の栄光への糧と

もするべく四十周年記念号を上梓する仕事に取り組んでいる。またその仲間はヒマ
ラヤ・エクスペディションを目標に真摯な精進を続けている。これ等の力強い息
吹きを身近に感じて、不惑の齢を迎えた山岳部が山岳会と共にいよいよ健実な歩
みで前進し、尊い歴史の上に一層光輝ある頁を積み重ねて行くことを期待して止
まない。

(旧制5回卒業 山岳会々長)

アルピニズム宣言

(甲南高等学校山岳部報告創刊号より)

現時我国の山岳界はその澎湃たる登山流行の大潮流の只中にあって、大なる一飛躍をなさんとしている。即ち今や、登山概念に於ける。将又、登山形式に於ける進展段階に立っているのである。

山岳の客観性研究は主観的内容を帯び、登山概念の主観的発展的必然的にその上層建築たる登山形式の変遷を齎らしたのである。理論形式の進展は必然的に実行形式の発展に結果したのである。登山術の概念に就いての煩些なる論争は今や存在の合理性を失って了った。

斯くして今や新しき概念は主観的傾向を帯び、登山形式に於ては Ohne Führer の主張となったのである。

然らば又 Alleingehen に就いても、Alleingehen が登山概念の Kategorie 外なり、とは誰が断言し得るか。

遮莫、荒れ狂ふ嵐の中の幾時間、冷き岩稜、高なる胸、緊張の一瞬間、寒冷、寂寥の岩小屋に送る忍苦の十数日、その真摯なる態度、進り出る若き生命の躍動、山行く男の子、これこそ我等若人の精進する姿である。

(創刊の辞に代えて 1927. 11. 13)

I 40年の歩み

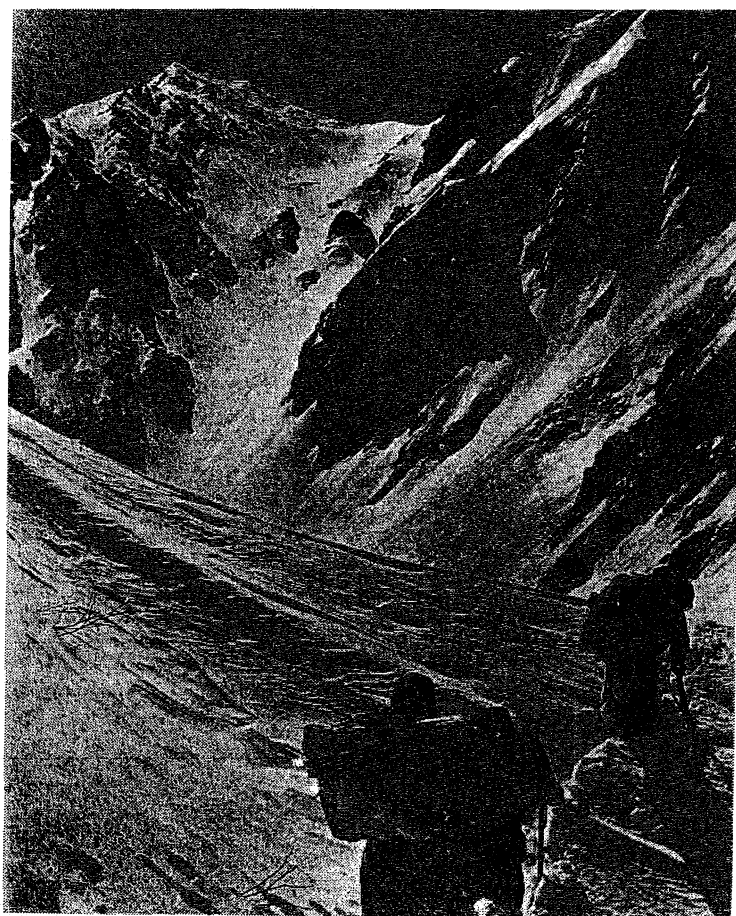


北穂高岳滝谷

時 報

甲南山岳部創立40周年記念号

—— 物故会員の霊に捧ぐ ——



甲南山岳部・甲南山岳会

創 成 期 (大正12年～昭和5年)

香 月 慶 太

山岳部四十年の歩みをふりかえる前に、私はヨチヨチ歩きさえ出来かねてゐた大正末期から昭和初期にかけての山岳部を、幾多の困難と戦いながら今日の躍動する確固たる部になるまで営々とつちかい続けて来た仲間に関先づ深甚の敬意と感謝を捧げたい。その仲間の内、而も多くの古い同志は既に亡い。それ等の人達のその時代、その時代の姿は本編の中に納められて不滅の輝きを放つてであろうが、過ぎし苦楽の憶い出を俱に語り合い得ぬことに私は限りない淋しさを覚えるのである。遙かに瞑福を祈り、この後ともいつまでも山岳部と山岳会の上に加護を垂れ給はんことを念じて止まない。

大正12年の春、それは関西で初めての七年制高等学校が甲南によって開かれた年の新学期早々、山岳部の前身たる遠足部が何の身も心にも準備のない私のその場の発案によって校友会総会で誕生した。私は私のこの行いに大きな責任を感じた。然し山登りは私の最も苦手とする運動だったので当初の一年余りの間は紅葉狩り程度のワンダリングをやっただけで殆ど無為に過ぎてしまった。

大正13年の二学期初め、夏休み中の記録を話し合った時に私は隣りの級に檀淳なる精悍な仲間の居ることを知った。檀は彼の兄やその友人の三好毅一（当時関西登山界の先端を行ってゐた神戸高商登山部の闘士）等と未だ一般には知られてゐなかつた芦屋ロックガーデンに数回行ったことがあると話して呉れたのである。それまで微かに遠足部として行動してゐた入江明（朝日石油代表取締役）と祇園清（大同生命大阪支社長）に相談して檀を遠足部に誘い込んだ。彼は喜んで仲間に加つて呉れた。私はこの檀との結び付きを山岳部発展の第一のEPOCHと考えてゐる。

大正14年、この年から檀を加えた四人の動きは急速に活発の度を増した。遠足部は山岳部に名を変えた。その頃神戸には ROCK CLIMBING CLUB (RCC) と KANSAI WANDERING SOCIETY (関西徒歩会KWS) の二団体が権威を持てゐた。私達はその動きに倣つて山岳部の運営を考えた。自づと足はロックガーデンや神戸裏山に向うことが多くなった。当時流行のカウボーイ遊びに使つた投げ縄用のロープを携えて高座の滝から飛び尾根を這つて上ったり、六甲の大池畔や淡路島のキャンピングをしてゐる間に山岳部の基礎がだんだん固まっ

て来た。やがて東館の階段の下に部室も貰い、岩登りのためにアーサービルのザイルも買った。私達もクリンカーやトリコニーの鋏をいかめしく打ちつけた靴を揃え、屋根職が使うハンマーを用意した。どうやら部らしい形を整えて翌年の新学年を期して大飛躍すべく備えたのである。

大正15年に山岳部の第二の EPOCH が訪れた。4月の始めに神戸高商の三好と雪の比良武奈岳へ行った。麓でのキャンプと輪カンをつけての雪中登山で檀と私は何か新しい方向を導き出された様に感じた。学校が始まると早速山岳部員の募集に乗り出したのである。

この時に加入して来た仲間に伊藤愿、西村格也が居り、尋常科では湯川孝夫、喜多又太郎、水野健次郎（美津濃副社長）等がゐた。之等の STAFF が爾後の活躍の中心となり、就中伊藤愿の存在は内外に大きな反響を呼ぶに到った。5月の週末に奥池で新入部員の歓迎キャンプをやった折に参加したのがこの面々で偶々雨が激しくなり芦屋川の途中で天幕を張ったが、濡れながら苦勞したキャンピングが一揆に仲間の気持ちを強く結び付けて山岳部の大きな発展の緒口となった。

KWS が発刊してゐた NEWS の美文に倣らい“奇岩怪石そそり立つロックガーデンに岩の香求めて云々”と言った掲示を大きく張り出して仲間の勧誘につとめ、毎日曜日のトレーニングを続けた。運動場の西北隅に作られた運動部の部屋の最北端に部室を確保してからは授業時間の間の休みにここへ集る仲間が日毎に増えだした。

その年の夏に初めてのアルプス行きを催した。有明—燕—槍—上高地—徳本—島々の所謂アルプス銀座ではあったが背山慢歩から、岩場の練習に踏み出し、次いで 3,000メートルの山に方向を向けたこの行事は我々の山岳部が実質的に遠足部から脱皮した第二、EPOCH の頂点となるものと言えよう。参加者は磯田辰男以下伊藤愿、檀、西村格也、前田敏文（甲南大学講師）長尾、香月等であったが、この夏を境に部の発展は急速に近代的色彩を深めることになった。それにはもう一つのエピソードがある。夏休みになる少し前であったか、低山徘徊を部の方針としてゐた当時の部委員長磯田さんは我々の岩登りを足掛りとする近代登山への指向を苦々しく思って或る日私と檀を部室に呼び、鉄拳を以って方針転向を強いられた。なる程私達は委員長とは何の相談もせず岩登りをトレーニングの主体としてゐた事に反省はしなければならなかった。然しそれが腕力でなされたことと、今後の学校山岳部の在り方が近代登山形態の先達の役割を持つべきだと言う私達の考え方に一沫の疑問も挟み得ぬ自信を持ってゐたことによって、反って覚悟と団結を強くする結果となった。檀と私は殴られて熱くなった頬を押え、涙

に涸びながら愿と格さんに決意を訴え、同志的な結合を固くして山岳部の建設に邁進することを誓い合った。これがアルプス行の動機となり、亦多雪のため実現はしなかったが穂高での岩登り計画になったのである。今から憶えばあの時に殴られたことが山岳部の近代化への大きな拍車になった訳で磯田先輩にあらためて敬意を払うべきであろう乎。

山岳部でスキーを始めたのもこの冬である。年号が大正から昭和に変わったその正月に、オーストリー式のスキーを持って鉢伏に入ったのが部としてスキーを採り上げた最初の計画であった。当時好日山荘の元祖である西岡一雄さんに相談して歩く度にギッコン、ギッコンと音のする発條のついたリリエンフェルトのスキーを檀、愿、格さん、野田真三郎（住友金属鉱山）、それに私の五台を購入した。神鍋、伊吹、宇奈月と合宿して兎も角早く後輩の仲間に教える様にならなければ、と練習に励んだ。成果は別として、仲間を増やそう、それには自分等がリーダーとして頑張らなければならない、と言う心構えに燃えてゐた当時の私達の気概は顧みて懐しさに胸迫るものを感じる。

昭和2年の春から部員制度を採用した。毎日曜日の岩登りやワンダリングの掲示で続々と部員が集り、長屋の部ルームは休み時間には尋常科の部員でハチ切れる許りになり、安曇節、中野小唄に“ 護れ権現 ”の歌等が数十人の合唱となり、その唄声に誘はれて新しい部員が飛び込んで来る有様、この異様な風景は学校の名物にもなって来た。部歌を懸賞募集したら応募は伊藤愿一人、その当選作は現在歌われている、“山の歌 ”と“ 雪の歌 ”の二つ。“ 山の歌 ”の作曲は平生を通じて専門家に頼み、“ 雪の歌 ”は石原徳春に作って貰ったが譜面を読める者が居ないので、私が妹にピアノで教わり、忘れぬ間に翌日部のルームで皆に教える、そこで大合唱になると言った工合で、和気霽々の裡に遂に部員が八十名を越える大世帯の部になった。

ロックガーデンのトレーニングもザイルパーティーが十組位になって岩場はどこを見ても甲南のメンバー許りが取り付いていた。部長の伏見教授も、配属将校の田村中佐も、独乙語のフッパ―講師も部員とアンザイレンして行動を共にされた。こうした多数部員の集結の中から、又その集結を土台として私達は高度登山のメンバーを創り出し、増やして行くことを考えたのである。

昭和2年の夏には北ア、南アと分れて行動した。伊藤愿の異様に躍動した登高意慾はこの辺りから内外の注目を集め出した。山岳部が単に学校の内面的な存在から外へ向って一步を踏み出したのもこの頃と言えよう。山岳部報告創刊号を上梓したのも、又その中の記録を昭和2年からとしたのもその現われである。こうした部の移推は必然的に雪の山に眼を向けることとな

り、この年の暮から昭和3年の春にかけては関温泉のスキー合宿で部員の養成に努めたが、愿は3月の槍ヶ岳に、五月の北ア縦走に、春山の先駆をつとめている。

昭和3年の夏山は北ア、南アとパーティも増えて漸く山岳部の形が整って来た。部員の養成の成果が見え始め、三高、四高、六高、八高、松高等の仲間入りが出来るまでに育って来た。

昭和4年の春は山岳部として第三の EPOCH へ入る記念すべき季節となった。伊藤愿が独りで上高地に入り、鹿沢で一息入れてその足で再び上高地へ燕返しをする奮闘振りに、部の志気は愈々奮い立ち、伊藤、檀、西村格、湯川、香月（他に神戸一中生の大島寛一君）で積雪期の最初のパーティーを編成、3月の槍、穂高登高行が実現した。一ノ俣と上高地で早稲田大学の連中と同宿したのが後に思想問題で部の存在が危ぶまれる程の大揺れを起した端緒ともなったものである。その頃は早稲田と慶応が山でも張り合っていたが、坊ちゃん学校と見られる甲南は、相似た慶応と親しまず、少々左派じみた早稲田に反動的に接近する様になった。その影響が後日マルキシズムを部員の思想に導き入れる結果を招来したと私は考えている。

部活動としては春山の輝かしい第一夏を記録したが、それまでに山岳部を育てられた伏見教授が新学期と共に長崎高商に去られた。校内で最大のシンパであった伏見部長を失い、一時はどうなるかと心配したが、同教授の後任として来られた地理の岡本重彦教授は進んで部長を受けられ、前任部長にも増して山を愛し、山を理解して私達のボスになって下さった。他面、この春山と時を同じくして妙高グルワのスキーツアーに行きすっかり山霊のとりこになった田口一郎、二郎の兄弟が部へ身を投じて来たことは、山口省太郎の入部と共に亦一つ大きな力を齎すことになった。

伊藤、檀、西村の3人が卒業して先達陣に穴があいた観があったが既に春山活動で躍進のはづみが付いたところへこうした新部長と新部員を迎え入れた山岳部は、その穴を埋めて尚俄然力強い前進を続けることになった。第一回の山祭りで氣勢を揚げ、夏山は南北アルプスの各方面に分散登山を行い、9月にはそれ迄の役員会制度を改めてリーダー会中心の運営に切り換える等、第三の EPOCH はその最高調に達した。山岳部報告第Ⅱ号はこの熱し切った雰囲気の中で発行された。

外面的な部の拡大、活動が華やかになる反面、内省的な動きが ALPINISM の論議と共に部内の空気をゆさぶり出して第三の EPOCH は後半に入ることになる。報告創刊号のアルピニズムス宣言は些か愿の主観が勝った内容ではあったが当時の一つの旗印として私達も共鳴して掲げたものであった。然し部員が増え、部の活動形態が変わって来、若年部員が成長して来る

と、前述の思想傾向の問題も絡んで、ALPINISM も自と新たな数多くの観点から論ぜられる様になる。マンネリズムになり易い従来の考え方は、新人によって刷新される。その時代までの支えになって来た登山理念も、新しい時代にはそれに適わしい理念に置き換えられるのが至当である。山岳部の創成期を、三つの EPOCH に亘って徐々に固められ、積み重ねられて来た理念も、昭和4年と共に歴史の中に納められ、昭和5年の春光を浴びて新しい時代の ALPINISM が生れて山岳部は黎明期を迎えるのである。私はこの輝ける前途を祝福しつつその春甲南を卒業した。

(旧制5回卒業・山岳会々長)

アルピニズムの揺籃 (昭和4年～8年)

近 藤 實

1. 背 景

私が分担執筆を依頼されている昭和四年春から八年春に至る期間は、大正末期から続いた経済的不況が所謂帝国主義的發展に活路を求め、軍国主義の胎動に次いで高らかな陣太鼓の響と共にその強引な登場を迎えた時代であり、満州事変の勃発、左翼運動の全面的弾圧という一連の事件が、次第に超国家主義的統制を加えて、国民生活に一種の不安ムードを醸し出した頃であった。然し乍ら、少くとも其の前半期では比較的に富裕な階層の子弟の多い在学生は、その様な時代の波に全く晒されることなく極めて安穏な雰囲気の中に学生々活をエンジョイしていたと言っても差支えなからう。其の後半に至ると、甲南特有のリベラルな気風を身につけた青年達に、社会情勢に対する或る種の反応が起り、後述する部活動に一つの流れを形づくることとなる。

さて、当時の外国登山界では、英国のエベレスト攻撃は既に古典に属し、ドイツのパウアー隊やディーレンフルトの国際隊による「カンチェ」の攻撃が話題の対象になっていたが、特に前者の果敢な東山稜攻撃は若い学生登山者達の志気を大いに奮い立たせたものである。欧州アルプスでは、バリエーションルートの開拓が盛んに行われていた時代であり、主としてミュン

ヘンを中心とする若いドイツ人達と、ドロミテで高度の岩登術を獲得したイタリア人達の活躍が目覚ましい。特に後者の中では1928年に今日の人工登攀が完成されていたが、このアブミと二重ザイルによるオーバーハング登攀法が1932年後期に紹介されているに拘らず（部報Ⅴ—3号喜多訳）それが余りにアクロバティックであるとの見方から当時の登山行動の中に生かされなかったのは聊か残念に思える。

1931年のシュミット兄弟によるマッターホーン北壁登攀は、近代アルピニズムの精髓として私達に感激を与えた。アイガヴァントやグランジョラスの北壁も既に幾度か試登されていたが、その完登はもっと後になる。スポーツアルピニズムの指向する、より困難な登高の実践という意味では其の頃ドイツ人達が代表的チャンピオンだったと思える。或るフランス山岳人が、敗戦（第一次大戦）の屈辱を賤がんとする国家主義的戦斗心が彼等を英雄的登攀に駆り立てたと言っているが、一面の真理を穿ったものと言えるかも知れない。

日本の山岳界では、長谷川氏の「ヒマラヤの旅」による写真集が私達の注目を集めたのを除くと、老大家達は書齋に沈潜し、社会人のアクティブな登山者はあったにしても稀な存在であり、登山活動の第一線は圧倒的に学生達によって占められていたので、彼等は自からの手で登山意識を決定し、その実践を開拓しなければならなかった。当時の情勢や自己の能力から判断してエクスペディションは夢であり、（立教隊のナンダコート登頂は次の時代（1936年）になる）これ等の青年達が外国の傾向に従って、スケールは小さいにせよ国内に於てバリエーションルートの登攀と積雪期登山に、より困難な登高を求めて行ったのは、誠に正当であり必然とも言うべき方向であった。

2. 概 観

さて、吾が甲南山岳部が前述のような時代的背景の中でどのような歩みを辿ったか当時の行動記録を追って概観して見よう。昭和四年（1929年）の春に西村（格）、伊藤（愿）、檀（以下敬称を省く）の優秀な創立時のメンバーを送り出した後、73名の登録部員を擁する大世帯の山岳部が遺産として残っていた。その夏の記録は香月、植田の南アルプス班、湯川、楠木をリーダーとする穂高及び錫丈生活班、田口（一）をリーダーとする劔岳生活班の行動が主なものである。これ等はそれまで縦走一点張りの夏季行動から、初めてベースキャンプを中心として一つの山群を登高するという型式をとった意味で、後年の登山型式の萌芽であり、より深く山を知るという点で成果があったが、その反面、若年部員間のやや放縦に流れた行動や意見の固

執が次に述べる華々しいアルピニズム論争と組織の改変を招いたのであった。この夏季行動の中で記録的には特筆すべきものを認めないが、楠木、井上、秋馬、水野による烏帽子岩登攀がやや光っている。夏山が終って例年行われる六甲キャンプや其他の会合で上級部員の一部で行われた論争の出発点の一つの危機感であった。

外面だけ膨れ上がった部の内部に、登山行動に於ける各人の趣味、主張が多すぎる。若い部員の中にある岩登りだけを以って足れりとする傾向、既に過去に清算された筈の低山徘徊趣味の蠢動、このような動きを放置していたのでは、先輩によって築き上げられた近代アルピニズムへの階段は崩壊し、山岳部は無為無策な群集としてのみ残るのではなかろうか。此処に必要なのは思想の統一とそれを実現する統制力を持つ組織を作り出すことである。簡単に言えば以上が論争の主眼点であり結論であった。この結果その年の九月に既存の役員会とは別個にリーダー会が組織され其の後の山岳部行動の方向づけに大きな役割を演じたのである。この頃の論争焦点たる組織問題については部内雑誌3号の田口兄弟、湯川、足立等の論文と、部報Ⅴ-3号の田口(二)の情勢分析から其の概要を知ることが出来る。

それによれば、校友会の部として必要な委員長以下の役員は事務執行機関であり、部員の総意を代表し行動を決議するのは部員会であるが、リーダー会の当面の任務と存在意義は七年制高校に当然存在する年令差から来る登山意識の深淺を一つの正統な思想に統一し、且つ登山技術の向上を計る為の指導機関の役割を果たす処にあると説明している。又、混乱期から所期の成果が上るまでにリーダー会の専制が行われたことは必然且つ正しいが、部の主流が近代アルピニズムの実践に同化した時には部内デモクラシーは回復され部員会が最高決議機関として本来の役割を演ずるべきだという。

其の根底にある左翼的論理の展開と聊か難渋な直訳的表現の是非は別としても、此の時点に於いて、混乱を乗り越え前進路を開いた当時の上級部員の決断と勇氣、その明快な分析力は敬意を払うだろう。その頃、O. B. の伊藤が適切なアドバイスを部内雑誌3号に寄せている。学生山岳部の進むべき道はパイオニアワークの実践であり其の時点ではウィンターアルピニズムの確立であると指摘し、この為に登山技術の向上に全力を尽すべきで、あまりメタフィジカルな問題の論議に時を費やすべきではないと言っているのは当時の部内の状況を反映していて興味がある。

さて、以上のような部内統制が行われた後に部の登山行動がどのような経過を辿ったか以下に述べよう。

昭和四年の冬は例年通りの関温泉スキー合宿のほかに管平合宿が行われ、猫、四阿等へのスキーツアーが訓練的意味に於て為され、田口（一）、湯川は来春の横尾谷雪中露營の準備偵察の為に穂高に入った。其の後、春の行動に至る期間は特に頻繁にリーダー会、研究会が開かれている。これ等は既述の論争結果を実践に移すための真摯な準備行動であった。部創立者として大きな役割を演じた香月を送った後、昭和五年春の登高記録には、O.B 西村（格）と楠木、西村（雄）、多田、井上による白馬地区の行動と、田口兄弟、湯川、村上、足立、喜多、秋馬による横尾谷雪中露營をベースとする北穂、奥穂等の登頂が現れる。この雪中露營は今日の眼から見れば極めてプリミティブであり其の必然性を缺くようにも思われるが、断呼たる決意を以て積雪期登山にマウンテンクラフトの向上と部員の団結を求めた青年達にとっては充分な存在理由があり其の期待を裏切らなかつたものと考えてもいい。春の槍、前穂、西穂は既に前年卒業部員達が足を仰しているが、由来、エキスパートの去った後に次代を背負う部員達が前者の業績を維持向上せしめんと努力し悩み、これを年々オ々繰り返して前進して行くのが学校山岳部の姿であり宿命であるとするれば、この春の行動記録は立派なものだと言えるだろう。

五年の夏になると、次の冬期行動に備えて、村上、田口（二）、秋馬が乗鞍に探查行を試みたほかに、各リーダークラスが下級部員を連れて、色々な縦走路を取り、最後に潤沢岩小屋をベースとして、集中登山を行う型式が採られた。この合宿に伊藤（愿）、西村（格）両 O.B が熱心な協力と指導を惜まなかつたことが記されている。この時のメンバーには既述の部員達のほかに、伊藤（新）、関、佐山といった後年活躍する人達が幼い顔を出しているのに気付く。登高としては、前年よりも多い訓練的登攀が既踏のリッジやピークに行われた外に伊藤（愿）、田口（一）によるジャンダルム飛弾尾根登攀が光っている。

此の頃ロックガーデンの10米足らずの岩で、こせこせしたテクニックに凝るのはアルプスの岩場では通用しないのであって、むしろアンザイレンしたまま早くかつ安全に大きな尾根筋を行動するのが実際的なのだという意見が出た結果、下級部員の私等も暫らくの間そんな恰好で芦屋裏山の砂尾根を走り廻ったことがある。然し乍ら、後年のバリエーションルート開拓に見る部員の実力には、むしろロックガーデンの小さな岩場で獲得された微妙なバランスが大変役立ったように思える。この事はスケールこそ違いが、フランスのル・ソスワに於ける比較的小さな岩場の訓練が、ドリュエ西壁登攀にまで発展したのに似ていると言っては過言であろうか。

この年の九月に井上が家庭の都合で転校した。体力的にも精神的にもエキスパートになる資格を備えた人物で、そのまま在学していれば後年部の登高史に異彩を加えたであらうと惜まれる。

五年の冬までは、十二月の行事と言え、野沢其の他の温泉地スキー場の合宿が恒例であった。これは当時まだ夏季登高の対象となるバリエーションルートを積雪期に挑むのは自己の能力の限界外であると正當に理解していた結果に他ならないが、一面、スキー技術そのものをマスターすることが山岳部活動の一つであるとの見解に立っていたからであろう。

然し乍ら、この冬には、スキーを積雪期登山の一手段と考える見方から、中、低山のスキーツアーに満足せず、一応3,000米の高度を持ち当時は冬山的概念をもって考えられた乗鞍が部員全部の訓練の場として選ばれた。確かに其の頃の乗鞍には冷泉の営林署小屋と、冬季には使用不能の肩の小屋しかなく、今日のようなスキー場としての面影は全く認められなかった。年内班に湯川、西村(雄)、田口(一)、足立、秋馬、水野、野口の名を、年後班に、村上、笹岡、多田、喜多、近藤及びO.B伊藤の名前を見る。この合宿は登山活動として見るよりは下級部員に冬山を経験させ併せてスキー技術の向上も計るという意図の下に行われたわけだが、当時初めて冬山の冷厳さに触れた下級部員の一人であった私には、上級部員の期待した闘志の幾若かが芽生えたように思える。

此処で当時の部員のスキーに就いて少し触れておこう。第一回冷泉合宿の当時は、スキー経験の多いO.B西村や、田口、水野其の他少数の現役部員を除いて全般に余り上手であるとは言えなかった。伊藤(愿)のインナーリンと称する後傾内足荷重を以てするターンが一部に流行っていてこの為に連続回転が困難なのであった。其の後数度の積雪期登山やスキー行を経て総体の技術も向上し、昭和七、八年頃には一般スキー場に甲南の一隊が現れると圧倒的な滑降ぶりを示すという光景を見るようになった。無論これはスキー人口が少なく一般スキーヤーの経験が浅かった為でもある。この頃の回転技術や各人のスキー振りについては部報Ⅵ-1・2号の田口(一)や山口の文に詳しいが、要するに戦前アールベルグ派の流れを汲む前傾外足荷重による回転を主軸としたもので、現代の滑降技術とは器具もそのメカニズムも異なるが、それはそれなりに安定したものであった。

昭和六年の春になると、湯川、田口(二)、秋馬、喜多、笹岡による穂高生活の、岳川よりジャンダルム、天狗より西穂、南岳等の登高記録、村上、黒田、安井による針ノ木生活、西村(雄)、水野、多田、近藤、野口による猿倉生活の、小蓮華から白馬山岳往復等の記録が見られ

る。これ等一連の積雪期登高は記録的に特筆する価値はないとしても、下級部員を含む部員全般のマウンテンクラフトが一定度の向上を示した証左と考えてもいいであろう。

尚矢張りこの春に行われた田口（一）、西村（雄）による南股から六左衛門滝を通過の杓子登頂が次年度から展開する南股奥の山々の開拓の端著となる。

この春に田口（一）、湯川、楠木は大きな足跡を残して大学に去り。西村（雄）と村上が先頭に立つこととなる。

この五月に、田口（一）O.B と西村（雄）による鹿島槍東尾根の登高記録がある。積雪期としては第一登であり後年の春の登高への原動力ともなったものであった。同じ時に田口（二）、伊藤（新）の鎌尾根登高が見られるが、これは同年冬の登高の前駆となる。

昭和6年夏期の行動記録は、後立山縦走の後、岳聯のA・Cをベースとして剣岳生活を送ったパーティーと、涸沢をベースとして集中登高を行ったパーティーの活動によって満される。これ等のメンバーの中には前年の部員の他に、山口兄弟、松野、伊藤（収）、田口（二）等の名前が見られる。登高記録として剣生活の方は例年の如く八峰、源次郎の訓練的登攀に終わっているが、登高に於ては、北穂滝谷の各尾根が探査され、第三尾根及び主稜北山稜の田口（二）、伊藤（新）、関、佐山による初登攀のほか、比較的困難なジャンダルム第二尾根、前穂第三峰フェースのバリエーションルート開拓が行われている。部報Ⅳ-3号の田口（二）による詳細な滝谷尾根の紹介は今も尚文献の価値を失わないであろう。

春夏冬の休暇を長期の登山計画実施に当てるのは学生々活から規制される当然の結果であるが、その他にも少しの暇を見つけては、大山、雪彦、大和の山等、比較的近傍の山々に出かけたり、この年の十一月漂然と独り木曾駒を訪ねた喜多の記録等が残っている。これ等はそれに参加した人々には矢張り懐しい思い出として残るものであろう。

六年の冬には昨年の例に従い同じ理念の下に喜多をリーダーとし西村（格）、香月、湯川等O.Bと中堅部員及低学年部員を含む冷泉スキー合宿のほかに、田口（二）、近藤（新）による鎌尾根からの鹿島槍登頂と、喜多、笹岡、野口の岳川からの前穂登頂が行われた。記録的価値からは大したことはないが、当時の山岳部にとっては初めての厳冬期登高としての意義であろう。筆者は高校一年であったが、大川出合の近くにある煤けた営林署造林小屋の熱情とユーモアに満ちた九日間の生活を忘れがたい。

昭和七年に入ると、西村（雄）、村上、黒田がそれぞれの業績を残して卒業し、前年の終りにチーフリーダーとなった喜多は家庭の都合で田口（二）に其の位置を譲った。

この春には、多田、水部の立山、剣行と松野、山口等による乗鞍スキー行のほかに、白馬南股の本格的合宿が始まる。これには、田口（二）をリーダーとし近藤、山口兄弟、松野、伊藤兄弟、関、佐山、山岡が参加し、つねに協力を惜まぬ田口（一）O.B が加わっている。この合宿の収穫は記録的にさほどのものでなかったが、積雪期の唐松沢に初めて入り不帰一峰の試登と牛首ダイレクトの登高が行われ、この附近の山貌を掴んだ所に意義を認められるし下級部員のスノークラフト向上にも寄与する処があった。

南股奥の山々についての詳細は、山岳第31年第2号に田口（一）が先輩としての愛情をこめて部の行動を記述した文に見ることが出来る。この春田口（二）、近藤、伊藤（新）は春の鹿島槍東尾根を攻撃するために一の沢の頭まで登ったが、第二ジャンダルムの積雪状態から登攀不能と決断して引き返した。

この頃には部員全般の積雪期登山に対する知識と技能は或るレベルに達したので、卒業部員が去って行くことで部活動が遅滞や混乱を示す恐れがなくなり、比較的円滑に次代責任者への受け渡しが行われるようになった。がそれだけこの少数精鋭主義の中に一種のマンネリズムが胎動し始めたとも言える。

この六月に甲南山岳会が誕生した。それまで先輩の数も少なかったので各個人がそれぞれのニュアンスで部とのつながりを持っていたが何か多少有機的な協力体を造ろうという機運がこの誕生に至った。この辺のいきさつは、部報Ⅴ—3号の田口（一）の記事が概要を伝えているが、爾来連綿として32年間、会長として其の育成に努めた香月の努力には誰しも感謝を惜しまぬであろう。

昭和7年夏の記録は非常に華々しい。伊藤（新）、関による鹿島カクネ里バットレスの主稜登攀はバットレスそのものについては第二登であるが、一つのバリエーションとして価値があり、この地区への初めての部の進出という意義がある。穂高では、例年の通り若干の縦走路をトレースした後、涸沢にベースを持つ集中登山が行われた。この頃には長年の積み重ねが、この附近をプレイグラウンドの如く安易に考えさせていたので、未踏のリッジやフェースを探すのに大童わという状態であった。

この夏の興味は専ら滝谷に残された尾根と、前穂北尾根の又白側に向けられたので其の結果が四峰バットレス、滝谷第一尾根、前穂バットレス、ジャンダルム第一テラス北面の登攀という形で現れた。この合宿には、足立をリーダーとし近藤、山口兄弟、松野、鴛渕、伊藤（収）山岡、比企のほか、O.B として西村（雄）、村上が参加していた。伊藤（新）はカクネ里が

終ってから穂高に廻って弟と共に前記の諸ルートを開拓したのであるが、山生活40日に互る登高意慾とスタミナは敬服に価する。

この夏に初めて遭難事件が起きた。その程度は軽いものとは言え、これに厳正な批判が加えられたのは当時のチーフリーダーだった田口（二）の責任感と、常に愛情と関心を以って部の育成を見守っていた先輩達の協力によるものと言える。この遭難の内容については別記したこともあるから此処に省く。詳細は部報Ⅴ－3 遭難批判会報告にある。

9月になってチーフリーダーのお鉢は近藤に回って来た。

この冬は例年の行事化した乗鞍スキー合宿と岡本部長の御世話による管平合宿が30名に近いスキー愛好者の参加の下に行われた他、登高パーティーとしては、近藤、松野、伊藤（新）、関が上高地に入り、岳川から天狗尾根とコブ尾根を狙ったが、天候に災いされて為す処なく退いている。

其の頃、部の上級部員達は新しい記録を作ることに熱心な余り、自己の登山行動に行き詰りと疑念を感じていたし、一方、スキーだけを楽しもうとする別派的行動も表面化して来たが、これ等の情勢を分析し徹底的な解決に導びかんとする熱意と能力に缺けていたように思える。

昭和八年の春には田口（二）、足立、多田、喜多、水野、安井、笹岡の多くの上級部員が学窓を去って進学した。この人達が量質共に其の頃の中堅として部史に活躍の跡を遺していることは前掲の通りである。

この春の行動記録には南股合宿と乗鞍スキー行、槍、北穂登高班、鹿島槍東尾根登高班の行動が見られる。

南股合宿は近藤、伊藤（新）、山岡、比企、国府、奥山、喜多（豊）、加藤と O. B として田口（一）と大学に入ったばかりの喜多（兄）、水野、多田が参加していた。登高記録として田口（一）、伊藤（新）による不帰第二峰と、田口（一）、近藤、伊藤（新）による天狗尾根の試登があるが、特に前者のスッキリした登高に風邪が何かの為に参加の機を逸したことは筆者に後まで悔を残した。

穂高班は松野、関、伊藤（収）、山口（良）によって行われた。鹿島槍東尾根は、大学入学はやはやの田口（二）と近藤、伊藤（新）によって登高されたが、筆者にとって現役部員として最後のスッキリした登山であり一種の感懐を以ってそれを終えたことを忘れ得ない。

以上で私の分担する期間の部史概観を終り、次代を伊藤君に委ねる。

3. 関西学生山岳聯盟

当時の甲南山岳部を語るに当って岳聯についても若干附け加えて置く必要があるだろう。

この聯盟は昭和四年春、京大高橋、大阪医大水野両氏の間に行われた話し合に其の端を発し、ついで6月中旬の京阪神七校による会合、準備委員の決定の後、6月23日発会式を行うに至って成立した経緯がある。創立に当っての抱負は、閉鎖的、排他的な各校山岳部の共通の場を作ることによって、その壁を打ち破り、結集した力を以って登山界の発展に寄与しようというまことに大義名分の通った、誰しも反対し得ない主旨に立脚していた。岳聯報告第一号は昭和五年に出されたが当時京大にいた伊藤がこれを編輯している。

甲南山岳部の岳聯に対する反応はどうであったであろうか。其の初期にあっては前述の主旨に全面的讃意を表し、その発展育成に協力を惜まぬ態勢にあったことは疑いない。部報が部内雑誌と表題を変え、公的発表を岳聯報告に出す為に部内の啓蒙記事に中心をおいた編輯となった事からもそれを推察出来る。然し乍ら時を経るにつれて、創立時の立派な主旨にも拘らず、聯盟は期待通りの動きを示さぬ為に其の関心は次第に稀薄になったように思える。創立当初危惧されたことではあったが、各校山岳部の環境、伝統、アルピニズムへの理解と反応に於ける大きな差が、聯盟の期待する統一行動に除き難き障害となって来た。甲南山岳部は近代アルピニズムの実践に於て第一線にあったが、平均年令の若さと、或る種のエリート意識がこのような対外的人間関係に指導力を発揮するのを妨げていたのかも知れぬ。

昭和七年末から八年にかけて私は岳聯委員として数度の会合に出席したが、創立四年にして、成熟すべき統一行動は尻すぼみとなり、恒例のA.Cと岳聯報告のみが実績として残っていたと記憶する。当時の委員には、同志社児島、京大本野、関大西島、三高杉山等の諸兄が居り、それぞれ個人としては頼もしい山男の映像を与えたが、盛上りの気魄に乏しく、次第に創立当時もっとも戒められていた単なる親睦団体的存在に陥らんとしていた。年々構成メンバーの変るこのような聯盟組織には基本的脆弱さがある。「岳聯の将来というものは或る本質的な矛盾と共に一つの苦悩を私に与える。(中略)その本質に於て鋭い自己批判とその潜在的缺陷と矛盾を清算する時こそ形式的ならざる岳聯の真の誕生である」と伊藤が報告創刊号に述べているが各校山岳部のセクショナリズムは遂にその創立者達の疑念と希望に答えることなくして終ったのであった。

創立6年にして所謂発展的解消をとげた岳聯は其の成果に幾若のものありやと言う疑問があ

るが、現在残っている数冊の岳聯報告こそは、その時点に於て充分史的役割を演じたものと言って差支えないだろう。

4. 岡本部長

私達の時代を物語る時、当時の部長であった岡本教授のことを忘れることは出来ない。先生は昭和四年春、長崎高商に赴かれた伏見部長の後任として着任された。先生の言によれば九州の産であり京大出身らしい。地理学の担任であるが故に山岳部長となられた。多分当時30才代であったと思う。私が初めて授業を受けた頃は中学三年だから、教師と生徒という或る隔りのある関係を一步も出なかったが、型にはまらぬ授業振りや、話が横道に入ると情熱的な口調で延々たる演説が始まるので子供心にこの先生は空想的なロマンティストだと思っていた。

高校生になると其の関係はもっと近親感を深める。当時の私達は前にも触れた通り、左翼的イデオロギーに真理を発見したと思っていたので、教師と学生の関係も甚だドライに割切った不遜な見解を持っていた。例えば、学校当局は或る意味で支配階級であり、「学生大衆」は被圧迫者であるという不消化な論理の展開である。支配階級の代弁者たる教師は、その本質は小市民であり、洋服細民であるに拘らず学生大衆の自治的な集団たる「部」に、支配的、監視的身振りを示さねばならない。彼等の取りつくろった威厳や自己欺瞞的言動は自己の立場を陰蔽せんとする苦悩の現れであって、「賢い」学生はむしろ一種の憐憫の情を以て彼等を迎えねばならぬと言った具合である。

このような考えを持つ、エネルギーに満ちた若い手合いを相手に部長を勤められた岡本先生は今から考えれば随分大変なことだったとも思える。然し先生は、固苦しい教師の殻に閉じ籠るよりは、若い世代の中に理解を求める努力を惜しまぬ心の広い人であった。部長をして居られた5年の間、夏山や、冬春のスキー行に殆ど中学一、二年の世話を引受けて下さったことも仲々出来ないことである。

山岳部の上級部員にとって、一、二年の指導というのは充分大切なことだと分りながら重荷であり、其の困難さの為に尻込みしがちな仕事であった。シーズン前のリーダー会で此の問題は常に悩の種であり、それを引き受けると自分のアクティブな登山行動が制肘されるので責任免れの小田原評定が続くのである。

結局いつも部長がそれを引受けて下さることで論議の終結となり、それが部活動を円滑に進ませる滑剤ともなるのであった。この事についてはもっと深甚の謝意を表すべきであったが先

生に対する一種の甘えがそれをさせなかった。こんな訳で部長はいつも一、二年生のお守り役だったから、私自身を含めた上級部員の所謂ビビッドなパーティーに於ける先生の思い出はないが、むしろ印象に深いのは日常の部長との「つき合い」であって、特に部長宅で屢々行われたスキヤキパーティーは其の最たるものだろう。大抵、晩の五時頃から始まって10時まで続き、休暇中等にはO.B.まで含めて相当な人数がおしかける。誰もが旺盛な食欲と絶間のない駄弁で時間を過すのであった。今にして見ればあれだけの人数がお邪魔して飲み食いするのは幾ら物価の安い時代とは言え、部長にとってもかなりの失費だったろうし、御家族にも御迷惑だったに違いないが、私達の若さは全くそんな事に無頓着だった。

左翼論理を信棒しながら、実践には程遠い日和見主義者だと自分を考えた当時の知識階級の卵達は、妙に虚無的なナンセンスは冗舌を好む傾きがあり、この連中が集った時の騒々しいことは一通りでなかった。無芸大食が一段落すると、先生御自慢の16mmを映写したり当時の所謂「岡本さんに物を聞くの会」が始まる。この内容は要するに一種のY談だが、普段、大きな事を言っている童貞青年だった私達の熱烈な探求心に応えて、それが随分と露骨な質問として表現されたに拘らず、先生は一向に驚かないで人間性の赤裸々なあり方について教示された。私達は真に迫った教訓に興奮し、それだけ先生の人間的暖さに親しみを感じたものである。

冬の頃になると私は用もないのに地理学教室に出かけ、適度に暖められたスチームの傍で一服しながら長い間話し込んだりした。そんな時先生は教師というよりも年長者としての適切なアドバイスを隔意のない態度で与えて呉れたように記憶する。私の卒業前に旋風の起るが如く部員の一部の左翼的实践行動が警察沙汰になった。この事件前後については伊藤君が記述すると思う。私はその前から大学入試を控えて部の活動から手を引き、予算獲得の為の委員長と岳聯委員だけをやっていたのでこの事件の惹起は全く不意打ちであった。然しこの驚愕も部長自身のそれに較べれば小さいものと言えよう。このようなカタストロフの来るべき根元を私自身は知っていたからである。当時一学生の私ですら随分責任追求を受けたから部長の立場は甚だ苦しいものであったと推察出来る。詳しい事は忘れて仕舞ったが色々な推移があった。結局、山岳部は一応その活動を停止し、それに大きな愛情を注いでいた部長の退場が終止符となった。

先生を交えた最後の部員会の写真が手許にある。其の中央に一抹の哀愁を湛えて正面をみつめている面影は印象的である。先生が京都に出発される時の住吉駅の送別群は盛大なものであ

った。特に一・二年の少年達が多かった。先生の人間味に感ずる者が多かった所以であろう。先生は京都に於て病を得られやがて亡なられた。私は多分其の頃軍務中だったのか再び温顔に接する機会なく過した。

5. 終りに

以上で当時の甲南山岳部に関連した記述を終る。其の頃のデーターが比較的乏しく加うるに卒業以来30年の長い才月は記録を拭い去るものであり更に戦争というギャップを隔てて忘却の彼方にあるものを引き戻すのは却々困難な仕事であった。従って此処に書き出された事柄が多分に主観的又は独断的な表現に流れたことを恐れる。特に其の初期の部分については不消化な或は見当違いな分析を冒したかも知れぬ。ともあれ私としては部の主流についてなるべく客観的に述べようと努めて見た。この他にも部の周辺には色々の問題があったし、行動記録の中に名前が出なかった人達の間にも協力を謝すべき人がある。

当時活躍した部員達の人物素描も特に故人について述べたかったが紙数が許さぬし、これは又別個の機会に山岳寮に寄せることとしたい。

尚この文を綴るに当って、古い部報や日誌の類を繙いていると其の頃の光景の或るものは彷彿として脳裏に甦り大変に楽しい時間を持ち得た事を告白しておく。

今や初老の紳士として社会の各方面に活躍している当時の部員達や若い世代の人達に、この拙文が昭和の初期に於ける一部員の眼に映じた流の一面を伝えるものとして受け取って貰えれば幸である。

(旧制9回卒業)

アルピニズムの開花（昭和8年～9年）

（第一期黄金時代）

伊 藤 収 二

前述の如く昭和八年三月には、田口（二）以下甲南山岳部史始まって以来最多数のアクチブメンバーを卒業させた。特に田口（二）は今なおグリンデルワルドの地に眠る田口（一）と共に、スイスアルプス、ヒマラヤに広く足跡を残し後年日本山岳界にとっても V. I. P（大物）となった男であった。のみならず三年にすすんだ近藤、松野、山口は共に理科で大学入試のため、山行きを退いたので、山岳部は急に淋しくなった。特にチーフリーダーであった近藤は、今なお一級の岩壁ルートとして名高い前穂四峯甲南ルートの開拓者であり、その他輝しい業績を残した好漢で万人に愛された。前述の甲南山岳部始まって以来始めての遭難さわぎの当の責任者で部でも大きく取上げられたが、昨今のような大きな悲劇から見れば、アクシデント呼ぶに価しないようなかい傷程度をパートナーが負ったというだけの話で、彼の輝しいキャリアに傷がつくものではなかった。しかしこれが松野の場合だったらこのような小事故でもおこらなかっただろう。松野はそれ程慎重居士で下級生に対する指導もきびしかった。山口は近藤とちがって、きびしい岩登りや積雪期の処女ルート開拓よりも山スキーに情熱を燃した。それだけに前述のようにうまいスキーヤーの多かった山岳部の中でもきつてのスキーヤーであり、理論家であった。彼が阪大在学中雑誌「登山とスキー」に投稿した「無制動回転の理論」はいささか難解のキライはあったが、画期的なものであった。当時経験的にスキーのうまい者は力学がわからず、物理のわかる者で、スキーのうまい者がいなかった中で、彼は唯一の例外であったからである。たとえば当時画期的なクリスチャニヤを説いたと言われるオーストリーのラインル著 Schilau von Heute も、理論的にはおかしい所が一杯あったのである。彼は又シネにこった。当時彼がうつしたシネフィルムが残っていたなら、甲南山岳部にとっても貴重な資料であろう。山口は松野とちがって下級生に甘かった。彼の民主々義的な思想から出たものである。当時の学校生活では上級生と下級生に封建的階級的な差別がある所が多かった。たとえば早稲田大学では、谷川岳へ登るのに、下級生は土合駅という最寄駅があるのにもかかわらず、湯松曾駅より歩かせたということである。上級生が谷川へ行った頃はまだ土合駅は出来ていなかったという理由からである。わが甲南にはそういう軍隊的な雰囲気は全然なかった中にも、山口は時に下級生の面倒を見た。昭和八年の部報に、役員会、リーダー会の他に各学

年より比例代表制による委員会を提案しているのもその思想のあらわれである。

このそれぞれの特徴をもったトリオの現役からの勇退、大量の卒業以外に沈滞した原因があった。すなわち甲南山岳部が目標としていたルートが前年で殆ど開発されて、一時目標を失った形になったからである。

昭和八年の夏は、新人のレベルアップを主眼とした第六回涸沢合宿と剣の三窓チンネ攻撃が計画され、前者は文二伊藤（新）をリーダーとし、尋四の奥山、国社、（以上高瀬より入る）文一佐野、理一山岡、尋四加藤、理三山口、尋三山口、川村、中村が参加し、北穂飛弾側 5 パーティ、北穂 3 パーティ、ジャンダルム、6 パーティ、北尾根 3 パーティの成果を収めた。

剣パーティは理二関をリーダーとし、文一伊藤（収）尋四山口（良）、比企、喜多が、二股に天幕をはって、チンネ附近をねらった。伊藤、比企のチンネフェイス直登がその成果であった。上記山行きの他、例により岡本部長が、一、二年の下級生を連れて、始めて白馬へ行った。参加人員 20 名の多きに達し、前途の有望さを期待させたのであるが、次に述べる思想事件のために、この時の顔ぶれの中で、後年山岳部で活躍した者は僅か、福田、鷲尾、伊藤（文）宇尾の 4 名だけであった。

昭和九年二月、理三山口（省）、理二関、佐山、文二伊藤（新）、理一田口（三）、文一伊藤（収）、佐野という山岳部の中心をなす大半が突如として、特別高等警察に一斉検挙され、御影署、芦屋署に留置されたのである。この事件の背景については、近藤担当部分でも若干ふれられているが、今少し詳しく述べさせてもらおう。

昭和九年思想事件の真相

昭和二年三井、三菱とならび称せられた鈴木商店が倒産、三年初の普通選挙実施四年政友会田中内閣張作霖爆死事件（某重大事件としか発表されなかった）で瓦解、後継の民政党内閣は緊縮政策をとり、益々不況進展、昭和六年世界恐慌、中小企業倒産相次ぎ、首切り反対、賃下げ反対の労働争議激化、農村は凶作にあえぎ、子女の人身売買が社会問題化した。一方裕福な者は今では考えられない程、ゴータン家に住んでゼイタクに暮していた。はげしい貧富の差という矛盾の他に、軍事工業力は世界一流でありながら一方零細企業、農村は「印度以下的」といわれる後進性を持つというように、戦前の日本資本主義は跛行的で矛盾に陥っていた。純真な青年の一部はこのような矛盾を黙って見ることが出来ず、解決策として、マルキシズムに、又一部は右翼愛国主義に走った。しかし時の為政者は、満州を中国より奪取することにより解

決しようとした。そのため左翼は弾圧され、右翼テロが台頭し、昭和七年は5・15事件がおこった。しかし国民の大部分は左翼にも右翼にも無関心であった。この無関心さが一部の者に権力を握らしめ、満州事変―支那事変―大東亜戦争―敗戦の歴史を辿らしめることとなるのである。一般社会人の多くの人が自分の生活を守ることにキュウキュウとして無関心であった中に、学生はそうでなかった。赤で検挙者を出したことがない大学、高校は皆無であった。その中であって昭和9年までは甲南は唯一の例外であったのである。それは甲南という学校が大部分ブルジョアの子弟で、社会の矛盾に関心がなかった他に、学校当局も金持の大切なぼんぼんをあづかっていて、（黙っておれば父祖の業をついで、社長のイスが約束されている者も多かった）赤にでもなられては大変であるという理由から、封建的でなくリベラルな雰囲気の中でも思想問題には特に気を使っていたからである。社会主義を頭から悪者あつかいにせず、その原因に目を向けるべきであるという意味のことを弁論大会で演説しただけで、退学させられた者さえいた。部史に関係あるエピソードとしては、山岳寮事件というのがある。たしか昭和4年だと思うが、山岳部は他の運動部と同様倉庫だけでルームがなく不便であったから、住吉村で一軒家を借りて山岳寮にし、山の研究会や、アルピニズム討論会をしようとしたことがある。折角家を一軒借りたトタン、学校当局から禁止され、そのかわり運動部としては唯一の例外として食堂の二階にルームを貰った。禁止の理由は、学生だけで家を借りて出入していると警察からよからぬこと、つまり社会主義運動のアジトと見られ手入れでもされると困るということであった。その理由といい、学生だけがこづかいを出しあって集会だけのために家を借りることが出来る程、貸家が多く安かったとは、今考えるとウソみたいな話でないか。

大体どこの学校でも運動部の連中は思想事件とあまり縁がないのであるが、最も縁のなかった甲南で、山岳部という運動部の一組織より大量の思想検出者を出したのであるから、学校当局はローバイし、世間は一驚した。しかしそのことは故なきことでなかった。当時の登山家には静かに山歩きをたのしむ一派と、きびしい岩登りや、積雪期登山にハッスルする一派とあって、後者はアルピニズムと言われて対立していたことは近藤の記述にもある通りである。この両者の対立は社会観に於ける新旧両思想、保守思想対急進思想の対立と一見似ていた。事実若きアルピニストによって愛読された、早稲田大学の船田三郎の「近代アルピニズム」（正確な題名は失念）はまるで左翼の論文のような言い廻しであった。（当時の左翼論文は一種独特の表現方法があった）

甲南山岳部に於けるアルピニズムの主唱者は田口兄弟（一、二）である。近藤も指摘したよ

うに彼等の論文も左翼的用語が盛に用いられている。田口兄弟と親友であった湯川は住友財閥の大番頭の次男で、パンカラの多かった山岳部員の中では、英国型紳士であったが、アルピニズムの信奉者であり、リベラルの思想から次第にマルクス主義に近づいて行った。彼は慎重居士であったから、親しい者にしかその思想の片鱗を現わさなかったけれども、大東亜戦争が始まって、国民の大部分が、大日本帝国の勝利を盲信し、万一負けるようなことがあれば、「鬼畜米英」の手によって「神国日本」は亡ぼされてしまうと思込まされていた時に、湯川は筆者に、日本はどうも負ける。しかし資本主義のチャンピオンである米国は日本を赤化を防ぐ「東洋の番犬」として利用するため、日本を亡ぼすようなことをしないであろう。狂信的な軍部を押えるため日本の為政者は天皇の詔勅を利用するにちがいないと洩らしていた。この卓見の持主も、自分の予見した通りになっていくことを目にあたり見ることなく、世界最初の原子爆弾によってマサカー命を落とすことになるとは神ならぬ身の知る由もなかったのである。山岳部OBの中に惜しい戦争犠牲者も多いが、彼もその中の一名であった。湯川の思想的影響を受けた部員も数あった中で、特に湯川以上に急進的となったのは彼の三年下級生の飯沼修である。彼は部員としてはアクチブメンバーではなかったが、彼の同級生たる中島祐吉の影響を受けて山岳部随一の社会主義者となった。飯沼は湯川のように秘かにマルクス主義を研究するだけにあきたらず、共産党青年同盟という三井合法組織に加入し、実践運動に入ってしまった。後にめぐまれた学生生活を自ら放棄し、家をとびだして、地下にもぐってつかまり、長い未決生活の後、執行猶余で出てから、演技座という劇団に入って俳優となった。現在 NHK テレビ「事件記者」相沢キャップその他テレビ、演劇、映画で活躍している永井智雄がその後身である。飯沼、中島を中心とする社会主義研究グループは始めは、マルクスエンゲルスの著書を研究する程度であったが、後に白亜城というビラを作って配ったり、地下にもぐった飯沼を通じて、資金カンパしたりした。

しかし飯沼のように深入りする前に幸か不幸か一斉検挙されたのである。何故警察に氏名が浮んだのか不明であるが、さすが世界に誇る日本の特高警察というべきであろう。高等科二、三年組は起訴猶余、一年組は不起訴という軽い（今なら留置するだけでも人権ジェーリンであるが、当時の状態から言えば）処分であった。関西財界各士の子弟が含まれていたから、警察も遠慮したのかも知れない。先に述べた例に見られるように思想事件には極度に神経質な学校当局も意外に寛大な処置をとって、退学処分はなかった。警察が遠慮したのと同じ理由があったのであろうけれども、平生夙三郎氏の英断というべきであろう。もしこの時、一時徒党が、

全て退学でもさせられていたならば、後に山口東大教授、関阪大教授も生れなかったであろう。検挙された者は全て、全員山岳部を退いた。しかし思想の如何に拘らずこの事件に無関係であった先輩、又は部員と感情的なわだかまりがあったわけではなく、山で結ばれた友情にはひびが入らなかった。退部を機に山に対する情熱も失った者もいたけれども、東大にすすんだ伊藤兄弟、早大に転校した佐野は大学の山岳部でも活躍し、山口は前記のようにスキーに熱中した。

山岳部員でなかった中島は、戦後直ちに共産党に入党、町会議員になった後、現在兵庫共産党兵庫県委員会常任委員で活躍し、先の知事選挙に共産党から立候補したので名前を知っている人も多いであろう。

事件関係者は当時としては自分が正しいと思ったことで責任をとるのは当然であって、退部もやむを得ないが、処分が軽かったおかげで、それぞれ最高学府にも進学し、物故者以外現在幸福な生活を送っているのに反し、何の責任もなかった岡本部長が、クビになられたことは痛恨事であった。岡本教授のことは近藤記述に詳しいので、再記はしないが、歴代数多くの山岳部長の中では一番の功労者であり、又部員から最高に敬愛されていた名部長と言って過言でない。この恩人のクビの原因を作った事件関係者は、常に、先生の御消息に対し、苦い後悔の念と共に、たえず関心を持ったけれども、戦局がすすんで、互にバラバラになり、ついに再び相まみえて、御詫びの言葉を述べることの出来ないままに他界してしまったことに、深い心残りを禁じ得ないのである。ここに誌上を借りて先生に対し心から御詫びすると共に御宴福を祈るものである。

(以上書き終って、山口先輩に目を通して貰うべく送って、O.K. ということで返送されてきたのと同時に近藤先輩の文が手許にとどいた。森鷗外の昔より医者には文筆家が多いが、近藤先生がこれ程名文家とは知らなかった。大分小生の文の方が見劣りする。又問題に対するウエイト字数の配り方がちがうが、最初の編輯方針が、記述者の特徴を生かし、統一はしないでおこうということであったので、若干字を訂正しただけでこのまま編輯子へ送ることにした。本当を言えば小生の兄の方が文章もうまく適任者であるのだが、約10年前亡くなったし、他にも適任者がいたけれども指名により敢て駄文をしたためた次第御許しあれ。)

(旧制11回卒業)

アルピニズムの開花（昭和9年～14年）

（第二期黄金時代）

福 田 泰 次

序

昭和9年より14年は第二期黄金時代と言うより、むしろ再建期と称すべき時代であった。即ち伊藤愿、西村格也、香月慶太氏等により創立された部は岳界に於るユニークな存在として数多くの業績を残し、昭和9年その第一次活躍の終止符を打った。

即ち第三部に於て伊藤収二氏が記して居られる如く、昭和9年春高等科全部員を網羅した左翼オルグ活動は部の有力メンバー全員検挙と言う形となり部の活動を一時的に停止せざるを得ぬ状況に追い込んだ。

その後幸いこの活動の圏外にあった、山岡静三郎氏を中心として部の再建が図られた。私はこの稿では主として、この再建活動が開始された昭和9年春より、この時代の最大目標であった積雪期白出沢よりのジャンダルム飛弾尾根登攀の目的を達成した昭和14年春までの5年の間について触れてみたい。

1. 昭和9年4月より10年3月

部長、西田教授 チーフリーダー、山岡静三郎

部報、Vol VII—1 昭和9年9月～10年8月 昭和8年12月～9年8月公式記録なし（部報休刊）

我が甲南山岳部は昭和9年春を悲嘆の内に迎えた。即ち思想問題により数多くの上級部員を失い、更に又部の中心であった岡本部長が引責辞職され、部員はただ路頭に迷うばかりであった。然し国敗れて山河あり、我々の愛する山々は厳然と尚その雄姿を誇っているのではないか。山が存在する限り我々の活動は続けられる。唯一人の上級部員山岡氏を中心として、残された僅かな部員によって再建活動は開始された。初めは非合法的に、そして新部長として西田教授を迎え漸次合法的活動に入って行った。新部長西田教授は西田哲学で有名な西田幾太郎氏の御子息で物理学者であった。哲学的物理学的である新部長は何処となく超然たる風貌があり、いささか神経質化していた部にとっては打ってつけの方であった。ともかくこの西田、山岡両

氏を中心として先輩の強力な後援の基に一步一步再建の道は歩まれた。そしてその夏には非法ながら喜多又先輩を中心としての穂高涸沢合宿を持つ事が出来、更に昭和10年春には同じく喜多先輩指導の下に喜多豊、奥山、神沢、富、山口等現役部員により穂高岳沢よりのジャンダールム登頂に成功した。一方、山岡を中心とし冬及春には乗鞍、白馬等に於て下級部員の訓練が盛に実施され、我が部再建第一年度は一応その目的を達成し得た。

2. 昭和10年4月より11年3月

部長 西田教授 チーフリーダー 喜多豊治

部報 Vol VII-1 Vol VII-2

この年度は多数の上級部員を擁し大いに活躍した年である。即ちチーフ喜多豊は又八こと喜多又太郎先輩の弟に当り豊八と称し、極めて熱心に部に貢献し特にジャンに対する執着は非常なもので、部がこの方面に行動を起す時は必ず参加し遂に我々が野望を遂げた昭和14年春の白出合宿にも先輩として参加して居られた。奥山正雄（オジン）は純情なるハリキリストであると同時に冷静なるセオリストでもあり常にこの方面（理窟を言う方）で部を指導し、カンサンこと神沢得之助とムキムキこと島良之は要領のカンサン、気真面目のムキムキと全く相反する性格であったが、無二の親友でカンさんのある所ムキムキありと言われていたが、残念ながらムキムキ氏は入営に先立ち阪大病院に於ける手術にて早世した。国府雄二郎（コーツン）は所謂カシコイ学者タイプのオジサンであったが案外気が良い所があり、植田忠七（ウェチュウ）は神戸弁丸出しの気の良いスキーの上手なオッサンであった、最後に加藤弘三（ジョーム）はなかなか器用な所があるスマートなオジサンで学内でも顔がきいたが残念ながら戦死された。

以上の陣容を擁した部は主として先輩の援助に頼った再建第一年度に引続き、我々の部は我々の力でをモットーとし独力で大いにガンバった。そして夏には劔池の谷に入り奥壁の初登攀（奥山、山口）を為し、一方鹿島槍にては北壁バリエーションルートに成功（喜多、植田）冬及春には白出沢よりジャンダの飛弾尾根を目指したが遂に成らず、3月29日午後4時第3テラス直下に迫り無念の退却を余儀なくされる、退路夜半壮烈なるスリップの後九死に一生を得、翌30日午前1時漸くにしてBCに退却するを得た。そして白出沢より眺めたあの美しき真白きジャンダの頂は深く我々の脳裡に焼付けられ、必ず我々のグループの手でこの敗退の復しゅうは為すのだと固く誓ったのであった。そしてそれがこの時代に於ける我々の最大目標の一つにあげられ、奇しくも満3年後の昭和14年3月29日午後2時伊藤文、福井兩名によってその目

的を達成し得たのであった。

主たる登攀記録

◎夏期劔岳池ノ谷生活 7—11～22 リーダー 奥山、島、山口、川村

劔尾根ドームバットレス（現在右股奥壁と称する所）7—20 奥山、山口、右股より直接取付き初登攀に成功（詳細主たる登攀の項参照）

当時余り知られていなかった池ノ谷に入り早月尾根ザイテングラードより劔尾根に関する詳細なる偵察を実施、奥壁の登攀に成功した。

◎夏期鹿島槍カクネ里生活、7—11～23、リーダー、喜多、加藤、神沢、植田、

メインリッジ右壁バリエーション 7—19

喜多、植田、昭和7年夏伊藤新、関集によって試みられたリッジ、取付附近は垂直の壁にはばまれピトン2本使用。

◎冬期白出沢生活 12—25～1～7 リーダー 喜多（豊）、奥山、島

天狗尾根末端森林帯にBC設置。甲南に於ける雪中露營は昭和5年春横尾谷を始めとし、

次いで6年春湯川、田口（二）によって岳沢に実施されて以来その例を見ず、今度のものはいわばルネッサンス的とも言うべきもので、我々としては初めて貴重なる経験を得た。合宿中は一途にジャンダルムを目指したが遂に成らず、12—31の柳谷尾根からの西穂往復に終わった。

◎春期白出沢生活 3—20～4～1 リーダー 喜多豊、加藤、島、赤松

冬期と同じ場所にBCを張りジャンダを目指した。

ジャンダ飛弾尾根3—29 喜多、加藤この日の記録を部報 Vol VII—2 の加藤の文より転載する。

ああ出発以来一句日、如何に此の日を待ちあぐんだ事か、終に來たのだ。「登れるぞ必ず…」毎日いたずらに手足を撫して雪を見て嗅きつつ待った今日の日は遂にやって來たのだ。此の好天氣に、無風、必ず成功するとのもりもりした氣持をのせてスキーはまだ薄暗い雪の上を、滑る様に登って行く。5時スキー・デポーに到り輪カンとはきかえて5時30分出發した。もう大分明るくなっていた。輪カンは一歩毎に可なり埋った。ブッシュ尾根に取付くや、斜面はぐっと急となった。このブッシュ尾根は我々が想像していた以上に長く又輪カンの悪コンディションにも禍いされて非常な時間を要し出切ったのは9時10分になっていた。それにつづいた尾根を更に少し登り続け9時30分一寸傾斜のゆるい所でアイゼンにはきか

え、ココアを飲んでゆっくり休み輪カンの疲労を完全に取りもどして10時10分出発した。此所から右にするトラバースは可なり危険と考えザイルも此処から付けた。が此所は雪も可なり良く、大して緊張味をます事もなく順調に進んだ。只此のトラバースは下から考えていたのと違い非常に長いものだった。初めの予定は此を真横に横切って飛弾尾根の一番下の方に取付き、ずっと飛弾尾根を登るつもりだったが、それは極めて長い時間を要する事、取付きの岩場は、逆層的なフェースをなして一寸取付き難いと見たので尚此の雪溪をそこにある小さい岩尾根に沿って真直ぐに登り第3テラスの下クラックの所に出て、其所から飛弾尾根に取付く事にした。此のルートはたしかに可能であり時間的にも良いと考えられたのが、登るにつれて雪は益々硬くなり、終りに全く氷となったため以外に時間を要して、12時になっても未だ目的クラックの所へはいらなかった。此の頃笠の方向にレンズ雲が出、太陽が傘をかぶったので一寸嫌な感じを受けた。忽ちの中に雲足は早くなって行った。1時頃には風は猛烈を極め出して、雪をとばしそれが顔に吹きつけて相当つらくなった。然し今更降る気もしないので、又天候も未だ少時は大丈夫と見て続けた。2時頃には然し辺りは全く曇って益々つのって来た風と共に、猛烈な吹雪となった。3時最初のクラックを登ったが、此の時には顔も手も耐えがたきまでに思われた。此の吹雪の故に時間は心があせるに反して益々長く必要とした。第2の20米程で飛弾尾根に出る狭いクラックを僕が半ばまで上って居た時、時計はも早や4時を指し此の吹雪の中に飛弾尾根を上り、更に奥穂への尾根を夜半に歩く事の危険を考えて遂に我々は断念する事にした。此の時には喜多は両手とも凍傷にやられかけていた。第1のクラックの上まで僕は降りて其所にピトンを打って喜多が先に降りた。そして我々は注意しながら先刻はち切れる希望と熱つい憧れをもって上って来た所を無念さに歯を食いしばりながら降りて行った。が我々が降り初めて間もない中に、吹雪のため日は意外に早く暮れ、真暗となった。登った時の足跡は雪と風とで全く消えて居た。可なり降りた頃、僕等はルートを全く間違え、可なり方向違いに降りて居る事を感付き初めた。(其の実、我々の降りていた所はそれで正しかったのだが)、そこで喜多の意見で又左上の方へ登る事となり二人で登り初めた。我々の左側には然し、雪庇が出てすごく切り立った断崖になっている事を気付いていたので、注意してそれに沿って、登って行ったが二人は急いでいたので不注意にもザイルを内にたらしただまま進んだ。そしてその結果当然ザイルは雪の中に出ていた岩角にかかってしまった。喜多が此れをはずしに降りて行ったが、あわてて降りて行った彼は自然左の方へまがって行って、雪庇を左足でふむなり「アッ」と言う声と共に

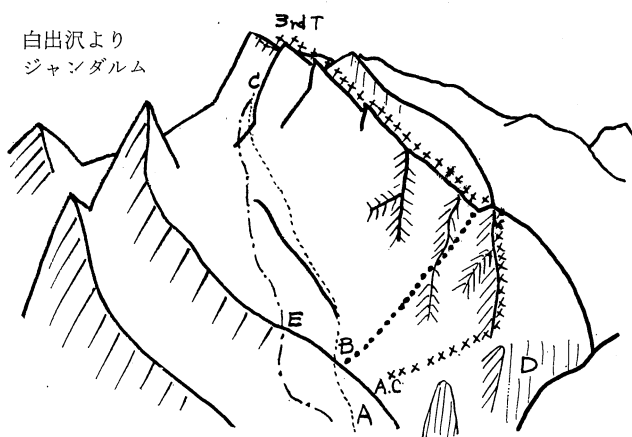
に墜落して行った。ザイルがするするとすべって終に僕の肩にぐっと来た。僕は懸命にザイルを掴み前こごみに体を雪面につけて、やうやく止め得た。そしてザイルを岩角にしっかりとかけてから、早速彼が如何になっているか怒鳴った。風に消されて二人の会話は充分に交わす事は出来なかったが、彼がとも角、負傷しておらず居る事は解った。彼が安全な所に居るものと思って私は立ち上って、少し下の方を見て、降りられるか如何を考え様とした。そして僕が立ち上ってザイルを軽く肩にかけた時（後で聞いたのだが、その時彼は一步足を出したのだった。所がそこにはサラサラとした雪の所でトタンに足をすべらしたと言うのだ）「失敗った」と言う彼の声と共に私の体は顔から先きに空中へ投げ出された。そして三回程の廻転の後、強く顔面から先きに雪の斜面を非常な速さで滑って行った。手にあったピッケルをやたらにたてたが何にもならなかった。そして新雪に我々の身体が与えたショックは小さい雪崩を起こして、それが更に身体を下へ下へと運んだ。やうやく止まった時、僕はひどく顔面に痛みを感じた。辺りに血がとんで雪の中に黒く見えた。顔面特に鼻と口唇がひどくやられていた。喜多はやはり僕の直ぐ傍で止まっており、幸運な事には何の負傷もしていなかった。然し何とも仕方がないので少時そこで休んで辺りを見てみると、一寸とした雲間からすぐ月光が流れ出て我々の真下に、朝登って来たブッシュ尾根が見えた。その時の喜び程、喜びを未だ僕は味わった事がなかった。我々はジャンジャンと下った。そして終にブッシュの所に出て、すっかり落付き、あの墜落にかかわらず不思議にわれなかったテルモスのコアを飲んだ。それが12時丁度

だった。更に降りつづけてスキー・デボに到り疲れた手足に鞭うつ様にしてアイゼンを取り、スキーをはいて1時10分遂に天幕に帰りついた。

起床 2.30～出発4.10～スキー・デボ5.30～A点9.10～B点10.10～C点（引返し）16.00～ブッシュ 尾根途中24.00

～天幕着1.00

附記 若しこの記録が戦後の



.....往路——復路.....初めの予定のコース
 ×××昭和14年伊藤、福井ルート
 Cは狭いクラック Dは切り立った岩場 Eは墜落場所

現役に読まれていたら、或はあの小窓尾根の遭難は無かったかも知れぬと考えられる貴重な教訓である。

天狗よりジャン奥穂を経穂高小屋、3—29、島、赤松（主たる登攀の項参照）

3. 昭和11年4月より12年3月

部長 松井教授、チーフリーダー 山口雅也、

部報 Voi VII—1（この年度より年1回発行）

この年度より部は再建功労者西田部長に代って松井部長を迎えた。同氏は西田部長と全く対称的の真面目一徹の勉強家であると同時に、驚くべき努力家であられた。

チーフリーダー山口雅也氏は山口三兄弟の末弟にてガーヤンなる愛称で呼ばれ、貴公子然たるリベラリストであった。従って山登りもガムシャラな馬車馬的な登山を好まずスマートに山をエンジョイするタイプで、後述する山岳部指導方針に関しても強引に再建へ再建へと努力して来た部の歩みに一步踏み止まり、静に反省の時を稼ぎスッキリした客観的方向を見出した点も、同君の性格に影響された点が多かったと思う。この年度にガーヤンと共に部を指導したメンバーは比企、武田両氏であった。比企氏は役者と称し古い部員であったが、途中病を得第一線を退いたが、蔭になり日なたになり部に多大な貢献をした人である。

武田氏は愛称ゾウの示す如くズングリ太った御仁で、かの有名な武長家の御曹子で極めて気の良い旦那であった。

さて前述した如く喜多豊を中心とした部の再建第二期は登頂には至らなかったが、積雪期白出沢よりのジャンダ登攀等により一応その目的を達し比較的安定した時代を迎えた。この間部としては最も悩んだ時代で激しく部の進むべき方向、即ち指導方針なるものが論ぜられた。

即ち当時ヨーロッパアルプスに於ても我が日本アルプスに於ても、ほとんどのバリエーションルートは登り尽され、所謂スポーツアルピニズムの活動領域が極めて縮小されて居り、残っているのはアイガー北壁とか、我国に於ても厳冬期のアラ沢奥壁、屏風岩等と言った様な極めて先鋭的軽業的登攀を要求される所だけになってしまった。一方進歩的アルピニストは之に先立ちコーカサス、アンデスを経てヒマラヤへ進出。この時既にトリズル（昭和5年）、カメット（昭和6年）、ナンダデビイ（昭和11年）が登頂されて居り、一方8,000米級では登頂には至らなかったが、英国隊のエヴェレスト、イタリアのK2、ドイツのカンチエ、ナンガ、フランスのヒドンピーク等が盛に攻撃されていた。我国に於てもこの年度即ち、昭和11年には立大

により6,000米級とは言えナンダゴットの登頂に成功し、漸くヒマラヤへの気運が動き始めていた。一方各大学山岳部は盛に日本近郊の朝鮮白頭山（京大）、冠帽峰（早大）、千島（東大）樺太（同大）、満洲興安嶺（京大）、濟州島（関西岳聯）、台湾（神商大、同大）等へ遠征隊を出していた。

且って先輩達により岳界の第一線の地位に伍していた我部にあつて以上のあらゆる方向、即ち先鋭の登攀は余りにも生命の危険が大で、既にスポーツの域を脱していると言う点で否定され、又所謂エクスペディションアルピニズムと言う方向も高校生と言う条件からすれば実現不可能と考えられ、進むべき方向を失った形となった。

何れにせよ前年度までただひたすらに再建へ再建へと一途に歩んで来た我々もさて一応その目的が達成され岳界を振り返り見た時、我々の置かれていた地位は余りにもみじめな事に気付いたのである。然し我々は決して怯まなかった、此の時に當って高校生たる我々にはただ考える事、悩む事、哲学する事が残されていたのだ。此処に当時我々が必死になって部の進むべき方向、即ち指導方針を論じ合った所以があつた。

かくてあらゆる論争の末、我々は一応の結論を得た。今之を部報 Vol.Ⅷ—1 に於ける山口氏の論文「部指導精神確立の為に」より一部拾つてみよう。

登山は歴史的に發展する。あらゆる他のスポーツマンが、只レコードを獲得する為にのみ汲々として單調な動作を繰返している時、吾々は吾々の手で歴史を創造している。其処にこそスポーツに於ける登山の偉大な特殊性がある。斯くて登山は理論的背景によって常に基礎付けられてあらねばならないのだ。唯單に登山が歴史的に發展するという事だけからかかる結論は生じない。登山の具体的な發展するという事だけからかかる結論は生じない。登山の具体的な發展法則が必要だ。現に今も日本山岳界全体が重大な画期的転向をなしつつある。即ち、内地バリエーションルートの沸底によって最も進歩的な部分は外地遠征へと進出しつつある。吾々は此の激化した状態の中で、他の言動に或わさる事なく自己の揺ぎなき地位を確保しなければならない。それには指導精神の確定が目下の急務だ。指導精神無しに部の發展はあり得ない。

過去に於ても此の問題は絶えず取上げられ討論されて来た。併しそれが余りに主観的に取上げられて来た為に、何等の結論を得るに至らなかった。部の指導精神は主観的な登山観、即ち個人の登山に対する態度と混同されてはならない。吾々は此の問題をもっと山岳的に取上げよう。それには先ず甲南高校山岳部の特殊性に於て、エクスペディションアルピニズムなるものを徹底的に批判しなければならない。

中 略

さて Expedition A なるものの本質が明らかになったが、そこに登山形態を我々が見出す以上、その目的とするエヴェレスト登攀こそが取りも直さず登山者としての最高目的である事は明白だ、ところが Expedition A という登山形態に進化すると同時に登山はスポーツから職業に転化した。即ち、且て登山が未だ余り発達していなかった時には技術的な容易さがアマチュア登山家をも華々しい第一線の闘士たるを召能ならしめていたが、今は登山技術の高度な発達に伴う困難さが登山の最も進歩的な部分を完全に少数の職業的登山家のものたらしめた。

吾が山岳部も且つては最も進歩的なグループとして山岳界を雄飛したが、今や此の転期に際して吾々は完全に一つデレンマー学問と登山の不両立に陥った。且つては学生であり、且つ登山者であり得た吾々も今や忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならずの苦境に立至った。併し結局吾々は登山者であるよりは寧ろ遙かに高校生であり、社会人としては未完成な人間だ。大学に入るべく運命づけられている。だから学問を放棄し、教養を無視してまで登山しようとする態度は吾山岳部として絶対にとるべきではない。

しかも吾部は年令的に完全に制約されていて事実上 Expedition を行う事は不可能なのだ。かくて吾部は最も積極的な態度を取る事は不可能となった。

中 略

要するに E.a を選択する事の是非に関する限り吾々は、それを全然個人の自由意志に任さねばならない。しかもそれは個人的自覚の明白となった大学山岳部に於て始めて問題となり得るのである。かくて結局高校山岳部は E.a を奉ずるべきでなく、将来 E.a に進み得るべき充分の基礎を形成し得るものでなければならない。此所に於て吾々のデレンマは一応解決された。然らばかかる根本方針は如何にすれば具体化されるであろうか。

吾々は先ず一人でも多くの完全なる登山家を養成することが必要なのだ。勿論此の場合完全なる登山家とは何かと言う事が重大問題であるが、此所で言う完全なる登山家とは、即ち登山を全面的に把握した人の事だ。中略 先ず登山を全面的に把握しよう。そしてその事が将来 E.a に進む人も必然的に通らねばならない過程なのだ。ハイキング、ロッククライミング、スキーイングから更に冬山へ。此の過程へ吾々は総ゆる部員を導かねばならぬ。併し此れはいわば理想であって、現実には於て家庭的な、或いは経済的な、或いは健康上の条件に制約されて、ともすれば登山を全面的に把握する事の不能な場合が少くない。だから結局、自己のあらゆる可能性に於て登山を把握する事が必要となる。だが此の場合兎に角グルッペ意識に支配されて対

立を生じ勝であるが、冬山への進出が山岳部の目的であると言う事及びそれにも拘らず何等かの事情で、冬山へ進出出来ない事が山岳部員として何等恥ずるに値もない事をよく意識しなければならぬ。問題は山岳部に対する熱情如何だ。

後 略

要は高校山岳部に於ては直接エクスペディションは不可能である。従ってこれを部の目標に置くべきではなく「完全なる登山家、即ち登山を全面的に把握した人」の養成を部の指導方針として抽象的ではあるが、一応部の進むべき方向を確立し得た。

かく論ぜられながらも一方実際登山活動に於ては、この年度は尚残された幾つかのバリエーションルートに成功した。

即ち、夏山に於ては前年度同様鹿島カクネ里に入り、荒沢奥壁（赤松、関）北壁バリエーション（中村、福田）劔池ノ谷にては前年度残された劔尾根ドーム（福田、関）クラックルンゼ（赤松、中村）に成功、冬山では穂高明神東稜（赤松、福田、伊藤）、春山にては南股より白馬小日向山双子岩に AC を設け杓子東壁 D リッジ（山口、福田）鎚北山稜（喜多豊、武田）の初登攀に成功し当時としては可成りの成果をあげ得た。

主たる登攀記録

◎夏期鹿島カクネ里生活 7—10—24 リーダー 赤松、中村、関、福田

前年度同様カクネ里に入り荒沢奥、北壁バリエーションをねらった。

アラ沢奥壁南稜 7—22 7—22 赤松 関

天狗尾根にビイバクし奥壁に成功（主たる登攀参照）

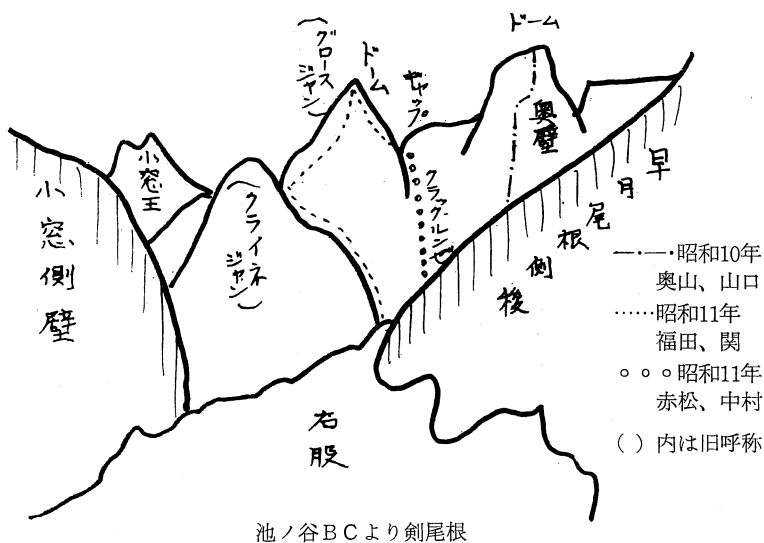
◎夏期劔池谷生活 7—26—8—2 リーダー 福田、赤松、中村、関

前年度残された 劔尾根 グロースジャン（現在ドームと称する所）及クラックルンゼをねらう。劔尾根ドーム登攀 8—1 福田、関

午前3時起床4時40分キャンプを出る薄暗い池ノ谷雪渓をアイゼンをつけコツコツ登る右股に入り僅にしてクライネジャン草付のある早月より見て屋根状を為したピークとグロースジャン（ドーム）との間のルンゼに取付く、ルンゼは所々水が流れているが岩が硬いので感じが良い、急な草付を登ってギャップに出る。此処より眺めた小窓側壁は随分傾斜感のある大きな壁だ。此処からアンザイレンし、右股側へトラバースしながらドーム壁に取付く、アゴを使ったりして可成り悪い数ピッチを経て行詰る、壁は右肢側に垂直に落ち込み更にトラバースを続行する事は不可能だ。仕方がない意を決して可成り悪いオーバーハングを乗越して

直登せんとする。ハーケンを打ち数回アタックするもどうしても駄目、体も疲労して来て全く右股の底へ落ち込みそうな気になって来る。関にトップを代ってもらい、今度はさっき打ったハーケンを利用しオーバーハングの下をまき気味にして、漸く難所を切り抜ける。後はガリーを斜右に登りドームピークに立った。一休み後ギャップへ向けて下る相当悪い覚悟でいたが、案外簡単にギャップに達す。初めの予定では此処にビバークし、翌日更に劔尾根上半を行くつもりでいたが、此処はもう去年島、伊藤が行っているので放棄して左股側へルンゼを下りキャンプに下る。この日大阪商大の方が我々がドームを去って、暫く後やはり劔尾根登攀後ドームに達した直後、一人の方が赤松等の登ったクラックルンゼに落ちられ、劔尾根最初の遭難者になられた事を我々下山後知った。

キャンプ4—40〜ルンゼ取付7—30〜ドーム頂上13—30〜キャンプ15—40
クラックルンゼ8—1赤松、中村
キャンプ4—40〜ルンゼ取付7—30〜ギャップ11—30〜三ノ窓13—00〜13—40〜キャンプ15—40



◎冬期穂高徳沢生活 12—24〜1—4

リーダー赤松、福田、伊藤文

明神東稜 1—3 徳沢 2—40〜ヒュウタン池上部ザイテングラート取付 (スキー・デボ) 7—30〜主稜とのジャンクション12—00主峯直下コル16—40〜スキー・デボ17—30〜徳沢21—00

上宮川沢よりヒュウタン池上部側稜に直接取付く取付点は逆層のスラブにて存外悪く主稜直下は急傾斜と深雪になやまされ、数回表層雪崩の危険にさらされ漸く12時主稜に達す。主稜は腰までモグル深雪加うるに急傾斜にて這松を掘出し、腕力によるラッセル予想以上に時間

を食い主峯直下のコルに達した時には、既に4時40分残念ながら断念しルンゼを下り宮川沢へ逃げる。

◎春期白馬南股合宿 3—19～31

リーダー山口雅、喜多豊先輩、比企、武田、赤松、福田、伊藤文、福井、森本

甲南のホームグラウンド南股を根拠地として、新人の訓練及小日向山双子岩に前進キャンプ（カマボコ）を設置杓子及鎗のバリエーションルートをねらう。

杓子東鎗（Dリッジ）3—23山口、福田、ビックイベントの項参照

鎗北山稜3—23喜多豊、武田

杓子沢より大ギャップ附近に取付き北山稜上半の登攀に成功。

4. 昭和12年4月より13年3月

部長 松井教授（冬期山崎教授）

チーフリーダー赤松二郎、12月以降中村成三に交代。

部報 Vol IX—1

この年度の指導メンバーは赤松二郎（大将）、中村成三（カポネ）、川村三郎、関暢三（ボンチ）であった。大将は極めて温かな御仁・カポネは愛称の示す如く暗黒街の大統領Rカポネにも似た容貌の持主で学内の顔役、川村、関両氏は途中で病を得第一線活動から、引退、川村氏は陰の立場から常に部に貢献、ボンチはなかなかの秀才で山岳部には珍しく学校側の信用があった。

さて山口氏を中心とした部の指導方針は「完全な登山家の養成」と言う形で一応理論的な形態は整えたが、その結論が非常に抽象的であった事と、その過程に於て所謂エクスペディションアルピニズム（ヒマラヤ遠征）を否定した為、部員間で具体的目標を失い却って部に無方針、無気力状態を招来し、これの打破に悩んだ時代であった。

そしてそれが前年度確立された指導方針の反省と言う形で現われた。その間の状況を知る為部報Vol IXより一、二の文を引用してみたい。

即ち伊藤文三氏は「現在種々登山に就いて論ぜられている。登山の本質とか或はヒマラヤエクスペディション等々。

我々が考えねばならぬ事は学生であると言う事である。我々の登山は之を抜きにして論ずる事は出来ない。然し登山それ自身の問題と学生としてのそれ自身との問題の混同を避けねばな

らない。

登山の社会はあくまで登山の社会として論ずべきであろう。我々が山岳部員であり、登山に興味を感じている以上登山社会の問題として深い関心を以て、登山の最高形式たるヒマラヤ遠征を眺めるのが当然である。

然るに斯るヒマラヤ遠征などを登山社会の問題として、何ら関心を持って眺める事の出来ないと言う人は、その人が何らか偏した登山観を持っているが為である。

我々学生として、甲南の生徒としてヒマラヤ遠征は不可能であるが、然し斯る意味に於て我々は絶えず斯る方面の研究を怠ってはならない。我々の登山は単に山岳美の観賞でもなければ金儲けのためでもない。より困難なる技術を必要とするより困難なる登山へと進み、我々の持つ肉体力、精神力の能力を十分に發揮して登山ならで得られぬ体験を得るのである」と述べている。

又、福田は「大体ヒマラヤ遠征と言うものを吾部では、登山と学問との不両立からして高校山岳部としては実行不可能なものとして否定し、非常に抽象的な完全なる登山家養成と言う事を部の指導方針としている。処がこの指導方針は非常に精神的なるもののみを擱んでいて、具体的に之に進むべきだと言う目標が無いので、全く不明瞭な物となり下級部員にあっては、之に対する認識不足を来しヒマラヤ遠征が全然無意味な物と解している者や、之に対する関心が全然無い者が多い。

扱て部の指導方針の最高目標は完全なる登山家の養成である。然し、之を具体的に言うならヒマラヤ遠征と言う事になる。つまり最も完全なる登山家を要するのは、登山の最高形式たるヒマラヤ遠征に外ならないのである」としてヒマラヤに関する記録を約120頁に亘って部報に掲載している。

一方實際登山活動に於ては夏は岳沢涸沢合宿、冬は鹿島西股、春は遠見尾根天狗尾根を経て鹿島槍登頂をボーラーメソッドにより実施、甲南山岳部に於ては従来この種形態の登山が部員数が少いと言う点でほとんど実施されて居らなかったが、この山行で初めてそれが実施されこれが現在行われている登山形態の第一歩であったと言う点に於て意味があった。

主たる登攀記録

◎春鹿島槍合宿 3—18~29 リーダー中村、赤松、鷲尾、伊藤、福田、宇尾、福井、喜多豊先輩

遠見小屋をBHとし大遠見にC I (アークライク) 天狗尾根 Dom 下に C II (カマボ

コ) を設置天狗尾根を経て鹿島登頂 3 月 20 日 C I 設置 22 日 トランスポート終了 23 日 福田、宇尾、福井パーラーのサポートにて C II 設置、27 日 中村、赤松、鷺尾、伊藤、C II より登頂

C II 5—50—ドーム 6—50—7—20—小屋岩 8—15—荒沢頭 9—20—頂上 9—50—キレット 10—50—キレット 小屋 12—15—30—C II 帰着 16—07

本山行では雪中露営に於ける装備、食料、及び輸送に関して研究が為され、それぞれ貴重な経験をえた。就中天幕に関してはアクティック（円形）に比しカマボコが勝れている事が立証された。

5. 昭和13年4月より14年3月

部長 松井教授、チーフリーダー伊藤文三、

部報 Vol I、

この年度は速報の意味で毎学期パンフレット形式の時報を発行した。従って部報 Vol I に
は春山を除きこの年度の記録は記載されていない。

この年度のリーダー会は先ず、チーフリーダー伊藤文三を挙げねばならぬ、彼は伊藤兄弟の
第三番目に当り兄貴同様代々ノンキなる愛称を賜わっていた。又事実相当ノンキな御仁でもあ
った。山登りもスキーを除いては可成り上手な方で、東大に入ってから積雪期荒沢奥壁をや
ったりして相当なファイトの持主で、惜むらくわ戦後病を得、第一線を退いたが体と金と暇が
許したならヒマラヤ遠征位は出掛けて行った人であろう。次に鷺尾頭（ワシオさん）ノンキと
小学校時代からの親友で遂に大学を出るまで総て行を共にした人で、真面目でオトナシイタイ
プ、学校の信用はあった、宇尾洋介（デメ）香月先輩の甥に当り極めて世話好きで気の良いオ
ッサン、村上武雄（ムラン）はなかなかビジネスライクでマネージャー的役割を引き受けた。
現在東京瓦斯にてこのマネージャー的能力を認められ将来を期待されている。（カップブック
ス後継者予想表に10年後の社長候補にあげられている）最後にかく申す筆者此処にては受称フ
クデンなる事のみを記して置く。

さて前年度に於て反省された部の指導方針は更に発展し、本年度部活動の具体的目標を白出
沢よりの積雪期ジャンダルム飛弾尾根完登と言う事に置いた。この間の事情は部報 Vol I 「春
の白出沢生活」鷺尾に詳しく述べられている。今この一部を引用するに、

吾校は昭和10年初めてジャンダルム飛弾尾根の積雪期に目をつけて攻撃が試みられたのであ

った。而して其の後、吾々によって確立せられた指導方針の根本は、要は「完全なる登山家の養成」であった。これは而し全く抽象的なものであって、何等進むべき方向を与えず、自然部の行動、部員全体を徒に不活発となすに過ぎなかった。即ち吾々は理論に走って実践は忘却されたかの観があったのである。ここに吾々は具体的な、全部員に把握される吾々の進むべき目標が明らかにされたのである。それはとりもなおさずジャンダルム飛弾尾根の積雪期登攀であり、例へその間に農大パーティによって完登されたとは言え、この尾根の価値は低下するものではなく、吾々のアビィリティーが欠如していたのであった。而して吾々の之に対する熱情は益々加わり、遂にかかる努力の結果、漸く実を結び、成功したのである。(以上)

尚この期には部に取って一つの悩みがあった。それは次年度の指導メンバーが皆無と言う事である。即ちこの年度の学生は丁度前述した昭和9年の事件の年、即ち山岳部への入部を禁止された年に入学した事になり事件の痛手がとんでもない時に出て来た事になる。従って我々は次年度に備え、或程度第一線活動を押えても部員の獲得と指導に全力を尽さねばならなかった。その様な状況の基に夏には阪神間を襲った大水害を押して濁沢合宿を実施、冬の上高地より天狗尾根登攀を経て春には白出沢 BC より更にグリーンスピンドルに AC を設け、攻撃隊員伊藤、福井両君によりジャンダの聖なる頂に我々の足跡を印す事を得たのであった。時に昭和14年3月29日午後2時25分奇しくもあの壮烈な敗退の日から満3年の月日が流れ去っていた。思えば昭和9年春の再建以来5年に渉る長い長い歩みを経て、その間の最大目標であった白出沢よりのジャン飛弾尾根に遂に成功したのだ。然しそうしたなかで私達は限り無き満足感と同時に「或る一つの時代即ち歴史の一コマが過ぎ去ってしまった」と言う、何か言い知れぬ空虚さと寂寥感に打たれながら、再びおとづれる事が無いであろう白出の谷を下って行ったのであった。

主たる登攀記録

◎春の白出沢生活 3-21~4-3

リーダー 伊藤文、鷺尾、福井、喜多豊先輩

ジャンダルム登攀 3-29伊藤、福井、3-28グリーンスピンドルに AC 設置翌29日ジャン飛弾尾根登攀に成功(ビックイベントの項参照)

白出沢より天狗尾根を経ジャン奥穂縦走、3-29喜多、鷺尾、白出沢 BC 3-55~天狗尾根取付 6-45~天狗岩10-30~天狗コル12-30~ジャン14-30~奥穂17-10~穂高小屋18-10~BC21~55
(旧制15回卒業)

戦時下の山岳部（昭和14年～17年）

小 川 守 正

思えば私が甲南に入った昭和九年の頃といえば、我大日本帝国は満州事変に成功し、本格的な植民地を手に入れたときであり、その後十年間続いた軍国時代の儚い夢の第一歩を踏み出した時代であった。

小学生の半ズボンをあこがれの長ズボンにはきかえてカブトの徽章を輝かせ有頂天になっていた我々新入生は平生ガマ先生から「諸君はこれから、この甲南で七年間、日本の指導者になるべき訓育を受けるのである」との有難き御宜託を給り、一ペんに値打が上った様な気がしたものである。平生先生は当時日本資本主義の輝かしいチャンピオンであり、甲南では神様のようなものであった。

入学式に続いて校友会主催のもとに華々しい新入生歓迎会が行われた。我々は学業よりもどの部に入るかということが重大な問題であった。ところが入学早々に主任の先生から「今年は山岳部に入ることは禁止である。将来とも山岳部にだけは近寄らぬがよろしい」とのお達しがあった。理由は別に説明されなかったが入学早々の中学一年生にとっては主任の先生の言は絶対的なものである。第16回のクラスには遂に山岳部員が一人もいないのはこの為であり、またその後も部員獲得に困難を極めたのは一つにこの学校当局の干渉によるものであった。

学校がかくも不当に山岳部を圧迫した理由は全く馬鹿げたもので、当時東大を始め、二、三の大学に残存していた社会主義ないし自由主義運動を根絶しようとして当局の弾圧が加えられつつあったが、山岳部の先輩の方々の中にもこの様な政府のお気に召さないグループに関係のある人が居られたということから、登山とマルキンズムに何らかの因果関係があるだろうと邪推されたらしい。

今にして思えば、その後の日本の運命を暗示する黒い雲は既に天の一角を被っていたと言うべきであろう。が、勿論中学一年坊主にそんなことが判る筈もなく、ただ山岳部に入れば赤くなっていたのだから全く他愛ないものであった。当時尋常科三年のフクデン氏が小さな体にギョロリとした目玉で非合法的に勧誘に来られたときには、これこそ赤の卵かと思って大いに恐れたものである。

私の入学した年はこのようにして終ったが、次の年からはどうやら人並の活動を許され、よ

うやく息を吹返した。それから5年間のことは福田先輩が書かれる筈だから、私は昭和14年4月以降について書かして戴くことにしよう。

14年春には、小林大一郎、小林誠、沢田晃の諸君が入部した。尤も皆、スキー合宿にはそれまでも参加し山口先輩の門人ではあった。

その年の夏は、劔の西面と涸沢に合宿した。当時劔の西面池の谷といえば人跡稀な荒涼たる谷で、テントを張ったのは我々3人（赤松先輩、グリーン、小生）だけで他には人影すら無かった。

8貫目の荷を負い、木登りか山登りか判らない様なアクロバットを演じて、小窓尾根のジャングルを越え荒れ果てた池の谷のテント場から眺めた頭上を圧するドームのバットレスの夕日に赤く輝いていた光景は、若い血気のクライマーにも山岳の霊といったものの神々しさを感じしめる偉大さがあった。

このドームのバットレスは先年、奥山、山口両先輩が初登攀されたところだ。この池の谷の合宿で大したことはなかったが、初めてアクシデントらしきものを体験した。それは劔尾根に登る可く、左股から尾根のギャップに取付こうとして、約100米位の岩壁に登っている時、トップのグリーンが落石をやって煉瓦大のやつが小生の肩に命中したのである。傷は大したことはなかったが、何しろ身動きならぬ岩登りの途中で、落石の音に目をつぶって運を天にまかせて岩にへばりついて待っているところをガン!! とやられたのだから参ってしまい、ザイルを出して赤松の大將に尾根上迄引き上げてもらった時は気熄奄々だった。グリーンは全く恐縮して平身低頭、富山でビールをおごる約束をした。

次の日は休養し、その翌日小窓尾根上部の池の谷側の岩壁を試登した。これは約100米の割合スッキリした壁だが、穂高などの岩場と異なり登られていないので浮石は多い。今度もグリーンがトップで登攀中又々落石をやった。一昨日の件でいい加減怖気づいているところだから、当らない先から“やられた!!”と思って半ば参ってしまった。そこへ膝頭をドンとやられたからたまらない。ズボンが破れて、丁度牛肉の脂の様な白い傷口がのぞいているのを見て今度は骨までやられたと脳貧血を起してへばってしまったが、これは小生の早合点で、皮がむけて皮下脂肪が見えたのであった。やっとのことでラストの赤松先輩にかかえられ意識を回復し、グリーンは散々叱られ今度は帰りの荷物を引受ける事を固く誓ったが、この二つの約束は二つながら実行されなかった。

^{つるぎ}

劔の負傷は結局大したことはなかったので引続き涸沢合宿にも参加した。尋常科3、4年

が8名程と、赤松、島、佐野先輩方、グリーン、小林、小生で賑かな合宿だった。この時小生は塩野（良）と2人でジャンダルムのフェースをやった。これは6ピッチ約150米程でスケールは小さいが仲々手剛い壁で途中にオーバーハングがある。このオーバーハングの下小さなテラスで一休みしている内に初めから怪しかった天気がかくれ豪雨となった。壁は滝の様になりシャツの手首から入ってくる水が腹までも流れて来る仕末で悲壮な状況になった。小生必死になってオーバーハングの横を巻こうと頑張っている時、濡れた岩場にスリップして危く止ったものの命と頼むピトン・カラピナーが胸のポケットから飛び出し、一瞬ガスの中え去った。万事休す……と塩野は蒼白になって「もうアカン」と言うだけで坐り込んでしまい立とうとしない。その時の塩野は、ウインパー「アルプス登攀記」の有名なマッターホルンに於ける墜落事件直後のタウグマルダーの様なものだった。勿論小生は勇敢なるウインパーの如く、彼を叱咤激励してこの難関を突破したのである。散々な目に合って穂高小屋にたどりついたところ島先輩が心配顔で迎えて下さった。

この翌日国府とグリーンが登ったが、小生の教え方が悪かったのか、国府の聞き方が悪かったのか知らないが、オーバーハングを正面から乗切ろうとしてもんどり打って墜落し、おまけに前日小生の打ったピトン迄抜けたが、グリーの筋金入りの腕で止められた。更に思えばこのジャンのフェースは数年前、植田先輩が頂上直下の悪場で墜落され、カラピナーが半分開く迄曲ってしまったという椿事を引起した因縁つきの岩場である。

その年の冬は、北川、塩野と3人遠見小屋から五龍をねらったが吹雪に明け暮れするうちにホームシックで引上げた。

明けくれば昭和15年、三学期早々予算会議のシーズンとなったが、山岳部は2年生がいないので1年が出なければならなくなった。

当時、校友会は1年間10円だかの会費をとり、毎年二月に高等科2年の新委員長が寄って、翌年度の各部費を決めるのである。これは勿論学生だけで全く自主的にやるのだから心臓の強い者の勝ちであった。山岳部は1年だから特別にグリーンと小生二人が出ることとした。二人共落第していたから大体顔を知っていたが仲々の苦戦だった。会議は3年が黒幕で策謀するものだから始めからフェアーでなく、文化系と運動系がブロックを組んで争い会議の前日などお互いにフラクション会議が開かれ、それが相手に洩れたり、裏切者が出たり、分裂したりで複雑な政争の縮図の様なものだった。それでも山岳部は525円取って面目を保った。雑誌部、弁論部等は血涙をのんで委員長が辞職した位やられたものである。

春は南股、梅ヶ池等に約20名が合宿し、この頃が部員の数から言っても最盛期であった。南股合宿は双子岩に幕営し、グリーン、国府、塩野、赤松先輩は白馬鍾の北山稜を登った。この方は別に事故もなかったが、南股に居たパーティは雪崩にやられかけた。南股勢は小生と北川後は尋常科の高倉等3、4名だったが、昼間スキーで不帰沢に偵察に出かけたところ頭（上）にゴーと言う音が聞えたと思った瞬間土用波の様なのが押寄せて来た。まさかと思った雪崩が来たのである。早速直滑行で遁走を試みたが転倒続出でお話にならない。幸な事に眼前10米位で止まったが、典型的な日射による二次崩で谷底は既に影になっていたが、尾根筋附近は日照りの最中だったわけである。帰ってから尋常科の人達に雪崩とはこんなものだ……と誤魔化しておいたが全く胆を冷した。

梅ヶ池パーティは小林がリーダーで新人のトレーニングをやったが、この時新入部員の加賀のベーサンは、空気枕でリックをふくらませ後半の片鱗を示した相である。

夏山は、鹿島カクネ里、奥又白、劔二俣、上高地などに合宿した。

最初は高等科ばかりで、鹿島の北壁、荒沢の奥壁等を目指してカクネ里に入った。珍しく比企先輩も参加され、八方尾根から白岳を経て大迂回コースをとって進んだが徹底した雨の連続だった。雨に煙る白岳沢の雪渓で木の根子を熊と真違って大騒ぎをやらかし漸くカクネ里に入ったが、雨、雨、雨、でどうにもならない。食糧を節約して野生の薊まで喰たりしたが、遂に我慢出来なくなり、明日下ろうという日にやっと晴れたので偵察もやらずに、2パーティに分れて北壁をアタックした。

小生と津田はメインリッジを、グリーン、塩野、小林、比企先輩はBルンゼをそれぞれにやった。小生のパーティは水の補給を忘れ空水筒で焼けつく様な渴と果てなく続く垂直のブッシュの壁で悪戦苦闘し無人のキレット小屋にビバークした。

一方グリンのパーティはBルンゼに取付いたが、変な所で行詰りザイルをピトンに括りつけ30米一杯延してようやく退却した時は夕闇迫る頃で、比企先輩は夜盲症で動けなくなり、遂に岩壁でビバーク、翌朝ザイルを外す元気も無くホーホーの態でテント迄帰りついたところ小生のパーティが帰っていない。スワ遭難と大騒ぎしていたところへ下りつき感激の握手を交した。

鹿島が終わってから、小生とグリーンは奥又へ、津田、塩野は尋常3、4年と劔へ、小林は尋常1、2年と槍に分れた。

奥又は、伊藤文三先輩（途中より参加され）と3人で四峰バットレスや前穂の北壁を登った

が昨年劔の一件もあるので小生が無理してトップをつとめたが、今度は小生の落した石がノソキのMに命中し非鳴をあげて倒れたが頑丈に出来て居た為大したことはなかった。

劔パーティは津田がリーダーで高1と尋常科3、4年の8名で二俣に合宿したが立山に登っただけで帰って来た。話を聞いても言を左右にして仲々真相がつかめなかったが、其内に判ったところでは、熊谷、出口、伊藤幹一といった連中が、雨のウサ晴しに一升飯のお代りをしてその為に食糧つきて下山したというのが真相であった。爾来、この大飯グループは我々にとって悩みの種となった。

その冬は、大挙遠見小屋に合宿し、最冬期の五龍に成功した。帰途腰を没する新雪の大斜面の下りでは国府ツン、塩野の山口先生直伝の高速回転術など、ものの役にも立たず、独り小生の股制動が威力を発揮したのは特筆すべきことだった。

翌16年初頭、例によって予算会議が開かれたが、何しろ経験のあるのは小生1人、初めから全くの一人舞台で、会議の主導権はこちらのもの、難なく800円分取った。

16年の春は小生等にとって最後の春山なので大いに張切り、3週間近い長期合宿をやった。まず尋常科のスキー合宿も兼ねて猿倉に入り、ここから杓子屋根を登り、続いて高等科生だけで南股から不帰東面の未登の尾根を登ろうというものだった。大体雪積期の南股から不帰というのは甲南のオハコで、その昔、田口、伊藤阿先輩によって開拓されたものであるが、その頃でも未だ未登のルートが沢山残っていたのである。

先ず前記の猿倉合宿は、15、16名も参加したが、運悪く期間中殆んど雨にたたられ小屋にカソ詰になった。読書という様な高尚な趣味を持たない連中だから、楽しみとしては飯だけなので、その為には腹をへらさなければというわけで、屋内運動に専念した。腕相撲、足相撲等にはすぐあきてしまい、天井の梁に上り、攻め方は下からこれに飛びつき引きづり下す、といった空中格闘の選手権をめぐるタイトルマッチ、リターンマッチの連続となり、遂には紅白二軍の集団的な立体戦に迄発展した時には、大部屋一つという構造の猿倉小屋は上を下への大騒動——それまでY談に花を咲かせていた大阪の実業団の相客もたまりかねて雨の戸外に逃げてしまった。

中でも岡橋、加賀、出口、伊藤幹一連の活躍は物凄く、戦い終った時には炬燵という炬燵は全部ペッチャンコになって居り、小屋のオヤジも魂消て一言もなかった。

こんなわけで猿倉合宿は終わり、ウルサイ連中を追返し根拠地を南股に移した。移動に際し元気な連中はグリーンがリーダーとなり、小日向の尾根を越えて行き、小生等本隊は、二股発電

所迄下りあずけておいた荷をサポートして共に南股小屋に向った。

本隊は重荷にあえぎ乍ら、日没寸前かろうじて小屋に着いたが、先に行って飯を炊く事になっていた屋根越の連中は未だ着いて居ない。その内猛烈な吹雪となったが姿を見せない。昼すぎには着く予定なのに夜になっても現れず不安は次第に濃くなり何とも言えない気持だった。遂に遭難と断定し一同悲壮な気持で明日の搜索の手配などを協議していると全身濡れ鼠でバリバリに凍り、既に夢心地になった小林大二郎をかついで屋根越のパーティがヘタリ込んで来た。全員スキーも荷物も無いので何事が起ったのかと驚いたが、ガスでルートを誤り変な谷筋に入り込み、小林が滝壺に落ちやっと這い上ったが、熊の穴らしいのが側にあったりして命からがら体一つで逃げて来たとの事だった。

連中が帰って来た時は全く嬉しく小生一生の内でも最も感動したことの一つであった。さてそれからの南股合宿が大変だった。小屋は発電所貯水池の見張用に電力会社が建てたもので、電灯、電気炬燵、電話、があり酒1升で何日でも借りられすこぶる都合がよかったのであるが、何しろ6畳1間の小さな小屋なので10人も入ると身動き出来ない。その上位置が悪いのか一度降ると小屋全体が屋根も出ない程埋ってしまうのでまるで潜水艦の様だった。そこで小屋にあった生の薪で炊事をするのだからたまらない。危く窒息しそうになり窓を開け雪にトンネルを掘って脱出したこともあった。そこへもって来て附近の野鼠が、冬中小屋の床下に避難しているらしく、その持って来た蚤が我々に飛びついて来たのだから凄かった。小生も初めて見たのであるが、下界の猫や犬の蚤と違って山鼠のそれは一騎当千の凄い奴で、更にその数ときたら全く三千世界の蚤が一堂に会したかと思われるほどだった。彼等にしてみればヤセ鼠の血にうんざりしていた所へ思い掛けなくも甲南のボンチ共の青春の血潮にありついたのでから気違いのようになって喰いついて来たに違いない。実際あの時の苦しさたるや言語に絶するもので、もしも誰が DDT でも持っていればカメラとでも交換しただろう。全く朝から晩まで寝る間もなく掻きずめに掻いた。小生あの時以来、山行きには何を忘れても蚤取粉だけは忘れたためし例がないのも、この体験によるものだ。

この瞬時も容赦しない蚤の襲撃と、一日三度の煙攻めに参ってしまい、1人去り、2人去りで遂に小生とグリーンと国府の3人になってしまった。人数の減少に比例して激しくなる蚤の攻勢に耐えかね遂に明日下山すると言う時に、伊藤新一大先輩が思いがけなくも一人でおいでになった。

勿論我々は大歓迎したが、蚤共も同時に大歓迎したらしく、到着され5分もたたない内にボ

リポリと手足を掻き始められたことで、この話が決して誇張でないことを証明するものである。

伊藤氏が来られたので帰るわけにも行かず翌朝三時に小屋を出て待望の不帰第一峰の試登に成功した。最後の垂直の壁は仲々手剛かったが伊藤氏が猛烈に頑張って突破された。この山行きがたたって後暫く病を得られたとかで申訳けなく思っている。

こうして春山は終わり、4月を迎え小生も3年になった。当り前なれば部の第一線から引退して夏山上高地合宿を最後のお勤めに専ら大学入試勉強というのが今迄の山岳部のしきたりであったが我々にとってはそれどころではなかった。

昭和16年は、御承知の様に日本にとっては運命の年である。

新学期を迎えて暫くすると突如として校友会の解散が発表された。

全校生徒武装して分列式を行い、ピリケンがゲートールを巻いた様な恰好の天野校長を団長に学校報国団が結成され、我々は報国団のバッヂを頂戴した。要するに、今迄の校友会は自治組織で自治の精神を養うためであったが、報国団は命令組織で専ら服従の精神に溢れた人物を造ろうと言うのである。そして「報国団は、新しい日本の理念に立って生れる可くして生れたものでありますから、従来のように先輩との関連も断ち切って、先生方を中心にこの理念を体得して新体制の国家意識を体得する様に」というのが、道理の擁護者天野先生の御挨拶なのだからチャンチャラおかしいではないか。

早速、各部の委員長は免職となり、部は班となり、先生方が班長、配属将校が顧問で学生の中から助手が任命された。

苦心して決めた予算はフィになり、柔道剣道部、などの時局向が大巾に引上げられ、山岳部は150円になった。最も傷めつけられたのは、山岳部、庭球部、野球部だった。野球は敵性国家アメリカのスポーツ、庭球も又ブルジョア的個人競技で日本精神に反するというのだった。山岳部は、これと言った理由はないが、勝手に学生だけで合宿などする事そのものが、新体制の精神に反するというのだから話の仕様が無いというものだった。一方銃剣術部や、国防研究会などの部が出来てここに入って居れば助かるだろうと言う見込みで落第坊主の巢になった。

ラグビー部なども、練習後は東天を拝し、大日本帝国万才を三唱などして新体制のバスに便乗していたが何となく割り切れないものであった。

然し何と言っても一番ひどい目にあったのは山岳部で看板から塗り変えられてしまった。先ず初めに報国団結成日の前、各教室で授業にその方針が発表されたが、丁度ドイツ語の時間、

あの温厚な中島先生が、新しい班名を順次読み上げられたが、山岳部がないので質問したところ、「アア、それはボーケン旅行班となりました」とのお答えなので、いくら我々がザイルやピトンを使って岩にブラ下ってるからといって冒険旅行とは人を馬鹿にしていると先生に喰ってかかったところ、鉄砲などかついで行軍する班で「剛健旅行班」との事であった。聞いていたクラス全員のドッと笑う声の中で、この時ばかりは本当に何とも言われない怒りと屈辱を感じた。

勿論、我々部員に一言の相談も無かったので全く寝首をかかれた様なもので、直にリーダー会を開いたがどうにもならない。山口邸で何回も相談したが、学校の部の先輩とは縁切りだというのだからどうにもならなかった。考え抜いた末があわれ、軍閥と妥協する外はないという結論に達した。と言うのは積極的に配属将校に働きかけ登山技術の国防的意義を認識させ、出来れば顧問位になってもらい、その後援によって班員を獲得し、実権は我々で握ろうと実に虫のよい一石三鳥位の作戦だった。剛健旅行班長の松井先生などそっちのけにして自主的に策謀をめぐらしたわけで、この精神がそもそも報告団精神に反すると申すべきであろう。それで当時の配属将校井原大佐と心安かった津田を案内役に、小林や国府などの成績優秀組を選んで一夜大佐を自宅に訪問し大いに弁じたのであるが、この井原大佐たるや、顔は一寸東條さんに似ているのだが、国防婦人会の理事などしておりつかみどころのない瓢箪鯨で「山はイイナー。僕も毎日裏山を散歩しとるよ。ワァハハハハ」といった調子で要領を得なかった。

しかし、我々はこれで先ず陸軍省公認になったつもりで早速寺井生徒課長にも話したのであるが、デエロニモなる別名を持たれる教授は、デロリと我々を睨みつけ、「何言っとるか……山岳部の道具は後藤先生が保管するから生徒課の倉庫に運んどけ」と取り合ってもらえなかった。命と頼むアーサービルのザイルをサッサに渡して運動会の張綱にされてはたまらんと早速疎開させたが、大半のものは接收されてしまった。

こうなっては自力で斗う以外には道はない。我々は部室のドアに“KONAN ALPINE CLUB”の看板をはりつけて頑張り山行の計画を勝手にリーダー会で決めて山岳班の名で掲示した。ここで立場上困ったのは班長の松井先生である。先生は委員長だった小林を呼んで剛健旅行班の行動綱領をコンコンと伝えられたが、一向に伝わらないので遂に全班員集合となった。部室に20位集ってガヤガヤやっているところへ先生が青い顔して入って来られ、「岩登りや、雪積期登山などと勝手なことを言わずに、学校の方針に従い、徒歩行事に転向して呉れ」と声涙共に下る説教を試みられたが、皆一言も口を利かない。先生はそれでも順番に「小林君

どう思う?」「小川君は?」「福井君は?」と聞いてゆかれたが黙して答えぬ。遂に怒り心頭に発し大声で何か怒鳴られたと思うと脱兎の如く部屋から飛出してどこかに走ってしまわれた。松井先生は甲南で一番真面目な学究で7年の長きにわたり部長をして頂いた山岳部の恩人であったが、我々はその先生の立場と御意志を踏みにじったのである。山岳部の自主性を守る為には誠に止むを得ない行動ではあった。

引続いて部員総会という様な恰好になり、今後の部のあり方を話し合ったが、国府などの穏健派は義理人情に引かれ弱音をはき、北川等の強硬派は、ホッテ置けという意見であり、中間派の小林は深刻な顔をして居た。こうやっている間にも矢張りゲートルを巻いて鉄砲かっいで剛健旅行に出かけようという奇篤な御仁は一人も現れず、遂に松井先生とは決別せざるを得ないということになってしまった。

早速小林が悲壮な決意で寺井生徒課長に経過報告に行ったが、我々は、横面でも張飛ばされて帰って来るだろうと待機していたところ意外にも「そんなら好きな様にしろ。そのうちに誰か班長を決めるから……」との返事だった。しかし、小生等の在学中は遂に班長も決らず寺井先生直属で自由勝手に山へ登った。おかげで小生、寺井教授と親しくなった。だが、いくら勝手な事をしたところで、部というものは矢張り学生全体の自治組織の母体があってこそ、潑刺として生きて来るもので、それが無くなったのだから、ともすれば同好会的な傾向に流れそうになって行ったのは止むを得ないことだった。

ま、こんなわけで班長を放り出してしまった我々は、夏山は例年の如く上高地合宿と洞沢合宿に決めたが、いざ出発という頃に仏印進駐が行われ、巷間日米戦の噂しきりで、一切切の合宿とインターハイも中止になり家庭で待期せよとの事で行けなくなってしまった。それなら勝手に奥又にでも行けということで、北川、加賀、岡橋で三宮駅から将に乗車しようという間際に、駆けつけた赤松先輩に逮捕されてオジャンになった。それ程切迫した空気がみなぎっていたのである。

しかし、その冬は大平洋戦争の開戦をよそに念願の積雪期奥又行を決行した。緒戦の勝利に酔っていたのか、返って開戦前より一時的には自由になった様であった。

蜿蜒と続くドライヴウェイをラッセルして8名で徳沢に入り、ここからラッシュアタックで奥又白谷から前穂を登り将来積雪期のバトレスをやる基礎を造ろうというつもりであった。尤も、天候が悪く松高ルンゼに2回ラッセル隊を出し、池まで達しただけで終ったが、雪の北尾根東面の壁は圧倒的な景観であった。

卒業式の日、皆帰った後で何となく気が抜けてしまった様な気持で一人部室の机の上に寝転んでいると、松井先生が入って来られ「君もどうかお元気で。僕も甲南を辞めました」と別れの言葉をかけて行かれた。その時以来、今日まで遂に先生にお会いする機会を持たない。（先生は現在文学博士で名古屋大学の教授になって居られます。）

17年の春、大学にどうやら入る事が出来たので、甲南の合宿にかけつけ参加した。

遠見から鹿島迄テントと雪洞で足を延すことにし、新人トレーニングが主目的であった。現役約10名に新 O・B の小生と小林誠のメンバーだったがこの山行は初めから終わりまでヘマの連続だった。

先ず、遠見小屋に入った初日、徳末の靴がストーヴの上で黒焦になりどうにもならない。翌日藁靴でトボトボ下山する姿は気の毒というより滑稽であった。2、3日して前進キャンプを設置す可く偵察隊を編成して5人で早朝大遠見の少し上まで進んだところで、後から「墜ちたァー」と呼び声がしたので振り返ると、小泉がクラストした斜面をカクネ里に向って滑落して行き忽ちガスの中に消え去った。呼べど叫べど答えはない。

えらいことになったと慌ててアイゼンに踏きかえ斜面を2,300米下り1時間近く探して木の窪みに頭を突込み、血まみれになって倒れている小泉を発見した。

これは駄目だ……と皆只呆然と見つめているだけで手を出すものもない。その内かすかなうなり声が聞えて来たので慌てて救助に取りかかった。小屋に着く迄、意識不明であったが、肩の上でウワゴトに「藤岡の数学を忘れた」と繰返し、繰返し言っては担いでいる我々の気を減入させたものであった。

それから後は天気が悪く、大部分帰って、確か加賀、奥田、岡橋、小生の4人テントに残ったが、天候が悪く五龍に登っただけで遠見小屋に引返した。小屋は我々のパーティだけだったので、ゆっくりと甲南生活最後の山の夢を楽しんでいたところ、「火事ダー」という呼び声に飛び起きると、既に天井に火の手が廻り着ていた蒲団もくすぶっている仕末。外はゴーゴーたる吹雪で、それにあふられた火焰と渦巻く煙で物凄かった。これには流石に物に動じない我々も全く魂消た。

必死になって水槽の雪溶け水を飯盒やコップで下から天井に向かってかけるのだが、それがそのまま我々の頭に、もどって来るのだからたまらない。

火攻め水攻めで散々な目に会い、鎮火した頃には吹雪の中の濡れ鼠だった。しかし我々の英雄的な奮斗で、幸いにも遠見小屋は屋根をなくしただけで助かり今日まで健在で甲南の諸君に

も泊って戴いているわけだ。

あれから20余年、時は移り、人は変っても、我々が先輩から受けついだシユプールは、そのまま切れることなく、後輩諸君によって受けつがれ懐かしいあの尾根に、あの頂に、永遠に続いているのである。

今更乍ら、永遠の時の歩みに、変らず立てる山岳の様に、人間の生活を貫いて永久に生命を保つ伝統の力を感じると同時に、その伝統の中に何年かを過し得たことは、生涯忘れ得ない喜びである。

B E R G H E I L

(旧制17回卒業)

終 戦 と 部 の 再 建 (昭和20年～25年)

河 崎 厚 二

此の5年間は、戦時中にもまして、混乱と不安定な世情の月日であった。だがその間にも、社会の悪条件を克服して山岳部が再建され、今日では想像もつかぬ苦勞をかけて山行や合宿が行われたのである。かくして部の活動も一時は順調に復元したかの様に思われたが、学制改革、即ち旧制高校の廃止と新制への移行によって思わぬ打撃を蒙り、再び潰滅の状態に陥った。従って、此の時代は後の新制大学山岳部設立迄の一つの過渡期であって、記録的にもみるべきものもない。又部員も少かった関係で、リーダーシップやイデオロギーに就て、歴史的考察を加えるべき論争も無かった。当時は経済、社会的条件と斗争事が、山行の重要な先決問題であり、部員のエネルギーは主としてその問題に向けられた時代であるから止むを得なかった訳であるが、此の混乱期の中に、山岳部員としての揺らん期を過した、当時年少の新人、阿部公、宮本、田辺、柳沢等が、後に新制大学設立と共に大学山岳部としての基礎造りとその発展に大きく貢献した事を思えば、決して無為な時代ではなかったと言えよう。

昭和20年

此の年、8月15日終戦の日を契期として、世情は絶悪の状態と化した。一億総玉碎の掛声に

踊らされていた国民は一夜にして虚脱状態となり、甲南に於ても、その日迄武士道を講じ、大和魂を説いていた教師が、早速民主主義の講議を始めると言った豹変振りに、むしろ学生の方が戸惑う位であった。人々は「喰う」と言う人間の最も原始的な本能をむき出して毎日を過していた。物望の欠乏とインフレ、おかゆを水筒につめて弁当代りにするものもいたし、闇の商品を拒否して栄養失調となり亡くなられた教師もあった。学生の間では、地下足袋スタイルが流行し、旧軍隊放出のゾル靴が巾をきかし、1本の煙草は常に5、6人で吸い廻され、短くなって手で持てなくなると、松葉を突きさして完全に吸われたものであった。かかる世相のうちにも、やがて山岳部員も何となく集り出したし、O.B 連との連絡も取れ始めて部再建の気運は次第に高まりつつあった。

併し、部員の大半は、戦時中に旧制の尋常科に入学し、戦争末期には軍需工場に勤労働員されていた為、岩登りの訓練だけはみっちり受けていたものの、大きな合宿の経験がなかった。この様な事情や、社会情勢などの関係で、結局、山岳部の実質的再建活動の第一歩は翌年に持ち越されるに至ったのである。

昭和 21 年

此の年の夏、道場百丈ヶ原に於て、福井亨リーダーのもとに、CAMP が行われた。これは山岳部としては、戦後初めての統一的再建行動であった様に思う。此の CAMP に於て、部の今後の具体的方針が検討され、日常のトレーニング等のプランも決定された。丁度此の頃、奥田泰三が朝鮮から引揚げて来たし、又小川守正先輩の絶大な協力もあって10月に穂高で秋山合宿を行う事も決定したのである。当時の部室に於ける論争は、専ら食糧を如何にして入手するかと言う事に集中されていた。集った食糧は勿論、餘なものは無かった。米と芋と、味噌が主体であったが、我々の山へ登ろうと言う意欲はくじけなかった。汽車の切符を入手するのも並大抵の苦勞ではなかった。国鉄住吉駅では松本行きの切符を1日に2枚しか発売しなかったもので、徹夜で並んで買ったものである。こうして我々は穂高へ向ったのである。しかし一方、この頃の山は、下界とは全く無縁の存在であり、自然そのものであり、静寂の限りであった。我々が出会ったPARTYは徳本峠で行も違った松高 PARTY、只一つだけであった。この穂高合宿では、翌春の北尾根アタックも大体の見透しがつけられ、又帰路乗鞍岳でのスキー合宿の目途もつけられ、再建への歩みを踏みだしたのである。

かくて同年12月には岡橋圭三、塩野喜久夫両先輩が中心となり、乗鞍位ヶ原でスキー合宿と新人の冬山訓練が行われた。

昭和 22 年

春 3 月、苦斗の末、北尾根のラッシュ・アタックに成功した。小川、中村、奥田、福井の PARTY である。同じ時、早稲田は、同じ北尾根に、早くも極地法を展開していたが、甲南では部員の少かった事もあって、小数精鋭主義のラッシュ・アタクティックに重点がおかれるようになっていた。此の傾向は、戦前の初登攀時代、ヴァリエーション開拓時代の甲南の行き方が大きく影響していた事は歪めないと思う。

7 月、潤沢に於て夏山合宿が行われた。此の頃も依然として、食糧難の時が続いており、又合宿人員も増えるにつれて、我々は買出しの為の先発隊をその都度出さねばならぬ様になっていた。闇米取締り警官の目をごまかす為に、リュックを背に、ピッケルを持って、信州の農家を廻ったのも笑えぬ話である。

当時のリーダーシップの基調は、“No Accident” であった。過去輝かしき数々の記録に伝統を有する甲南山岳部が創立以来、No Accident であった事は、当時の部員各人にとっても此の上ない誇りと感じていたし、此の事実こそは絶対に守り抜こうと言う信念みたいなものが自ら出来てしまっていたのである。此の事は、登山家であれば、当然の事であるが、戦後の再建途上にあった我々には不可欠の使命であったのである。

春、夏、冬の山行のローテーションはかくて軌道に乗って来たが、どう言う訳か中堅部員の不足が目立つ様にもなって来た。高学年と尋常科低学年の部員のみで、次代をに成る中間学年の部員がいない事は誠に重視すべき事態であった。インフレの世にあって、各人が合宿に参加する金をやりくりするだけでも大変なものであったが、それにもまして新部員を獲得する事は、此の上もなく困難であったのだ。此の事態は後の学制改革の際にも、大きな支障となって再建を一頓座させる原因ともなった。

昭和 23 年

3 月、鹿島槍東尾根、鎌尾根に歩を進めた。此の頃でも、我々の食欲は充分満たされてはいなかった。小川先輩が、空缶の中に残っていた保革油グリスをジャムと間違えてパンにコッタリと塗りつけて食べた話は、今でも山岳部の語り草となっている。

4 月になり、伊藤治、前田金剛等の主力メンバーが高等科 3 年に進み、大学受験準備の為、第一線より退き、残存部員は高等科 2 年の河崎と武蔵高校より転校して来た吉川の 2 名が中心で、他は阿部公とか宮本等、尋常科部員のみとなってしまった。すでに学制改革の話も起っており、山岳部としては、阿部、宮本等を育てる以外に、道はなかったのである。

7月には、その様な方針に沿って、穂高で基本的な合宿の後、戦後始めて縦走形式を取り入れ槍、燕へ抜けた。此の形態は、新人に山を知ると言う事に於て非常に役立ったと思う。此の方法を早く取り入れていたら、部員の脱落も防げたであろうし、新部員の獲得にも役立ったであろうと思われた。

12月、冬山可動部員は僅か2人となり、弘世源、河崎の2人は鹿島に向った。此の頃、冬山、春山合宿の時には、勿論スキー合宿は別に行われていた事は申す迄もない。又、関西学生山岳連盟神戸セクションも復活し、他校との情報交流や、記録公開が行われたのも此の頃である。

昭和24年

本年、学制改革が行われた。即ち旧制高校が廃止され、新制高校への移行が行われた結果、旧制高等科1年と3年は甲南を去った。又旧制高校2年は3年に進学し、旧制大学最後の入試受験の為多忙となり、事実上、可動部員は無くなり、残るは中学部員のみになってしまった。丁度その頃、関西にも極地法ブームが到来しかけており、関学はOBとの混成隊により、鹿島北壁を最終目標とする後立山極地法を試みたが、連日の悪天候の為、失敗に終わった。戦後5年間では各校とも地力はなかった様に思われる。阪大は、未だ正式な部活動に入っておらず、旧浪高出身者の少数が中心になりラッシュを行っており、京大も未だその域を出ていなかった。勿論、甲南も例外ではなかった。丁度岳連神戸セクションで合同登山の話が持ち上り、単独では大きな山行きも出来なかった時でもあり、甲南も伊藤治、河崎の2名が参加する事になった。天上沢より北鎌沢をつめ、北鎌尾根より槍を attack する計画で、前進 CAMP 3つを設定すると言う、時としてはかなり大きな山行きである。新人の多い混成部隊でもあり、異常な悪天候もあって失敗には終わったが、客観的に甲南山岳部と言うものを認識する事、機会を持つ事が出来た事は有意義でもあった。

とも角も、此の鎌尾根は旧制甲南最後の山行記録となった。旧制甲南山岳部には何か甲南独特のムードがあり、それにはチームパーティの和と言う事が大きな要素であった様に思われる日曜日のトレーニングの時でも、甲南パーティは遠くから離れてみても、すぐそれと判る様なものがただよっていた。7年制と言う特殊性にも拘わらず低学年から高学年に至る迄、誠に和気アイアイとし、その内にも、激しい斗志と自信が充ち溢れていた。他校のパーティとは比較出来ぬムードであったのである。新制への移行と、来るべき大学の設置に依って必然的に、他の高校からの入学者も増加するであろうし、従来の甲南山岳部の個性が失われはせぬかと言う

事を、我々やOB等も一時は心配したものである。

春山以後は完全に新制へと移行した。夏と冬は部員もわかかった関係で合宿は一般募集の形態で簡単な山行きが行われている。

昭和25年後

3月のスキー合宿、7月の涸沢、12月の乗鞍スキー、何れも宮本、阿部公、柳沢、田辺が中心となった。大学山岳部が設置され、その活動を始める迄の此の当時、即ち新制高校部員のみの時代が、むしろ、最も苦しく、危機に瀕^{ひん}していたのではないかと思う。年代が大きく離れていた事もあって、OB連との折触^{せふ}の機会もやや浅かったし、又OB連の協力も充分ではなかった事も原因であろう。併し、新制高校としてみれば、決して低調ではなく、当時の他の新制高校のレベル以上であった。

翌26年も3月の乗鞍、7月の涸沢、12月の遠見尾根と部活動を行っている。又此の年9月21日には美津濃に於てOB山岳会の会合が開かれ、現役山岳部に対し積極的協力を惜しまぬ事を申し合わせ、再発足の気分は漸くにして現役、OB共、盛り上ってまた記念すべき日となった。

27年、7月戦後7年にして始めて、20 pageの小冊子ではあったが時報復刊第1号が発行されたのである。混乱と荒廃の真只中であって、再建の歩みを始めた山岳部、始めに述べた様に特筆すべき記録もなく、アルピニズム、部としてのイデオロギー、リーダーシップ等についての思想的論争を持ついとまもなかったが、苦しい中を立ち上り、純粹にあらゆる悪条件と斗って、部再建の為に尽し、そして山に向った。当時の我々の仲間の努力を忘れてはなるまい。その仲間は、奥田泰三、中村忠雄、福井亨、伊藤治、前田金剛、丸山昭夫、弘世源太郎、若き仲間、阿部公義、宮本侑、田辺、柳沢、他数々の面々であった。又、OBでは香月会長を始め、小川守正、加賀昌郎、岡橋節三、塩野喜久夫の諸兄が中心となり、絶大な御協力を賜ったのである。仲間と諸兄に対する新たな感謝の念を持って、此の項を終る。

(旧制25回卒業)

学制改革と大学山岳（昭和25年～38年）

昭和25～27年 新制甲南高校山岳部の発足 阿 部 公 義

昭和24年学制改革の波が我々におしよせて来た。当時私は尋常科に在学中であったが7年制高校が今の普通の6年制高校に移行し、高校と中学に分かれ、その上中学は高校と異なる校章まで着用する様申しわたされた。しかし我々は7年制高校に入学したのであるからその様なことは出来ないとしさやかな Resistance をくりかえしたものである。

学制改革により一度に2つの学年が卒業することになり当時手薄だった山岳部は大きな痛手を受けた。新制高校として発足した初年度は部員もわずか数名にすぎず全て中学生であった。実際のところ我々中学生のみで部を運営し合宿を行うのは不可能であった。当時は終戦後まもなくであり、騒然とした世の中で登山を行うことは至難であり、汽車に乗車することさえも困難な時代であった。

学制改革の後一度に大量の卒業部員を出し大きな痛手を受けた山岳部も昭和25年にわたり少しづつ立ちなおりのきざしを見せて来た。学制改革当時中学生であった我々も高校1年となり山岳部としては最高学生であったが河崎先輩のよき協力を得て我々は中学生としては異例とも思われる合宿をへて四季の登山を行い基礎的な練習をかさねたのであった。

すなわち23年には穂高合宿を行い一応の縦走路を trace した。その後槍をへて燕に向い中房温泉をへて追分まで下った当時はまだ、Bus が中房まで来ていなかった。その冬と翌24年の春は我々中学生だけで乗鞍位ヶ原に Ski 合宿を行った。その冬の合宿に岡橋、伊藤（治）両先輩の参加があり我々にとっては大きな意義のある合宿であった。夏には吉野連山に遊び冬と25年の春はふたたび位ヶ原に Ski 合宿を行った。この頃より部員も充実し将来の本格的な合宿の基礎をかためる必要が痛感された。この年より Ski 合宿に吉松先生の参加を見、より充実したら Ski 合宿が出来た。今一度お礼を申し上げるしだいです。

以上の様な中学時代をへて我々が高校一年になった時、積雪期の本格的な合宿が考えられた。当時部の構成メンバーは高校1年3名、中学3年5名、2年1名であった。しかし高校1年が最上級部員であり、冬山の経験は全員位ヶ原の Ski のみであった。しかしながら我々は真剣に何とかして冬山の合宿を成立させたいと考え、河崎先輩にお願いし、加賀、奥田両先

輩の参加を得て新制高校になって初めての冬山合宿を遠見尾根に持つことになった。

テントと言えば、戦前の甲南ハナヤカなりしころのポーラー型テントとウインパーを使用した。新しくテントを作ることは不可能な時代であった。出発に先だって部室の前にテントを張りヤブレ穴をタンネンに修理して出かけた。マットレスはカボックの重いものラディウスも戦前のものとアメリカ軍放出のものを使用し、寝袋は全々なく大半は毛布を袋にして代用した。

ともかく前世紀的な装備でこの合宿にのぞんだのである。

結果としては五龍岳の登頂は出来ず高校生と中学生の体力不足を重荷にはばまれ前進テントの設営が予定より下になり白岳に達したのみで下山した。しかしながら最初の冬山合宿としては大いに得るところが多く、その後の積雪期の合宿の基礎として大きな役割があったと信じている。その後新制高校としては内容のある登山をくりかえし、春にはふたたび遠見尾根に入りその後、田辺（潤）がリーダーとなり、南股合宿をへて現在の甲南大学山岳部にとっての大きな基礎的な役割をはたした。

甲南大学山岳部の設立 昭和28年～32年

昭和28年の春、新制になって最初の高校山岳部のメンバーが卒業し、当時新設された甲南大学に進んだ。我々は直ぐに山岳部を設立したいと考え、その準備を始めた。しかしながら、当時すでに一回生により山岳部が形だけは作られていた。当時のメンバーは山岳部を正式に設立するために名前のみを借りたのが大部分で我々が入学するまでは全然行動をともしない有名無実な部であった。しかしながら名前だけでも先に作ってくれたことは後になり、甲南大学体育会の“部”と認められることが困難となったことを考えれば、我々にとって大きな幸運であった。

我々はただちに当時設立時のリーダーであった阿部純と協議し、今まであった有名無実の山岳部を一応精算し、我々甲南山岳部出身者と同時に入学した他高校山岳部出身者が中心となって事実上の大学山岳部としての第一歩をふみ出したのである。そして初代のリーダーとして阿部純一を挙げたのである。

当時の我々の直面した最大の困難は装備を始めとする資金面と大学が設立された結果、大学山岳部と高校山岳部との関係であった。

最初学友会の部費はわずか年額一万円であり、とても冬山はもちろんのこと夏山の装備を購入することも不可能であった。しかしながら高校山岳部の好意によりとりあえず、夏山のテン

トその他を借用し、夏山合宿を行うことが出来た。参加人員はわずか4名にすぎなかったが、剣沢に合宿し針ノ木へ縦走した。全員高校山岳部出身であり、すでに山の経験は持っており、わずか4名ではあるが充分により進歩的な合宿が行える可能性を持って居た。しかし大学山岳部として第一歩であり全員新人であることを認識し、Step by Step の段階を経て発展すべきであると結論し初歩的な合宿形態を取ったのである。

わずか4名のPartyで3週間以上の合宿の装備食糧を剣沢まで上げることは困難をきわめた。現在と異り八郎坂の急坂をへて3日を必要とした。合宿は雨にたたられ、満足な結果を得ることは出来なかったが、大学山岳部としての第一歩はこの様にしてふみ出されたのである。

当時我々の直面した第二の問題は大学山岳部と高校山岳部との関係である。

一般的に見れば大学が設立された結果今までの甲南高校と異り中学から大学まで一本化された甲南学園が新しく実現したのである。しかしながら甲南中学と高校は旧制時代と同じ一本化された一つの学校であり、中学一年に入学すると高校卒業までほとんど変化はなかった。それに反して大学は高校までの一本化に対して人員構成の面から見ると、他高校からの入学の方が甲南高校よりはるかに多く、実際には甲南高校の延長とは考えることが出来ない。それにもかかわらず、私を初め当時山岳部を設立したMemberの多くは甲南高校出身者であり、大学山岳部と高校山岳部とは一本化されなければならないし、合宿も中学から大学まで統一して行うことが出来れば他校に見られない、ユニークな山岳部が出来るのではないかと考え、又その様な幅広い上下の関係が甲南の伝統的な良さではないかと考えたのである。

この様な考えにもとづいて夏山合宿が終了した後にとり合えず我々大学山岳部が高校山岳部を援助すると言う型をとり、高校山岳部の合宿に参加し行動をともにしたのである。そして夏山合宿の後、大学山岳部と種々協議し冬山合宿は大学、中学合同で行うことを確認し、八方尾根より唐松をへて五龍岳へのポーラーを計画した。不幸にして悪天候のために初期の目的を達するにいたらなかったが、この合同合宿は種々の問題を我々にあたえてくれた。そしてその後における合同合宿の可能性を少くしてしまったのである。まず第一に大体十才以上も年令の異なるPartyを単一の行動隊の中に入れて一つの目的に向って行動をともにすることは当然不可能であるし、もしも体力技術相応の分に応じた職務を一つのPartyつ中で行うならば、現在将来ともに中学はもちろんのこと高校のMemberも大学山岳部の一兵卒の役割しかはたすことが出来ない。又リーダーシップの問題にしても年令、体力も相当なへだたりのあるPartyを動かすことは非常な困難であった。当時はまだ現在の様な先鋭的な登山と言うものは学校山

岳部においてはまだ取り上げられていなく、ヒマラヤを目標としたポーラー型式の合宿が多く試みられていた。ポーラー型式の合宿の中では特に上記の問題点が大きくクローズアップされ、第一の試みであった甲南学園としての合同合宿が失敗に終わったことは本当に残念であった。その後折にふれ、この問題が我々の間の初議題により甲南学園山岳部としての在方に対して議論したが、結論が出ず、我々の知っているかぎりにおいては現在まで何等の結論も出ていない様に思われる。しかしながら歴史的に見、又大学山岳部が設立された当時の関係OBとの関係から考えて何らかの結論が見出されるべきであると思っておりますし、又40周年の記念ある年にあたってこの問題も又真剣に考えて見る必要があると考えるしだいです。

冬山合同合宿の反省の後、春山は大学と高校とは別々な合宿を行うが大学山岳部が高校山岳部を援助する型式を取った。これが大学山岳部として初めての独自の積雪期合宿となった。冬の八方尾根の失敗を反省してふたたび八方尾根より五龍岳に全員登頂を計画し、前進テントを唐松直下に置き五龍岳に登頂した。途中不幸にして砂川彰雄が盲腸炎になり、予定の全員登頂は出来なかったが、全員のチームワークの結果により無事下山し大町の病院で手術を受けたのである。

大学山岳部が正式に発足して一年種々な問題が徐々ながら解決し、二年目を向えて新人の補強も順調に進みしだいに大学山岳部としての形態をととのえていった。五月の鹿島槍、夏の剣合宿穂高への縦走、秋の山行、冬の乗鞍、春の杓子岳にいたる一連の行動はつねに Step by Step の理論の下に山岳部の基礎の充実をはかったのである。

設立後2年を境にして我々の間によりやく飛躍的に前進する時期に来て居るとの考えがおこり、又甲南山岳部独自の一貫した山行きを合せてすべきであり、最終目標に向って全員が協力してその目的に向って全力を傾けること、又その計画の立案にあたって一つの方向づけをすることの確認がなされ、その考えの下に我々は当時まだ未知の世界が多く残っている剣岳西面に目を向けて、全ての方向をこの剣西面に向けることになった。その後二ケ年にわたり、春、冬の早月尾根、小窓尾根のテイサツを含みその他、夏の剣岳合宿冬の Ski 合宿について燕大天井の山行きも我々の考えの底には着々と西面への準備であるとの確信をもって居た。その間残念にも一つの小窓尾根でのスリップ事故が起り、我々にとって大きなショックであり、大なる反省を強いることになった。そして再び根本的な解決として Step by Step の考えが再々確認されたのである。

我々山岳部としての第1回の Member が4年になり、第一隊からしりぞいた後もこの考え

は次のリーダー会にも持ちこされ、より充実した山行きを積みかさねて行ったことは全く全員の山への熱意であり、全員の一致協力による強固な Team Work であると思い、我々も全面的な協力をおしなかったのである。しかしながら、この再出発を期し大きく前進する時にあたり再び小窓尾根において甲南山岳部始まって以来の Accident が発生したことは本当に残念であり、甲南山岳部史上に一つの汚点をのこしたことは我々は深くかなしむと同時に心からおわびするしだいです。それにもかかわらず、この Accident の善後処置については先輩を初め多くの人々の心からの協力と援助を受けて、残念にも福永君の遺体の発見は出来なかったが、数年に渡る後輩をも含めての搜索に全力を傾けて下さった人々に対して、今一度感謝の念とともにお礼を申し上げるしだいです。この甲南山岳部初の Accident の発生により、今までの前向きの姿勢が一時後退するのではないかとの恐れが、我々の間にみなぎって居た。しかしその後に預った田辺君を始めとする、優秀な後輩の努力により今の姿の山岳部に再びもどったことは我々第1回山岳部の設立にあたった者としてここに感謝するしだいです。

(新制3回卒業)

(昭和32年～33年)

田 辺 潤

我々3年部員——と言っても竹中と小生の2人しかいなかったのだが、——が4年の雨宮リーダーから、リーダー会を引継いだのはすでに5月に入ってからではなかったかと思う。恐らく雨宮は、以前から提唱されていた3年の秋にリーダー会を引継いで4年の秋に交替するという案を実行するつもりであったのかもしれない。しかし我々3年部員はそれに反対であった。論理的には、4年生の秋のリーダー会交替は理想的であるが、現実的には就職運動相俟って、4年生がリーダー会を全うすることは不可能であるし、前年度からの部内の雰囲気、或は状態と言ったものが、結果的には福永君の遭難死と言う取返しのつかない Katastrophe として表われたのであろうし、何よりも我々はそう言った部門の何か泥沼の底にいるかの如き状態

や雰囲気は新学期と共にリーダー会の交替と言うことで、新しい意気と、再建の意志に満ちたものでなければならぬと期待したからであった。

部の建設途上であって、この様な何かモヤモヤした雰囲気が何故部を取巻いていたかと言うことはすでに多くの反省が時報、或は故福永君追悼号によってなされているので、ここで再び繰返す必要もないであろうが、当時遭難によって再び再建をせまられた部が立直らんとするには、この反省の上に立っての第一歩からはじめねばならなかったのである。このモヤモヤした欲求不満の雰囲気、或はそれから来る各学年間の信頼性の遊離と言った状態は、恐らく当時の1年部員——故福永君も含んだ——を除いたすべての上級部員に責任のあることではなかったろうか。

まず第一にそれは3年部員によるリーダー会のまとまりのなさからくる無力であったろう。前年のリーダー会は大学創立後はじめて山岳部を設立したと言う、いわばパイオニア的性格を持ち、彼等の4年間に於ける活動が、その頃に暫く実を結び、且それによってここまで部を發展させて来たと言う自負を持っていたであろう。その後を引継いだ3年のリーダー会が、その構成メンバーの個人的性格の色彩濃く、又経験の不足から来る力量不足は如何ともしがたかったにもかかわらず、前年度以上の部の發展——進歩と言う誤れる考え、時報1957、部の歩みと方針雨宮宏光の項参照——を望んだことにある。

第二に当時2年部員であった我々の思い上りと、リーダー会に対する意地の悪い傍觀的態度であり、結果的にはそれは、リーダー会及び部に対する非協力であった。3年部員が前年度リーダー会からリーダーを引継いだ時、小生もそのリーダー会の一員に加えられた、しかし、大学山岳部の上級生絶対主義と言う誤れる意識と3年部員の力量不足を見透した小生の思い上りから、自発的にリーダー会を退き、その後、表面的には協力的であったにせよ、常にリーダー会に対する批判を心の内に持っており、夏山に於ては途中下山と言う形で、リーダー会に対する不信を表出したのである。その後我々にとられた処置や、反省によって、部は一時旨く行っていたかに見えたのであるが、その実リーダー会の性格は依然として変わっていなかったし、我々の不満も解消されたわけでもなかった。

第三に4年部員の直接的には責任のない、3年部員、即ちリーダー会に対する姑の小言であったと思う。上記した様に4年部員の、部を建設したと言う自負は、自分等がここまで立派に部を建設して来たのだから、オマエ等も当然、それと同等以上のことが出来るはずであると言う意識のもとに、力量不足だった3年部員を暖かく援助することなく、かえって批判ばかりし

ていたきらいがあった。

この様に、部の建設途上にありがちな過渡期の1年を遭難と言う結果で迎えた後、我々リーダー会がまずなさねばならなかったのは、反省にはじまって、現状を考え合せ如何に部を再建するかにあった。それは一口に言えば、従来の技術偏重を排し、大学山岳部としての使命であるマウントニアーたらんとする事であった。幸いにして、その年は、新入部員の入部が多く7名を越え、一度ドン底に落ちた我々に新たな希望をいだかせた。これら大量の1年生を着実に養成する事によって部の再建は為されと考え、部の組織を各人が責任をもって為される様改め、本当に意志のあるものだけを残して、名ばかりの部員を排し、又チームワークを作っていくに重要なお互の人間関係を密にする目的で、当分の間すべての山行を合宿に重点をおいた。リーダー会引継後すぐにやって来た夏山は、劔二股に合宿、後全員で薬師岳を通して双六岳から蒲田に抜ける縦走を考えた。しかし二股合宿中雨にたたられ、少くとも新人に劔の概念だけでも知ってもらえる様、縦走計画を変えて合宿を延期せねばならなかった。縦走は五色ヶ原から黒部へ下り、南沢を通して針の木峠と言うコースに変更されたが、好天にめぐまれ又全員による縦走でもあったので、チームワークを作ると言う目的が十分に達せられたのではないかと思う。縦走を終えて一部の3年2年部員で、高校の涸沢合宿に参加した。これは学園山岳部と言う考えから、我々の山岳部は中学から大学まで一つの山岳部であり、そこに甲南としての特徴を発展させると言う考えで、奥田泰三先輩も加わっていただいて、一時危機にあった高校山岳部としては久しぶりによくまとまった実のある山行となった。

冬山を控え、良きマウントニアーたるべく、部内で各種ゼミナールがもたれる様になった。即ち気象、食料、装備等の研究及び発表である。現在も続いている“プランノート”の作製などもこの頃からはじめられたのではなかったかと思う。冬山の計画は、まずマウントニアーたるべきものの荷物をかついでスキーが出来ぬようでは、お話しにならないと考え、前半を乗鞍のスキー合宿とし、後半にその成果をも確かめ得る目的で北股から双子岩或はカンバ平のベースから杓子尾根、杓子岳登攀を計画した。スキー合宿では、今までの半分遊びのスキー合宿から、真に山で使えるスキー技術の習得と生活に目標をおいた。杓子尾根の合宿は1年部員に冬山の何たるかを知ってもらう目的であったが、連日の猛吹雪とドカ雪に杓子岳には登れなかったが、ラッセル、除雪、ワカン技術等、基礎的技術の習得には大いに成果があった。

春山は、今年度はすべて合宿重点主義と言うことから、冬の北股とは反対の南股から不帰沢をベースに不帰の各尾根に登攀する放射状アタック合宿を計画した。不帰は、まずアプローチ

が短く入り易いと言う利点をもっているし、技術もかなり高度なものを要求されるし、又雪崩を実地に研究出来ると言う、新人にとっては、行き甲斐のある所であろうし、又我々リーダー会竹中と小生も一度ならずここに入って、しかも目標を達していず、又遭難後と言う事でそれまでの各合宿を控え目な計画で行って来たので志気を盛上げる意味においても不帰と言うヴァリエーションをえらんだのである。しかし、一昨年春の木全の事故、昨年の福永君の事故といつも春山にしかも2度連続しているので、今度だけは3度目でもあり、合宿マカリナラヌと学生部長より横槍が入った。慎重に慎重を重ねた上での計画であり、2度あったからと言って3度あるとは限らないと、はげしく抗議し、又半分ケンカにもなったが、ガンとして学生部長聞き入れず、もし強行するならば今後山岳部の存続を認めないとまで言いだした。部においても何度も討議されたが、結局竹中が昨年の事故の当事者であった事から、学校側の意見を聞き入れるべきだと今回の合宿に反対した事もあって、春山不帰計画を遂に断念せねばならなくなった。しかし春山を完全に放棄してしまっただけは何もならないと考え、この際もっとスキー技術を習得しようではないかと乗鞍へ行く事になった。

当時のことを思えば、ヒマラヤ遠征計画を実際に進めている現在が、よくもここまで再建出来たものであると感慨深いものがある。旧制先輩達の並々ならぬ援助もさる事ながら、我々の後を引継いだ伊丹や——小生の為にやりにくい事が多々あった事と思う。この紙上を借りてお詫びしておく——再建の原動力となってくれた広瀬、越田をはじめ、当時1年生だった人々に深く感謝の他ない。

(新制5回卒業)

“昭和33～35年”

越 田 和 男

小窓尾根の事故以来の1年間は捜査で明け暮れ、又大事な春山合宿(南股より不帰を計画していた)を大学側から中止を命ぜられ、乗鞍合宿に切り換える等散々な目にあったが、新学期を迎えて漸く遭難の暗い影も薄れ、部室も明るくなった。この年の特徴は、C.L.の伊丹氏が相当のんびりした御仁で、あまり闘争的な山登りを好まなかったから、リーダー会の発表する計画は概して消極的で、それを不満とする下級部員が下からハッパをかける様な事もあって、一寸おかしい雰囲気だった。おまけに4年生には山岳部の主的存在であった田^{ぬし}辺氏がデ^{ガヤ}

ンと構えて睨を利かしていたので3年生諸兄は随分やり難かったろうと思う。新人として参加した春山で同僚を1人失った伊丹氏だけに、計画が控え目になっても当然なのだが、下級生がこんな事に無頓着だったのがいけなかった様だ。

5月に合宿をやり出したのはこの年だった。鹿島の西俣に B. C. を置いたこの合宿では、当初の計画であった赤岩及び鎌尾根の地に東尾根や小冷尾根にも成功した。福田泰次、小川守正の両先輩をテントに迎えたこの合宿は楽しくもあり、意気も大いにあがった。

夏の合宿は前年に引続き劔の二俣で行った。前年が新人を対象とした尾根歩きに終始したのを、この年でもう一步進めて六峰フェイスやチンネの中級ルート迄を目標とした。雨の多い夏山だったが、定着合宿の方は八分通に計画を終った。後半の縦走に入ると豪雨に見舞われ立山の室堂平で釘付けされ、遂には食糧乏しく開散と言うはめになってしまったが、今の山岳部なら、雨に降られたからと言って夏の立山位で開散する様な事にはならないと思うが……。薬師を越えて槍へ行くと言う計画自体も部員にアピールしていなかった事は事実だが、開散になって1/3も山に残らなかったのは残念だった。

秋の試験休みには合宿はなかった。冬山計画の発表もなかったので下級生だけで勝手にパーティを組んで穂高や木曽駒へ行ってしまった。帰って来てしばらくすると冬山の計画発表があったが、つい2年前にも成功した早月尾根だと言うので皆がっかりした。その後結局、劔の頂上へ A. C. を設けて厳冬期のハッ峰をやろうと言う事で落着いたが、実際は劔岳に全員登頂したのみで帰って来た。

春山は馬場島から奥大日尾根に極地法を展開し劔に登ると言う当時としてはすばらしい計画だった。奥大日尾根自体我々は未登ルートと思っていたのでファイトは沸いたが、結局この考え方がいけなかった。かなり苦勞して奥大日岳迄達してしまうと、日数や食糧が乏しくなったのを理由にして結構満足して下山してしまった。しばらくしてから段々残念になってきた事は言うまでもないが、未知の世界に触れて多くの経験を積んだこの山行は、やはりこの年最後の合宿として意義のあるものだった。

1959年度

私達がリーダーシップをとったこの年は、山岳部の大黒柱であった田^{ガタ}辺氏が卒業されたとは言え、中学からの生抜きの部員広瀬を中心にアクティブなリーダーが多く居たので楽だった。多くの新人を迎え部員数も20余名にふくれあがったこの年は、遭難以来低姿勢を続けて来た山岳部の最初の転換期となった。即ち過去2年間、安全第一主義なる観点から個人の登高意欲が

とかく押さえられがちとなり、部中心的な合宿主義であったのが、この年になると個人の登高意欲の尊重がリーダー会で云々され始め、分散山行が部の行事として盛んにとりあげられた。一方山岳部としての団結を必要とする大合宿も勿論計画され、部の総力を集中すべき春山合宿の計画は年度始めから発表された。

山岳部の目的は“良き登山家の養成”なり、大学山岳部ではその基礎をマスターすればそれで良いとしたこれまでの行き方を一歩進めて、個人的な分散山行で登高意欲を満たしつつ優秀なる登山家の一要素である“1人で山を歩ける部員”を養成する一方、部としての山行目標も持ち、団体を通じての目的達成に努力を傾ける精神も重視すると言う考え方がその根本であった。平地でのハードトレーニングが行われたのもこの年からであった。

5月の合宿は南股で、不帰第一峰尾根の新ルート、唐松ダイレクトリッジの初登高の収獲があった。この合宿には福田泰次先輩が参加された。

夏山は例年通り剣の二股で定着合宿を行ったが、大窓、小窓方面に新しく進出した。定着合宿の後は分散山行として (1)伊藤らの穂高への縦走組、(2)広瀬と小生らの黒部源流組、(3)牧野大関らの立山東面組に分かれた。このうち(2)と(3)は甲南では初めてのゲビートに足を踏み入れた。

秋の山行も分散的に行った。即ち、広瀬、藤安、伊藤らは南股から六左衛門の滝を越えて杓子沢に入り春山に備え、大関は下級生を連れて木曽駒へ向った。小生も田中、小松の両君をひっぱり出して奥又白の池に入り、新雪の前穂東壁をやったりして皆それぞれ満足して帰って来た。

この年の冬山は乗鞍でのスキー合宿となった。こうなるまでの経緯は書けば長くなるので省略するが、一番の原因は当時我々リーダー会ではスキー技術が雪積期登山の欠くべからざる基礎と考えていた折から、下級部員のスキー技術が特に悪かった事を重大視した事と春山計画を重大視しすぎて冬山に対すファイトが薄れていた事があげられる。いずれにせよこれは失敗であって、当然何らかの形で“登山”をやるべきであった。

春山にはファイトを燃やした。杓子及び鍵ヶ岳東面の Variation Route を片っぱしから登ろうとする計画で（以後3年間この目標は続けられる事になる）、双子尾根の樺平まで B. C. を上げた。最大の目標は白馬鍵の北稜で広瀬、藤安が attack に成功し、その他杓子東壁のA尾根も成功したが、後半天気にめぐまれず涙を飲んで B. C. を撤収したが、その時は随分残念がった。目標は達成出来なかったが、積雪期の放射状登山と言う新しく試みたが成功に終

ってこの年も無事に四季全山行を消化した。

1960年度

大関をC.L.とするこの年に入ると分散的な傾向は更に強められた。各個人の登山家としての実力なくして組織的登山を行うのはナンセンスである。従ってまず部員たる者1人1人がそれぞれ完成されたアルピニストたらんと努力するのが先決である。その為には、合宿主義は余りに弊害が多いから極力避けるべきだとの基本的考えでこの年はスタートした。この年の数人には実に元気の良いのがそろっていた。武田、長谷川、村上と言った連中でやがて2年後、冬は穂高に、春は遠く利尻島にと広く活躍する面々であった。口のうるさい4年生がゴロゴロと居たのもこの年の特徴だった。

5月は新人歓迎合宿と言う事で、一昨年と同じ鹿島の西俣にB.C.を置いた。東尾根や鎌尾根の他ダイレクト尾根も目標にあって全部成功した。

夏は定着合宿から二つに分散させ、一隊は昨年牧野らが偵察した立山東面で岩登りをし、新人を含むもう一隊は例年通り二俣で合宿した。立山東面の岩場は勿論甲南では始めてであり新鮮な計画だったし、二股のほうもチンネの左稜線など所謂上級ルートにも成功した。夏山の後半も大関らの笠ヶ岳への縦走組、飯田らの針之木組、倉藤らの剣岳池ノ谷組と分散した。飯田らは平から東沢及び上の廊下を探り倉藤らは悪天候で余り動けなかったが池ノ谷の右俣、左俣を偵察して帰って来た。夏山のシーズンも終わった9月の初めには小生が森本、鷯木両君と奥又白に入り、前穂東壁と四峰バットレス甲南ルートに登った。

秋は愉快的な山行だった。涸沢で新人対象の岩登りをするのが目標だったが、入山路は4パーティに別れた。倉藤らの上高地組、大関等の常念越え、広瀬、藤安の西穂越え、小生らは槍の千丈沢で軽い岩登りを楽しんだ後キレットを越えて涸沢入りした。全員が涸沢に集まったのは2日ほどだったが、総勢18名が涸沢に来ていろんな所へ出かけた。帰路も又それぞればらばらだった。こう言う山行もたまには面白い。天気にもぐまれ楽しい毎日であった。11月には白山へ藤安、小生らで1パーティ出したがドカ雪で成功しなかった。冬山は、新人は大関が担当して乗鞍合宿したが上級生は横尾尾根から槍を登って槍沢に降りた。積雪期の縦走と言う始めての試みだったので慎重を期して、大関らが第一キャンプまでサポートした。この山行は非常にスムーズに運び、倉藤を中心にチームワークも良く出来たので、山岳部生活10年の広瀬も最もスッキリした山行だと言って喜んだ。雪積期に於ける幕営の迅速化、スキーの活用等に得るところ大であった。

春山は前年に引続き杓子の東面に B. C. を置いた。出発前倉藤が盲腸を切り、又 4 年部員が全員不参加となるなどで一時は計画の変更をせまられたが、上級部員大関 1 人ががんばって合宿を成功させた。即ち前年の合宿で残された杓子東壁の B、及び D リッジは、大関、森本、鵜木、武田らの奮闘で成功し、前年の計画を完成させた。

2 年間の杓子東面合宿の成果は、大関の筆によって雑誌“岳人”や、現代登山全集“白馬、不帰、鹿島槍”に甲南大学山岳部の名前で掲載され目的を果たした。

^{ボン} 広瀬、^{イースタン} 藤安、^{ノッキ} 伊藤、^{ドンダリ} 牧野、^{ホシ} 田中それに小生の 6 名がこの 3 月に卒業して、4 月からは、遭難を知らない人達ばかりになる。積極的な山行が全て成功する黄金時代の事は武田が執筆する事になった。

(新制 7 回卒業)

昭和 36 年 ～ 38 年

武 田 雄 三

この年の 4 月、新制大学になって以来始めて、10 人を越す新人を迎え、総勢 25 名、これまで人数的に部の体面を保つに勢一杯であったのが、夢の様な話である。Vaitality に富んだ多数の新人を迎え、部全体の空気が変わって来た。中でも、甲南中、高を通して山岳部員であった 4 名が、新人の内に含まれていた事は、それまでの中、高に対する、種々の援助と指導が、昇華されたものとして高く評価される。

5 月の新人歓迎合宿は、O. B 2 名を含む総勢 24 名で、劔西面に於て行われた。特筆されるのは、田辺 O. B が過去 2 度に渡って、偵察された未開拓の大窓頭、白萩川側の稜を初登攀された事であろう。

夏山合宿前半劔岳に於ても、新しい試みとして岩登 attack Base が、三ノ窓に上げられ、記録的にも充実した成果があげられた。

後半は、北海道、南アルプス、劔→笠ヶ岳縦走の 3 Party に分かれ、行われたが、前 2 者は、これまでにない画期的なものであった。即ち北海道 Party は、将来に備えて、知床半島と利尻島の偵察を兼ねて行われ、33 日に及ぶ長距離汽車旅行を含む合宿期間に良く耐えた事は部員の精神力の成長と充実を物語るものである。

又南アルプス全山縦走を目指した Party も部として初めて、南アルプスに入るに関らず、食糧、装備の軽量化により、Non-support にて、成功した事は、北海道 Party 同様、合宿

成功を目指しての熱心な研究がもたらした結果であり、無雪期に於ける分散 Party 行動に絶対的な自信が生れて来た。

秋山合宿は新人強化の目標を掲げて、穂高にて行われた。夏山合宿以来、新人の間に生れた沈滞、即ち山行に対する意欲の欠如を打破せんものとして、俗にいうシゴキが行われた。実に徹底したシゴキであった。当事者の意図したシゴキとは、精神的な成長を促すものであったが本場でシゴキを行った事に対する非難は強く、大学山岳部の有り方について問題提起となり、大きな反省の機会をもった事は、貴重な体験として受けとられた。

冬山合宿は、明神岳東稜セミポーラを目標に行われた。偵察の失敗に起因して、主目標の前穂へのトレースは出来たものの、明神 5 峰北稜の失敗は、大きな shock を与えた。偵察の結果を見て計画の立案を行う事の困難な事に鑑み、計画立案の後にその線に沿った偵察を為す方が、如何に有効であるか合宿一つの不成功という代償を支払う事により得たのである。唯一の収穫は、2 party が Biwak に十分に耐えた事である。初めてのしかも冬山に於ける Biwak (Biwak せねばならなかった理由は兎も角) 余裕をもって行った精神面での成長は、小窓尾根に於ける Accident と思い合せて、少しでも前進した結果と思われる。

春山合宿は、3 年連続の杓子東面に於て展開された。(都合により、C. L が交代し、C. L 二谷となった。)

合宿目的の項を引用すると、北アルプスに於て ski が使えて、しかも Variation Route の登攀も可能である場所は数少い。そこで先 2 年に引続き、杓子岳東面にて新人主体の合宿を行う事にした。即ち新人による杓子及び白馬岳東面の概念の把握、氷雪技術及び積雪期登山の向上に重点をおき、同時に中堅部員の杓子東面の Variation Route の登攀研究を行う。」という事であった。

合宿前に C. L の交代した事と、参加部員の減少は大巾な計画の縮少を行う主原因となった。Support 隊 3 名も含めて、4 年 1、3 年 3、2 年 4、1 年 9 の人員の unbalance の結果、多数を占める 1 年生の教育に目的の主体が置れる事となり、3 年連続杓子東面で合宿を行わねばならない結果となったのである。

例年がない、強風と降雪の為に全く春山らしさのない合宿に、attack 日和に恵れたのは、唯の 1 日だけであった。多くの反省を残す合宿となったが、新人教育について考えさせられる機会を有したのが、唯一の慰めである。新しい試みというより、Leader が少い事に起因してか、2 年生 Leader の Party が出来た事は、前年に Trace した Route であったり、熟知し

ていたと言っても、一考の余地がある。この年度を通じて、上級部員の数が少ないと言う事に相まって、11人という多数の新人を迎えた事により、新人教育に振り回された感が強いと言える。

1962年度

この年、部が目指した事は、中・上級部員の増加と技術面での level-up、又装備等の充実に伴って、過去に於て部が課題としていた Area 或は記録的な面で過去に失敗した Route 等を一つずつ片付けていく事に有りました。勿論、部の存在理由或は価値と言える根本目標は良き登山者＝良き学生、良き社会人の育成である事は確認されたのですが、これを上記の課題と如何に上手に昇華させていくかという事がその焦点でした。

5月合宿は、中堅部員の氷雪技術の向上を目指し、1960年の夏山で手をつけた立山東面で行われた。残雪期の登攀ではあったが、この Area の積雪期の価値を判断出来たのが、大きな収穫となった。

夏山合宿は全く型破りの形式で行われた。即ち、前半、後半の合宿が全く分離され、前半は7月に縦走を主体として、後半は8月末より9月初旬にかけて穂高にて行われた事である。これは6月の完全個人山行と共に合宿主義の偏重より来る個人の山行意欲の減退を解決する一方法として行われたもので、原則として前半合宿は、個人の希望を最大限に取入れられ、南北アルプスの殆んど全稜線上に、その Trace を残した。課題であった後立山全山縦走又黒部川上廊下より全作谷、毛勝三山より前穂高岳や、前年に於て残された南アルプスの鋸岳、農鳥岳の稜線の Trace に見られる如く、各 Party 共に部としての新しい行き方に努力が払われ、益々分散合宿に対する自信は強固なものとなった。

後半合宿は穂高奥又白谷と滝谷の2つに分かれ、合宿として入山した事の少ない Area での岩登りが行われた。中堅部員の技術の向上と気力の充実は近年にない成果をもたらした。

冬山合宿は18名という多数の参加人員を得、穂高の代表的 Route、前穂高北尾根上に、Tent を分散、将来吾部として積雪期に於ても分散合宿が、可能かどうかの命題への One Step とに展開され、同時に、ツェルト・ザックに依る前穂、西穂間の縦走も試みられ、4峰新村、北条 Route 登攀。参加人員全員の前穂高登頂と共に大きな自信が与えられた。装備の面でも全面的に Nylon-Seil の使用、Transceiver での連絡、改良フェルト・ザックの使用等々、合宿成功を導く為の一つの道具として、積極的に研究が取入れられ、成果をあげる事が出来た。

唯、この合宿に於て、Leader の独断に依り、合宿直前に、Ⅲ峰 Face からⅣ峰新村、北条 Route に目標が切換えられた事は、当事者間の了解の有無・成功の問題でなく、部としての正しい姿からの逸脱として、厳しく反省、批判されるべきである。

登攀意欲の増大の直ぐ裏側にある、危険性に十分な配慮が為されるべきであった。個人の登攀を満足させる為に合宿が、山岳部があるのではない事に注意したい。

春山合宿は、3年越しの夢であり、課題であった利尻岳にて、15名の参加を見て行われた。山自体、又、偵察や現地交渉、荷物の梱包発送等の面に於ても、全て初めての経験が多く、良い勉強であった。南稜、東稜、東北稜、大槍の Trace に成功出来たのも、部員1人1人の Feight はともかく、現地の方々の御協力が大きな支えであった。天気が比較的良かった事と天気図上での読みが正しかった事とにより、行動が円滑に進み、食糧、装備の合理化と相まって十分に利尻を楽しむ事が出来た。この年を通じていえる事は、中堅部員の充実に依り、計画が建てやすく、又全員が期待通りの動きを見せた事にあろう。

1963年度

新制大学になって初めて、8名の実行リーダーを得て、番一層の発展が期待される年であった。リーダー会は1年間の目標を春山の後立全山縦走に置くと部員総会で発表した。5名の新人を迎えて、5月合宿は鹿島槍東面で行われた。新人の雪上技術訓練と並行して、中堅部員に依る荒沢奥壁、爺岳の尾根等の attack を、又同時に春山合宿の偵察を兼ねた鹿島槍～杓子間の縦走が行われた。例年の如く5月合宿は天気が悪い。今年の新人は例年に比して、少し元気が無い様で先が思いやられた。

夏山合宿は、例年の毎く、前後半に分かれ、前半は劔岳で定着合宿、後半は引続いての縦走が行われた。

前半合宿に於て、黒百合のコルにテントを出し、初めての東神谷 G1. G2. G3. 駒草ルンゼ等のアタックが、又池ノ谷では中央ルンゼ、ドーム右稜等の登攀が、試みられる意欲的な合宿計画の下に行われた。しかし残念な事に、計画は意欲的であったに掛らず、ルートの研究、偵察不足の結果、ルートを間違えて登るパーティや、気力の充実不足から思わぬ所でのスリップ事故が4件も有り、基礎的な技術の欠如が問題となった。

このスリップ事故は、ロック・ガーデンでも同じ日に2度も起して、新人1人が、この夏山合宿に入山出来なくなった事と考え合せると、今一層の合宿計画前に於ける慎重な現状把握が為されるべきではなかったか、当事者は、技術的に優れており決して無理なルートではなかつ

ただけに、少し注意すれば、避けられる事故で残念でならないが、外傷をうけるに至らなかった事は、不幸中の幸いであった。

後半の縦走は、劔岳—三俣蓮華—白馬岳の北アルプスUターン、後立山全山縦走、北アルプス猫又谷溯行、南アルプス全山縦走の4パーティに分れて、存分に山を楽しんだ。この中、特に例年と比して目立った計画は、北アルプスUターンパーティで、前年度より一段と進んだ、画期的なもので、こういったノソーサポートによる大縦走が、安全且つ確実に行われる様になったのは大きな収穫である。こう言った新しい試みが、次々に実行される事は、大学山岳部の新しい行き方を探る手段として重要で、若い柔軟な頭脳と Vitality が無ければなし得ない事、但し現状ではこの様な計画を建てる、リーダー会の独りよがりな点が目に付く。その為に、それに続く者達の間、意図するところを充分に理解させる為の努力が払われねばならない。飽くまで、新しい或いは、継続的な事業を完成させる為には、次代をになうメンバーにその主旨を徹底理解させる事が、第1の要件であり、表面的に成功を勝ち得たとしても、それが本当の勝利と言えるだろうか。若い時には事の表面のみをみつめて、若さにまかせて突走し裏面に有する危険性を認識しにくいものである。此処に言う危険性とは、事故の事ばかりでなく、次代の人達に対する教育の事である。各世代が、違った意見を持ち、バラバラに行動したなら、山岳部もその存在価値を失ってしまう。その結果、毎年同じ失敗を繰返したり、最悪な時には退部と言う事になる。部の真の発展は、徹底した教育に依り生れる。精神、肉体、技術の基礎の充実に依って為される。山で我々が学ぶものは一生に通じるものであり、例え最高学年の者と言えども、他人に教えるだけでなく、新しいものを学びとる意欲を忘れてもらいたくないものだ。

秋山合宿は、穂高涸沢にて行われたが、新人の参加が少く、沈滞した合宿であった。

冬山合宿は、念願であった北鎌尾根と横尾を尾根を結付ける事となった。数次に互る検討会や、偵察荷上を行い、慎重に慎重を重ね絶対の自信の下に行われた。

予期した通り厳しい登攀に終始し、顔面凍傷者まで出たが、充分に力を発揮して、トレースに成功出来た。唯惜むらくは、リーダー数が多い為か、テントを分散した時にテント間の連絡や決定にずれが生じ、反省しなければならなかったのは残念であった。又横尾尾根は2度目であるのに、偵察時の確かさを欠いた。予定した事とは言え、雪洞を用いねばならなくなった事や、デポの荷物発見に半日を費した事等、無駄が多く、合宿としての成功にほど遠いものとなって終った。

春山合宿は、年度始めの後立山全山縦走が為されるはずであったが、各合宿を通しての反省の結果、今だその段階に至らずとの結論が出され、烏帽子―白馬間の縦走と大巾に計画の縮少をみた。非常に残念な事であったが、部の現状と照し合せるとこの変更は余儀なかったし、また正しい判断であったと思われる。縦走途中、病人が1人出て、一旦下山、また直ぐに登り直して、計画を完遂したファイトはほめられる。

この年度を通じて言える事は、リーダー数が多く「船頭多くして船山に登る」の例えの如くこれより発生する反省が多かった事、又年度の目標を、後立山全山縦走の様な年間目標を建てた事は、部の年度目標として、的はずれであった。

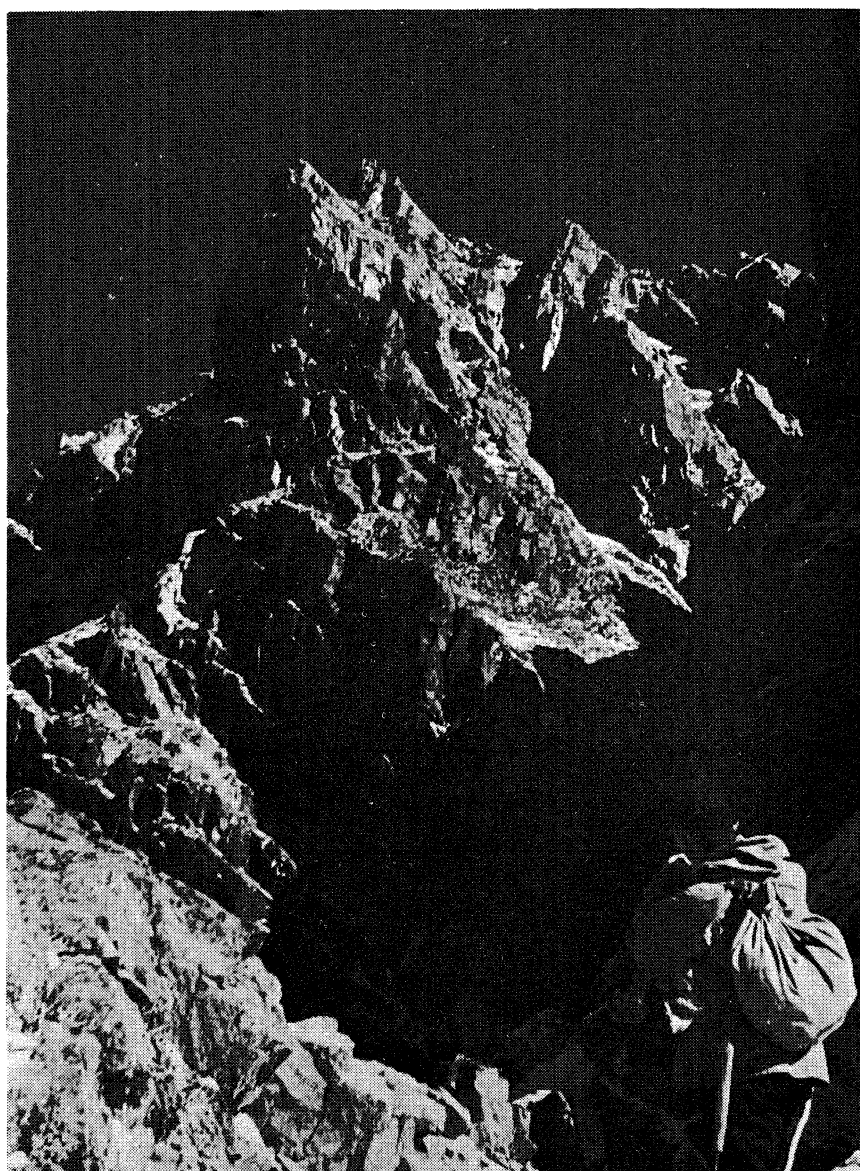
一步一步の Step をより確実に力強く踏み出す為には、年間計画の一貫性と、勝れたTeam-work の Balance がとれて、事可能となる。何分にも4年間という短い期間に多くの事態を消化していかなねばならず、対象たる山は非常に広く深い要素を有するが故に、我々の手さぐりすべき範囲は広い。

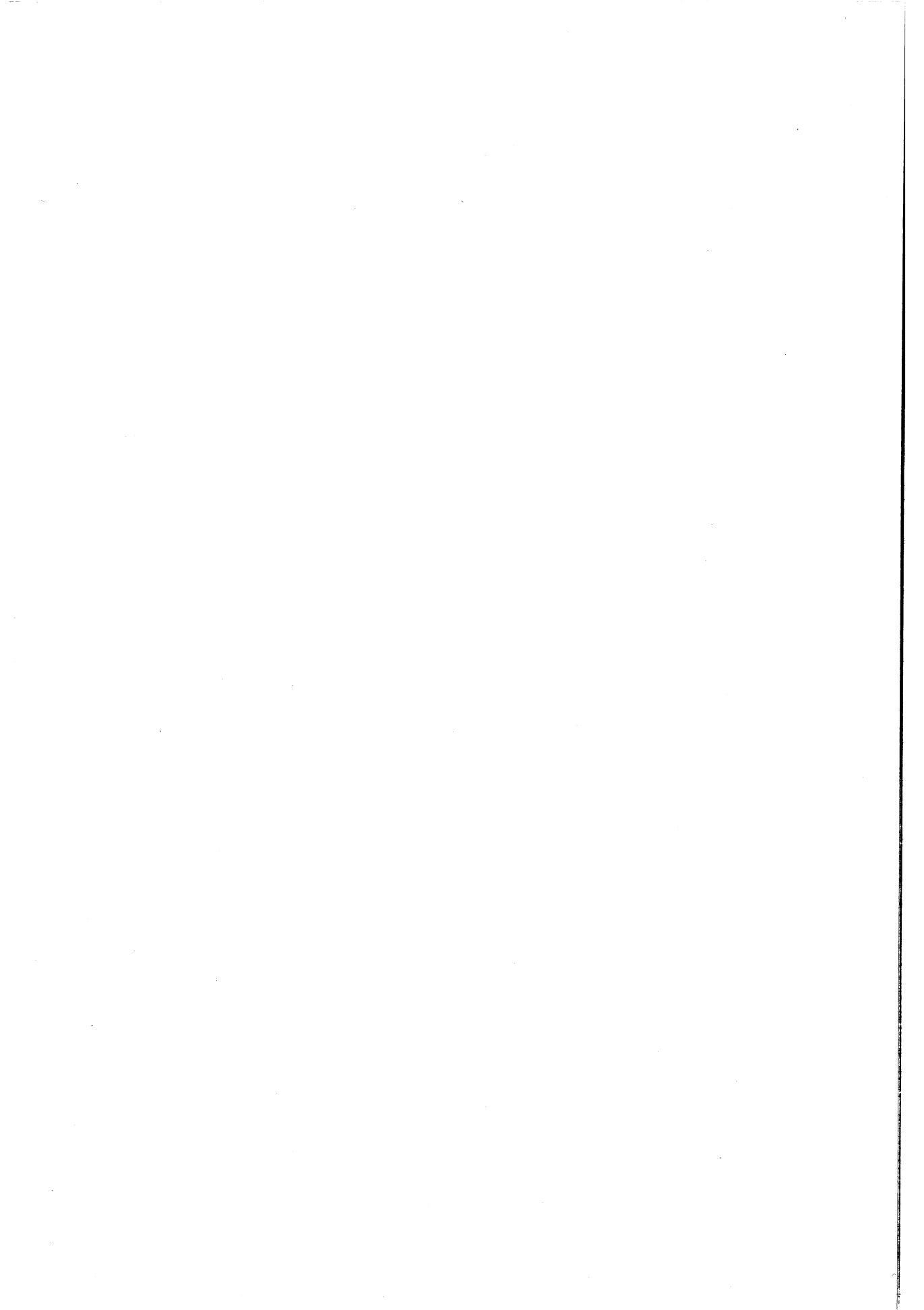
これ等の多くの問題を、全部解決は出来なくとも、勇気をもってぶち当たって行ってこそ、大学山岳部の進む道は、己ずから開けて行くものと信じる。40年に及ぶ歩みを決して無駄にしてはならない。

(新制10回卒業)

Ⅱ 主たる登攀

滝谷第2尾根





小 槍 (1927年)

檀 淳
伊 藤 愿

幾つもの山脈が群り合い競い合って横わっているその奥、静かなる流れの囁く谷間の朝夕、黙せる森林、聳ゆる峰々。天魔の如き動き岩山、その頂の暖かき光の動揺、之こそ希望に溢れ底知れぬ理想を胸にひそめて、若き日に憧れを抱く我等男の子の憩い場である。忍苦の幾時間、激しき岩稜の登攀、未知なる山頂への戦い、其の強き撓みなき努力こそ我等が若き日の歓びである。斯くして岩は今や近代的登高精神に燃ゆる若きベルグシュタイガーの心を把握しているのである。

× × × × × ×

幾日かの山歩きの後、我等登山者の群れは北アルプスの盟主槍を訪ずれる。毎年の事乍ら槍の姿は若きアルピニストの胸に一種の懐しみの情を与えてくれる。槍を訪ずれなくては、何だか物足りぬ様な気持を抱かせる迄に親しみ深いものとなって了った。

之の大槍の西側に面白い岩がある。大槍を訪ずれる者は誰しもが気付く小さい乍らも怪異な岩峰がある。小槍と呼んで岩質は槍ヶ岳と同様で硬い。穂高連峰、北鎌等と共に同時に生成されたらしい槍の一部と推定される。原始の雄々しい血を迸せる若きアルピニストのせめてもの心のやり場として憧れを一身に集める小槍。今年には秩父宮の御登攀によって一躍世に有名となった小槍。

曾っては吾々を寄せ付けじと威嚇していた彼も今は、若きアルピニストの憧憬的となり、Rock-climber の一度は訪れるべき試練場となった。今年わが部でも3回も登ったりしたので、之を一纏めにして此処へ収録する。

× × × × × ×

登山はスポーツの王であり、climbing は登山の真髄であると言われるが、僕はもっと深く考えたい。尊い命、真紅の血を常に犠牲に供するを覚悟して居る我々には、単にスポーツと言いきる事は出来ぬ。如何に小さき弱き者でも死の伴う事には力強い真剣味がある。僕達はこの真剣に始めて山に憧れ登高に生きて居る。岩はこの意義に於て最も僕を引き付けるのだ。勿論軽薄な近代的のヒロイズムにかけられてではない。岩は僕達には無くてはならない離れる事の出来ぬ親しき友だ。或時は厳格なる父であり、その膝の上に寝れば無限の幸福を感じるの

だ。

英人が Lake District を持つように僕達は芦屋の岩山を持つ。Scale は小さいが実に好い練習場である。先輩を持たない僕達は全く涙ぐましいまでに精進した。小さな岩小屋に露営の夢を結んだのは幾度か。雨中を黙々と Training した事も度々ある。

今年は7月、烏帽子の方から槍へやって来て、二日の嵐の忍従の後小槍を試みた。今年は僕達が初めてやったのだ。以下はその記録である。(1927 7.20)

悪魔の乱舞の様に暴威を逞しうした連日の嵐は全く静まり、大気は心行くまで澄きって居る。大槍は飛雲一つなき大空に鋭く屹立している。午前6時僕達一行(檀、野田、松本、西村)は槍肩小屋を出発する。7月の太陽は僕達を祝福するかのように輝き僕達の心を限りなく燃やしたてる。4人は英国製 100feet の縄を肩に 1.m の捨縄を肩に Piton・Hammer を用意し槍の肩から右へ進み間もなく別れて左へガレを下った。岩壁を traverse して大槍と小槍のザツテルに着いたのは6時半。Route に付いて研究するとザツテルから続く東稜は Square-cut-edge になって居て、傾斜が鋭いが努力すれば登れそう。この Square-cut-edge の裾の 3、4m の Slab を traverse すると Narrow chimney がある。下の方は身体は入らぬが上方はやや広くなり幅は1尺余である。このつぎる所に素敵な Anchorage がある。裏側を見ると先ず手頃の Tunnel chimney を通り Terrace に達す。それより Smooth slab を攀ると Anchorage に達する事が出来。Route は裏側を取る事に決る。ザイルは 100feet なので2組に分け最初の Party は檀、野田次は松本、西村。僕と野田は無言の中にアンザイレンして惜気もなく Crampon ネールドブーフを捨て跳になる。最初は手頃の Chimney だ。高瀬の溪谷は数千尺の眼下に深く横たわって居る。僕は緊張そのもので第一の Terrace に到着した。途中 Chock stone があつたが無事に通過す。懸念して居た Egress も無事だった。「ヨーン」N が来る。再び Terrace を2段登る。次が難場だ。何の手がかりも無い Smooth slab だ。

この丁度中途に去年神戸高商の三好君の打ったハッケンがある。左手でためすと全身をたくしても大丈夫だ。僕は念の為、Hammer で、2、3度打った。カンカンと澄んだ響きが大槍にこだまして荘厳な気分になる。愈々何も手がかりの無い Smooth slab をハッケン1つを頼りに衣服の Friction を利用して登る。心臓の鼓動が手にとる様だ。呼吸が烈しくはずむ。生死の彼方へ生命の躍動へ。其強き挽ゆみなき奮闘の後に Anchorage に到着する。ここには都合の好い Belaying-pin がある。ラストのNを完全に確保する事が出来た。Nが無事

に Anchorage に立つと再び僕は動き出す。 先ず小時の間裏側を絡んで表に出て殆んど垂直な所を岩を抱く様にして登った。岩は非常に緩んでいて注意を要した。

Rubble を攀ると頂いに達す。Nも来る。時計を見ると35分も経って居る。僕等には全く一瞬間に思われた。2人は興奮して互いに今は身も心も渾然として高鳴ってる。友の顔には無限の喜びがありありと浮んで居た。柴の煙も黄金の水も知らない僕達は唯若き意気があるばかりだ。

(旧制4回卒業)

小槍の頂上は1坪位でケルンが1つ積んである。美しき岩桜は咲いて居なかったが紫黒の苔が反ってぴったり調和して見えた。冷い風が吹上げて来て2人の頬をかすめる。数日前通って来た鷲羽岳、蓮華岳、双六岳、樫沢岳、西鎌尾根、の連峰が蜿蜒と横たわって居て得も言われぬなつかしさを覚ゆ。銭壁の如き大槍の西稜は Rock climbing には面白そうな所だ。

小憩の後DNの順で降り始める。 上り以上の緊張を以って先無事に2人は Anchorage に達した。この Anchorage の素的な Belaying-pin に捨縄を利用して懸垂で Terrace に下り再び chimney を通ってザッテルに帰る。待っていた2人は心から成功を祝してくれた。降りに費した時間は30分。第2のパーティの松本、西村が同じルートを登攀した。2人のタイムは短かった。成功した一行4人は包み切れぬ喜びを以って小肩に引き上げた。 (檀記)

× × ×

× × ×

7月22日、昨日はひどい嵐だったので小屋にはお客はない。只前から根気よく滞在している。当にした友の一行は既に一昨日上高地に引き上げて終ったのだ。今日も又あまり天気は良くない。露が晴れそうもない。穂高縦走も、之の分では当分駄目らしい。里心ついて上高地へ下り度くなる。午後になってやっと暫く霧が晴れた。好期逸すべからずと小屋を飛び出した。

余儀ない事情の為め独りでやる決心をしたのだ。小さいリュックサックにはハンマー、ザイル、マウエルハッケン、と序に写真機、コア入の水筒を投げ込んでガラガラ岩の槍の腹を右手から廻った。どんな気持だったか今でも解らないが東鎌を廻って北鎌の方を越して小槍と大槍の鞍部に出た。大槍の腹を廻るだけでも興味はありそうだった。八高が3人登っている。合図して用意に取りかかる。

鞍部にリュックを残して出発する。西南面のフェースをトラバースする事に決めた。Griffはあるにはあるのだが不安定だったので Slab の丁度中央（挿入の小槍表面図M点）にマウエルハッケンを1本打ち込む。カチンカチンと冴えた音があたりの岩壁に飴する。思わずその音につり込まれる。左手でハンマーを振うのでうまく行かぬ。

指を少々擦りむいて血が滲む。テストして確信を得たので、そのハッケンを利用してザイルを以って自己確保してこの Slab を Traverse して Crack に体を入れた。辛じて入れる事が出来る位の広さだ。ハッケンにかかっているザイルをアップして身を巻いた。ハッケンを打ち込む為に僅かな Griff に全身の体重を托して緊張してアルバイトをなした為、早や疲労を感じている。

この Crack は奥行はあるのだが幅は一尺位だ。体をトッブリ入れて休息する事は出来るが Chimney-technick を用いる事は出来ない。それで動作する時は之より体をはみ出さねばならぬ。

右側のリッジに噛りついて登攀する。膝と手とでしっかりリッジをかかえての動作だから衣服のフリクションを大いに利用した。之を登り切って、一寸、又フェースをトラバースして次の稜を越す。窪になっている所だ。これもこのリッジに沿って直ぐ Egress だ。Rubble を歩んで積石の処へ、頂上だ。前記の3人と挨拶す。

ハッケンを打った時間も合して17分要した。3時迄頂上に居たが霧が晴れない上に、意地悪く霧シヨンがやって来た寒さを感じて来た。E点（挿図参照）迄は上りと同じローテを取る。E点の捨縄及びフェース中途のハッケンを利用してセルフビレーで下る。テラスへ着いて

チムニーを通り鞍部へ出た。雨がひどくなって来る。アルバイトの後の気安さを淋しく味う。
1人でやる岩登り。正統ではないだろうが、又別の愉快もある。小屋へ引き上げるには槍の西側を廻ったから丁度大槍も一周したわけだ。

小槍のルートについて

小槍が今では、Rock-climber の一度は登るべき試練場となり、そのルートとも言われるべきものが出来て了った。即ち西南面のフェースをトラバースしてクラックを利用して登るのと東北面からチムニーを通りテラスを経てその上のスムース、スラブに登攀し、西南面のルートに合するのが普通のものである。

その他、エキスパートに取ってはP点（挿図参照）即ち西南面を全部トラバースして西北側の稜から登るのがあり、又全然東北面のみを登るのがある。最後者のみは未だ手を着けられずに残っている。Smooth slab なのとそれに加えて Over-hang 気味なのが困難なる原因だ。然し工夫次第でやれぬ事はないだろう。

もう1つ2つ面白いのを言えば Square-cut-edge の東稜のみ辿るのや西南面の中央の稜のみをつたって、頂上へ至るのがある。又大槍の西稜と小槍とを連絡して試みるのも快であろう。要するに岩質、根拠地、登攀時間等の諸点に於て岩登りの適当なゲレンデである。

ひと り た び Alleingehen von

HANS MORGENTHALER "IHRBERGE"

いくとせの楽しい美しい旅多き青年時代は過ぎ去った。かつては多くの山友達と一緒に連れ立っては、あちらこちらの山々に登ったのだ。我々は常に限りなく次へ次へと幸福を捜し求めた。そして最も美しいもの一山こそ我々が知り得る最も美しいものであらうと信じた事が度々あったのだ。そしは歎び、我々は直ぐ又新しい山登りを試みた。

年若い友を私の神聖な場所一山に連れて行くと言う事は私に取って大なる喜びであった。何故って、彼の心にそれが如何に気に入ったかと言う事を発見した時には、それは私に取っては美しい楽しい日であったんだもの。

然し又、度々只1人で山へ行き度いと言う衝動をどうしても抑制する事が出来なかった。どうしても堪え切れなかった。

然も、之は私の考え及ぶ限りの最も美しいものであったのだ。これ以上に美しいものはあ

り得ないのだ。／ 最も小さい山すら私には巨人に思えるのだ。最も小さい山すら私には巨人に思えるのだ。さらぬだに既に大きな瞬間がなおも無限にと拡り行く。単独行と言う事は私にとって是最もうれしい心のときめきだ。

君は私のこの行動を烈しく呪って、軽はずみだと呼び然かもその言葉に邪難の響を含ませて言う。

有難いことには若い時には気軽なものだ。事実私はこれ迄屢々たった1人で出かけたんだ。それが軽はずみだって？そう言う君の言葉こそ軽はずみな言葉じゃないか。／

滝沢谷、涸沢岳登攀（1927年）

伊 藤 愿

残雪に彩られた男性的な、魅する様な岩壁、初夏の爽やかさを感じさせる山、蓋し之は上高地や横尾から眺めた穂高に外ならない。即ち穂高と言う山は信州側から見る時は、その峻しさにも或る纏りを持っている。即ちその鉄塊の如き穂高も全容として見るときは一種の美を有している。然し乍ら飛弾側より之を見る時はその山容は全く別趣なものである。黒味を帯びた岩、押しつける様な威容、実にその大峭壁は人の近寄るを寸毫も仮借しないとばかりに威嚇している。実際飛弾側より穂高を望む時はどうして登れるだろうかと疑う程である。又、之に伴うてその谷も信州側の岳川谷の明るさを有し、又横尾谷は長閑さを有して登山者を魅し登行への憧憬の念を起させるに比して飛弾側の谷は何と言う陰うつさであらう。搗てて加えて魔の密林の奥深さ、その無気味なただずまいは猶更に人の心を暗くさせる。

此の様な理由からして信州側の穂高と言うものの一般的であったに比して、飛弾側の穂高についてはあまりに知られな過ぎた程であった。然し近来 Rock climbing の発達に伴って、之を試みる人も出来て、この滝沢谷を除いた外は殆んど総べてが人間の触感を知って了った。又この唯一の滝沢谷すらも、昨年8月 Rock climbing の先覚者たる朝日新聞の藤木九三氏によって北穂のキレットへのローテ、及び早大の四谷氏一行によって涸沢岳へのローテが開かれた。此れで嘉門次爺さんの折紙をつけた飛弾側の谷もすべて手を着けられ、極められた事にな

る。然し乍ら依然として、飛弾側の谷は信州側の谷に比して試みられる事が少く、新しさを有している為に墜石甚だしく、天候に左右される事は想像以上である。加え、飛弾側の谷は殆んど総てが滝を持っていて、降雨後には滝の水量が甚だしく増し、登攀は全然不可能となる。昨年前記二氏と前後してR・C・Cの西岡一雄氏も同じく之の滝沢谷を試みられたが、数日來の降雨続きの爲め、水量は非常に増加し、墜石甚だしく然かも瀑流に多くの石が混じて危険極まりなき爲、万難を排して雄滝の上迄行かれたが、遂に引きかえされた程である。で今度自分が之の谷を試みるに当っても、此の天候とその登攀の時期については随分心配した。7月初旬蒲田の今田旅館に向って、由勝を招いて話をした時にもその事が第一の論点であった。彼は今じゃ無理だと言う、雪が多いと言うのだ。雪の多いのは初めから覚悟して来たが、然しその為水量の多い事と水の予期以上に冷い事が気がかりだ。そして彼は、私が1人でやると言う事に対して多少の懸念を懐いているらしかった。

然し私には登攀の時間が何より問題だ。駄目となれば無理をせずに引きかえそうと思っていた。

滝 沢 へ

7月17日いよいよ滝沢をやるのだが昨年既に3組も之に手を着けたので初登攀の喜びは味う事は出来ないにしても、その3組共が案内を連れて行ったのだし、今自分はほんとに1人でやるのだと言う別趣な心持を懐いていた。

槍平の室堂は実にすばらしい所だ。室堂の窓を開けて眺めていると奥穂と潤沢の Gipfel の東側から黄金に輝いた朝日とその明るさを増して行く、薄紫に眠っていた岳も目を醒す。まだ薄藓の罩めた林から駒鳥の朗らかな啼声が響いてくる。焚火も良くもえて自在にかかっている湯もたぎって来た。簡単な朝食を済まして、7時53分、大島のおっさんの『ためらって喃う』の聲に送られて室堂を出た。一寸ここで今日のコンディションについて言おう。荷物は出来るだけ最大限に切りつめた。リュックサックは滝の下をくぐる事を予定して小さい方、ゴム防水の内袋のあるのを持って行く事にした。中味は寒さを感じた時の用意に毛シャツ上下、地図、磁石は常の通り、飯盒一杯の飯と水筒には濃厚なココアを充した。ザイルは1人だから10m、ハンマー、それからマウエル・ハッケンは2本用意したが使わなかった。ピッケルとシュタイクアイゼンは未だ雪が多いとの事で持って行く事にした。靴はクリンケルと丸鋏を打ったもの。もう此れ以上は制限できなかった。密林をぬって室堂から30分程で滝沢の入口に着く、8

時5分。少憩の後、流れの右岸を沿って進む。残雪がある。クレバスが口を開いている。9時、第一の滝の下へ来た。雪は滝の直ぐ近く迄続いているが、滝の水に削られて、端は丁度シュルンドの様になっていて非常に危い。扱ローテだ。右を取るか左を取るか、一寸困った。此のあたりの地勢を少し述べて見よう。ここは両方から2つの沢が入り込んでいる所で左の沢は屏風になっていて、これからも小さい滝が5、6条懸っている。その右が夢少木が生えている場所で、その下はやっぱり岩だ。その右にある沢がこの巨滝があるのだ。即ち左手に相当な滝とその右に大きな本滝が凄まじい音を立てて岩を削っている。此の場所に立ってあたりを見廻すと、何という窮屈さを感じるのであろう。身は峭壁にすっかり囲まれている。滝は轟々たる響と共に身に迫って来る様だ。開いているのは今登って来た沢の流れ口だけである。この三方共切り立った様な岩壁の何れかによって登攀しなければならぬ。之が最大の難関だ。右するか左するか、暫し滝の下に立ちつくしてコースを考えた。若し左手を登るとすれば滝の左手にある幾分手がかりの多くありそうな岩を攀じ上って、前に少し述べた樹木の少しある所へとつづかれるのだ。それをうまく利用すれば滝の上、左手へ出られそうだ。右を取るとすると。3.40m位な水の流れている岩壁——手がかりは十分あるので安全だ。——をよじ登れば一寸したTerraceがある。尚この上は屏風岩で然かも細い水が滝をなして落ちている。此の中腹——と言っても此のTerraceから20m位上方——に何とかすれば、左へトラバース出来そうな裂滝がある。又Terraceから左へ搦めば、即ち雄滝の右手に当ってGullyがある。20mか25m位だ。然しそのGullyの下へ行くには頭から水を浴びて行くのだから随分つらい。昨日南沢を降って滝の中をくぐりつつ足場を求めるには閉口して了ったので、なるべくならば此の水を浴びる事だけは御免こうむり度いと思った。それで此の裂滝を左へトラバースして雄滝の上へ出る事を考えた。先ず直上は屏風の様だから右の草付の方へ、うんと搦んだ。随分不安定な事だ。書き落したが、滝の下でアイゼンはつけていた。それは雪から岩へ移るのに雪の端がSchrundの様でStepをcutせなければならぬ程で危険だったから。草付を搦んで上へ上へと試みたがうまく行かぬ。遂にOver-hangに突っかった。Over-hangは2度目だ。色々工夫したが、結局駄目、仕方がないからGullyを試みようと思って降る事にした。下りには自己確保法を使って岩角や灌木の根を役立たした。前記のTerrace迄戻って考え直した。草付で案外長く苦しんでいる。分時計は11時25分だ。2時間半もかかったんだ。胸中には何だか不安さが湧いてくる。何でもない事だが、今朝室堂を出る時、靴の紐の切れた事も気になる。——山男の感傷と一途に断定して下さるな、山ではほんの僅かな事も気になるのだ

——引きかえそとも考えた。10時半にも近くなったのでは時間も充分と言えない。然し今日の晴天を取り逃がしては明日を保証する事は出来ぬ。……引きかえすにしても、せめて雄滝の上迄出よう。濡れても仕方がない Gully をやる事にする。頭から水を浴びつつ Terrace から Gully の下へ進んだ。下へ行く迄に全身ビシヨ濡れた。此の Gully はチムニーと言うには広過ぎるもので Backing-up は使えない。四肢を踏張って一ぱいだ。そのフリクションを利用して登るのだ。岩質は粘土性を帯びていて脆い。Gully 中途位迄は Griff もあるが上はそれが無い。加え、水で濡れている。傾斜は6、70度位もあるだろう。上部はそれでも、もっと傾斜がひどい。小さい岩は相当に落ちた。此のあたりから足場を切った。登り切って Gully 上部にある Egress に取り付いた。此支から上へ出るのにまっ直ぐ Gully を登り切るのと、一寸下手から右へ傾斜のひどいボロボロの岩の所へトラバースしてガラガラ石の岩で出来ている上の Terrace へ出るのとの2つの路があるが、後者を取った。ガリーの上部のテラスは草地だ直ぐ下はガラガラ石の河原だ。それは雄滝の落口へ続いている。なる程水量の夢い筈だ。直ぐ近く迄雪溪が来ている。少し休憩する。食事をしようとして箸をつけたが一箸しか食へぬ。これではいかぬと思ったが、仕方がない。水筒のココアを一口飲んだきりだ。

Gully には12分かかっている。陽が丁度このテラスを温めてくれた。水に濡れた寒さもあまり感じない。休みつつあたりを見廻した。滝の落口の少しを除いては、又直ぐ雪溪だ。實際由勝が話した様に樋だ。第一の滝で見た通りの景色だ。西側は峭壁だ。そして右手の岩壁からは之も細い滝が3、4条雪溪を叩いている。まあ何と滝の多い谷だろう。どこを見ても滝だらけだ。これから先でも屢々この様な眺を恣にする事が出来た、230米の細い水が白煙を挙げて黒い岩から迸り出ている有様は実に美事なものである。天気が良かったればこそ、こんな余裕を持ってあたりの景色を眺める事が出来たのだ。11時迄休んで立ち上った。草地から少しガラガラを伝って直ぐ雪溪に突っかる。雪溪の下の流れた、石が混じて流れるのでゴロゴロと物凄いい音を絶間なく響かせている。今にも雪溪が下へ陥ち込みそうで心はびくびくものだ。黒く汚れた雪溪を尚も進むと、又滝に直面する。さっき正面に見た滝だ。所謂第二の滝と称するものだ。雪溪の端はさっきと同じくシュルンドになっていて足場が危い。やっと滝の左手の岩へ噛り付いた。この滝の落口や岩は仲々複雑な相をしている。即ち岩に噛ついたまま下を覗き込んだ。宛然、洞穴とかわりはない。その洞穴の底を、雪溪の下を、滝の水は轟々たる響をたてて泡を立て岩をかんで流れている。暫く見ていると気が遠くなりそうだ。下の方を覗き込んで岩の様子を見るに、下の方は大体に於て右手が手がかりがありそうだ。然し上の方はと見ると右

手の方は峭壁になっている。左手は無理をすれば多少とも手がかりを見出せそうだ。その上に右手を登るとなれば一度下の方へ降りて、そして滝の飛沫を浴びつつ右側に渡らなければならない。なるべく水を浴びると言う様な事は此の際免れ度い。たとえそうなくとも全身濡れねずみになるのだから。そして若しこの際水勢に打たれて一步足を踏み滑らしたら……雪溪の下を泡をかみつつ流るる奔流の爲め雪溪の底をくぐって、第一の滝の落口へ出るだろう。然しその時にはもう命はないものとしなければならぬ。若しその上に雪溪が落ちて来たら、……昨日の南沢の事を考えても陥没しないと誰が保証出来よう。そしたら久しなへに万年雪の下積だ。……とてもそんな事は出来ない。無理をしてでも左を行こう。斯く決心して滝の水に濡れ乍ら左側を手がかりを探しつつ全身緊張の内に途中の一寸したテラスに出た。そこで流れの水を汲んで飯を食べようとしたがやはり食べぬ。ココアで一時を凌ぐ、11時25分だ。少憩の後又上へと向う。幾分寒くなって来て長く休めぬ。寒さと言えば第二に登った滝で水の中へ手を差し込んで手がかりを探すのに冷めたさで手がしびれた様だった。

ピッケルとクランポンの使用で50度を越す様な雪溪もぐんぐん登る事が出来た。槍平が小さく見える。又それを囲む密林も。霧の晴間からは美しい笠ヶ岳が見えたりする。穴毛谷も見える。登って行くに従って谷がいくつもいくつも右左から入って来る。右から第一に涸沢の西へ出ている尾根を越して白出に通じるらしいもの、左からは又北穂の大キレットに出るらしいものが入って来ている。

落石が随分ある。最初は縦走者だとばかり思っていたが、ふと、目の一つが急に雪溪をすすると落ちるのを見て啞然とした。落石の危険をさける為に谷の右か或は左かへ寄り沿って進む。ガラを踏むととても危い。この谷に限らず飛弾側の谷はすべてが雪と岩とに埋まっている。その岩たるやほんの一寸の保ち合いで重なり合っているのでうっかり踏むと直ぐ小規模の岩雪崩を起す。一度小さい岩雪崩に乗って1間ばかりづつてからは雪があればなるべくそれを行く事にした。そうとう雪溪はなくなった。脱ぐのが面倒なのでアイゼンをつけたままガラを登る。涸沢の峭壁は益々おっかぶさって来る。傾斜は急になるそろそろ霧がかかり出した。見透しが利かぬ。

これで随分隙取った。岩が大分しっかりして来た。頂上はもう近らしい。どうもあまり右へ来すぎた感がするので、谷を左へ取って見た。これ迄は大抵見当で右へ右へと進んだ。傾斜は益々急だ。頂はおおいかぶさって来る。四つ這いの登行だ。出口が見え出した。

とうとう細い鞍部に着いた。2時55分。鞍部に跨がって涼を入れる。谷を一面霧がたちこめ

て了った。それに比して横尾の明るさ。屏風が眼下に眺められる。常念も午後の陽に光っている。気のせいせいするカール、数時間の緊張した気分からやっと解放された。信州寄りには金ぼうげがきれいに咲いている。何と言う長閑さだ。只一人恣に此の情景を味わっているのだ。何はともあれ小屋へ着いてからと未練を残して、アイゼンを脱ぎピッケルをリュックにくくって涸沢の北を縦走路の通りに登る。暫くすると「オーイ、オーイ」と呼ぶ声がある。気のせいか雪溪の方から聞える様だ。又昨年の「二の舞」ではないかと思ってこちらも応酬する。少し行くとつい先で声がある。尚も進むと呼んでいる人達に出会った。「涸沢の小屋はまだですか」と言う。色々聞いて見ると案内人無しで初めての人達ばかり5人の穂高縦走だ。肩の小屋を6時頃に出たそうだが初めての事とて迷ってたのだそうだ。之も随分無謀な事だ。一緒に穂高小屋迄伴う。

涸沢の頂上へ着いたがあたりは霧で良くは見えぬ。眺望の利かぬ事程残念な事は無いがやむを得ぬ。ガラを踏んで穂高小屋に着く。重太郎に会う。やっとゆったりした気分になって今朝から初めてマドロスをくわえる。4時。室堂で知り合いの仁助や勘一郎に会う。安心したせいか急に腹が空いて、汁を貰って飯盒一杯の飯を平げる。

ゆったりした気分で小屋の外で腰を下ろして夕靄の中に沈み行くあたりの山々、抜戸や笠のあたり一面に棚引く五色の雲海を眺めて一日の愉快的アルバイトを終えた。心地良い蕩酔に浸った。……

今日は晴天に恵まれて穂高は実際大混雑だ。お陰で小屋は満員だ20何人の鮓詰だ。然し不足は言わぬ。1週間振りで蒲団に寝られるんだ。……何と言っても山小屋の楽しさだ……

7月18日 4時頃には空一面銀星が輝いていたのに7時頃とうとう嵐になって了った。若し昨日之を延ばしていたら？ 何とも言う事の出来ない、一種名状すべからざる気分につまされた。

吹き募る風は岩を動かし小屋の屋根を揺って勢甚だ険悪だ。これでは一日籠城だ。丁度軀の良い休養だと思って吞気に構え込んだ。寒さがひどいので重太郎の厚意でストーブを焚いてもらって毛布にくるまって寝ころぶ事にした。外には嵐が荒れ猛って小屋の外へ一步も出る事は不可能だ。便所へ出る事も出来ぬ。

それでも昼頃少しやみになったのをねらって一部の人達は涸沢谷を降りて行った。それで小屋も静になって、良い気持でストーブの側にくるんで5時頃迄寝た。実際山小屋でなくては味わえぬ気安さだ。

7月19日 嵐はやまぬ、然し烏帽子方面から来る友の一行との打合せがあるので、少くとも明日中には槍へ行かねばならぬ。それで嵐がやまなくとも白出しを下って室堂へ帰る事に決めた。丁度人失の勘一郎も中尾に帰ると言うので、中途迄一緒に出掛けた。11時半に小屋を立てて室堂へ帰る。大島のおっさんも帰りがあまり遅いので万一を心配して呉れた。

後 記

滝沢一飛弾の人達は通称「雄滝雌滝の谷」と言う一を終えてその感想と言う様なものを書いて見度い。由勝も滝の上へ出ればあとは登る事が出来ると言っていた。実際やってみればそうだった。この谷は彼の言う様に事実樋を立てかけた様な谷だ。両側は峭壁だから如何ともする事は出来ない。それに雪とガラとの数時間のアルバイトだからあまり感心したコースではないかも知れぬが、人のあまり入っていない谷だけに確かに新鮮さだけは持っている。パーティとしてやっても、又単独でやっても注意すればそう大した危険は感ぜられない。只くれぐれも注意すべきは落石だけである。飛弾側の谷は何れも落石が甚だしい。今年8月、柳谷から西穂へかかろうとした某高の一行中1人は落石のため大変な負傷をされたそうだ。大変気の毒な事だ。その落石にも3通りある。自然に落ちるのと、穂高縦走者が無意識に、或は意識して——それは飛弾側の谷はとても人が登って来ると言う様な事は考えないから——すのである。自分もこれを心配して16日には肩の小屋へ行って沖田さんにこの事を注意してくれる様頼んで置いた程である。最後に登攀者自身達が落すのである。某高のもこれであったとか言われている。それから登る時期である。昨年は皆8月にやられた。7月は未だ雪が多い。8月には勿論少くなる。それで7月と8月との比較であるが、7月には雪の為にガラを踏んで行く苦痛は免れるが水量の多いのと水の冷さには困らされる。雪溪の端がシュルンドになっていて危険はある。然し8月には以上の反対の現象が起る、そして雪の多い時よりも時間が多くかかる事である。要するにこの谷は7月でも8月でもあまり大差はなからう。私は出来るならもう1回9月の初旬にやって来て天候の良い日を見定めて雪の殆んどない時にやってみたいものと思っている。そしてこれに入っている沢を探って行くのも面白いプランだと思っている。又この谷は滝の多い谷だからどうしても、水量を考慮しないわけに行かない。滝の落口の形状から言っても水量の多い時にはその僅かな通路も水に奮われるだろうし、落石も多くなり滝に石がゴロゴロ混ざる事も多いだろう。ピッケルはどうしても欠く事は出来ぬだろう。雪の多い時はアイゼンも必要だ。然しガラの登行となると、傾斜も急になって四っ這いだからピッケルは邪魔になっ

てリュックへ納めた。それからこの谷は滝との苦戦だからどうしても濡れるのを予定せなければならぬ。それに体が濡れると必然的に寒さの伴う事も覚悟しなければならぬ。実際、水を頭から浴びたり、水の流れている岩にかかった時に袖口から水が流れつたって体を濡らすのだから積極的な事は出来ぬかわりに一寸した防寒具位ほしいのはやむを得ない。これがこの谷での一番困った事だった。それから一つ付け加え度い事は腹は空いているにもかかわらず食欲のない事だ。飯をしっかりと用意したのに役に立たなかった。この事は早大の四谷氏一行も書いておられる。私はココアの濃いのを持って行ったので大分助かった。之はあまり大した事でないかも知れんが一寸考慮すべき事と思う。要するに普通の谷キチに飽きた人にも面白い谷である事を保証する。

(1927. 8. 25)

劔 岳 早 月 尾 根 (1925年)

伊 藤 愿

1929年5月14日の夜、厳かに聳へ立つ山々に招かれて、己が居宅へ急ぐかの如く欣然として我々は京を発った。晩春の山、未だ雪と氷との支配下にある山、その魅力に引き付けられた我々ではあった。洵然として酔えるが如く大自然の懷に抱かれれば足りる我々ではあった。然しそこにもやはり目的——この行の重心は依然として存せざるを得なかった。早月尾根即ち之である。此の尾根の登攀は以前冠松次郎氏一行の企てられてより、以来小生寡聞にして之あるを知らぬ。大正6年の夏7月であった。物凄い藪と叢との暴威に悩まされながら、そして又未踏地の登攀に伴う幾多の危惧に常に脅かされながらも、4日間の苦闘の後に終りには劔の頂に立たれて、心の奥底から湧き出る感激に咽ばれてより己に十有二年の歳月は立ってしまった。「十年一昔」と言う。その間に科学は、文明は甚だしく進歩した。そして社会百般が、従って驚懼すべき程度にまで発達した。山岳方面に於いてのみ独り如何にしてこの埒外に在り得たろう。山岳観にあっても登山形式に於いても当に一変せざるを得なかった。そして登山の価値は漸やく広く認識されるとともにその大象化は一層高唱さるるに至った。斯くして山に向う者は

年とともに増加し、山と言う山はあらにるルートを取って登られ、悠久の自然の裡の永劫の沈黙を守って居る山岳は今や殆どその全てが小さな人間に依り登り尽されたのであった。幾百千の人達が剣の頂に立ち心からなる快哉を叫んだことだろう。然し眼下に走る長大な尾根を眺めながらも遂に之を登ろうと企てる者は一人も無かった。そしてこの昭和4年、春も正に暮れんとする5月我等の登攀とはなったのである。此の行の提案計画は高橋健治、伊藤愿両氏によってなされ、小生之に加わるのを機を与えられた。或は此の尾根もブナクラ附近に露営して翌朝未明に出発すれば恐らく1日でやり得ようが、未だ雪のコンディションに依り完全に行程を支配される時期にある以上之は些か疑問に属する。今もし尾根で寝なければならぬとすれば天幕の必要は絶対的に要求される。我々は重量僅かポンドを出ざるズダルスキーテント二張を携行した。如何にしても雪上に寝なければならぬ時は——幸にして之は杞憂に過ぎなかったが——雪中に穴を掘り一張を敷き他を張って仮眠する覚悟であったのだ。吹き晒しの尾根で眠るとは言え、もう5月であるからとて荷物を最軽量に止めんと欲する要求から防寒具は出来るだけ少くした。それに特別な毛皮類など持ち合せぬ我々のこととて睡眠の不足は免れなかった。

小又川発電所まで

5月15日 朝北陸線滑川駅に着く。都は已に春も終らんとして居るのに、此处北陸の一隅は未だ総てに冷い冬の名残りがあふ。吹く風、行く人、やはり未だ全く冬から脱し切つて居ない。立山剣の連峰が朧ろに見える。何れもまだ白く、化粧されて居る。そして流石に春だ。ぼんやりとして夢の国のその様だ。その姿、淡い靄に霞んだ山の姿、それは何と言う平和な姿なのだろう。一麟の雪片だに留まるを許さざる岩稜、息つくの暇だに与えざる風雪と男々しくも戦える岩壁、さては嵐に狂い岩を飛ばし砂を上げる山、それ等ももとより我等の心を掴まずには居ない。前者は静的な姿であり、後者は動的な姿なのだ、是ももとよりいいには違いないが、彼の平和なる姿は一層いい。立山鉄道はコトコトと進む。この音、旧い車、そして田舎びた乗客、我々は確かに山へ向って居るのだ。山——岩と雪今まさにそれ等の殿堂に飛び込まんとして居るのだ。何と我等の心の躍る事よ。上市駅に着くと人夫が来ている。芦峯の者だ。佐伯由蔵と言うのだそうだ。宗作をと言うことにして居たのに都合悪くして来られぬとは些か残念だが、用とて別になく始め人夫は使うまいかと考えた程なのだ。と言うのは、是が今度の山行を大変容易にしてくれたのであるが、この3月、部の剣沢生活の時上げた食料の残余が1週間は優に我等を支えてくれることを期待出来荷物なども至って軽くてすみ、ただ薪取りや、炊事などの煩を省かせるくらいの物だったのだから。まあ誰でもいいと言えばいいわけだ。スキ

ーを持って来て居る。我々も各自4尺余のを持って来た。勿論尾根で邪魔になると思わぬでもなかったが幾日かの剣沢の生活を思うとやはり是非ともほしかった。だがこの長いのは余りに荷になりすぎる。気の毒だけれども送り返さす。

駅前から自動車に乗る。乗合と言っても客は我々4人だけ、貸切も同じだ。一曲り二曲りして上市の町はすぐ出はずれ細い田園道を驀進する。ひどい埃が立つ、道行く人は茫然として見送っている。道が悪いからと言って例の橋までは行かないで二、三町手前でおろされた。だが釈泉寺まで我々を運んでくれた事を感謝する。リュックを背負う。曇天だけにそんなに照り付けはしないが馬鹿に暑い、汗がだくだく出る。巾の広い平坦な調って単調な道を進む。間もなく低い峠になる。之を越す。折戸に着いた、土地の茶屋風の家で昼食を取る。家の人が田舎人らしい親しさと誠実さを以て我々を接待してくれる。道は相変らず平坦だ。馬車でも車でも通る立派さだ。ずっと早月川の左岸を通じて居る。川は越中によく見る如く幅が広くて河原が多い。流れもゆったりとして居て春らしくのんびりして居る。早月尾根が真正面に立ちはだかって我々を威圧して居る。伊折の一町程手前で暫らく休んで徐ろに伊折の部落を観察した。昔小黒部鉱山の盛なりし頃、此の地は物資供給の要地として、それが上市と鉱山との中間に在るという地理的優越の故を以て実に隆盛を極めた物であった。だのに時代は廻り鉱山の廃止されてより久しき今日在るは、ただ十余の茅屋のみである。何処に当時の隆盛を忍ぼうぞ。溢るるばかりの活気も今はない。三味の音、脂粉の香、己に絶えて全く無い。静寂その物の中に眠れる山間の僻村に返ったのだ。大古以来の姿、安らけき其の上の姿に返ったのだ。それにしても此処の女性は実によく働く。野辺に耕すのも山に薪を取るのも多くは皆彼女達だ。嘗って鉱山への物質の運搬にあたったのも多くは彼女達であった。よく働く女、元気な女は他方に於ては貞淑な女房なのだ。彼女等の亭主たる者も少し頑張らねばなるまい。伊折から道に幾分石が出て来た。だがとても悪いなど言う程の物じゃない。巾は広いし傾斜は無いし目をつぶって居ても行けそうだ、それでも別に急ぐ必要もないことだからフラリフラリと歩く、でも5時前に発電所に着いた。ここの合宿所にリュックを下して体をのぼす。実にいい気持だ。数日来毎日夕刻には雨が来ると言う。どうも感心しない。明日はどうだか。尾根の2日だけは晴れて居てほしい。

雨の日

翌16日3時頃に目を覚ます。聞こえるのは確かに雨雫の音。雨だ、断然滞在せざるを得ぬ。8時過より雨は上り陽の光さへ見え出した。然し今更出発も出来ず、その上雲行は頗る険悪な

ので静かにコースの研究を繰返す。午過ぎ又雨となった。然も夕近くなるに及んで益々烈しい。此処に於て皆今日の滞在が頗る良かった事を喜ぶ。此処の発電所も現代の多くの山のそれが然る様に、山に来る者にとって甚だ喜ばしい存在である。仮令合宿の障子の破れ畳は真黒く汚れて居ても、それ自体何等我々に嫌悪の情を起さしめるには足りない。まして其処に住む人達は時に訪れる都会の者を喜んで迎えて心からの持て成しをしてくれる。そして我々の尋ねるがままに田舎人独特の親切さを以て一々詳しく返答してくれる。もし湯槽に浸って一日の疲労を癒し悠然として体をのぼして洵然たる時静かに谷川のせせらぎを聞けば、身は遠く仙境に遊ぶを覚ゆるであろう。それに食膳にのぼる香り高い「ウド」「フキ」「ワサビ」等何れも一度味わった者には永久に忘れられない物のみなのだ。山の水電、我々の懐しい山の水電、お前達は永遠に健全であってくれ。

17日 天気は回復した。何となく気鬱りな晴れ具合ではあるが、明日のみか今日の午後も或いはと思わせる程なのだが兎に角今は、是の朝は快晴だ。どうせ天候の事明確に断定出来ぬ。行け、昨日1日の余儀ない滞在に体のコンディションは全くよく新しい元気が湧き立っている。冷々とする空気。そして迫り来る山の香、何と言う心持よい事だろう。此処から道が細くなる。愈々「山へ」と言う感じが出て来る。窓が美しい。大窓から小窓、三窓への縁、その紫紺に輝く岩、ここから見た窓は格別だ。目的の早月尾根は真正面に、剣の絶頂から真直ぐに走って聳え立ち飽くまで我々を威圧してやまない。バンバジマに来る、爽かな朝の大気の中を進むのは何時もながら馬鹿に気持がいい。里程も近いが足のはこびは軽かった。ここで一息入れて居ると杣が来た。ブナクラの炭焼小屋には人が入って居ると言う。同所迄行くらい。同じ道なので一緒に歩く。道は白萩川の左岸にそって居る。之を一町程行くと左に大きくカーブする。此処から松尾平に行くのに2つの登路がある。1つは立山川に出て短かい2、3町の処なのだが二度程徒渉して、出合から最初の深く入り込んだ谷——尤もこの谷は此処からは見えないうが——を登るのであり、他はキワタツラの谷を登って松尾平の上に出るのである。我々は何れを取ろうかと協議した。が結局キワタツラを登る事に決定した。と言うのは立山川の徒渉が恐らくは不愉快な物であり、又馬鹿に時間を食うであろう事と、もう一つは松尾平より上雪の尾根までの藪、チト難物だと見受けられたからだ。そこで白萩川について又進む。炭焼小屋はブナクラ谷との出合の少し下にありキワタツラの谷は此の小屋の東南に深く入り込んで尾根まで続いて居る。夏は中程に滝が懸って居てその附近の上昇には大分時間をくうそうだ。然し今は谷一面が雪でうずまって居て、その心配は全然無い。上の方の傾斜は大分あるが兎に角尾根

に出るには此処が一番いいらしい。出合の半町程上に余り大きくはないが樺の木がある、その附近が割に浅い、此処を徒渉する、水は勿論冷い。靴を脱ぐのが面倒なのでその儘ザブザブと渉る。勿論水は入ってしまった。此処からは残雪が豊富だ。私はスキー靴なのですぐアイゼンを附けた。キワツラ谷は下の方は広くて立派だ。之をグングン登る。余り晴れては居ないが流石に5月、やはり暑い。雪も大分柔らかくなって居る。間もなく滝の所へ来た。余り時間もくって居ない。1250mあたりから右に尾根から来て居る小さな谷に取付く、傾斜は相当急だ。が恐らくこれ以上本谷を登る事はより以上の困難を齎すだけだろう。雪がとてもゆるんで居るのでともすればずりそう。慎重にジグザグを取って進む。尾根に出た。傾斜はグッと無くなった。勿論未だすっかり雪だが、笹や雑木が露れて居て歩きにくい。それに偃松や雑木の叢を進まねばならぬので相当疲れる。一概に立山川側は傾斜も急だし、悪い。1900m附近で木蔭にゆっくりと休んで昼食を取る。朝から気づかっていた空は大分あやしくなってきた。霧の去来が気に懸る。進むに従って傾斜が漸次増加して来る。が一方眺望も次第によくなって来る。完全に雪に覆われた大日山塊が右手に美しく光って居る。未だコルニスさえ持って居る。左手には斑になった猫又が見える。2300mあたりで森林帯はいよいよ尽きた。時刻は未だ早いがこの辺でキャンプしないと薪を得るのに不便だ。右手に雪の消えたテラスを見つけここに露営する事にする。尾根の南側なのでよく乾いて居る。勿論傾斜はあるし木の根は出て居るがそんな贅沢は言って居られぬ。よくならして、それに下はすぐ立山川の断崖なので丸太を横に渡して転落をふせぎテントを張った。薪は少し下った森林から求め水は勿論ないので雪を溶した。食事までに時間があるので雪がクラストする頃を見計らってスキーをやる。池ノ谷側に稍緩い斜面があって少々滑れる。打ち揃って夕食を摂って居るうちに陽は漸く落ちて、もう星がまばらに輝き始めた。手早く後仕末して狭いテントに4人が潜り込む。寝ようとするが寝られない。寒気がひしひしと迫って来る。ウツウツとしてもすぐ目が覚める。寝て居られないのだ。寒気の為なのだ。5月とは言え200mのこの高所、まして風には何等の防禦なき尾根である。如何に凪いだ夜だと言っても寒気は愈々強くなる。どうしても眠られない。更け行くにつれ下る気温は甚だしい。寝られない苦痛、そしてそれに打勝たんとして打勝ち得ざる努力、何と苦しい戦であろう。耐えかねてテントを這い出した。夜露の為テントも芝草もベトベトと濡れて居る。消えかけている火を盛んにして暖をとる。凄惨な程静かな夜だ。総てが静寂その物の中に眠って居る。星の瞬く音すら聞こえそう。間もなく茶はあつく沸いた。ブランデーをおとしパンを噛む。そして語った。山の話、スキーの話、こうやって焚火をかこんで話しているのも又我々

にのみ与えられた樂園なのだ。火に当たらない半面は益々冷え切って来るがそんな事は一向無頓着だ。或は横臥し或は跪座して話は依然尽きるを知らない。然し未だ夜明けまでには大分間もある事とてやがて又天幕に潜り込んだ。

18日、随分睡たかったし又眠ろうと努力したのだが、冷えるので殆ど一睡も摂れなかった。寝られぬままに早くから用意し出したのだが、暖い焚火の側が離れかねて仲々捗らない。それにキャンプの後仕末は流石に時間もくう。出発はやはり6時半になってしまった。意外に遅れたものだ。未だ朝早いので雪が硬くアイゼンが気持よくささる。正面の雪の隆起に登る。部分的に相当急な斜面がある。出来るだけリッジ通りに偃松の縁にそって2、3度之を縫いながら進んだ。例外なく尾根通しは傾斜はゆるく少しそれると両側はグッと急だ、出発が予期程早くなかったので早くも陽が直射し始め雪が驚く程早くゆんで来た。猛烈にもぐり出す。だが1時間程で剣直下の独立した大きなピーク、その下は大きくカーブして居る処に来了。昔日あれ程冠氏一行を悩ました所の藪や、丈余にも及んで殆どその進行を遮った偃松も今は殆ど積雪の下にうずもれて到底その暴威を振るべくもない。この先剣絶嶺下の岩壁の下にこそ、氏等が最後の野営をされたのであろう。氏は物見にやった人夫の成功に早くも明日の勝利を確信され心は為に躍ってまどろかなる夢も幾度か破られた事であろう。小窓の頭から南に走った山稜には、その南面には一片の雪だに附けて居らず物凄い地肌をその儘表して居る。石が池の谷へと盛に落下する。剣の頂が鼻の先につつ立って居る。距離にしたっていくらかもない。だがこれからが愈々なのだ。2、3ヶ所グッと傾斜の強い岩場がある。これの登りには少々悩まされた。ピークを2つ程越すと次は鶴ヶ御前へ走る尾根の真直の登りだ。愈々最後の奮闘だ。急なロンゼに登る。氷の上に雪をのせて居るので足場が悪い。ステップを切る。来た。遂に来了。メインリッジのコル、剣の頂から少し下鶴ヶ御前の方へよった。平蔵の頭より大分上に着いた。三田平の小屋が黒1点となって其の存在を示して居る。すぐ眼前の前剣の平蔵側からは盛んに小さな雪崩が出て居る。ごく小さい物だが馬鹿に頻繁だ。由蔵は薪の都合もあるので1足先に小屋へやり、3人は頂上に行く、10分程の行程だ。頂は全部完全に雪で覆われて居て三角標の上に立って居る棒の上部が出ているばかりだ。曇っては居るが眺望は相当きく。眼前の立山本峰そしてその後方遙かに槍穂高その右には長大な笠と雄大な山系が相連って居る。源治郎もハツ峰も未だ完全に白い。ハツ峰の小さく並んだ所はまるでおもちゃだ。引き返して平蔵沢を下る。源治郎側のすごい雪崩は殆ど出てしまっている。前剣側からは上から見た様に小さいのがひっきりなしにおちている。源治郎寄り下る。おりるにつれて下は谷一面猛烈なデブリ

だ。そのデブリ上にスキーを操るのだから無理な話、勿論面白い事はあるにせよ。遂に途中から脱いでしまった。

剣沢との出合に着く。上から1時間半もかかっている。全く話にならない。此処にもデブリの大きな堤防が出来て居る。人の丈よりずっと高い。此処まで来ると小屋に着いたような気がするが不足な睡眠、それに猛烈なアルバイト、それ等に疲労し切った体にはこの登りは考えただけでいやになる。フラリフラリと登る。2時間近くも費してやっと三田平に着いた。大分偃松の島が出来て居る。小屋には先にやった由蔵が1人居るきりだ。つい2、3日前までは幾つかのパーティが居たと見えて附近一面に未だ新しいアイゼンの跡やスキーのシュプールが残って居る。真っ先に、上げてあった食糧を調べて見る。完全にある。之を無断使用した人があるとか、言うので一時相当心配した。恐らく大丈夫だと思って出発したものの幾分か気懸りだったのだが之で一安心だ。小屋は昨秋高橋氏が目張しておいたお蔭で雪は少しも入っていないし暖かだ。それにストーブを使用するのでそれ程けむくもない。今日から我々のみで此処に生活するのだ。我々の楽しい山小屋の生活が始まるのだ、それを考えると馬鹿に嬉しい。

錫杖烏帽子岩 (1929年)

秋馬晴雄

リーダー 楠木義明

秋馬晴雄、水野健次郎、井上正憲

7月21日 曇

涸谷岩小屋―穂高小屋―キャンプ地

昨日訪れた楠木が沙汰やみになって居た錫杖行を持ち出してとうとう行く事になったので5日間我々を泊めてくれた岩小屋に別れを告げたのは7時30分であった。涸谷の雪渓を上って9時穂高小屋に着いた。穂高小屋から白出しを見ると一面に霧がまいて気持ちが悪い様だ。10分程休んで穂高小屋を出発した。雪渓とガレとの連続を下って滝の上を右にからんで下り、右俣との出合に出たのは2時20分だった。そこから少し下った蒲田川の河原でキャンプをした。

7月22日 晴

キャンプ地（7:15）—右俣、左俣の出合（9:15）—笠道との出合（11:00）—第1丸木橋（1:30）—第2丸木橋（2:15）—錫杖沢岩小屋（3:30）

今日は良い天気だ。右俣の清流で久し振りに顔を洗った。何とも言えない新鮮な気持ちになる。簡単な朝食をすまして蒲田の方に向った。途中度々人夫衆に会った。蒲田の者は感じがよい。林道の中を進む。河原に出る、林道と小鍋谷、外ヶ谷を過ぎて笠に行く道の出合にきた。楠木と秋馬とは蒲田に食糧を買いに行った。蒲田温泉と言っても、家は4、5軒よりなく草藪の中に1つの小さい温泉がある。上高地に比してここは何と古風な奥ゆかしい感じのする所だろう。河原に出ても気持ちがよい。暫く休んで笠道に入ったが登りばかりだ。その上荷物は5貫程あったので、林の中とは言え木間漏る午後の暑い日に照らされて体中にビッシェリ汗をかいてしまった。

クリヤ谷に入って第2の丸木橋を過ぎるとすぐに錫杖沢を見出した。錫杖沢は急だから荷物を2度にわけて岩小屋迄運ぶ。楠木の案内によって容易に来ることが出来た。出合から2、3町上り沢が3つに分れる所に大きな岩が庇状に突出しているのが即ち岩小屋である。極めて原始的で非常に気持ちのよい所だ。水は傍の沢にあり、薪は附近に無限にあり、広さは約10人位寝ることが出来るだろう。神戸商大の人が2人帰って来られて烏帽子岩に成功した事を語られた。僕等も明日は錫杖生活の第1歩として烏帽子岩に登攀と試みようとする食事の用意をして寝についた。

7月23日 晴 夕立あり

岩小屋発（6:10）—烏帽子岩の鞍部（8:10～8:30）—頂上（9:50～10:15）—鞍部（11:30）—岩小屋

錫杖の第1夜はほのぼのと明けた。雲1つない程の澄み切った空に西穂はようやく覚めて暁天高く錫杖を俯瞰している。朝食を終えた頃にははや嶺を紅に染め始めた。リュックにはピトン、ハンマー、地図等を用意し、40mと10mのザイルを肩に本沢を遡り始めた。行手に屏風のような岩壁が奥又奥に聳立しているのを見ると烏帽子の大岩壁が想像されて喜び勇んだ。小さい沢が2、3度1ヶ所になったり分れたりしている。大きな石のゴロゴロした登り難い沢を登るのだから相当疲れる。暫くすると沢が2つに分れる。右を進むと滝に出合うが左の草地を搦んで安々と通り越した。憶測図を頼りながら進んでいると右手から沢が入り込んで来る。此を登れば丁度烏帽子岩の南面に行けそうだが遡って行くのが困難らしく、其処から少し登った所

に又前と同じような沢が来ているのでそれを行くことにした。此辺は最早物凄い絶壁が両側に押迫って圧迫されているようだ。2ヶ所小さい滝に出合ったが困るようなことはなかった。此附近から右手に登れば烏帽子岩と見る事が出来るだろう、水筒に水をつめて笠の間を分け登った。成程期待にそむかず如何にも烏帽子のような恰好をした。思っていたよりも大きい奇怪な岩峰が天空高く突立っている。余り間近に急に現れたから少々驚いてしまった。兎に角西側に来たがとても登れそうにないので基部を安易なトラバースを続けて東側に来た。憧憬の峰にやって来て登ろうとする今は何とも言えない妙な心持になって心臓の鼓動が胸をうっている。

東側のリッジに取付いた(オーダーはI・A・M・K)確かなるホールドが豊かにあり体は次第に高まり第1の絶壁を登り、少しブッシュを右に廻って、第2の絶壁を登る。ビレイングピンは幾らもあり、困難と思う様な所はなく愉快的アルバイドが続く。第1の絶壁の上に昨日登られた商大の人の捨縄があった。其上はテラスになっていて其処から右(北側)にブッシュの中を5、6m下り、更に数米登った草地の大きいテラスに出る。此処から頂上近くまで1本の長いチムニーがある。これは2段になっていてバックアップで登るが、2段目はエグレスにチェックストーンが蓋のようにになっているのでIはAの肩を借りて登り後の者は我武者羅に登る。何れも4、5m位の長さはあって、内壁は赤苔でじめじめしていて感じの悪い所だ。難門な所と言えば此処位だろう。「もう頂上だぞ」と言うトップの声に元気を出し、ブッシュとチムニーの様な所を越すと頂上がすぐ眼前に2段になって屹立している。予期に反して容易であった為かあの取付き様もないような大岩壁の頂上とはどうしても思われな。ガラ場を歩いて頂上に着く。4人は歓喜の眼を輝かせながら暫くは一言も発し得なかった。時計を見るともはや1時間と15分も経っている。慈光を浴びて頂上の岩に腰を下し取って置きチョコレートを噛む。頂の眺望は素晴らしかった。東には黒味を帯びた穂高の群峰、それに連る盟主槍、小槍が大きく見える。焼が噴煙をなびかせ、乗鞍が悠然と構えている。又谷底はるかに中尾村が平和な眠に落ちている。暫く4辺の景色に眺入っていた。頂に打ったピトンには初登攀をせられた三好君等の結び付けられたと言う赤旗が今では風雪にさらされて白色に変じ当時の面影がしのばれる。ケルンの中に署名をして置き記念撮影等をする。やがて頂上に名残を惜しみながら下った。登りと同じルートを取りチムニーの所と最初の岩壁の所でアップザイレンをしたが思ったより時間を長く取り、登りと同じだけ時間をくって居た。ザッテルの所で昼食をする。帰りには写真をとったりしてうれしさに軽い足をゆるめてぼつぼつ来た道を下った。雨を予告してか雲が怪しく流れ始めた。岩小屋に帰って暫くすると物凄い夕立になったが、西穂の上に

白雲が2つ現れると雨も次第に止んでしまった。暮色が4辺に迫って来る頃僕等は甘い疲れを抱いてシュラフザックに入ると何時しか深い眠に落入っていた。

翌日は色々な事情により岩小屋を下り焼を越えて上高地に行った帰りに中尾から錫杖を振返ればあの、黒い岩壁は未だ満されぬ僕等の登高心をしきりにかき立てた。実際地図上では問題にならない程の貧弱な岩場だが、行って見ると絶壁やピークが幾らでも屹立しているのには驚かされる。欠点と言えば雨のよく降ると言う事だが僕等の居った時は殆ど降らなかった。岩は堅く槍や穂高の様に余り人が行かないから新鮮味があり、岩小屋が完備している等、岩場として（雪はないが）先ず絶好の所であろう。

7月24日 晴 後雨

錫杖岳小屋—クリヤ谷出合—第2の丸木橋—第1の丸木橋—蒲田川合流点—中尾村—中尾峠—上高地

気持のよい岩小屋を後にしたのはもう9時を少し廻った頃だった。クリヤ谷に落込む、此の急峻な錫杖沢に、リュックサックの重たいのを持って余しながら下るのは、相当烈しいアルバイトであるがあえぎあえぎ出合迄、がん張る。此所からはもう笠の道があるから楽だ。槍平の道との別れ目へ出たのが、もう11時だった。蒲田川原へ出て1時間ばかり昼寝して、中尾へ向う。中尾の美しい白樺の林の芝生の上で昼食を取る。余りよく休むので、峠へ向って立ち上った時はもう2時半だった。

中尾の気持の好い峠道から、奇怪な岩貌を持った錫杖岳を望みながらぐんぐんがん張って峠へ着いたのは5時半だった。

夕霞に煙った上高地になつかしい燈の光がまたたいて居る。

いでゆの上高地よ、森よ、河原よ、梓の流れよ。とうとう帰って来たのだ。

急な焼岳登山道をはせ下って、友の待つ地へ帰って来た。途中からの細雨に、懐しい上高地の燈はうるんで物淑かにまたたいて居た。

（旧制8回卒業）

奥穂高及びジャンダルム附近

ジャンダルム飛弾尾根登攀 (1930年)

伊 藤 愿

1930・7・17 伊 藤 愿 田 口 一 郎

夏山の陽の上るのは早い。岩小舎はもう早くから陽が一杯さしこんでカンカンしているのにシュラフサックにもぐりこんでいるいも虫連中はまだ起きようとせぬ。低い天井の岩に頭を気にしながらはいだすと良い天気山は光っている。味噌汁だけ拵えて冷飯を流しこむ。リュックには念のためのアイゼンとパンのみ。ザイルは30mが一本。パーティは昨日横尾から誘って来た湯川と田口で3人。

穂高小舎への登りはガレでいやだ。今年は雪渓が殆んどないのでたまらない。

小舎についてから悪い事にYが咽喉が痛むと言って苦しみ出した。連日のアルバイトに彼等2人は非常につかれているのだった。色々手当はしたが痛みははげしいらしい。Tと共に彼も伴って行きたいのだが、真に山を知り登山技術の厳格な律をわきまえる慎重なYは、己れ1人のためにこの行を左右するのをおもんばかって留る固い決意を示した。おお、Y、君は昨年の3月にも、君の初めての冬の槍に伴った時にも健気にも尊い犠牲的な態度を示したのだったね。尾根に揮身の努力を捧げ、頂に立つのみがベルグシュタインガーの全容ではないんだ。君に具備されたその精神こそは最早エキスパートの資格を充分に示している。好漢自重せよ。又いつかは君と必ず共に輝しいアルバイトを遂げてその喜びを分けようね。

残した1人の友に心をひかれながらTと私とは奥穂を登って行った。奥穂から眺めるジャンダルムはどこからよりも一番すばらしく、岩壁は物凄く見える。此の尾根を初めジャンダルムの峯頭の北の科尔から谷に下り、岩壁の裾をトラバースして尾根の末端に取りつこうと考えていた。これは相当苦しまなければならぬ上にこのルートからの尾根の取付はテラスから殆んど垂直におちこんでいる岩壁である。

この尾根は下のテラスで末端が二つに分れていて、その一つは前記の垂直におちこんだ岩壁で終わっている北側のものであり、もう一つは比較的ゆるい手懸の多い南側の尾根である。

それで私達はジャンダルムをこえて峯頭の南側の科尔を谷に下り前記の南側の尾根に取付く

ルートをとる事にした。

ジャンダルムの峯頭をこえて南のコルの残雪で黒パンとチーズで軽い食事をすまし、アンザイレンして谷に下る。空には少し雲があるが良く晴れている。尾根の南側は偃松が所々に生え傾斜もあって豊富にバンドがあって搦める。尾根が草付におわる辺りに取付く（B点）ここから尾根を登る事も出来るが向う側即ちこの尾根のすぐ北にオーバーハングした尾根があるのでそれを登る事にする。そのオーバーハングの下に達するには今いる尾根をこすのだが、この尾根の北側は矢張オーバーハング気味だ。Tにビレイをたのんで3mばかりぶらさがった。向う側にうつるには足場が少ないので体をうかさねばならぬ。オーバーハングの下には一寸したテラスがある（C点）上方の岩にビレイイングピンを見付けてTを確保して2人が此所に移る。オーバーハングには幸いその稜線にリスがあってホールドは確実だ。一ピッチでオーバーハングの頂に達する（E点）此所からは稜線のリスを通りガリーの下に達する。ここから上を見あげると稜線は二つに分れてあたかもツウルムが二つある様に見える。この2つのツウルムはジャンダルムの尾根がここで二つに分れている故にこう見えるのである。右方（南側）の尾根はその下方を今我々が登って来たのであり左方（北側）の稜は奥穂の方から眺められるジャンダルム飛弾尾根のすごい直角の稜である。この岩稜はこのガリーの下からながめると鋭い牙の様にそそりたって左方（北側）のツウルムを形成しているのだ。この二つのツウルムの間に2m位の幅のガリーが存在している。その下方は砂礫があり足場は可成不安だ。このガリーの北寄りのリスをよじて二つのツウルムのコルに達する。そしてすぐ牙状のツウルムの頂点（H点）に立った。此所に吾々の手でこのジャンダルム飛弾尾根に最初のケルンがつまれた。このHのテラスは奥穂から見る最下のものでかなりのナイフエッジをなしている。この少し東よりには一つの岩峰がある（I点）その北側はオーバーハングでがれている。この下のコルより上はリッジ通しに登る。ビレイイングピンは豊富だ。中程に奥穂の方から見ると鉄砲の様に見える岩がある。漸くこの頃から飛弾側からの霧が白出の谷を登って来た。上のテラスに達した。（T点）ここは広いテラスだ。ここまできればこの尾根はもう我々のものだ。此処にも又ケルンが我々の手によってつまれた。ケーゼを口に入れてしばらくやすむ。もうあとは少しだ。リッジ通し楽なのぼりでジャンダルムの頂に立った。カメラードとして良く努力してくれたTと微笑しながら頂上のケルンのそばでザイルをとく。

奥穂をこして穂高小舎で岩小舎の食糧を仕入れて重い荷物にくるしみながら黄昏ただよう頃、親しい仲間の許にかえりついた。

(時間) ジャンダルム南のCOL (11.00) — B点 (11.45—12.00) — オーバーハングの頂
点E (12.13) — 下方のテラスH点 (12.45) — T点 (1.13) — ジャンダルム (1.21)

附記期待が大きかっただけに案外楽だった。岩が硬いし、しっかりして安心して登れる。30mのザイルに2人だから間隔は28m or 29mもあるので時間は非常に早かった。小生達と前後して北上氏がここを下られたと言う話をきいたが詳しい事はまだ知らぬ。7月7日に涸沢に入ってから雨つづきで折角の天気の良い日も横尾のA・Cでオジャンになるし、しょげていたら、湯川、田口と喜多のパーティが多くやって来た。喜多には少々気の毒だったがA・Cの留守番をたのんで2人を唆のかして涸沢に逃げこんだ。そしてこのお蔭で飛弾尾根初登攀の宿志を達した。一方喜多のパーティにはお礼を言わねばならぬ。湯川と共に登れなかったのはかえすがえすも残念だった。

1930.8 伊藤 愿

「お断わり」穂高生活の他の記事は皆現役でかいているのにこれだけを伊藤先輩にお願いしたのは僕の怠慢からです。

これも僕のずぼらからですが、この原稿が長かったので先にある序文的のものを原稿用紙1枚程省きました。全然僕の独断からです。

伊藤先輩及び部員諸君に以上お断り申しあげます。

田 口 一 郎

穂 高 小 舎 へ

8月2日 湯川孝夫 村上正一郎

風・雨・嵐、頭から被っているシュラフザックの中迄もしっこく忍び入る風の唸、石垣の間から、天幕のすきまから吹込む雨のしぶき、もうもうたる煙、副食物は干鰯とバター、ありし日の豪勢さに引きかえて今の生活は正にルンペンそのものだ。

併し嵐のあとの静けさ、2日の朝は美しかった。蒸暑い日だ。6貫余りの荷を背負って穂高小舎へ、11時55分着く。午後は又雨、蒲団の上で悠々とのびる。昨日迄の生活に比べると丸で乞食が王様になったようだ。

ジャンダルムへ

8月3日 曇 同前

穂高小舎 (1.17) — 奥穂頂上 (1.37—51) — ジャンダルム下 (2.32—35) — 同頂上 — (2.48—3.00) — 奥穂 (3.51—4.27) — 穂高小舎 (4.45) 奥穂頂上で 田口兄

・笹岡・伊藤新に会う。奥穂から三つ目のピークでM-Yの順序でアンザイレン、2人なので
すらすらはかどる。最後の15mだけビレイする。霧がまいて何も見えぬ。下りは曇、岩側にガ
レを伝って下る。夜は久しぶりで賑やかだった。

せま谷を登る

8月4日 晴 同前

どうやら天気も落ついたらしい。昨日の3人は朝早く西穂へ出発する。

すぐ下に見える残雪を目当に下り出した白出しの長い事——遂に40分もかかってしまった。ビ
ッケルもアイゼンも携行しなかったので注意して雪渓を横切る。谷の入口は幅一間位で両側は
切立った岩壁だ。少し上ると谷はますます切立って狭く両側からおおいにぶさるようだ。アン
ザイレンして右側の岩壁をトラヴィースし10m程の滝の右側を下る。狭い河底のせせらぎの上
をたび越えとび越え進む事約10分で雪渓の下のうつろになった所に出た。つまり雪のトンネル
だ。中は暗いが下をぬけられそうなので、少し腰をかがめてはいる。中は丸で冷蔵庫のよう
だ。したたる滴は思わず首をすくめさせる。約30mもあったろう。再び明るい世界に出る。谷
が右に廻ると大きな岩が行手をさえぎっている。人梯をやったり、ひちで突張ったりしたが、
何しろ右側はオーバーハングの懸崖左手は逆層の絶壁と来て居るので手の付けようがない。ハ
ンマーがあればと悔んだが追付かぬ。時計を見たが9時すぎだ、時間はありあまっている。引
返すのも残念だ。左側の岩壁の斜に走ったりクラックに沿って上れそうだ。取付く事にする。
オーダーY・M・一手一足を動かす毎に物すごい音を立てて石がなだれ落ちる。暫し緊張の時
が続く。20m程上ってやや広い岩棚を左にトラバースすると少し傾斜がゆるくなって、岩と草
付の交錯した所に出た。流石のせま谷も今は日がさしたのか先刻の雪渓が白く光っている。
ともすれば落ちそうな草付を一步一步踏みしめて慎重に上る。1時間程してやっとはい松
に取付き、胸迄達する間を泳ぐと尾根に出た。やっと緊張から開放されてビスケットを頬張
る。飽迄すみ渡った青空には真綿を想出させる積雲がふっくりと浮び洞沢岳がゆるやかに肩を
のべている。右俣、槍平、中崎、錫杖、笠、丸でパノラマのようだ。右手にはジャンダルムの
飛弾尾根がすっきりしたスカイラインを見せている。12時20分穂高小舎に帰る。

せま谷は一風変わった面白い沢だ。はい松の緩斜面が何か地質の変り目にでも沿って雨の侵
蝕作用で急に鋭く切れ込んで出来たらしい。だからすぐそばに行く迄谷の存在は分らない。若
しハンマーとピトンを携行して谷底に沿って最後迄上れば相当面白いだろう。ジャンダルムへ

も行けそうだ。涸沢へ行って行く所に困るようになったら一度行って見てもよい所だと思う。
夕方藤田氏一行が檜からやって来た。田口弟が涸沢から上って来る。3人で穂高小舎に泊る事にする。

夜のとぼりは次第に山の頂迄も包んで行く。奥穂の頭に月が浮ぶ。涸沢岳がほの白く光る。北尾根の向うには月光に輝く雪が流れるが如く、もり上るが如く、その崇高、その壮麗、とても拙筆のよく現し得る所ではない。涙ぐましくなる光景である。友も同感なのであろう。暫し見惚れて茫然とする。誰が歌うのか澄んだテノールが静かに静かに響いて来る。

(村上正一郎)

ジャンダルムへ

7月15日 快晴 西村格、笹岡、井上

サカタ (京大生)

岩小屋出発 (8.15) —— 穂高小屋 (8.50—9.15) —— 奥穂頂上 (9.50) —— ジャンダルム (10.50) —— ジャンダルム西のピーク (10.55—11.25) —— 奥穂頂上 (1・30) —— 穂高小屋 (1.27) —— 岩小屋 (3.30)

涸沢岳下のガレ、ひだ尾根の鞍部と格さんのコンパス早き所を見せて穂高小屋を過ぎ、奥穂へと向う。ジャンダルムの瘦尾根を伝って、ジャンダルム東のピークにてアンザイレン、コンティニャスにて下る。ジャンダルムの思ったよりあっけない登りをして頂上、次のピークにて昨日去って来た上高地の瞬時の楽しき思い出、忘れ得ぬあの思出を惜しんで昼食に掛る。同じ尾根を奥穂、穂高小屋と進む。小屋にて一休みの後グリセード。自分には生れて初めてのグリセード。(笹岡忠夫)

前穂高北尾根第4峰又白側について (1932年)

近 藤 実

— ま え が き —

4峰の頭から又白側にかけて落ちている此の素晴らしい Fällén Fels について最初は全く無知識であった。

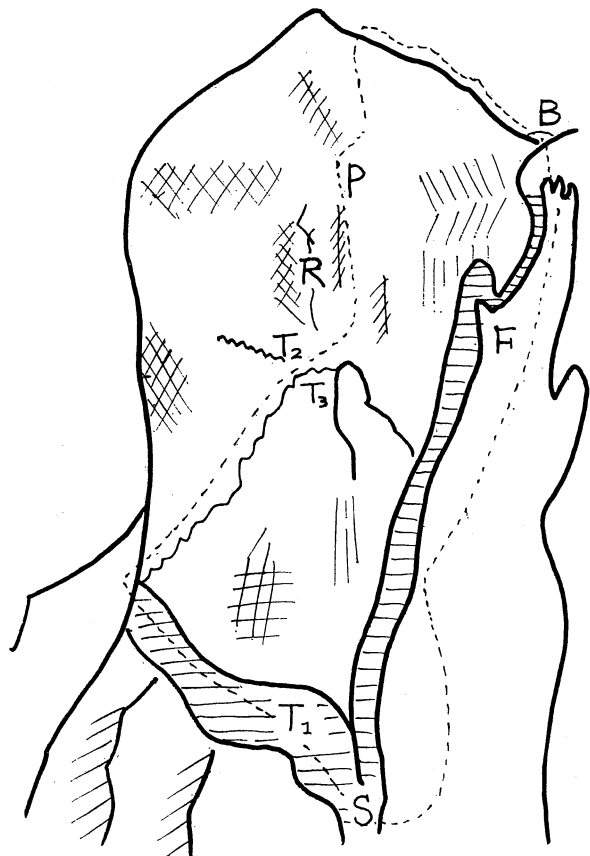
だが私唯1回の attack にもかかわらず、此処が数多の Valiation route を取るならば、crag's-men にとって必らず登り甲斐のある所である事を疑わないのである。

不完全なる附図によって地形的説明を為すならば次の如くである。

大体此の Felswand は非常に膨大な物で半円を為して3峰からの残雪と4、5の Col からの残雪との出合に落込んでいて、其の全面的な相貌は複雑を極め到底容易な説明を許さない。さて私達の attack した route は5峰寄りの Wand に含まれるもので、若し3峰寄りに route を採すならば——かなり手強いにちがいないが——面白い Kletterei は充分為し得ると思う。

図は5峰の4峰寄りの Col から派出せる尾根上よりの sketch であるが、前述の如く5峰寄の半面のみしか表わされていない。

図中Bは Biwak out で一寸



した terrace 状のものである。此の Biwak についてはかなり考えたのであるが、連日の Arbeit の疲労が幾分休養を要求していた其頃であったのでゆっくりやるつもりで Schlafsack 其の他を其処までかつぎ上げたのである。だが此れは偵察にも翌日の Arbeit にも効果的であった。若し元気だったら一日でやるに越した事はない。

Fは残雪であるがかなり急なので glisading は注意を要する。下部の方は Cut step するに限る。Sは Bergschrund であるが此れは理由無く越せた。T₁はかなり大きな terrace で此の wand の大部分を巻いていて図中では見えなくなっている向こうにも勿論続いているのである。

此の Terrace から T₂まで続いているクシャクシャした所は草附になって居て所々小さな灌木なども生えている。T₂、T₃は2、3人居れる小さな Terrace で bush をへだてて連絡している。

R附近は一带に Overhang になっていて Wand 全体が此の Overhang の帯に巻かれているのである。Rは小さな Rippe で、此の左側は slab になって居り右側は Verschneidung (壁と壁とが或る角度で交わっている凹部) になっている。

P点に到ると傾斜はゆるくなり zom ばかりが、30°の草附になっていて上部のガレに出られる。局部的にダラダラ述べたが、要するに岩壁は上部の100mのガレと中部の Terrrce までの100mと Terrace 以下の100mの分岐した尾根状の下部とに3区部さるべきであろう。

下部は這松等も多く Terrace までは route の選び様によって容易に行けそうなので割愛した。

—— 紀 行 ——

:party 近藤実、山口良夫

7月26日

池ノ平—10 45a.m.、4峰と5峰のCol—

1:35p.m.

偵察——2:30——4:25p.m.

肩の荷はかなり重かったが私達は割に早く Col まで行くことが出来た。

リックを置くと一先ず5峰より派出した尾根の上へ観察の為に掛けて見た。Buttress は午後になると既に日が当たらないので黒く陰鬱につつまっていた。私はプリズムを取出してみた。

第一の terrace は恰好の着きに見えた。そして其の下部を割愛した理由は前記の通りである。

T₂ までは軽く Manage 出来うそだった。だが其の上の Overhang は？

私は terrace の上の Rippe の両側すなわち右側の Verschneidung か左側の slab かこれが最適な route だと思った。で大体の目算をたてると再び Col に戻った。

取着を偵察するために私達はやがて Runse に glissading を飛ばした。雪はかなり固かった。そして両側には深い Bergschrund が闇をただよわせていた。着きの附近は zigzag に 3、4 段 Stufenschlagen をやって置いた。此れは翌日の時間をどれだけ Save したかわからない。

Bergschrund は一寸と細工すると直ぐ越せた。そして私達は草付とがしを交えたその terrace の上に空を仰いで立った。

岩壁はかなり威圧的だった。上部の Overhang は此処から見ると全く不可登の如く覆いかぶさっていた。其の端から夕映に赤く焼けた片雪が幾つとなく現れては消えていた。

偵察を終えて Runse を登る私の心は何んとも暗かった。それは明日の Arbeit に対する不安にも似たものだった。

だが Col に戻るとすべての峰は夕べの憩に息づいていた。Bace Camp には灯が入った。そして私達は夕飯に力づけられた元気で這松の床にもぐり込んだ。

7月21日

Col…… 8:30a.m. T₂……10:00a.m. P点……11:50a.m. 縦走路……0:45p.m. Col 着…… 1:00p.m. Col.出…… 5:00pm. 池ノ平 6:00p.m.

T₁ までは昨日の通り、pickel は後で取りに来る事が出来ないので如何にしても持って行かねばならなかった。T₁ で Anseilen した。Order K.Y の順。T₁ から T₂ までの草付は予期通り面白い Kletterei だった。割に Sound で停滞する事もなく常に愉快だった。

私は T₂ から左の slab を attack して見たのであるがこれは案外手強いと上部がひどい Overhang だったので見事に失敗して T₃ に移った理由である。T₃ から上の 30m はかなり手強くはなかった。実際弱音を吹きかけたのも再三ではない。だがそれだけ P 点に出た時はホットして汗をぬぐった。

悪い事には後から引上げたルックザックの一つを落石でとばされてしまったことである。

(其の中にはピトン、ハンマー、カラビナ等が入って居た。)

Pから上は前記の如き草付で慎重にさえやれば大した事はない。ガレに出ると Continuous でジャンジャン進んだ。それで今日の Arbeit は終わったのである。

—— 附 記 ——

要するに此の Buttress は T₂ から Pまでの Overhang さえ Manage すれば Variation route は幾らでも取り得るのだ。私達の取ったもの等ほんの一例に過ぎない。他日部員諸君の attack を望む。落石は自然落下は1回しか見なかった。縦走者のない限り安心とみて差支えなからう。(1932.9.3) (旧制9回卒業)

穂高ジャンダルム第一テラス北面 (1932年)

伊 藤 収 二

8月7日、終日霧 party 伊藤新一、伊藤収二

前日に gendarme へ行って降られて穂高小屋へ宿った僕達は8時ごろ目をさました。朝食の後晴れて gendarme 附近が見えるので偵察に小屋の後へ行く。プリズムで見ると北面の壁の下草付が大砲の下あたりでくいこんでいる辺より上へ行けそうなので route をそこにして帰って来ると生憎霧で11時ごろまで待ってもはれないので早飯を食って出かける。(11.50)

Gratturm の北寄の Col (12.30) よりガレを下り壁の下を traverse して大砲より少し左の直下あたりこの辺の草付が少し上へ行っている辺に体を横にしてやっとであるくらいのせまい chimney が20m程の高さである。これが偵察した route の下で。こあるこで Anseilen (12.50) す。Order 僕、兄、昨日の豪雨のためと現在の濃霧のため岩がしめってはいるが、完全な soundrock である。ここの出口が少し悪く次の pitch で Order を 交替、3,4pitch で大砲と同じ高さの Band へ出た。この上は霧の間より Over hang が頂上にかかっている。ここより大砲まで出てしまうとあまりに飽気ない。とてここより上へは登れない。よってこの Band を5,6m ばかり向って左へ traverse して見上げると第一テラスの少し右の 辺が漸く Overhang なるのをまぬがれている。ここを登る岩は浮石が少し多い Head の落すこけや岩はひゅーとうなりごえをたてて霧中に消える。下はすんと落ちていて何も見えぬ。途中平た

い巨岩がのっているが如き所を通過す。hold は多いが、あまりよいので、はがれぬかとうたがう。出口は Overhang で手で強引にあがってしまう。出た所は第一テラスの少し下の小さいテラス (3,05)

2時間余の climb で終日霧であったとはいえ hold も多いし、step のひっかかりぐあいもよいし、easy ではなく出口の Overhang も省けば difficult でもない。僕の今夏の収穫中最も愉快的な登攀であった。頭をまいて穂高小屋 (4.10—5.15) へ着き雨になって雨の潤沢をとばとばと池の平へと下って行った。(6.00) 註、大砲とは第二テラス側の所に小さいとんがった岩が出ている。これを大砲といていたままここに書いた。

北 穂 飛 弾 側

なんといっても甲南としてはこの方面に一番多く party が送られた。先づ穂高におけるクレッテライ、ゲレンデとしては今のところ一番愉快的な又 sound rock の豊富なところだろう。そしてここにもわが部員の輝しい記録を見ることは誠に嬉しい。先づ第一尾根についていえば全部で 3 party その中近藤君の party は2回の根気強い元気の溢れた attack にも失敗に終わったことは惜しむべきだ。その後をうけて route こそ違うが伊藤君 party の登攀完成は喜ぶべきことだ。次に第三尾根には 4 party 足立、伊藤収両君の party と山口省、松野の party によって研究、enjoy せられたのであるが未だ非常に難しいところなど種々 Variation のとれるところだと思う。

(旧制11回卒業)

北 穂 滝 谷 第 一 尾 根 (1932年)

—クレッテライ、ゲレンデの紹介として—

近 藤 実

この尾根の位置とか、大体の外観については部内雑誌4—3の田口二郎氏による「北穂の飛弾、側を見られればよからう。

私は今夏2回の attack よりしてその尾根のゲレンデとしての価値その他の詳細を述べたいと思う。

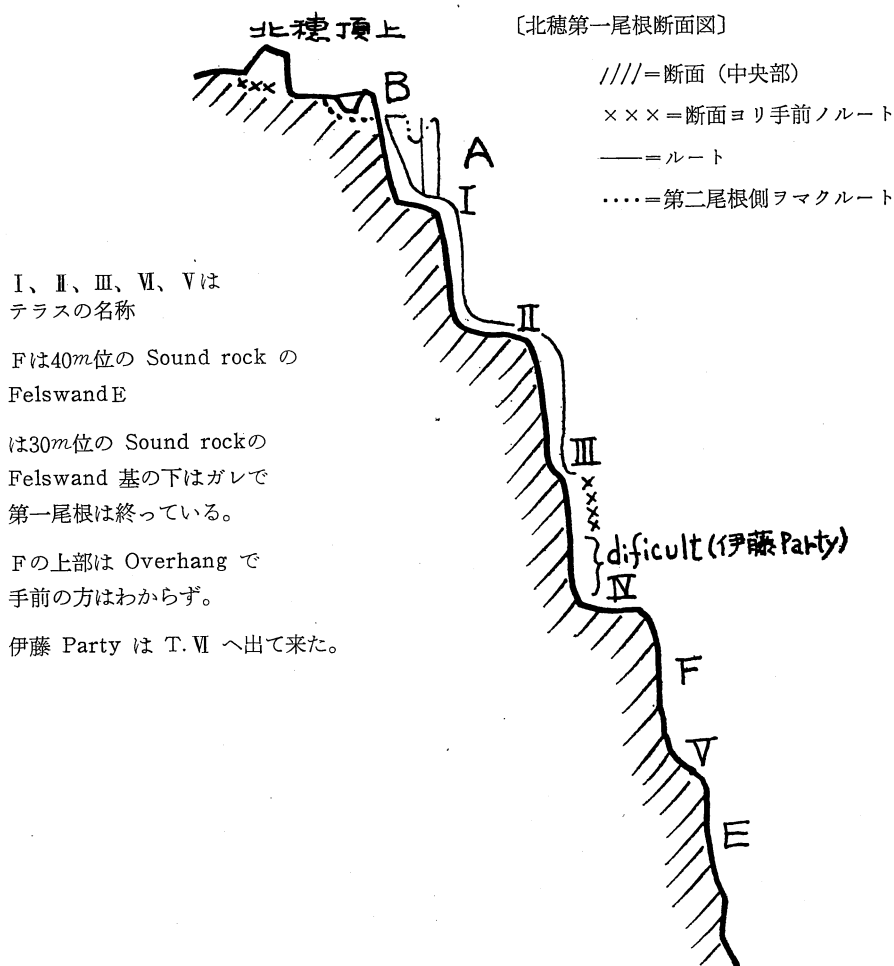
尾根の横断面は大体図の如きである。すなわち北穂頂上の小さな Rockpinacle の後からしばらく knifeedge になっていて、そこから30mばかりの Fels Wand が落ちている。

次が第一 terrace である。これは横にもかなり広く気持のいい所である。そこからまた25mばかりの Fels Wand であるが、これは真中の galley が voute を与えてくれる。第2 terrace 前者より更に広潤で、これもかなり大きく巻いているのである。

第3 terrace までは galley もなく真の Wand である。したがってかなり手強さを感じさせる。

第3 terrace は左より下へ30°ばかりの傾斜で Wand が走っている。いわゆる Band という奴で一人でやっと通れるくらいの所だ。

第3から第4までの Fels Wand は全く手に負えないほどベタッとしていて第4 terraceが



直ぐ傍に見えているだけ切歯扼腕する所である。八月になって伊藤兄弟達の登ったのはこの Wand の向って左端の ridge の所で、私達がなんべんも attack しては引返した。こ真中はすこぶる手強い所である。第4 terrace は上から見ると平であるが実は Ridge であって Mainridge 側はだらだらガレになっており切戸側は落込んでいます。

第4 terrace を除くと各 terrace は皆切戸側の沢へぬけられるのであって、たとえば私達の取った route の如く帰路には 第3 terrace 沢を traverse すれば、北穂肩までの面白い Kletterei をなし得るのである。

北の尾根の attack は伊藤兄弟の取った如く B 沢をジャンジャン下り（第一尾根の直ぐ左の沢は、ちょっと落石で手が出せない）肩から出ている尾根を越えて、再び B 沢を逆のぼり Mainridge 側から、第4 Terrace に取っていくのもいいだろう。

しかし、それはあまり労力を消費するという人があったら、私達の取ったように北穂頂上から climbing down すればよい。だがこれは前にも言うようによほど自信がないと、また第3 terrace で行きづまることになってくる。

だが、どちらにしてもこの尾根を attack すれば、決して後悔しないような Kletterei が出来、また terrace 毎にはふわりとした柔らかな憩を与えてくれるし、陰惨な落石の響にふと前をみればすみきった空に笠がなだらかな肩をみせているというのだから、とにかく、気持のいいことは確かである。

あるいは霧の日でもいい、もしそのしめった苔の上に腰を下し、谷から吹きあげる霧を吹込んで暫し Arbeit の憩をとるならば、それこそいわゆる “Badminfonstyle” の真髓が味わえるにちがいない。

以下は時間と行動について 2, 3

7月23日の attack party 近藤、山口

この日、滑稽なことには最初 Mainridge を行くつもりで第一尾根に行ってしまったことである。第一 terrace に出るまでは全くそれに気がつかなかった。

time 北穂頂12.40 第1 terrace 1.25—1.35

第2 terrace 1.50 | 2.07 第1 terrace 2.37 頂2.37

前に述べたように Mainridge だとばかり思っていたので、なんの気なしに出発しはじめた。最初の Knifeedge を過ぎると Mainridge 側を巻いて図中の Rock pyramid との鞍部に達したが練習不足のころだったので相手強く思えた。（図のA点）Aからは gulley を

伝って第一 terrace に至った。その下はかなり手強そうに見えたが、gully を利用すると割に易くゆけた。下部は Overhang になっている。第2 terrace より下は更に手強く見えたし、時間もないのでここで引返す。同様の route で第一 terrace へ。そこから別の gully (切戸側) を通ってB点に出る。後は路と同様 (この日は全部肩確保に終始した。)

7月25日の attackparty 近藤、山口良

今日はぜひ第4 terrace まで行きたいと思ったのでピトン、カラビナなどを用意して早期に出かけた。

Time 頂9.40. A.M 第1 terrace 10.25 第2 terrace 10.38—11.25

第3 terrace 12.20—2.10p.M 頂2.55

第2 terrace までは前と同様の route を通った (もっとも第1 terrace と第2 terrace の間の Fells Wand では前記の gully 以外にちょっと Variation route を取り難い)

そこでゆっくり昼食を取る。

やがて Y.K の Order で下り始める。結局 Fes Wand の真中あたりを下りることにして私が terrace の上で確保した。10m程下った所の全く小さな凹部でYがこれまた非常に小さな belaying pin を利用して、私が下ったが、そこからは Overhang の下にちらちら第3 terrace が見えていて非常に闘志をそそるのだ。15mばかりなのだが前記のごとく1時間も費やした。そのかわり非常に delicate な climbing down でが殊に第3 terrace に後2mあたりの Overhang なんかは、まことに愉快極まる奴だった。ともかく第3 terrace まで来たので一先づほっとして休憩した。第4 terrace までは15.6mだが、ちょっと route の見付け所に困るようにベタリとしている。左端へ行って見たり (伊藤兄弟はこの Ridge 状の所を登ったのである) 真中を attack してみたり細い terrace の上を右往左往してみたが結局ものにならなかった。もっとも5mばかりは下ってみたのだが、結局懸垂してみようというのでピトンを打込んでやってみたが、1m下るとピトンが動いたのでびっくりして這上ったりした。5回目の attack がいよいよ失敗に終わったので遂に引揚を決心した。(だが私は決して、この climbing down が impossible であるとは断言しない)

この間、北穂の肩にいて私達の動作を観察していた村上、西村、両君とは、しばしば沢を隔てて大声で話したものである。

帰りは往路に戻るのも気がきかないし、また大分へばって自信がなかったのでテラスの左端に行ってみると容易に沢をトラバースできそうなので、それを取ることにした。

このテラスの左端からは第2のテラスまで楽に行けることも発見した。この route は下からは理由なく発見されても上からは発見し難いものである。したがって第3テラスまで下りるのが目的なら、わざわざ私達の取った真中の route を取らなくてもよいわけである。

この沢をトラバースしてから北穂の肩までの Kletterei は実際愉快的なものだった。

ピッケルはなるべく頂上付近に置いておくほうが delicate な climbing に差支えなくてよからう。ルックを別に下すとしてもピッケルがあると邪魔なものである。

この尾根は Fels Wand の連続だったので落石に随分気をつかったが自然落下はほとんどないようである。ただ自分の落した奴が岩雪崩を起してB沢を落下するのはしばしば見受けた。

(旧制9回卒業)

穂高滝谷第一尾根 (1932年)

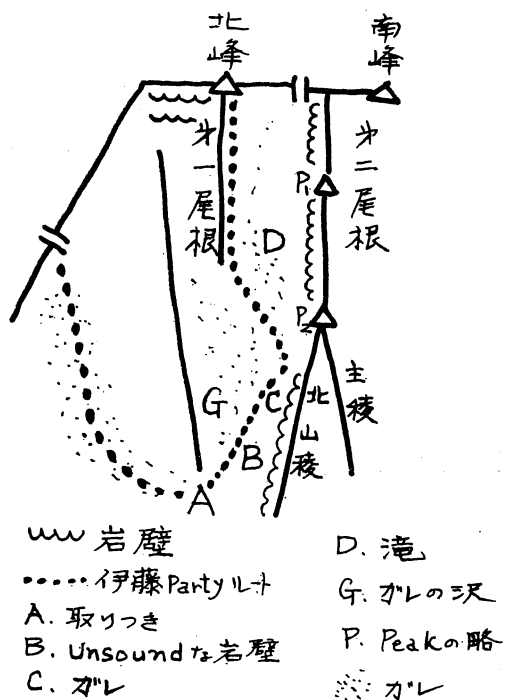
伊 藤 収 二

第一尾根の大体のことは近藤君が説明されたから僕達の route について記そう。(図参照)

第一尾根の北側の尾根は北峯の少し北より出てどこが基か判然せぬやせた岩尾根である。これを合宿では“第一尾根の tributary ridge”と称していたから以下略して tributary ridge とは、この尾根を指すことにする。

僕達は第一尾根を完全に行かうと思ったので北峯より往復することを止めて下から取ろうとした。そして取りつくまでの route は次の3つが考えられる。

- ①北壁の肩よりB沢を下り取りつく route
- ②第二尾根と第一尾根との間を下り取りつく route
- ③ tributary Ridge を下り traverse



をして第一尾根の末端に至る route また tributary Ridge と第一尾根との沢も落石は多いし途中に所々落ちているので危険である。

②の場合を考えると、これには2段の滝があり上の滝は約30mで降りられぬ。(滝まではガレ) 現に早大の party がこの沢を降りて滝のため下まで降り得ずに traverse してしまったとのことである。③の場合は tributary ridge その物が相当時間を食うし、うまく第一尾根側に降りられるや否や知らなかったのも、この第2の route をやめて①の場合を取ることにした。この壁の肩より偵察したときは tributary ridge のかげになって第一尾根の下部が見えぬのでその末端は tributary ridge と同じくらいだと誤解して、すなわち北壁の肩からの沢を下って tributary ridge の末端の下を廻ればそこが第一尾根である、と思ったのである。しかしそれは図にも示すごとく誤りであった。行ってみて始めて知ったのである。

紀行

party 伊藤新一 伊藤収二 1932.8.9 晴

time—池の平 camp (7.20) —北峯 10.00—10.30) —肩 (11.00) —地図上A点

(Anseilen) 2860m (11.20—11.40) 図上C点 (1.40—1.45) —D滝の下 (2.20) —第四テラス (3.15) —第三テラス (crack の上) (4.00) 第二テラス (4.25) —第一テラス (4.45) —断面図のB点 (5.00) —北峯 (5.20)

肩からの沢は雪がないため pickel は北峯頂上において行く。もちろん雪があれば必要だ。

この沢はガラガラのガレである。A点に残雪が少しあった。ここの高度約 2,860m。北峯の頂上は3,100m以上であるから、250mばかりの登高である。前にも記したように第一尾根を高く思い過ぎていたからここを第一尾根と思い違いをしてしまった。ここは来ると岩壁がずくずくと聳えていて上のほうはもちろん見えぬ。ここで Anseilen をす。order は兄が top で登り始む。岩は unsound rock でずいぶん大きいのがちょっとしたハズミでも落ちる。ある時には top が traverse していた時一尺四方の石を落したら5.6m下の人間大の岩が少ししかしいだかと思うと轟然くづれて5.60mも中空に飛んで下の雪を真黒にしてしまった。その後はガレのごろごろという滝沢名物の陰惨な音をどこまでもたてて、僕達をゾーとさせたこともあった。unsound rock ではあるが相当悪い Overhang もあり緊張させられた。途中大きなテラスは発見し得なかった。図上C点へ出て始めて僕達の登高して来た所は第二尾根の peak II からの尾根の下であると知って呆然とさせらる。この辺はガレで P₂ までの尾根は北山稜 との間の gully をのぞけば不可能であろう。ともあれ第二尾根の第一尾根側は物凄い。また第一尾根は

と見ると F.E の両 Buttress は (sketch参照) 僕達の役柄の外である。

face F は40mぐらいで上はかぶっている。行けるとしたらそれは上部で左から登って Overhang をさける route であろう。

しかし僕達は第一尾根の近藤君の降り得なかった face で時間をどれだけ食うか知れぬので行けそうにもないこの E.F の face は除外し C 点より order を反対にしてガレを traverse をして滝口に至り滝口を苦心の末登った。これは15mぐらいなものであるが crack があり上が Overhang なので苦心したわけだ。D 滝の上より第四テラスまでは傾斜のゆるい unsound の face で上から見ると平たく見える。D 滝の上よりテラス4まで4.50mでテラスは実際上は Grat である。この Grat の真上は地形の複雑した所が7.8mばかりでその上に crack が10mばかりあり、crack の最後の所は Overhang である。これが一番可能性のある route でその右のほうに登れぬことはあるまいと思われる。route があるが非常に delicate な Balance が要求されるであろう。(近藤君らの降らんとしたのはここである) crack までは easy であるがその上の crack は靴が全部入りきらぬくらいのせまさで洗足になった。大変悪くこの日の一番 difficult な所であった。上の overhang は右へ少し出ると楽であった。この20m程を2人で45分もかかった。ここが第三テラス (実は Band) でここでは岩で確保できた。岩は大体 sound rock である。ここより真すぐ上へ尾根状の所へ行く。比較的 easy な climb で第二テラスへ着く。第一テラスまでも easy な climb である。ここより上は近藤君の party の始めの日の登りの route によって登る。北峰に着いて Abseilen をした岩登の時間5時間半に及びかかる。Arbeit は僕としては始めてなので精神的にも肉体的にも非常に疲労した。

万一第四テラスの上が行けなかったなら、また滝口が行けなかったら困難な A 点までの climbing down をして肩まであのガレに登らねばならなかったであろう。登高の喜びは二重であった。帰りに所要のために穂高小屋を廻って帰ったら猛烈にへばってしまった。

この紀行文によって了解せられたごとく第一尾根を完全に行かんとする人は上から往復するに非ざれば非常に遠廻りをせねばならぬ A より B を経ずして第一尾根の取つきまで行く route すなわち沢 G を登らんとすればこれは大変なガレで雪がなかったなら非常な労力を要すであろう。

前穂高奥又白側 Buttress (1932年)

伊 藤 収 二

前穂の Buttress とは前穂頂上より奥又白谷側に落ちる 200m ばかりの大岩壁のことである。北尾根縦走者で少しでも又白側を気をつけた人は四峯の Buttress とともにその豪大さに誰も一驚したであろう。実際穂高でも、これの登攀であった。そしてこの Buttress は去年、田口君らによって偵察もされ、登攀の計画も建てられたのであったが、惜しいことに時日が足らなくなってその成功はみなかった。また去年松高の人によって初登攀されたと聞く、しかし、その route は北尾根より見えぬ側であり (face(a)の向う側) 僕達の行かんとする route は四峯側なので新鮮味はあったわけだ。その他の人のこの Buttress の登攀は聞かぬ。第4峯頭より少し、また白のほうへ下ってこの Buttress を偵察すると(図参照)図上(a)(B)の両 face は全然不可能な巨大な face である。

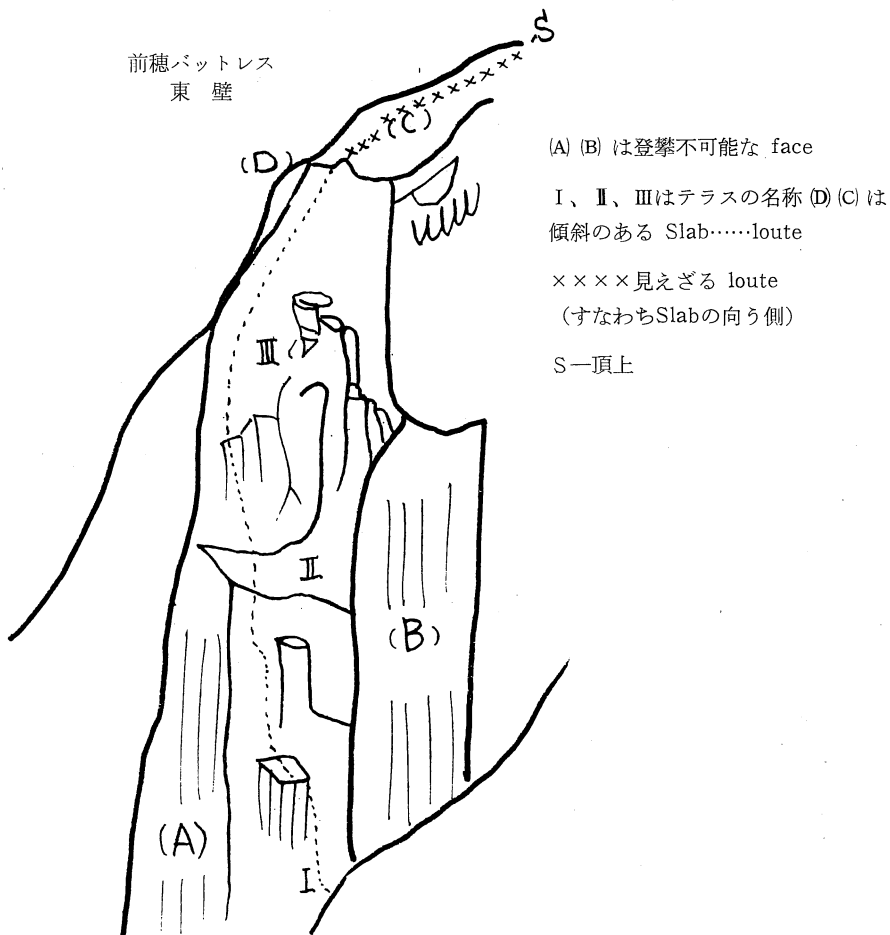
よってこれを除外して考えると全部で三つのテラスがある。これを下から数えて第一テラス、第二テラス、第三テラスとすれば第一テラスはガラガラで急傾斜で行なってみるとテラスらしくない。第二テラスは傾斜が少なく比較的小さい。第三テラスは下のほうばかりで上のほう及び明神のほうは草付の傾斜のあるテラスで一番広くて長い。去年は残雪が(7月中旬)あった。このテラスの上は急な Face で上に slab が2つある(図上(c)(D))。この2つの間は離れている。図上(D) face は少し解り難いが(c)(D)は全く似ている。取付より第一テラスまで三峯より出る岩尾根のため見えぬ。第一テラスより第二テラスまでは岩がもろくて優秀な Anchorage がなさそうである。しかし割合に複雑であって route は Variation が取れそうで Crack が3つ見える。第二テラス、第三テラスとの間も Unsound らしいが、この間の route は第二テラスより左へ少し出て直登して第三テラスに達するかテラスⅡより右へ登りつ、テラスⅢの右へ出るいずれかが行けそうだ。第三テラスより上は slab c,D の間を抜けるか、もしそれが不可能ならば右へ traverse して slab の右の草付に出て逃げてしまえばよい。以上私達が8月の9日偵察しての route である。そして8月13日にこの Buttress 登攀を企だてて成功した。以下次の紀行を述べることにする。

時日 8月13日晴霧少し party 伊藤新一 伊藤収二

6時起床、屏風岩の頭には久し振りの太陽だ。携帯品はツェルト(万一途中で Biwak する

場合を考えて)防寒具、piton (2本) hammer 捨縄、双眼鏡、Steigeisen Pickel Barometer Seil 30m一本、3食分の食料品、水筒 etc これで相当重い。6時50分出発、3峯4峯、Col (9時05分)に着いてから4峯より一度偵察をし自信を得てから下り始む(9時30分)。雪渓は4.50mでつきる。それより少し登って第3峯よりの岩尾根を越せば Buttress とこれとの間の Rinne 大分続いており下は滝状である。この Rinne には残雪少なく Steigeisen を使用せずすんだ。

この Rinne の行きづまりの少し下で第一テラスの末端へすぐ出られるので取りつきの不安は晴れた。ここの高度 2,900m (僕達の携帯した Barometer は正確を欠いていたかも知れない) であって着いた時刻は10時10分、少し休んで Anseilen をす。Order は兄が top で出発す。(10時30分) このテラスは問題外。ここより、図に示すがごとく右より2番目の大きい



crack を登る。果して unsound rock 気味で慎重を要す。anchorage もよくないが登攀は difficult ではない。crack の上 (11時15分) 第二テラス (11時25分) に着く。第二テラスは Biwak は可能である。テラスⅡより前述 route 気味の前者をとり左へ少し出てやはり unsound rock 気味の小さい尾根状の所及び crack を利用して登れば第三テラスに達す最初はガレで上のほうは大分草がある continuous で最後の face の下まで行く (12時10分) 荷も重いしするので昼食。うすい霧の中より見える牧場奥又の池などは夢のようだ。すぐこの下が数百米も落ちていることなんか忘れてしまう。太陽が霧を通して月のようだ。軽い疲労を覚う。今まで思ったより時間もかからなかったし (僕達は偵察の時取つきより第一テラスまでを大分見積っていた。) 思ったより容易であったが所が所だけに大分緊張させられた。何分万一失策して2人とも落ちたら数百米落ちてくたけてしまったであろうから。昼食後向って左のほうへ偵察に行くところのテラスから少し落ちて Rinne がありこの Rinne を距て向う側に岩尾根がある。残雪は少々。引きかえしてちょうど slab C の左側の下あたり (ここより slab C は見えぬ) に overhang があってその下よりそれを左へからんで行けそうだ。そこまで 30m ばかりでその上は見えぬ。order は前の通りで出発 (12時50分) 岩は白い感じがして石切場のようである。テラスⅢ以下に比べると大分悪い。Overhang の下の辺などは相当な物だ。hold はあるが step がすべすべしていて鋏のかかり具合が悪い。次の pitch では Ruck のじゃまになる広い crack を通って上に出た。この下の anchorage で些やかな cairn を積んだ。出た所はもう缶詰、新聞紙が2、3個見られて頂上近くであることを知った。20m ばかり continuous で登れば頂上の明神岳寄の一番はしであった。最後の 60m をのぞけば思ったより easy であって案外であったという軽い望失と呆気なさで登れてよかったという慰安と交々な感がした。時は (2時10分) ツェルトなどの大袈裟な用意が僕達を苦笑させた。とはいえ岩を要する人を引きつけずにおかぬ岩肌を有すあの豪壮な今潤沢生活の最大目的の Buttress に僕達の足跡を印したかと思うと非常にうれしかった。ゆっくりのびて用事があったので穂高小屋を廻って帰ると天幕についた時はもうすでに夜の帷がすっかり池の平を包んでいた。

なお稿の sketch は僕達の不注意により sketch し得ず田口二郎君の手を災らわした。ここで深く感謝します。

春の南股合宿 (1933年)

伊 藤 新 一

私達の春における南股生活乃至合宿は、今や、恒例となったかのである。今春も第4回目(初めの冬をよせて)が行なわれた。このグループに対する、基礎は、これまででだいたいできあがり、今や必然的にヴァリエーションの段階に入ったといえよう。

私達は、かなりいきごんで今度の生活をはじめたけれども、結局、六左衛門滝の通れざりしこと、および天候の悪かったこと、この2つの不利な条件のため、期待どおりうごけなかったことは幾分残念であった。

以上私は、Ⅰ合宿全体の記録および、Ⅱ登攀記録、の2つにわけて書いていくことにする。

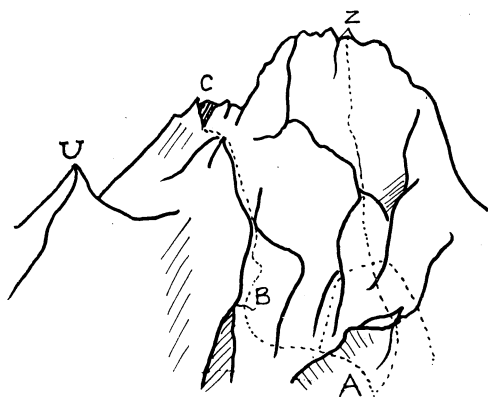
不 帰 第 二 峰

3月25日 晴 2.00pm頃より雪

party 田口(リーダー)、伊藤私達の登ったのは、不帰第二峰のこの頂より非常な急さで、唐松沢へおちている尾根である。(これを第二尾根と仮称しておこう)(以下スケッチ参照)

この尾根の下部は岩まじりに、全然パーティカルにおちていて登攀不可能である。私達はルンゼAを登り、Bに出る方法をとった。Bよりここまでは岩壁で、どうしても、向う側の非常に急な雪の斜面を登らなくてはならぬ。私達はここが少し気がかりであったが、他は大体確信があった。もっともそれも雪質の問題であったが。

近藤がかぜをひいて出られないので私達2人になった。唐松へ行くパーティーと一緒に出発する。多人数のため、大変ゴタゴタして、出発したのが、既に5時ごろになってしまった。小屋からアイゼンをつけていく。23日に降った雨のため、それが凍って雪は非常にかたく、アイゼンは絶好だ。谷のなかには、小屋からも少し見えていたが実にひどいデブリだ。



- A ルンゼ
- B col
- D 第一尾根
- E 第二峰北頂
- F 第三峰

今まで蓄積され、鬱積していた雪量は雨のために完全に清算されたかのようなのである。出発がおそいため、滝に来ぬうちに夜が明けはじめる。だが、明るいのはなかなかアングネームだ。アイゼンの爪しかささらないので非常に能率をあげ、南滝の col まで1時間半少しで来てしまう。col で唐松沢を見下し、思わず、アッと驚く。谷一杯に延々と長蛇のごときデブリで、おおわれている。もちろんこの間の雨で出た高次のようであろう。不帰沢の国境線近くより発生して、南滝のすぐ上まで押しひろがっている。実際鹿島の北股の二次雪崩にも匹敵するやつだ。デブリをふみこえふみこえいく。天気は、日もはげしくてらぬ、うすぐもりだ。この分なら尾根の雪も大してゆるまないであろう。二峰、三峰間のルンゼとの出会で唐松へいくパーティーと別れる。1時間ばかり登り、とりつきのルンゼ(A)の入口に来る。スッキリした気持のよいルンゼだ。非常に急峻なので最初からアンザイレンしていく。ほとんど氷化していて、アイゼンの爪が快よく、サクサクとつきささる。はじめ、コンティニアスで進んだが、間もなくステップ、カッティングを余儀なくせしめられる。それからトップを代りつつステップを切って one at a time ですすむ。2人だから大変能率がいい。傾斜はちょうどステップの切りどころだ。2人で無数のステップを切った後、10時半 col につく。うそさむいルンゼより開放されて、眼前がぱっとひらける。唐松のほうより友のエッホーが聞える。小さい黒点となって彼等の姿が見える。

正面の岩は、予期したとおりほとんど登れそうでない。予定どおり左側をまく。うす曇りであるとはいえ、ルンゼよりもやや雪はゆるんでいる。予期していたとおり傾斜は全く急だ。60°くらいあるだろう。これからはずっと one at a time ですすむ。2時間ばかり後、小さな雪庇をこえて尾根の上にでる。(B)。これで問題はすんだわけである。もっとも唯単に急であるというだけのものだが。とはいえ粉雪でもあらば、不可能なところである。あとは、もの雪稜を辿ればよい。頂はすぐ近くに見えていて、案外遠い。今まで見えていた白馬が雲にかくれたと見ると、間もなく、吹雪がふきつけてきた。やがて白いとぼりが、われわれをとりかこむ。雪稜をおわり、ニピッチ程岩稜を行き、頂上着。ルンゼとりつきより約5時間あまりの気持のよい登攀であった。同志近藤のはやまって来ざりしを、残念に思う。アンザイレンのまま、唐松の手前の col までいき、アップザイレン。気温が非常に高いので、雨にならんことをおそれて、唐松沢を下るのをやめて、八方尾根を下ることにする。唐松小屋、小けいの後、いやにダダッピロイ八方尾しを吹雪のため幾分、迷いつつ下る。それでも九方押出を見つけて、シッティング・グリセードで下り、近藤達に出むかえられて小屋へ。

—時間 小屋 (5.00) —出合 (6.45) —出合 3 (7.40) —ルンゼ入口 (8.30) —col (10.30)
岩の上 (12.30) —頂上 (2.30) —唐松小屋 (3.40—4.20) —小屋着 (7.30)

(註、時計をもっていかなかったため、幾分不正確はまぬがれぬが、大体はあっている)。

(旧制 9 回卒業)

春の鹿島槍東尾根 (1933年)

近 藤 実

(1933年 4 月 2 日—3 日)

鹿島槍東尾根についての説明は、部内雑誌Ⅳ～2号との重複を避けるためにここに省くことにする。諸君はもう一度あの田口一郎君の文を読み、かつ後巻末の附図を参照にしてこの文を読んでくれたまえ。

私達も実は彼の文を読んで春の東尾根に対し fight を持った 1 人なんだ。私達は去年 3 月すばらしい闘志でもってこの尾根にぶつかっていったのである。だが深雪に打ちのめされて空しく撃退されてしまったのだ。田口君があ文に述べておられるように私達はあの隆々たる黒い岩壁と、べったりとそれにひっついていて、より全体を威嚇的にしている雪とのすばらしい調和を鹿島槍という山が持つほとんどすべての魅惑として感じたのである。殊にそれが 3 月ごろだと、あの他にはあまり見られない 2,000m の高差が一段と立派さをそなえてくる。

それら以外に私達を数回もこの鹿島に引きつけた原因はないのだ。

さて、私達が、この春雪に埋れた鹿島村を訪れたのは、このころにはめずらしい 4 日間の天気がつづいて 4 月に入ったついたちの日であった。その日はまったくすばらしい好天気だった。私達は鹿島川を渡る大分手前の雪に埋れた芝地を大声をあげて覚えたての Erlkönig を歌いながら軽くスキーをすべらせて行った。その日はいろいろの理由から 2 人の Träger を雇っていたので私達は全く荷物から解放されていた。

例の狩野氏方で昼食を取ってから私達は荒沢偵察に出かけたというのは、それまでの私達の計画としては荒沢バットレスを登るつもりだったからなのである。

もう雪は大分くさってきた時分なのでスキーは一向にすべらなかったが、皆かなり元気だっ

た。そして細い枝をすくすくと海のような真青な空にのぼしている落葉樹の下を通ると、例の見なれた大川の出合にやってきた。

4日間天気がつづいたにもかかわらず雪は去年より多いように思えた。

ちょうど頃は3時ごろだったのでギラギラ光る雪面がどこまでもつづいて、それが両側から迫る、ヤブ尾根にたちきられるあたりの一段上に国境線が長く横たわって見えた。東尾根だけは去年より多少岩を露出していた午後の日がその岩壁をくっきり浮びださせていた。やがて私達は例の恐い丸木橋を這うようにして渡ると大川の右側の林道に出た。

あたりは未だかなり雪があったけれど、その間々に首を出している芝草は、なにか昔を思いださせるような、つつましい香と、この雪の間を縫って流れている大川のせせらぎによく調和した心地よい春の気分を醸していた。雪が所々きれていて時々スキーを脱さねばならなかった。やがて林道は大きなデブリにさらわれていて河原に行くほうが得策になった。

いよいよ渡渉にかかったのでスキーを置いて歩きだした。

ちょうどそのころは、この深い谷には、日もささなくなっていて時々回り角でまだ日の当たっている遠見尾根の一角を見るような状態だったので私達もそろそろこの長い沢歩きに倦んできたのである。だが地図を見るともう一つの鼻を廻れば荒沢に出るだろうと見当がついたので、ラストスパートをかけてグングンがんばった。そして間もなく一ちょうど5時ごろだったが一荒沢の出合に出ることができた。そこはおそろしく陰鬱に木が茂っていて、しかもこの眼のとどくあたりまでは水が雪の間に黒く流れていた。この沢は直ぐ奥で右に廻っていて奥のほうは望めないのである。

私達はこのあたりの夜歩きが、ちょっとできそうにもないのをみてとった。実際懐中電灯1つで何回も渡渉を繰り返せばそれだけで充分へばってしまうものである。特にスキーを用えないのも不利な条件の一つであった。その結果私達は荒沢バットレスを抛棄して、専念東尾根に向うことにした。

私達はかなりへばったようだった、だがTなどは「いい training になった」といつていた。

出合で、もう灰色の雪面にはのかに残光をのこしている東尾根にも一辺眼をやって明日の登攀を約束しながら、凍った Spur の中にスキーを走らせた。

明日何時頃に出るか？それが相当問題だった。というのは定石通2時起きをやるにはあまり身体がへばっていたし、おまけに雪さえしまっていれば、いくら東尾根でもまる2日を費いや

すとは思えなかったのである。いろいろ協議の結果、明日午後1時ごろ出かける手筈になった。

もう5日も天気が保ったのだ。すくなくとも2次雪崩は起き得べくもない。今や高次へ移らんとする Stage であろう。と、これが私達の予測だった。そして今日の状態をみれば3時以後には北股において雪崩音をきかなかったことも、私達が昼ごろ出かける大なる理由にもなっていた。

だからこの夜はうんと滋養分を食ってあらゆるものをほったままにして、狩野家の好意の蒲団に Angenehm な眠をむさぼった。

その翌日、その日は予期どおりすばらしい快晴だった。私達は9時ごろやっと起床してぼつぼつ荷を整理しはじめた。

荷は去年の経験にかんがみて、可及的に省略を重ねた。それでも出来上った荷を見ると張り切った Subruck の上に輪カンとアイゼンとピッケルがついて、おまけに私などは30mのザイルを肩にかけて行かねばならない状態だった。

南股で握り飯の実力を知っていたのでこの日もお婆さんに、すてきに大きな奴を作ってもらった。そうするとその荷重がまた私達を悩ました。

出発は予定どおり1時 P.M になった。私達は肩に喰い込む荷を気にしながら、だまっていっつもの Spur どおり滑っていった。陽はさんさんと紫の空から落葉樹の枝の間から私達の肩に落ちて、そこに光る白い斑点をいくつも作っていた。

遠見の尾根つづきの黒い針葉樹と、むき出た黄い草地からは、ゆらゆらと透明な陽炎が上っていた。全くこのゆっくりした出発は私達にのんびりした気分を与えてくれた。それは凍った雪の上をカチカチとアイゼンで踏んでゆく2時起きの張り切った気分とは別個のゆったりした、たまには空想の余地をも与えるようなものだった。

出合でしばらく休むと私達はまた広い河原を進んだ。そうすると間もなも林の蔭からこちらへ歩いて来る3人の人影につき当たった。

最初私達は獵師じゃないかと思った。がよく見ると大きなルックにおしつぶされたようになって歩いて来る。やがて彼らは私達の前で止った、私達はたがいに会釈した。彼等は立教の人達だった。そうしてこの3月の中旬から八峰キレットに頑張っていたのである。先頭の大男は私達と満更縁がないでもない、人夫の桜井という男で彼がその日に焼けた顔面を悠然と上げて立っているのを見ると、よく頑張って来な—というような一種のなつかしさが生じてきた。

「お静かに」「御無事で」お互いにこういって別れると彼等の踏んで来た輪ガンの跡を伝ってグングン奥へ進んだ。

かつて12月に崩壊した林道に悩まされたことがあったが今は河原を充分利用できるので時間的にも、労力的にも全く助かった。

空には真綿を延したような雲が大きく横ぎっていた。あれが天候に如何に作用するかなどの問題も私達の時々の話題になった。ともかく私達は万事を善く見るようにした。もっとも、また悪くなつてはこの機会をまたと得られるとは思えなかったのである。

さて、森林帯を脱けるとやっと北股の出合に出た。もうそのころ、陽は国境線の後にかくれてしまつて大きな灰色の影が、北股全体をしめていた。

ここで私達は実力的な握り飯を摂取した。

北股全体はすばらしい高次雪崩に埋められていた。これは多分10日ばかり前の雨で惹起したものだと思像できた。

デブリの上の新雪は5日間の天候ですっかり解け去ってデブリ自身の醜い形骸が重り合い押し合い、つぶし合つて、長く奥までつづいていた。このデブリの間をスキーで行くのがまた一苦労だった。

この辺りから二ノ沢は充分観察できたが、かなり悪そうに見えた。この沢は非常に広範囲なもので数本に分かれて尾根に至っているが、どれも途中ちょっとした胸壁にさえぎられていて、たとえ登れたとしてもかなり労力を取られそうなのである。

昨日の計画としては二ノ沢あるいは三ノ沢を今日中でできるだけ高く登りつめて、Biwakに移るつもりだったが、もはや5時半を過ぎていたし、そういそぐこともないので沢の出合でBiwakを暮し、翌日全部の荷を置いて中尾根から戻って来ることにした。この計画は実際すばらしく効果的だった。實際上これだけの荷で東尾根を行くなど少々私達の力量以上の話である。

デブリの間に行くことは前記のごとく甚だ困難を極めたが、ともかく私達は、三ノ沢が北股最奥部に口を開いている地点に6 P.Mについたのである。

Biwak Ort は沢の左側の尾根の端の、稍、高地状の所と定めた。それから、ピッケルやスキーの tail で強引に雪に切り初めた。その夜の Zelt は新調の、Dach 型になっている奴なので両側にスキーを立ててそれに結びつけると、かなり優秀に張れた。あらゆる防寒具を着こんだ。そしてお互に膨れた身体を笑い合ながら、どっかと腰をすえて、とっておきの煙草に火

をつけた。

灰色から黒色に変わった雪面にいつの間に出たか、半月が青白の微光を与えていた。私達は時々立ち上っては銀色に光りだした、国境線をながめ、胸いっぱい吸いこんだ煙を青い空に向けてはいた。その煙は白い息とともにしっとりとした静けさのなかに溶けこんでいった。全く風一つない穏かな夜だった。そして私はこんな夜に安曇野の灯が見えたら一層この疲れた身体と頭を慰めてくれるだろうにと思ったりした。

夕食としては残ったにぎりめしとオーツを取ることにした。

3人はジーと音をたててとけていくコッフヘルの中の雪塊を、それをてらしている臘燭の灯のようにぼんやりとそれともなく見ていた。

夕食がすんでも、月がよかったし、風もないのでしばらく外に立って歌ったりしたが、やがて3人、雪の段の上にこしかけて Zelt をかぶった。温度は14°ぐらいだったから暖いといえは暖いはずだったが Zelt の内側の露と背中の中雪面からくる湿気が目に見えぬ縄のように私達をしめつけ、ちぢまらした。露ができるくらいだから、Zelt の内部はもちろん 2—3° あったに違いない。それでも夜中に紅茶を作りミルクパンを摂取して寒さをまぎらせたのである。

3人ともうつらうつらの内に夜明けを迎えた。私達は6時に出発するつもりだったが、4時からそろそろ準備に取りかかったのである。太陽の照らない内に Zelt を出ることは恐ろしく勇気の要るものである。が、とにかく私達はそれを断行して、うす明るい外に飛び出た。そして手際よく防寒具を脱ぎすてると昨日どおりの服装にかえた。そして夜中苦しめられた身体をのぼして、透明な空気をいっぱい胸にはらんだ。

朝食はオーツですました。そして各自荷をつめはじめた。どうせ今日中にここへ帰って来るという観念が頭をしめていたので、あらゆる荷はそこえ置かれた。私などはザイルをのけると替えの5本指だけだった。

荷のまわりをスキーでかこんで輪カンを穿いてしまっただけで出かけた。というのは昨日の温度があまり下らなかったためか、あたりはいささかもぐったからである。ちょうど5時半だったから私達は予定より早く出発できたわけである。しばらく行くと輪カンは爪だけしかもぐらなくなってきた。したがって私達は maximam Rithm で登れた。

三ノ沢が岩壁につき当って右に曲っている所がある。その付近は傾斜もかなり急になってくるので Eisen にかえることにした。そして以前にもまさる Speed でグングン沢を登って行った。

そのころ漸く爺岳の頭から国境線一帯にすばらしいモルゲンロートに彩どられていた。そしてこまかいひだの一つ一つが明るい陰影の中に浮び出ていた。天候は今日一日は大丈夫とみてとれた。

私達の登っている沢は陽の当る時間がはなはだ遅かった。したがって私達は尾根の上の陽の当る部分に早く出たい気持を押えられなかった。全く何んの不安もない愉快的な登行だった。私達は zigzag にあるいは direct に Zacke をきかして登った。

間もなく私達は東尾根の一角にたどりついた。そこはちょうど、田口一郎君らが、尾根に出たところから200mばかり Gendarme に近い所である。田口君らは私達の登った所を滝が出ているために避けられたのであろう。

尾根に出た時、7.30 A.M.だったから、ルンゼは2時間で登り切った勘定になる。

尾根の上はさすがに陽のためにもぐった。私達はやっと東尾根に出たという一種の満足を感じていた。そこから一の沢の頭までの尾根は一面に固そうに光って、おそろしく大きな雪庇を荒沢側につき出していた。

やがて少前のエッスパウゼを取り、アンザイレンをして出かけた。第一チャンドルムの根元まで One at a time の個所が2ヶ所ばかり在ったが、それは軽く行けた。第一チャンドルムはすばらしい尖塔のように突き立っている。その真中（もちろん北股側）にルンゼ状の物が縦にかかっているのである。それが100mばかりで上部のはえ松と岩塊の間に終っていた。

私達はそれを登ることに決めた。そしてK.T.Iの順に One at a time で登りはじめた。そのルンゼは最初から中頃までは靴だけでもぐる程度だったので難く行けたが、雪塊が次第に大きな盤となって、脱するような状態となってきた。ピッケを全部差込んでも心元なかった。仕方なく端の岩と草付に取付くことにしたが、それがまた80°ばかり有るので思はぬ所で樺の木登りなどしてやっと上部の岩塊に出ることができた。私は額に、にじみでた汗をぬぐった。

そこは、また、すばらしく気持のいい所だった。陽は適度に岩面を暖めていたので私がそこにすはると、春に似つかはしいぬくもりが全身に伝わった。そのころ安曇野はもやにつつまれてしまっただけその向うの管平の大きな銀板がかすかに光っていた。八ヶ岳のほうは灰色の雲塊にかくされて、その青曇色の峰々を淡くかがやかしているだけだ。雪の間から首を出している這松は、このあたり一面の白さに対して、緑の点影を与えていた。私はそのやわらかい葉を1本ちぎった。そうしてその苦い味を乾いた舌の間にしみこませた。ピッケルは雪面に差しておいて、Shoulder Belay をしていたので久しく遠ざかっていた。芦屋の岩場のような安易な

気分が私を支配していた。そのせいか、私はザイルを握りしめながら声いっぱい Grindelwalder Lied か何か歌ったように覚えている。そしてその声が遠くの雪尾根に当たって消えるまでじっとその感触をたのしんだ。

そこからは急ではあるが平凡な雪面となって Gendarme の尾根の上までつづいていた。私達は再び Continuous になって登った。

Gendarme の頂に出ると尾根はだらだらと200 ばかり下っている。そこに例の第2 Gendarme の偉大な岩壁がバッサリと尾根を切っているのである。私達はその岩壁をにらみながら黒パンを食った。時はちょうど10.30a.m であった、

その岩壁は、去年のようではなかったが、まだかなり雪を付けていた。私達はその登路として岩壁の一番右端すなわちこの尾根の一番荒沢側寄りの40mばかりの、Vertical な edge と、例の田口君らの登った、岩斜を斜めに走っている雪のバンドとの2つを考えた。

だが後者を取るにはどうしても、ここから50 ばかり雪面を下らねばならない。その原因のために私達は全く未知のその edge を登ることにした。かつて聞いていた荒沢側の棚という奴は雪にかくされたらしく見当らなかった。ただそこには固い垂直な雪壁が深く落込んでいるだけだった。

さてしばらく休んで、K.T.Tの順で登り初めた。初め10mばかりは2段の細い雪稜になっていてそこまでは比較的容易に行けた。何んといっても Seil partie が3人なので甚だ進むのが遅い。その雪稜を過ぎると、いよいよ岩である。私は充分 Belay をしてもらって進んだ。ところが具合の悪いことには岩上の雪が氷化していて、おそろしく硬く、また不安定に乗っているのである。ピッケルで氷を叩き割る。そうすると黒にぬれた岩肌が出てくる。それがまたスベスベしたスラブなので、その苦労は一通りではなかった。ともかくやっと這い登って上部の雪稜に達した時は、やれやれという感が多かった。3人とも登って来た時は既に2時間たっていた。

ここから後は坦々たるといいたいような雪稜続きである。それが約1時間ばかり続いた。そのころは、先きにあれほど晴れていた空も陰鬱に曇ってきて黒部側からさかんに霧がまいてくるようになった。南檜はそのために黒い岩壁を半ばまでかくしていた。檜、穂高も既に見えなかった。そしてなまぬるい風が目立って感ぜられるようになった。

最後の急な雪稜を登り切ると、私達は北檜の頂に出た。そして固い風にたたきつけられ磨面に寝ころんだ。「とうとうやった」という感が深かったが、比較的感激のない握手を交わし

た。周囲はすべてが灰色の中につつまれていた。私達はそう寒さを感じないのでしばらく頂にいたが間もなくユルまでかけ下りた。そして一先ず Pause を取るために黒部側の全てのものにアディューを告げて、100m ばかり下の岩塊まで下りることにした。ザイルを解いてプレイカブルクラストになやみながら、その処まで来るともう何をする気もしないまでにへばってしまった。

附近では雷鳥が奇怪な聞で鳴き立てていた。それは天候が崩れる時私達がよく経験することである。

立教の連中の輪カンの後があるので最初はそれを下りていたが間もなくクラストもなくなってきた。Sitting glisade を試みると、以外に滑るのでそこから下部のゴルジュあたりまで1,000mばかり一気にすべり下りた。それは私の経験した内でもっとも愉快的な glisade の一だった。出合附近はまだ雪が充分くさっていて、すてきにもぐりだしてきた。しかも時々岩壁から剥落する、高次雪崩が一それはごく小さなものだったが一私達を時々立止ませた。

Biwakort につくと、ちょうど3時半ごろになっていた。だがスキーはほとんどすべらないので、いつものように転倒することもなしにデブリまで下りて来られた。今朝から出た新しいデブリがまた私達を充分悩ました。

西股との出合附近でもう一度尾根をふりかえるとその黒ずんだ岩壁は孤独に灰色の空に突立っていた。『すべてを首した』という感が私達をいそがせた。そこでかなりつかれてはいたが、あまり遅滞もなく大川の出合まで、だだっ広い河原を下って来た。私達は今日の登攀をより印象的にするために、なんべんも立止まってはふり返えたが、今はすっかり灰色の溶危の中にとけてしまった、その岩肌は期待ほど威厳を示さなかった。だが『もうこの山も私達の間では一段落を告げてしまった。再びこうしてここに立ってあの光影を見ることはあるまい』という感慨がその威厳を失なった黒と白と灰色のコンビネーションにしばし眼をすえさせた。が、やがて、くるりときびすを返えて、もう雪崩もあまり感じない、暗い落葉樹の間の雪を鹿島村へいそいだ。

以上で東尾根の紀行は終る。

唯二、三気のついたことを付加して置こう。

東尾根に対して過去数年しばしば冬の登攀がこころみられているが、ことごとく失敗している。その最大因子は、もちろん天候だが、それ以外に1月の東尾根の持つ実力が以外に手強いことに他ならない。1月はあらゆる点からいって三ノ沢の登行は困難を加えるにちがいない。

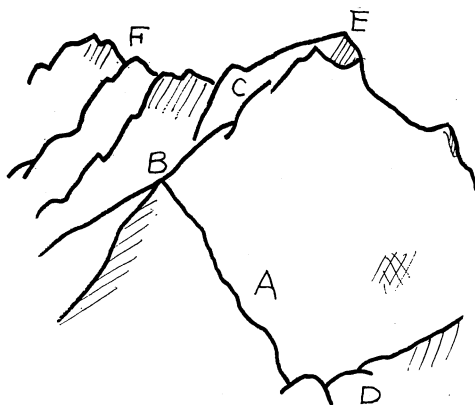
また一の沢の頭から根気のよい登高をこころみるならば、それは2乃至3回の Biwak を要求するであろう。唯私が考える一つの可能性は三ノ沢全体が Lawienenzug となった直後をわらって尾根に出ることである。しかしこれは尾根までの問題であって、第一第二の Gendarme に関しては、より一層の困難が存在することは疑いない。

ともかく東尾根が一番面白く登れるのは私達のえらんだ、4月から5月の間であろう、5月になると這松が出すぎてしまったり、滝が出たりして、ちょっと面倒になるから、やはり4月中旬ごろが適当だとせねばならぬ。

荒沢のバットレスについて感じたことは雪が固いときは行けそうだということである。だが、これは技術的に possibilty をもっているということで。これ以外の種々の問題、すなわち時間、それにとまなう Biwak のことなどを考える時、要するにこれはかなり大物なのだ。かなり張り切っていないとできそうもない。事実かなり気温も高かったし、全く風のない晩だったから、この種の Biwak としては最も容易だったといえよう。持参のカボックは非常によかった。素足の上に穿いた猫靴下はそう効果的にも感じなかった。もっとも、もっと温度が下ると効果を出すのかも知れない。その他特別なる点なし。

部員諸君が春なり冬なりの東尾根に向うならば双手を挙げてできるだけの援助をお与えする。

—1933・5・17—



三 窓 チ ン ネ (1933年)

伊 藤 収 二

劔岳三ノ窓尖閣 (Zinne) は劔岳三窓付近にある高さ300mばかりの岩壁を有す岩稜である。それはに三高のメンバーにより命名され、初登攀された。これは劔付近の他の多くの紀行とともに三高部報6号に詳しく出ているから、この一帯に就き知りたい人は一読されよ。なおR.C.C.のメンバーが他のルートにより登攀したのがR.C.C.報告5号に出ている。

ところで、われわれのご登攀については高さが200m余の岩壁であるから尖閣(チンネ)未知の読者には百聞一見に如かずで実物を見つつ「あそこをどーのこーの」といえば判るものであるが、字に書けば、なかなか合点がいきかねると思われるが、図を参照(優秀な写真を撮っておけばよかったのだが、とれなかったのだ)しつつ読んでください。

A点右下あたりで昼食、12時15分比企と僕とのコンビでAnseilen(アンザイン)をする。登れそうな所を選んで向上する。40~50mでセマイ草付の帯があるのを東行する。5~6mで下より直上するクラックがある(パーティーこれを登り来たり帯でわれわれとすれちがった)。手強いとみて裸足になる。

2ピッチで行きづまり。左1mばかり出て、またクラックを直登すれば大バンド。東行すれば(右に行く)Faceになって行きづまり、上部にR.C.C.のケンスイにうったらしいピトンがあった。バンドまで大分悪かった。始終霧がまきビトン、ハンマーなど持ってきたので雨が降ったらどうしようかとたいてい心配した。大変落度ではあった。暫く休む。3時ごろ出発、少し右気味で大体直上する。太陽が霧中にほのかに見えたその方向へSolarismとか何とかいいながら進んだ。奥穂Gendarme(ジャンダルム)の北側に似た感じがする。ちょうど頂上に出た(4.00時)軽い喜びと疲労を覚ゆ、テルモスのココアでくつろいだが、それにしても足の裏の痛いこと、お蔭様で帰宅後最もよく使用した所は皮がむけてしまった。

霧中前方にピークが2つ見える。相当すごいと感じたが、晴の時見たらスカみたいであった。

Peakに声あり、早大の人3名、昨日八峯(ハツミネ)でケガをした大阪者を助けて劔沢に行っておったとのこと、なにしろこの日は始めであるし霧がまいていて、後に来れば何ともなかった。池の谷のほうがすごく見えたりして想像しておったのと大分様子がちがっておるので

窓へ出る道を聞いたら Zinne にのぼってそれくらい知らんとはと笑われてしまった。いや大失敗であった。池の谷のガレイで待っておる、君、喜多君に喜びを頒たんとて急いで下る。

追記 われわれの Anseilen は全部 One at a Time で高さ約200mだろう。僕が Head で行った、われわれの登攀は少々シマリがなかった。よく偵察してなかったし、ピトン拾縄などを用意してなかった。（出る時は、チンネ付近散策のつもりであった）からである。チンネの裏側は上部 Z.E 間の下は割に面白い。その上に起つと西方ストンとしていて気持がよい、ニードルは全然登る気がしない。Zinne から三窓までの岩稜は三窓谷側は草がついておるが池の平側はストンである。U 岸の下をまいて Z.K の Col に出てその辺を見ておきたかったが、雪がわれていたのでやめた。まあこの辺で夏に一番すっきりしておるのは Zinne くらいな物だろう。（秋は岩がなく草が枯れておるからよいそうだが）甲南のメンバーで誰か Zinne の新ルートでも開いてくれ給え。

この紀行は関の「劔日記」の 1 部に属すべき物であるが、出来上ったところを見ると関の日記式に比べて比較的詳しくチンネのことが書いてあるので、別に「三窓チンネ」として出しておく。（125page 参照）

劔岳西面池ノ谷生活（1935年）

奥 山 正 雄

劔岳西面。この生活こそ去年からの憧れの対象であった。過去数年間に亘ってわれわれの先輩たちによって登り尽された北アルプス、広くは日本の山々の持つ Variation も残り少なくなり、Variation 探求時代も否定され、より高い登山形態、すなはちあるいわ新静観登山派は Expedition School などが論争せられる今日となった。しかし Variation はまだ皆無とはいえないだろう。カクネ里、劔西面などは実に新鮮味を味うに足るであろう。斯るが故に、われわれは大いなる憧れを抱いていたのである。そして、いよいよその憧憬は今夏の plan へと具体化されたのである。

以下生活 party 池の谷への行程、谷尾根の観察、登攀紀行といった順序に書くことにする。

party リーダー 奥山正雄、島良之、山口雅也、川村三郎

人夫 佐伯 友一 佐伯 藤吉

行程

7月10日出発

7月11日 滑川駅で東京帝大生3人と合す。彼等はいずれも好感を持てる人たちばかりだ。滑川から数里離れた上市までは野暮なガタ電車が走っていた。上市の前の大運送店には僕たちの15日間分の生活資料が来ていたが、比等の物に永い時間を費し、再びガタ自動車にゆられて積泉寺に投げ出され、ここより先はいよいよ山への歩行がはじまるのである。糧として朝食を摂った後、重荷のために雇った荷担夫1名と芦くらから来た guide 2名および東大 party 1人たちとともに積泉寺を後に、7貫目の重荷を背負って第一步を踏み出したのである。一晚汽車にゆられた身には荷が一層肩にこたえる。道は坦々として続き変化なきものであった。

伊折ノ折戸を過ぎた立山川出合の辺まで1間幅の儘畠の中を縫っている。途中折戸で馬車を雇いそれぞれ7貫目の荷をおろし勇躍して歩く。伊折で昼食を摂り、それから約1時間荷馬車が着いた時に再び肩に食い入るような荷物を持って今度は少し森林を混ぜた変化のある道を以前よりも元気に歩き出した。いつの間にか東大の人たちは、おくれてしまった。さすが立山川との出合に来た時分から今までの広い道は切れて磧を横切るといったような道である。従ってここまで来て始めて山へ入ったのだという気分がし始める。灌木林を縫うて明日の快晴を知らずごとき空を後にやがて重荷を劔の家に置いたのであった。かつ私は先輩から「バンバジマから見た劔は日本離れがしている」と聞いていたが、耳から入った劔西面と奥在として目に入った劔西面との完全な合致が私の心に「美しくも、また豪壮なる劔西面」という一つの観念となって私の心に深く刻み込まれたのである。実際西の空の明るさに対し、そのセイかも知れぬが、夕靄の中に巍然として聳立する劔そのものの姿はその高差といい、その岩肌といい、私が今まで経験してきた山々においては到底見られ得ざる現象であった。その美しい劔も今は闇そのものとなり、僕たちもその暗黒の中に吸込まれるように疲れた身を横たえたのである。

7月12日

天気は先ず快晴とみて良い。しかし昨日よりも下り坂のようにも思われる。前日の7貫目の重荷では今日の行程としては過重なので、バンバジマに食糧を半分残して出発。

今日は憧れの池の谷までである。昨日とは違った新しいような、すがすがしい様な空気である。山間の細い道を1時間半も行くと白萩川と池の谷との出合に出る。池の谷の入口には、も

この5時間も行くと大きな滝があり、行手をさえぎられている。春期には滝は埋まり通れるそうだが、今日のArbeitとしては滝見物なんてのんきなことは考えられない。白萩川と池の谷とを2つに分ける小窓尾根は、ここより始まり長蛇のごとく早月尾根と相対立して劔の頂から出ている Haupt Grat にT字形に変わっている。実に龐大なる尾根だ。ほとんど上まで bush 続きであるが殊にこの末端は猛烈な茂みだ。小憩後暫く磧を迂廻しながら進むと小窓尾根より押出された彼の積雪期のデブリを思い起こさしむるような残雪の少し手前で渡渉しなければならぬ。たいしたものではないが、雪溪直下で流れないので梓川のそれとは一段と冷さが優っている。それからデブリを経つつ5分も行くと再び道は切れて渡渉せねばならぬ。この辺になれば谷も次第に斜を増して必然的に流れも急となっているわけだ。磧もグットせまくなり水は股を打つくらい程度、渡渉には無経験な僕達には猛烈と思えるくらいの急流だ。対岸までの距離は5mぐらいいで、ザイルの必要は無いとみとめられたが、岩には比較的自信のある僕達には、これには確かに弱味を感じざるを得なかった。甲南山岳部では、もっとこういった方面のことをも研究の対象物として実践的にやってみる必要があるだろう。山をもうすこし見なおすことも良きものである。

再び15分の間白萩川を遡行し途端に大岩石にぶつかる所に出る。この岩が雷岩である。(この岩は特徴的で、他に二三ころがっているからそれと直観し得る) ここで昼食を摂ることにする。さっきから右方に続いている小窓尾根が、この雷岩からはひどく高いものに見える。この尾根筋から急峻(45度)な傾斜で、真直にそして全く草でおいつくされているといった言葉が最も適切のように思われる沢が1本下りている。実際この小窓尾根は尾根筋一帯が古木鬱蒼たる森林、それ以下は、灌木林雑草、主に落、笹などによって全く包まれている。この沢に出るには再び渡渉せねばならぬ。

この白萩遡行は天気さえ良ければ比較的容易だが、一旦降雨があった場合にはズッと下方の丸木橋などは流失し、この川の進行は不可能となるであろう。(もちろん、この面(白萩川)の左手の尾根をへつれば良いわけだが、沢までの取付は容易だが漸進的に傾斜は急になり、密生した Bush としめった土とは靴のあとすべりを免れ得しめなかった。)

その上落石の危険で油断はならぬ。(この沢は雨が降ると流水と落石とで登攀は不可能だろう) そうした沢登りにも勝るとも劣らぬ尾根筋の林間迂廻が直に始められねばならなかった。数ヶ所伐木などして、2時間もたってからこの尾根筋では珍らしく開けた場所に出た。ここは尾根筋が次第に広くなった所で藪の頭を成している。

そしてその先は切れ、自然池の谷に降るようになっている。ここからは、昨日パンバジマから仰いだ、ある長治郎の頭付近、三窓などがより一層異った岩肌くあらわして、昨日までは見受けられなかった雪との contrast は一段と凄味を増して見える。今夏登攀 route として、最大の目的としていた劔尾根もその全姿をあらわしているのである。特に露といったのは、それから二週間、ほとんどその姿を見せなかったからである。—しかし、今までの激しい労働のために知らなかったのか夕立でもあるのか、空は悪化の徴をきざしているのに気がつき直に眼下 500m に見える池の谷へと突進した。もちろん Bush の中を通してだが、しかし先の沼よりも余程楽であった。途中熊の糞などに驚く。信州などではあまり見受けぬ物である。30分ぐらい後にはもう雪溪に第一歩を踏み入っていた。ここはちょうど、雪溪が切れてその下から水の飛び出している地点だ。池の谷としては、この辺しか camp seite は見出し得ない。

といっても根本的な地ならしをして始めて使用し得る程度である。やがて未開地の開墾といった動作が始められ、住家たる tent も張られ、ここに池の谷生活の第一歩が始まったのである。しかし途端に空の沈黙は破られ、大ツブの雨が tent をうつようになり生活の第一歩は斯くして雨から始まったのである。

以上は山への Approach としての prelude に外ならぬが、斯く永たらしくなったのは、この谷までの route の複雑性に帰因するものである。

以下私は今夏得た 2 つの登攀及び、2、3 回の recormoitre によって得た観察をここに総合して不十分ながらも池の谷の全貌を描写したいと思います。

池の谷 Camp seite 以下は省略、この雪溪は非常に緩い傾斜のまま 6.70m の幅をもって 1,000m ぐらい続いているが、その辺より沢は劔尾根によって右股 左股 に分割されている。二股の辺は非常に大きな平面となっている。これは積雪期において両股より押し出されたデブリの残りであろう。tent より二股までの間はかなりの勾配を持っている小窓尾根と早月主稜より出た幾多 Seiten Grat によって囲まれている。一口にいえば池の谷は山間のミドン底、といった感じである。早月側には、かなりな雪溪が Grat の間に入っている。Camp から二股までは 40 分ぐらいである。

右股、二股より右方に出て約 45 度ぐらいの傾斜で劔岳山頂と早月尾根の頭との間に達し、その間早月側には小さな雪溪が多く入っているが劔尾根側の雪溪としては劔岳山頂と長次郎の頭との col に達し、更にその先端は長次郎頭と劔尾根 Dome との col に深く入りたるものと、もっと下方では二股から約 800m ぐらいの所で、ここまでの右股とは一直線をなして、かなり

悪い雪溪が続き上部は劔尾根の Col の下に滝をもって終っている。（仮にこれを Gap 沢と名付ける）

以上の二者は比較的大きなものであり劔尾根登攀には重要な役割を演ずるものである。なお Gap 沢の出ている地点より右股は右方に大きく迂回している。Gap 沢は右股の出合から100mも行かない内にもものすごいクレバスが約20m 間隔に口を開けている。クレバスの下から上までは滝状をなして梯子でも無い限り先づ登攀は不可能だろう。また横をまくとしても大きな Bergschrund と、垂直なる岩のために直に阻まれてしまうであろう。

この点からみて一般的にここよりの劔尾根登攀は夏季においては先づ不可能といって良いであろう。一方右股の上方も Gap 沢との出会より少し上は同様な Crevasse に行手を阻まれてしまう。股より劔 Haupt Grat の Col への（夏季）登攀も恐らく不可能であろう。右股からはやはり早月 Seiten Grat にはかなりの雪溪が入っていて早月尾根への取付は非常に簡単だが、いずれにしても、それらの雪溪の上方でズバズバ開いているから、直に Seiten Grat に取付かねばならぬ。唯この右股は左股に比べて雪溪がその特質たる白さを保っておること、および落石が少ないために Glissade は相当快適である。

左股、二股より約3.40mぐらゐの幅を持って右股と同じ長次郎の頭と劔尾根 Dome との Col に続いている。これは後の小窓尾根よりの偵察によると Col 近くで1ヶ所非常に細くなっていたが、後には切れているように思われる。やはりこの沢にも左股の本沢が迂廻している所から Direct に三ノ窓の Col に続いている。左股はその傾斜と Clevasse の開いていない故に、この池の谷からの唯一の populas な route となっている。この沢は幅が非常に狭いためと両側に立つ劔尾根と小窓尾根との間に挟まれている関係上、ひどく威圧的な感を与える。

従って両尾根には、ほとんど雪溪は入っていない。

劔尾根 長次郎の頭よりカラカラの col でもって結ばれておる Dome より始まる尾根である。右股からの高差は約1,000mだと推察される。大体この尾根を次の a. b. c. d の四部に分析してみる。

Klein Gendarme 以下の Grat この部分はほとんど小窓尾根や早月尾根と同様に Bush でおおいつくされている。Klein GはGross Gの直下に尾根状をなせる peak であるそれを形成する。岩はほとんど出ていない。先年11月にA先輩が登られたのもこの少し下位だろう。Klein Gen にいたるまでに草付 peak を認める。右股側の偵察にほとんど数ヶ所取り付けそうだった。劔尾根全体を登ろうとする人に尾根末端より取付くよりは右股を少し登ったあたり

から取り付いたほうが木登り的な労を少しでも減じ得るであろう。左股側は Klein G まではほとんどすとんである。

ただ1ヶ所 GG と KG との Gap 辺りに一つ急な Runse が入っているが恐らく不可能だろう。ただ右股側の草に比し、少しその岩塊を現はしている。

B Gross Gendarme. ここより劔尾根は今まで Haupt Grat に対してT字形の位置を保っていたが、ここから尾根は右に大きく廻り、長次郎の頭に続いている。Gross Gen から始めて劔特有の赤黒い岩を現わし草は下部においてのみ見受けられるのである。Gendarmeの上に三つ四つの大岩塊によって形成されている。そして図中 d から e まで Zinne や穂高 Gendarm で見られるような大岩壁を形成している。

早月からの偵察によれば、ほとんど通行は不可と見られる。そしてこの大岩壁こそ劔尾根最後の疑問符として今夏末偵察のまま残されてしまったのである。図中 (d) からこの壁をまくには、少なくとも右股側は impossible であり、左股側も camp seite 付近からの prism 観察によれば恐らく不可だろうとみられたのである。しかし、あるいは這松などによって案外簡単にまける可能性もないとはいえぬ。ただこの岩壁には2つばかり Crack 様のものみとめ得た。

Gross Gen に取付くにはただ Gap 下の雪渓より出る、巾の広い Krack Runse のみが possible だろう。

この Krackrunse は20日の行により全くその可能性を見届けることができたが、これは Gap 沢と及びその上部図上 (a) の下は滝状のクラックによりさえぎられているので、夏季登攀は結局不可能となる。5月ごろの積雪状態に俟つよりしかたがないだろう。Gross Gen の左股側は、ちょうど Curve してる辺りより右股に見るような大岩壁は無くなり非常に急峻なガレ状をなしている。ここからは容易に取付きができる。

C Gap より Dome までの Grat —この尾根によって Dome に結び付けられるのだが、尾根の両側はストーンと落ちておる非常に瘦尾根をなしている。数ヶ所に這松が見受けられる。右股側で図上 (a) から先に述べる Crackrunse とそれから同じ (a) から Buttress 寄に非常に大きな Chimney Runse とが入っている。この Runse は20日行の内東大 party が登った。尾根と劔尾根主稜との間に上部は雪渓となって出るので、その雪渓下あたりは相当悪るそうである。なお (b) 付近を Gross G の大岩壁と同様に猛烈に落ちている。なお左股方面では Gap 下が緩傾斜のために取り付き得るだけでそれより先は再び急峻となっている。要はこの間の尾根筋は比較的容易な Kletterei を楽しめるといったわけだ。

D Dome 及びそれに Butress. Dome 上からは大体劔尾根左股以外に 3 本の小さな尾根を右股側に出している。Dome そのものの頂は右股左股側に落ちた約 2 尺幅の薄い岩板に過ぎぬ。その中ごろ（全長 30m 位）が少し切れて右股からの最大の尾根が続いている。そしてこれら 3 本の Art は Gipfel 直下の猛烈な sound Rock の Fluk を始めとし、そして unsound rock の Terras によって終っている。Terrasse というよりは寧ろ緩傾斜の Band といったほうが良いだろう。この Butress は早月尾根からの偵察によると上部は非常に細い Band が 3 本入っており、Band 間は黒灰色の岩壁となってストンと落ちている。下部は上部 3 本尾根の終った辺りより再び前三者とは異った Bush 尾根を 3 本右股につっこんでおる。今まで私は尾根とってきたが尾根というよりは一般的に Butress を見るなら、円味を帯びたまま半円錐形となって右股におちているといったほうが適切だと思う。そして上部は比較的 sound Rock となっており、そして右へよれば unsound と変り行くのである。

省りみれば、この Butress こそ私達 Climber には適当な Variation と Angenehm な Kletterei と最後に劔尾根そのものの価値を高めているあの偉大な高差とを与えてくれるのである。

早月尾根、ただこの頂としては池の谷側のみを書こう。膨大といたい早月主稜からは幾多の藪尾根と雪溪とが小窓尾根と比べると余程緩傾斜をもって出ているといっても右股中部は偉大な岩塊を以て接しておる。早月主稜直下には未だ残雪が多いために融水はこれらの岩壁からは滝となっておちている個所を見受けられる。然し右股上部は再び新たな Seiten Grat により幾分傾斜は和らぎ岩は所々草にかくされている。ただこれに注意すべきことは早月への取付きは出来得る限り右股を逆登り、しかる後に主稜に取付くべきであるということだ。

小窓尾根、これも先輩達によって書かれてあるし、また今まで大分述べてきたようだから、ただ左股からのみの観察とす。僕達は最初左股側からの小窓尾根への登攀を大いに期待してきたわけだが、現実に見るこの尾根は、あまりにも impossible である。この尾根は小窓の頭付近になって始めて全体が赤黒い Wand をなしている。しかし猛烈なガラガラらしく雪溪はそれがために非常に汚されている。ただ小窓尾根への取付きとしては二股あたりに、2ヶ所程 Runse が入っていたように思う。次に池の谷の気候といったものを、もちろん研究ではないにしても断片的に書くことにする。

先づ今度の日記から見受けられるようにその大半はこの池の谷上空に暗雲が停滞していたのである。もちろん 7 月中旬といった悪条件はあったものの—という記録によって明示されたる

如く確に劔東西他の所に比すと悪いようだ。生活中劔尾根の Dome を見たのはわずかであった。朝は晴れていても午後には見えない劔尾根であった。こういった現象は穂高の飛弾側に良く見受けられるものである。そのせいだろうが、この谷の第一印象として非常に陰惨な感と岩石上に見る古色蒼然たる貌であった。一方気温も東面などに比べるとときには僅か 1,700m の高度であるに関らず非常に寒く思われた。右股の雪渓は夏としては珍らしい固さを有して Glissade には固すぎ登攀の際には常に Eisen を用いたくらいであった。ここは山の西面にあたるために朝は非常に遅く、晩は 8 時ごろまで明るいといった関係上朝は特は寒く感ぜられた。最後に今度の行の食料として野菜が豊富であったことは好感がもてたが、以上の天候上湿気が多いために、パン類の包装などによりもっと注意を払うべきだと痛感した。

以下記録

7月13日 (曇後雨) 2時ごろより出合まで偵察に出る。

7月14日 (曇時々晴) 右股滝下まで偵察に行く。この早朝人夫バンバジマに荷取りに行く。

7月15日 (曇雨模様) 昼ごろ荷が着く。12時ごろより東大 party と合同コンパ。途中豪雨となる。

7月16日 (雨)

7月17日 (雨)

7月18日 (雨)

7月19日 (快晴) 早月尾根より劔頂上、party 奥山、川村(東大、伊藤、釣田)

tent (7.30) ~ 早月 Seiten Grat 取付 (10.5) ~ Seiten Gart と早月主稜トノ合点 (11.5)
昼食—早月頂上 (12.30) —劔岳頂上 (1.10) —三窓 col (4.00~4.50) —二股 (6.10) —
tent (6.50)

連日雨に縮まっていた僕達は勇躍して camp を後にしたわけだといっても雨—洪水—風雨、これらの物は僕達の delicate な身の構造はひどく害していた。山口君はこれがために今日の Tour は断念、島君も途中から引返す。お気の毒である。いつもより出合が永く感ぜられた。右股の雪渓は先日よりも固化されている。Gap 下沢との出合辺で先に出た東大 party に追い付く。更に右股を登ると直ぐに Crevasse に阻まれてしまったので直ぐ Seiten Grat に取付くことにする。雪渓からの取付は非常に簡単だ。この尾根は緩傾斜の非常に堅い Slab の上に細い偃松の生えている快適なる Gelände をわれわれに充分に味わしめた。

稜線へは約1時間ぐらいであった。久しく見ることでできなかった晴天下の劔尾根は男性的なはっきりした稜線を浮上らせている。これとは面白い対象として女性的な早月主稜がなだらかに続いている。明日の登攀に備えて周到な観察のため30分を費やす。これから上は瘦尾根上の這松コギ30分の後に早月主稜との合点に到着、ここからは切り開かれた優秀は道がついていてわけもなく早月頂上に来てしまった。ここから劔頂上までは非常に unsound で不快そのものであった。それにも増して劔頂上の塵には驚くべきである。実際日本の登山家にはもっと公德心があってはどうかなどと真面目な怒も、これでは禁じ得ないのだ。しかし一旦目を東方に向けた時あの陰惨な Gorge に比べ同じ劔であるのに、真白な、なだらかな雪渓はまた一驚に価するものである。

頂上でゆっくり休んで出たのはもう2時近くであった。三窓の col までは来るべき日のために東面を充分に見ながら、途中真沙沢にいる東京帝大の人々に挨拶を交わしたりしてかなりの時間を食う。col 下には例の再び陰惨な左股が見えるのみである。決して面白くはないが久し振りではある。Glissade を飛ばして7時10前 Camp に帰り着いた。おりから明日の晴を知らず夕焼けが西の空を真紅に染めていた。

7月20日 (快晴) 劔尾根 Dome Buttress

party 山口、奥山

Camp (A.M.4.00) — 二股 (4.45) — Gap 沢下 (5.45~6.00) — Dome ヨリの Gart 取付 (6.50) — gart 第一 Terrace (9.40~10.00) Dome の Band 下 (第二テラス) (11.00~12.00) — Dome Seiten Gart T (2.00) Dome 最高 Band 付近 (3.00) Dome 右寄りの尾根 (4.00) — Dome (4.30) — 長次郎の頭 (4.50~5.00) — 三窓 col (5.50) — 二股 (6.20~6.30) — Camp (7.20)

前日の夜営にもかかわらず何かしら興奮した一夜であった。暖められた皮膚には暁方の寒さがひどく冷たく感ぜられた。

出会で今一日三窓に遊びに行く友と別れたのはそれから1時間と45分たってからであった。お互に交す「ヤッホー」はこの Gorge に反響してその音韻を長がびかせ、そして消していくのである。東面ではもう太陽も出ているであろう。Gap 沢の出合に着いた時分には、その力強い光線は天界に反映して、美しい。前日の Arbeit のためにここまでの一步一步は昨日の一步一步よりも遙かに重きものとなっていた。Garge 沢を再び10分も登れば予想していたであろう不適な滝状の crevasse が開いていて途端に阻まれてしまった。

左寄りには Bergschrund のために到底まけそうもない。右側に一ヶ所多くの hold をもつ岩壁はどうにかまけそうに思えたが attack 3 回の後に不可能と認められた(岩壁の高さは 20m ぐらいだが例えこれが登れたとしても更にその前方に新なる Clevasse が口を開けているから結論としては、この雪渓の登攀は先づ impossible とみて良い。これによって早月主稜からの reconnoitre によるこの沢上部の 2 つの route (田中 crack runse と chimeny runse) の登攀は先ずここで最初に咀止されてしまった。しかし、ここの収獲としてこの一つの route は残雪多き 5、6 月のころには快適なる Kletterei を与えてくれるだろうことを確信して直ちに引きかえして Dome Buttress の最左側に取付くことにした。尾根状をなして、全く岩によって形成されているが最初から猛烈な Bush となって密生した這松はその強靱さを以て僕達を下へおしつける。凄い抗争約 2 時間の後感じの良い珍らしく木のはえていないテラスに出る。

途中 2 回 Anseilen する。昨日と同様霧などは全然みとめられぬ好天気だ。昼食後直に出発。再び烈い這松コギの連鎖だ。以前よりは余程小さくなってきて鋭い傾斜の岩を現わすようになってきた。かなり精力をつかった後に再び感じのいい草付のテラスに出た。ここから 50m 余上部は小さい草付となっているが、それから上は左方の Gendarme に見るような、あの男性的な力強い Flanke となってその稜線を明かに青空に浮出している疲れ切った身にも、なお岩への闘争になる生命はやどっている。この尾根は実際垂直といたいくらい傾斜を以っているからして、このテラスの直ぐ先の、遙か 1,000m 下の池の谷は洋々として流れ行く流水のごとく平面的に永く続いてその末端によってさえぎられている。天空(過言でない)から見る池の谷はその陰惨さを消失し、美しい純白にさえ見受けられる。

未だ 12 時前だし、Biwak の必要も感じられなくなったので、専ら Essen 至上主義と化し 1 時間の休そくを取る。正午出発とする。ここまで行きともに出た東大 party は劔尾根寄り第一番目の尾根に取付くために甲南 party は第二番目の尾根に取付くために左右に別れる。最初所々短い草付の所は 20m 程すればつき、ここより上は次第に鋭い岩壁となっている。

しばらく continuous のままがらがらに登る。なるべく左寄に面白い route を選って行ったが、たちまち大きな Salt にさえぎられ、第二の尾根に取付く。top 代る。劔特色の落石の多い所である。あらゆる岩は Delicate な平衡を保って乗っているにすぎないのだ。気を使うこと甚だし。右側に Dome 下の岩壁をよけて行くと突然 overhang に行き当たってしまった。

その下は第二の Band まで激しく落ちている。かなり上部がかぶっているので困難と思わ

れ piton を打つことにする。この辺はひどく岩がもろくなっているので piton が動いて役に立たぬ。思い切って登ることにする。クラックの間の chock stone は案外がっちりしている。ルックは後で揚げることにする。二ヶ所程草付が認められる。ルックを揚げた後雅也君も直に登って来る。この Band は buttress の一番上のもので約60m ぐらい右端に続いており末端はがらがらになって右股側にすんと落ちている。このころより猛烈な霧となり二三滴ポツポツときたように感じた。

直にこの Band をずっと右に Traverse する非常に angenehm だ。Band の切れた所から Dome の一番右側の尾根に取付く。猛烈なガラガラでさわる岩は悉く右股側に落ちて行く。この尾根はほとんど 剣 Haupt Grat と平行を保っていて、その間は深くえぐったようになっている。この辺はひどい unsound Rock である。少し霧も晴れてきたようだ。この尾根の上部も凄い壁となっているので咀まれた感があったが偶然にも上部に逃道というより通路を見出して Dome (後でそれと分ったのであるが)に出ることができた。幾分霧がかかっている。池の谷は全然見えない。Dome は薄い板になっていて板の先は切れてガラガラの col を似て長次郎頭とつながっている。軽い喜びへ直に長次郎頭に出る。東大 party は未だ登ってこないようだ。

「ヤッホー」も空しく消えて応答はない。今までの4時間半の Kletterei は非常に快適であったが価値判断を下すならば穂高に見るような困難な所は少なく、その高さと long course とが燦として輝くものであると思う。—もう5時近くなので尾根筋には人影はみとめぬ。ここから、camp までは昨日5時間半(もちろん遊びながらだけど)を要しているので直に引き返すことにする。

快い気分で左股を超 speed で Glissade をとばす2本の条痕はわずか1時半の後にはもう二股に達していた。出会下から友の「ヤッホー」がきこえてくる。今は再び陽光は Dome の岩壁を輝していた。

(付記 | この日一緒に出た東大 party は前述の尾根上部で猛烈な Dome 下の岩壁で悪戦苦闘の後 Biwak したが翌日降雨のために残念ながら引かえされた。上部はかなりかぶって岩も比較的もろかったとのこと。)

なおこの日暖かく support してくれた友達は左股から剣頂上へ行ったそうだが特筆すべきこともないとのことだそうだから Time のみ記す。

出発 (4.00) —crl (7.30) ~ 剣頂上 (9.40—11.00) —col (2.00) ~tent (3.30)

7月21日 Gap 沢の会合まで東大 party をむかえに行く。夜最後のコンパを開く。

7月22日 三窓 col より二股へ。

(旧制12回卒業)

天 狗 よ り 穂 高 小 屋 へ (1936年)

赤 松 二 郎

3 月 23 日

白出沢の下へテントを張ってから一向に天候は定まらず、既に2度も出発の準備をして朝早く起きては、いつも出発間際になって、或はジャンダルムに渦巻く黒雲に、或はポツリポツリとテントをたたきみぞれに僕等の岳への闘争心をくずされてはいたづらに神のしわざを怨んでいたが、28日の午後灰色に空を被ひとぎれとぎれに湿雪を降らしていた雲が次第に遠のき、強烈な春の光が西穂の沢を照らし出したので僕等は全く元気づきテントの横の沢でスキーを楽しんでから明日のアルパイトの為に早く寝についた。

3月29日 パーティ、島良元、赤松二郎、中島政太郎(人夫) テント発 4:00a.m.—天狗岩と間の岳との Col 8:15a.m.—天狗の頂上 8:45a.m.—ジャンより一つ西穂よりのピーク 11:35a.m.—奥穂切戸 2:30p.m.—穂高小屋 3:30p.m.

2時半起床、中島は2時頃より起きて飯の用意をしていた。*沢山食はねばへばるから味噌汁で飯を流し込む。

梢の間からは数多くの星が輝きジャンダルムの鋭い岩峯が夜空にもくっきりと見える。笠の方にも雲はない、準備も出来た。正4時出発。懐電とラテルネの明をたよりにぼこりぼこりと輪カンで行く。昨日スキーをした所を少し出はずれた所の1週間程前のデブリの所に来ると俄然ひざから時には腰もうずまって動けなくなる程もぐり出した。はきなれない輪カンその上にこのラッセルで、たちまち荒い息づかいになる、唯黙々とリズムカルに上へ上へと西穂の山陵が美しく輝き、すがすがしい Morgenrot が笠の上半身を照らした。しばらく休息しながら昨年の大晦日に槍へ行く途中やはりこんなふうに笠が Morgenrot に映えていたことなどを思い出したり良い気になって休んだ。西穂沢を左よりに進み%ほどもきたころからやっともぐらなくなって快適なワカンアルパイトをつづけ col の少し上でクラストが 顕れてきた

したのでアイゼンにかえ8時15分に col へついた。ここで固パンとココアで食事を摂り直ちにアンザイレンをした。

オーダーは中島、僕、島、天狗岩の頂上までは岩に氷が薄く張っているので、ふみわってすべらぬように気をつけながら登った。8時45分、頂上、ここからジャンヘ行く喜多、加藤のパーティーが見え3人で代る代る「ヤッホー」を叫ぶ、下にもどうやら聞えたらしい。このパーティーが予定していたより非常に遅れているので心配しながら直ちに下る、ギャップまでちょっと切り立ったようになっており相当急傾斜で出来得るかぎりアイゼンをきかせながら下るがそれでも相当にステップカッティングを要求された。経験の残り僕は相当緊張せねばならなかった。ギャップからの岩稜は非常に簡単に Continuous でひたすらに登る。大した風も吹かず毛糸の手袋1枚だけで何んともない。

11時35分、この岩稜を登り切った所、すなわちジャンダルムより一つ西穂よりのピークに至り、ここで昼食を摂り、簡単にジャンダルムの頂上へ出た。

12時30分、このころから少しずつ風もきつくなり笠の向うがどんよりと無気味な天候になりあと2時間と持ちそうになかったのでまだ登ったとしても大分遅れているし引きかえしたいらしく思われる喜多のパーティーより先に行くことにした。始めの考えではこの辺りできつと一緒になると思っていたのにまだ姿さえ見えないから非常に心配だったけれど、先へ下る。下りは夏道通りに下るのだが、全く手強いものだ。中島が先に下り僕と島とはちょっとした岩にザイルを引っかけて懸垂のようにして下った。そこからロバまでは20mほどの雪のナイフエッジ、ピッケルでうまく安定を取りながら進む。このあたりで遂に天候はくづれだし白出しのほかうら雪を交えて烈風が吹き上げビレーをしながらじっとしているのが寒くてしかも、雪が吹きつけて目もあけられぬ様になり、今までのアルバイトで相当疲れてしまっている所以ロバの悪場を通るのに最悪の状態となってしまった。

之も夏道に従って飛弾側に出て、トラバースをする所まで20m程の60度以上もあると思われる雪面を下り、又困難は climbing down をしなければならないが確実にビレーが出来るので非常に心強い。

それからロバのトラバースは烈風の中をかざかんでくる手をこすりながら最も緊張したピッチであった。奥穂のキレットについたのが2時30分、パーティーが3人だから非常に時間をとった。其処から Continuous で夏時ガラガラした所だが、氷で固まった所をアイゼンをきかせながらずんずん登り、奥穂までのナイフエッジの所もチャカチャカで奥穂の頂上に出てもつま

らないからすぐ下を通して、縦走路の様に飛弾側に出ず主稜を真直ぐに下ってしまった。小屋
着 3 時 30 分

小屋は完全に埋まって居り、一足先に三重高農の人が掘り出してくれて居たので小屋を掘り
出さなくてもよくて助かった。

ジャンダルムのパーティが心配になったが、この吹雪の中を登るはずがないのできっと下っ
ただろうと思って、中畠に白出沢を、テントまで下ってもらった。其の後 30 日、31 日と吹雪が
続き 4 月 1 日に俄然日本晴となり、滝谷を見物する為に唐沢尾根に行く 10:10a.m. 小屋発—12
時まで下る。

小屋からすぐアンザイレンをして全部 Continuous でチャチャカと下りあまり下っても帰
りがしんどいからいいかげんに切り上げてのびる事にした。全く風もなく暖かい日だったので
2 日間の籠域の憂極を完全に吹き飛ばしてしまった。色々と迷ったが結局今日中に Camp へ
下ることにして、白出沢には最後まで西日があたるから 5 時 10 分まで待って日が弱ってから雪
崩を心配しながら一直線に下った。滝の所で中畠が迎えに来たのに偶然出会い色々の話をしな
がら輪カンで、ポコポコと折からの月光に青白く光っている白出沢を下って行った。テント
着 7:00p.m. (旧制 14 回卒業)

夏の荒沢 (1936 年)

赤 松 二 郎

今夏僕その他に関、中村、福田の 4 人でパーティを作り大いに張切ってカクネ里に入った。そ
して最も能率を上げる為に僕と関、中村と福田の 2 パーティに分け僕と関は荒沢の壁を、中村
と福田は鹿島槍の北壁を志した。非常に都合よく行けば交代して中村、福田のパーティが荒沢
に行き僕のパーティは北壁をやろうと欲張った考えを持っていたが、そんなに都合よくいく筈
はなかった。しかし比較的天候にめぐまれて、僕のパーティは荒沢をやったし北壁の方も 3 度
も登攀する事が出来た。其後此の行を終えてから劔西面へ行ったのであるが全体を通じて何等
の事故もなく、年齢も若い僕等だけで、しかも相当の成績を挙げ得たのは全く愉快であった。

鹿島槍から派出された東尾根及び天狗の鼻尾根の2本の尾根の間にあるのが荒沢である。此の沢は両側が急傾斜をなしており狭ま苦しい感じのV字谷をなし広々としたカクネ里のU字谷と天狗尾根1つをへだてただけでこんなにも異なるものかと驚かされる。カクネ里には人の気配がするが此処は全く人の気は無く此所へ下ると、自分の知らない世界へ来た様で心細い様な気持に襲われる様な所だ。

僕等は此の沢のドンづまりの壁を登るつもりで来たので沢そのものの観察はしなかったし沢の大川との出合のあたりには地形上見えなかったが此の沢は第1ジャンダルムの遙か下の方より出て居る荒沢尾根(学連6号友7号にある浪高の書いた地図は誤り)によって、北俣と南俣とに分れて居る。南俣は荒沢尾根にかくれて見えなかったが非常に小さい物である事は容易に想像された。北俣はかなりの傾斜のある雪渓が続きそれが終ると荒沢の頭まで壁をなして居るのである。然し此の壁は(壁と言うとストンと切り立ったものを想像するが実際は案外傾斜のゆるい草付の岩にすぎぬ)上半部に荒沢の頭直下より出て居る幅20mから30mぐらいの非常に細長い雪渓があり、雪渓の切れた所より下即ち下半部は雪渓の水が滝をなしている。之はすばらしく大きなもので水は途中から霧となって下の方としめらせて居るにすぎない。そして之によって此の壁は左右の2部に分かたれている。左の方即ち東尾根側は、第1ジャンの中間より出た稜が主体をなしている。然し之は非常に不明瞭で少しこじつけて考えないと下まで続いているとは思えない。(浪高の言う北稜)細い説明をするとスケッチのAのあたりは全く sound Rock で岩の破片がガラガラして気持の良くない所だ。Bの辺りは感じの良いかなり急な草付。Cは sound rock と草付。Dは特徴ある岩少しオーバーハング気味で15m程のもの、所によっては小さな木を利用して行けば登れそう。此の辺りから上に這松がある。E這松と草付と岩の trio だ、下手なルートを取ればエネルギーを使うだけ、F之も特徴的な岩2枚の岩板が並んでいる様に見える20か30mはあろうかと思われる。G白樺等が生えている。平易な所だ此処を、rerse すると雪渓の下端に出る。H這松の急な尾根、第1ジャンの下に2段になってすごい壁がある。第2ジャンの下にも早にすごいものがある。

Iより下が滝、右の方原ち天狗尾根側は小舎岩より出た尾根と大岩壁とである。此の尾根はかなりはっきりしている。総て這松でCと対称の位置に特徴的な岩峯がある。J.Kは全く垂直で鳥の他には何物も寄附けない。

左の方のルートは色々採れるが右側は小舎岩から出た這松尾根より採れそうにない。60か70度程もなる急傾斜で登攀が想像される。

登 攀 記 録

カクネ全体の記録は福田君にまかして置いて僕のパーティに就いてのみ述べる。

真先の問題は天狗尾根へ出るルートと Biwak-party の方は尾根に出るからと言う事にして尾根に出るルートも先輩の伊藤君等の天狗尾根行の時に採られたものより他に知る術が無かったので先ず之に寄るより仕方が無かった。此れは非常に特徴的な大きな三角形の雪渓を経て天狗尾根が小舎岩から急傾斜で下っている所の下に、駱駝の脊の様な瘤が1つある。其処に出るのである。此処から Dome まで這松の bush をこがなければならないし、tent から取付まで2時間、取付から尾根に出るまで2時間半程を要するので、前後3回の attack の中2回は此処を選んだが(悪天候の為に引返えていた)最後の時には直接 Dome に取付く事にして長く Dome の方に続いた雪渓を選んだ。此れは雪渓が所々、無くなっているか、かなり Dome 近くまで続いていて、之を上手に利用すれば前述のルートよりはるかに短時間で行ける。事実僕等は tent から3時間半で Dome に立つ事が出来た。

7月14日にカクネに入ってから快適な天気なく2回尾根まで行くには行ったが、雨にやられたり霧に捲かれたりして未だ壁の偵察も出来ないままで既に20日になってしまった。24日には降らねばならない。それに1日の偵察と翌日の登攀の為に2日の晴が必要なのだ。然るに1日で lounge の出来る中村のパーティは既に2の lounge を行って嬉々として成功談を物語るの僕等はすっかり僻んでいたのである。

20日の晩に明日行かねばもう日が無いから是非とも決行する決心で用意を整えて寝に就いた。そして21日5時頃起床早速 tent から飛び出して見ると可なり低く Dome の辺り迄霧が捲いている。併し翌日は晴れるかも知れないし、今日を外したらもう駄目だから兎に角出発、5時40分、4日分の食糧 Zeltsack と Zeltsack、ザイル、ピトン、ハンマー、カメラ等でルックがずっしりと肩に堪える。今日初めての直接 Dome へ取付く細い急な雪渓に行く。何しろ初めてなので先が如何になっているか解らないし、自分の位置が良く解らないので後で考えると拙劣なルートの採り方をしていた。苦しい bush 漕ぎの後、8時40分やっと尾根に出た。其処から dome まで又這松を漕いで9時2分遂に dome に着いた。罐詰の空が2、3散らかっているし、焚火の跡等もある。チョット広い所だ。まだ霧が烈しく往来し時々荒沢を見せるだけで偵察も出来ない。併し次第に雲が破れ晴れ出すと霧も何時の間にか薄くなり10時頃には日本晴になった。お蔭で緩っくりと偵察をしてプリズムで隅から隅まで観察して十分登れる自信を得たし、Biwak の必要も感じられないのみならず予想外に短時間で行けそうだ。

ルートは浪高の南稜のルートと大体同じで最後に飽迄荒沢を忠実に登る積りで雪渓を選んだ。ルートを決定してしまうと日が暮れるまでは退屈で仕様がな。もっと遅く出ればよかった等考えたがもう遅い。日が暮れると早速 Zelt に潜り込む。併し10時11時となるとぐっと温度が降り夜露で Zelt がべたべたになって寒くて寒くてうつらうつらとまどろんだにすぎなかったので翌日は condition がとても悪い。

22日 Dome 出発 6:30 取付 7:30—7:45、E点10:10 雪渓の下11:50—12:10 アラ沢の頭11:10—1:40 北槍 2:00—2:15 キレット小屋 3:00

オートミールで朝食をすまして Dome を少し北槍の方へ降ってそこから荒沢に降る、草付と石のゴツゴツした所で傾斜も大した事はないし楽な降りて北俣の雪渓に降れる。北俣の急な雪渓を暑さと寝不足の為にフウフウ言いながら取付へ達した。心配していたシュルンドも何でもなく小さい石のガサガサした所Aまで行き此所でアンザイレンをする。此処から上を見た所アンザイレンの必要もなさそうに思えたが一応アンザイレンをして Continuous で行く事にする。サンドロックに岩の破片がガラガラ乗っていて其れをはらいのけながら実に簡単に登りBの辺りも草付にアイゼンをきかしてジャンジャン Continuous で行く。Cの所は真直ぐに登るのも行けば行けるだろうけれど時間を食うからDの岩の下を travers してDを巻いて上に出る此の辺りは可憐な高山植物や百合が咲き乱れていて寝不足の頭に良い清涼剤である。出来るだけふみ付けないように幾度も休みながらのんびりとE点まで来た。まだ10時半だ。Fの下を travers してFの岩の上に出た所でゆっくりと寛いで食事をする。もう後はGの所の travers へも僅かに one pitch 程のものだ。雪渓へ下りるとかぶる水をがぶがぶ飲んで今までの水不足の攀憤を晴らすと後はザイルをルックに仕舞い込んでチャカチャカと雪渓を登り、荒沢の頭まで来て仕舞った。此処で一応ボンチと握手はしたものの実は余りのあけなさに拍子ぬけの態で嬉れしくもなんともなかったのである。実際岩登りらしい様な事をしたのはDのトラバースから之を捲く所ぐらいなもので他は草付と石ころの mix した様な所とアイゼンでヒョッコラヒョッコラ登ったにすぎないのである。全く5時間半で登れるとは今から思えば腹が立つ程であるがその時は何しろ目的を達したのであるから心残りなく降れると思うとボンチも僕もイソイソと北槍を越して途中まだ北壁のbushの中で苦闘を続けている福デンのパーティと喜びの言葉を交しながらキレットの小屋へ下って行ったのであった。

杓子岳信州側 (1937年)

山 口 雅 也

party 山口雅也、福田泰次

1937. 3. 23 (晴)

tent (AM 4:00) —ザイテングラートの取付 (8:00) —ザイテングラートのリッジに出る
(9:30) —小テラスにて小憩 (10:30) —主稜に出る (11:30) —頂上 (PM 0:40~1:30)
—杓子沢のコル (1:40~3:00) —tent (5:00)

午前4時鐘へ行く連中と共にテントを出た。気遣っていた天気も案外良く気温は零下6度テントからアイゼンをつけて出る。雪面が適度に凍結していてアイゼンが快適に利き、1時間余りのトラバースを楽に通りぬける事が出来た。杓子尾根から分れている小さな尾根を1つ越えて、杓子沢へ下りた頃、もう太陽が出始めた。杓子の壁は真東に面している為、日の出と同時に太陽の直射を受けて、はや雪面は溶け始め、アイゼンをつけた足が膝位まで潜ったのには閉口した。6時過ぎた頃鐘へ行く連中と分れたが、此処から愈々斜面は加速度的に急になり、頭上におおいかぶさる様に杓子の壁が吾々を取巻いている。可なり威圧的だ。スカイラインには大きな雪疵が咬付こうとするかの様に不気味に連なっている。正面は到底登れ相にないので、左側に出ている尾根のザイテングラートに取付く事にする。此のザイテングラートは殆んど垂直に近いので、之への取付を昨日から最も問題にしていたのだが、来て見ると思いの外急峻でおまけに岩の上に薄く氷が付き、其の上に軟雪が乗っている状態で、全く手も足も出ない。それで此のザイテングラートの右側のルンゼの登路を探しながらステップを切って登る。此のルンゼも益々急になって愈々壁に遮られる。どん詰り迄来た時、滝状の氷のチムニーを見出して、これに取附く事にする。(AM 3:00) 此のチムニーは岩の面から10cm許りの空間をおいて、10cm余りのパンパンの蒼氷が張りつめているものである。ホールドとステップの為に、氷に丹念に穴を開けて進んだが、此の15m許りのチムニーに約1時間半を費し、且つ精魂を使い果してしまった。(AM 9:30) 併しこのザイテングラートも全く急で休む場所も無いので直ちに代る代るカットステップを切りながら、コンティニアスで進んだ。

此の頃、頂上の辺りから小さな雪崩が落ちるのが屢々見えた。

10時半、小さな岩かげに辛じて立止まり、ココアを飲み、固パン、熱電食を食って、稍元氣

を回復する。

ここからは、益々尾根は痩せているので、One at a time で進む事にする。ナイフエッジ式に雪のハッチに跨って進んだが、有難い事には、1ピッチ30mばかりで、主稜へ出る事が出来た。(AM11:30)

どうにか難関を突破したので、雪の上に腰を落とし、正午の麗かな太陽の光を浴びながらEnergyの補給に努める。此所からは尾根もずっと緩かであり、逃げようと思えば左側の沢へ下りられる。4つ程の岩場を越えなければならないが、慎重にOne at a time で進む。第1の岩場は右の雪面を巻き、第2の岩場は左を巻き、第3と第4は岩の上を乗り越えて頂上に出る事が出来た。(PM0:40)頂上で昼飯を食ったが、黒部側より吹き上げる風が猛烈に寒いので杓子沢のコルまで馳下り、其処で鏝のpartyを待合せ、共に楽しく帰路についた。

(旧制13回卒業)

春の白出沢生活 (1939年)

鷲 尾 頭

まえがき

吾校は1935年初めて Gendarme 飛弾尾根の積雪期に目をつけて攻撃が試みられたのであった。而して其の後、吾々によって確立せられた指導方針の根本は、要は「完全なる登山家の養成」であった。これは而し全く抽象的なものであって、何等進むべき方向を与えず自然部の行動、部員全体も徒に不活発となすに過ぎなかった。即ち吾々は理論に走って実践は忘却されたかの観があったのである。ここに我々は具体的な、全部員に把握される吾々の進むべき目標が明らかにされたのである。それはとりもなおさず Gendarme 飛弾尾根の積雪期登攀であり、例えその間に農大 Party によって完登されたとは言え、この尾根の価値は低下するものではなく、吾々の Ability が欠如していたのであった。而して吾々の之に対する熱情は益々加わり、遂にかかる努力の結果、漸く実を結び、成功したのである。勿論これは現役の力のみならず、先輩諸兄の厚き御援助の賜に外ならないのである。而して現在の山岳部にあっては、高等

科部員は3年を除けば2・3名にすぎない有様である。例え具体的目標（劔尾根、早月尾根、前穂北尾根積雪期登攀？）が立てられても、実現するとは現状では殆んど不可能であり、徒らに実行焦らずして兎も角少くとも、一年は準備の時代であり、発展の為の退歩であり、只部員の量的獲得と、上級部員の一致的質的向上に力を注がねばならぬ。実は今年は吾部にとってある意味に於ける危機であると同時に試練時であると信ずる。徒らに目標実現に焦らず只確固たる方針の下に邁進するならば遂には実を結ぶであろうと信ずる。

Historical Survey

奥穂より北西に走る主稜西穂に至る間の飛弾側は他に比べると一体に非常に忘られたかの如く問題とされなかった。記録上からは1928年3月法政大学田中氏等が、小鍋、貝堀（恐らく柳谷と思うが全然確定的ではない。）間の尾根より主稜に達せるものが初めてである。次いで Gendarme 飛弾尾根は1930年7月母校の伊藤、田口先輩によって登攀がなされ、次いで同志社大学の児島氏が Variation を成功された。その後飛弾側において注目せられたのは Gendarme 飛弾尾根であり、そのみ目を向けて、この尾根は非常に多くのパーティによってトレースされ、現在では穂高の最もポピュラーな尾根の一つと化して了ったのである。而してこれは一度び氷がつき、雪が覆いかぶさった積雪期に至っては、登攀は可成りの困難を予想され、登攀を試みるものとなかった。そこで母校においては1935年夏より積雪期に於ける Gendarme 飛弾尾根に目をつけ、勿論飛弾側より入るにしても、最も近い小屋は穂高温泉、又は槍であり、前者より白出迄約1時間、後者からは4時間強を要し、ここにおいてベースキャンプを白出沢の柳谷尾根の末端と定めた。と言うのは白出沢に於けるキャンプサイトは、この附近の森林帯附近及天狗尾根末端の森林帯以外は雪崩の危険があつて絶対に張れないのである。その時の計画としては Gen 登攀後縦走路を通して穂高小屋にその日宿泊し、翌日白出沢よりキャンプに帰る予定であつたのである。その冬母校京都医大のパーティが白出沢に入ったが、天候悪しく失敗に終つた。が白出沢から西穂への登攀がなされた。1936年春母校が再び白出沢に入ったが、主目的たる Gen の登攀は遂に途中より引返しを余儀なくされたが、西穂沢より天狗と間の岳の巻を経て穂高小屋に達する登行に成功した。母校はけれども決して積雪期に対する熱は失わなかった。1936年の冬1937年の春の計画は立てられたが、穂高小屋焼失（1936年10月）という悪条件のため、吾々の行動は大いなる支障を来し企ては挫折の余儀なくに至つたのである。この間1937年度春、東京農大のパーティ、飯田、麓阿氏が約24時間を要して Gendarme 飛弾尾

根に成功されたのである。而して1939年春吾校、早稲田大学のそれぞれのパーティによって、良好なコンディションに恵まれて成功した。再びここに繰返すが一旦此尾根が登攀されたからとて、Gendarme はあくまでもやはり Gendarme 以外の何物でもない。これにより、より高き登山技術を練磨し、登山意識を高揚し、将来に於ける大きな登攀の重要な礎因を作り上げるであろう。

計 画

吾々は昨夏計画の結果ベース・キャンプを先年の場所（柳谷尾根が白出沢下方で一度切れて又下の方まで延びている、その切れ目の下の森林中に設置した。此の位置は白出沢で最も問題となる雪崩からは完全に免がれ、白出沢に於けるキャンプサイトとしては最適な場所である。而して第一 Advance キャンプを Gendarme 飛弾尾根直下のブッシュ辺りに一方 Supporting メンバーをして、天狗の Col に第二 Advance キャンプを設置せしめ飛弾尾根登攀パーティを援助して、併せて初歩者のトレーニングを試みんとしたのであったが、昨秋の地形偵察、つづいてメンバーの不足の結果、これは残念ながら変更して、少人数で計画の範囲は狭められたが、第一 Advance キャンプの設置は絶対的必要なものであった。と言うのは飛弾尾根にとりつく迄に精力を消耗して、時間をくい、農大パーティが24時間を要し、早大パーティがゴブ尾根の頭でビバックを余儀なくせられているのを見て明らかなる事である。登攀ルートについては紀行の頃で述べる事にしてここでは重複をさける。次に考えなければならぬのは帰路である。農大パーティはBルンゼを引返し、早大パーティは天狗沢をとられた様だが余程時間を注意せぬと雪崩の危険性が多分にあると思う。吾々は穂高小屋を経て白出沢を下り、ベース・キャンプに下る予定で、Gendarme の頂上より穂高小屋迄のステップを Supporting メンバーに切らせておく積りであった。以上の如き計画の下に昨秋主なる荷物（備品、食料）を槍見温泉に送り、吾々の山に入る数日前に中畠（人夫）をしてベース・キャンプ（アークティック・ウィムパー4人用）を設置させた。

紀 行

パーティ リーダー 伊藤文三

喜多豊治先輩、鷲尾頭、福井実

人 夫 中畠政太郎

1939年3月20日——4月2日

3月20日 PM11:29 三宮出発槍平パーティと同車

3月21日（晴れ）岐阜 AM 4:42—飛弾古川（9:36—10:10）—船津（AM 11:50—PM 0:40）—栃尾（PM 2:00—2:58）—槍見温泉（PM 4:55）栃尾迄自動車

3月22日（曇り）槍見温泉（AM 8:15）—柳谷出合（AM 10:50—11:30）キャンプサイト（PM 1:15）久し振りのアルパイトにへばる。槍平の連中と白出沢出合で別れる。PM 3時頃より雪降り出す。

23日（雪）滞在

24日（曇り後雪）滞在、中畠荷をとりて槍見沢へ下る。スキー練習するも適当な場所がない

25日（雪）滞在中畠来る。

26日（雪）滞在

27日（晴れ）二次雪崩の危険あるため出られない。早稲田大学パーティのテント訪問

28日（曇り）ベースキャンプ（AM 8:05）—天狗沢、白出沢の出合（AM 9:15）—Green Spindleの上 Advance キャンプ（AM 11:35—PM 1:25）—ベースキャンプ（PM 2:30）

ベースキャンプ建設以来悪天候に悩まされ久振りに動く。白出沢、天狗沢の出合には物凄く多数の雪崩が堆積し、雪崩の大きさが推知される。これより輪パにはきかえる。前進は容易である。荷物はパーティの備品に2日分の食料で5人に分けているから大したこともない。尾根の Green Spindle への登りは苦しいが、5人なので速い。Green Spindle の上に適当な地を発見、どうもテントを張った後の様で多分昨年冬農大の方が此所に Advance キャンプを張られて、天候悪化のために引上げられたのであらうと思われる。農大報告2号には「此の尾根の上でも積雪の如何によっては充分雪崩を発生する状態にある云々」と述べられて居る。而し吾々が此のテントを3月29日より4月1日迄放置し、（その間天候の悪かったのは31日早朝雪 AM 10時頃より雨と化した事実である。）そこに張られて居たテントは何んの変化も受けていなかった。ウインパー・テント2、3人用を設置、左右は木によって両端はブッシュがあり、適切に風より遮っているし、雪崩発生 of 地貌的条件も具備せられていない。ただ欠点なのは長期間の悪天候の中に荷物を Transport する事は絶対に不可能である。それはこの尾根にとりつく。どこからも雪崩が発生し易く、それにより沢の雪の平衡状態を攪乱する恐れがあるからである。又沢自身も雪崩の危険性は多い。伊藤、福井は Advance キャンプに残り、明日に備えて少し上迄ラッセルに出掛ける。他はベース・キャンプへ下る。

29日（晴）天狗尾根より穂高小屋（飛弾尾根登攀）

パーティ 伊藤、福井

喜多先輩のパーティがベースキャンプに引上げてより、天候はなかなかよくなりそうでなかった。明日は駄目だろうと観念して夕飯を倅約して喰う。何故なら折角持ってきた食糧を意味なく食い尽す事を恐れたからである。雪がじゃんじゃん降れば雪崩の危険のために2、3日たってもベースキャンプに帰れなくなりそうなので一食糧は2日分しか持って来ない—明日起きて雪が降って居れば荷物を全部置いたまま帰り、次の機会をベースキャンプで待期し、又天候が良ければ飛弾尾根に出かけようと、どっちみち明日早く起きる事に決した。併し就床前即9時頃外に出て見れば猛烈によい天気となっていたので明日の登攀は殆んど決定的となり用意万端整えて寝た。

朝4時に眼をさます。果して好天気、絶好の登攀日和となりそうだ。今日一日天候が持つ様に祈りつつ簡単な食事—紅茶とパン—ですます。愈々テントよりワカンをはいて出発したのがすっかり附近が明るくなって了っていた5時半、先日喜多先輩とやっておいたラッセルは仲々効果的であったが、それもすぐなくなって雪面が硬く内部がザラメというワカンにとって苦手な雪となった。もくもくとへばりつつ愈々飛弾尾根の主稜にトラヴァースせんとする地点に着く。(7時)先日早稲田パーティもこの地点よりトラヴァースしたらしい。僅かにそのシュプールが残っていた。加藤、喜多両先輩が来られた時は、このトラヴァースは雪が氷と化していた為に、不可能であったそうだが、我々の場合はそれと逆にワカンをはいてすら膝あたりまでもぐり寧ろ雪崩の危険をさえ感ずる位だった。Aリッジ(図参照)に着いてよりワカンアイゼンと換える。リッジ通しに登り飛弾尾根主稜より約30m下でアンザイレンし、ワンアットタイムで僕がトップで進む。岩と雪のコンビネーション丁度ワンピッチザイルは40m—で飛弾尾根に出る(8時20分)天狗尾根、西穂が見え、既に西穂の上部は朝日に照り赤くなって居る。ワンアットタイムで進む程悪くないのでコンティニアスでしばらく進む。忠実に尾根通しに行く。農大の人が肩車して登った—農大報告9号—と思われる所に出会った。僕の背の2倍位の高さの1枚岩で中途にピトンが打ってあった。ちょっとアタックしたが、曲芸になりそうなのでまた少し引返してそこを巻いて又尾根通しに行く。岩場の悪そうな所は時間をセーブするため天狗側をまく。40mのザイルを一ぱいに延ばしてワンアットタイムで進み時々コンティニアスで進む。夏は大抵第3テラス位までしか下らないが一番下より登ってくれば随分長い。天狗尾根を登攀しつつある友を発見しヤホーを交しつつ登る。10時頃飛弾尾根に日が照り出し、風もなく絶好の登攀日和である。軍手一つで平気だ。しんどいながらも面白い雪と岩のコ

ソビエーションの登攀。1時30分に第3テラスに着く。ここで軽い食事を取る。即ち昼飯としてパン1人1斤持っていたが之を約 $\frac{1}{3}$ 喰った。これより純粹の岩登りである。岩には雪が付いて居らずアイゼンを付けているのががちりと足がかかり、仲々快適である。可成り時間が掛ったので少々急ぎつつ第1テラスに来た時コブ尾根頂上に突然人間2人が現われた。最初誰か解らなかったが喜田先輩及鷺尾さんと解った。彼等はずっとにジャンの頂上を行き過ぎていると思ったから、最初是人夫2人と思ったわけだ。何故ならば天狗尾根頂上に両君が居たのを見たのが10時頃であったからだ。第1テラスからガラガラして居て嫌だが、雪のためしまっており夏より反って楽だ。終に Gendarme 飛弾尾根頂上に着いた。時刻は2時25分、丁度この時天狗尾根パーティも頂上に着き劇的握手が交された。

ちょっとした食事を取り僕のパーティが先になり、縦走路を穂高小屋へ急ぐ。最初のつもりでは小屋より誰か遊びに来てそのためジャンより穂高小屋までラッセルしてあると想像していたのに当てが外れた形であった。併し雪の状態はよく一部夏より楽な所があった。穂高小屋への下りが少し悪く結局3時間かかった。穂高小屋に来れば既に日は沈み、だんだん夕闇が迫り併し幸な事に日が照って居たので青色い雪の上を白出沢をじゃんじゃん下る。滝を巻く所で少し迷い、途中ワカンの利かぬ所があったためアイゼンにはきかえたりして安全地帯に来たためか又疲れ等が出た為か随分時間をくった。そのためテントに着いたのは10時であった。

29日 晴れ 天狗尾根より穂高小屋

パーティ 喜多先輩、鷺尾

ベースキャンプ (AM 3:55) — Ski Depot (AM 4:55—6:00) — 天狗尾根 (AM 6:45—7:00) — 天狗岩 (AM 10:30) — 天狗の Col (PM 0:30—0:50) — Gendarme 頂上 (PM 2:30—PM 2:55) — 奥穂 (PM 5:10) — 穂高小屋 (PM 6:10) — ベース・キャンプ (PM 9:55)

昨夜雪がちらついていたので、恐らく今日は駄目だろうと、兎も角 AM 2時前起床。意外に、幸いにも月が出て星が煌々と輝いている。直ちに用意して出発。輪パの煩を避けんがために、天幕からスキーをはいて、行ける所まではくことにする。広い西穂高沢を、雪によって見え隠れする月と懐中電燈のライトによって大きな Zigzag を切って登り始める。互に2人とも妙に嘔気を覚えてならない。併し時々冷やかなる風が吹く度に、或る緊張を意識し黙々と歩み続ける。西穂高沢の上部は、西穂西山稜からの雪崩に可成り荒されているが広いカールを思わせる斜面である。吾々は天狗尾根の下から数えて5つ目の支稜の向い側の岩稜の蔭に Ski Depot を選ぶ。之以上はスキーでは危険である。殆んどどんづまり迄来た。Ski は後で

中畠がとりに来る様にしておいた。これより輪パにはきかえ、腰のあたりまでもぐりつつ前進を起す。既に夜は明けて、笠の方に朝焼けしているのが見える。今日一日天気が維持することを願う。尾根に出ると殆んどもぐらない。左手には Gendarme 飛弾尾根の素晴らしい景色が繰りひろげられた。それを登りつつある吾が友を呼ぶが一向に返事がない。100m程登ると雪質は変って、松の上に粉雪が堆積し、前進思う様にはならず、泳ぐ様にして登高を続ける。AM 8:30 Steig Eisen にはきかえる。友の叫ぶ声が聞えてきた。吾々は声援を送る。之より上部は瘦尾根で3つの小さなピークを越さねばならぬ。交互に Step を切り、又浮石が案外に多いので注意しつつ手頃な岩登りを連続して遂に天狗岩へ登りついた。風がないので手袋は1枚でぽかぽかする。昨日計画したのは天狗尾根より天狗の Col へのトラヴァースであるが、それは不可能なためにどうしても天狗尾根をのぼりきらなければならず、意外に天狗尾根に時間を要したので、Supporting に間に合わぬのではないかと急いで下る。天狗の Col 迄の下りは Anseilen する。夏道のとおりに行くのだが慎重を要する。悪場は One pitch だけである。これより後の記録は部報1936年Ⅰ20頁1936年Ⅱ35頁に掲載されているから省略する。Gendarme の頂上でぱったりと吾友と会い、感激の握手を交し、共にその成功を喜ぶ。憩う間もなく Gendarme 登攀パーティが Top となり吾々はその後を下る。穂高小屋には人がいないので直ちに白出沢を下る。巨大な雪崩が堆積している。月夜なので明るい、滝をまく所で迷い、漸くにしてペースキャンプにへばりきった4人が到着した。

30日 晴れ 昨日の Arbeit のため休養

31日 雨 滞在

4月1日 晴れ 最早目的の Gendarme は登れたのでテント撤収に決す。伊藤、中畠は Advance キャンプへ荷物をとりに行く。PM 2:00 全員背負い切れるだけしよって、残りは置いて槍見へ下る PM 5:20

2日 雨 荷物は中畠に頼み飛弾古川 (PM 5:47) で帰路に着く。

あとがき

この山行は確かに成功した。それには全部員の奉仕、協力によってである。耐し吾々は徒らに現状に甘んじてはならぬ。スポーツの根本は「単にスポーツは娯楽慰安のためのものではなくしてそれこそ一つの訓練であり勤労であり、今日銃後体育、体位向上の美名の煙幕下にかくれて、その実スポーツ自身を享樂する如き傾向あるは甚ば遺憾であり云々」と文部省体育課の某氏が述べられている。斯く凡ゆるものはうつりかわりであるのだ。現在吾部の地盤は未だ固

っていないのではないか。兎も角先ず自己反省をしなければならぬ。而して山岳部生活において、今年以来吾々の活動を見るならば上級生の真に涙ぐましい働きがある。而れども「笛吹けど踊らず」である。下級生が更に自己の地位に目覚めて協力奉仕するならば、部全体の発展と共に個人主体は向上するものである。実に部員の自発的、能動的活動が望まれる。これこそ又現代学校教育の欠陥を充す役割を演ずるものであらう。

(旧制15回卒業)

奥又白谷より北尾根登はん (1947年)

小 川 守 正

そのころ海軍航空隊から命からがら復員した我輩は、しばらく勤めていた自転車の町工場を首になり浪々の身を持て余していた。それで、かねてより尊敬する山口先生を時々訪ねて唯物論の手ほどきを拝聴する以外に何もすることがなかったのである。マッカーサー元帥が、未だ消え去る前で、輝かしい解放者として、天皇陛下のもう一つ上に鎮座ましましていた時だった。山口先生も旭日昇天の勢いでたくさんの内弟子がケンケンゴーゴー討論を交わしており、まるで松下村塾もかくありたるか、と思わせるようであった。小生何分頭が悪く師の説くところの難解なる弁証法を理解し得ず遂にモノにならなかったのは面目ない次第である。

しかし、それまで「右向け右」をしていたのを、180度向きを変えて、左の世界も見ることが教えて戴き、世界が多少とも広くなったことは、生涯感謝しなければならないことである。…まことに先輩は有難いものである。特に話題の何たるかは別として、年令、経歴を超越して温い親しみを感じながら、向上進歩して行くことが出来るのは、部の先輩をおいてほかにはないと思う。

閑話休題——こうして私が先輩のご厄介になっている頃、当時現役の奥田君や田中君が時々来られた。私の家がたまたま学校の近くにあったことと、失職中でいつでもブラブラしていたために便利だったのだろう。勿論この方は社会問題ではなく、山の相談である。

山岳部という所は、昔からいつもウルサイ問題をかかえ悩み断えなき部であったが、終戦後の再建は、実際むずかしいことだったと思う。戦争でペシャッコにつぶされてしまった部を再

建するのに、客観状態また極めて悪かった。食糧がない、切符が買えない、備品や道具がない、学校は援助してくれない、どれもこれも他の運動部より悪い条件がそろっていた。奥田君や中村君、川崎君たちは本当にご苦労なことだったと思う。奥田君や中村君は、たしか我輩が高校三年の頃尋常科の一、二年だったと思う。ヒヨコのようにピーピー言っていた頃のおぼえしがないので積雪期登山をやろうと思うが、小川さん行きませんか、といって我輩と同じ位の背丈をして現われたときには、一寸戸まどった。私も身をもて余していた時であるからその場で話が決まり、行先は奥又白谷より北尾根登攀、ということになった。

当時は旅行するだけでも仲々骨が折れたのであるから、山行は想像以上に困難だった。金の方も不如意だったが、第一に食糧である。奥田（以下敬称略）がどこからかマッチをたくさん仕入れて来て、これで山に登ろうというのである。というのは、信州の田舎ではマッチ不足だろうから、これと米を交換して兵糧に当てよう、という二段、三段がまえの涙ぐましいプランであった。

即ち奥田が一般資材係、中村が食糧係というわけである。それでも、中村の説明によれば副食にはサケ缶だのカレーだのバターといった当時としてはすこぶる豪勢なものを喰わすことになっていた。——我輩実を申せば、配給のナンバ粉にうんざりしていたので、これにいささか魅力を感じないでもなかったのである。いや全くお恥かしい次第——しかしこの魅力は後に文字通り夢の如く消え去り、その反動として一層みじめな思いをさせられたのであるが、そのときは勇躍征途についたのである。

メンバーは奥田泰三、中村忠雄、福井亨の現役三君に私だった。

名古屋の駅裏のブラックマーケットで資材係はさらに朝鮮人から地下足袋なども仕入れて、中央線のガタガタ闇列車に打乗って松本に着いた。

そこで先発の中村が出迎えてくれたが、米は手に入らなかったし、副食は何も持って来なかった、とすました顔であった。これにはひどく失望し、立往生しそうになったが、今さらどうにもならない。

それでも、流石に朝鮮でその方面の訓練をつんでいた奥田は、エキスパートであった。島々行の電車の途中で2、3時間下車し、マッチと地下足袋を米にかえて、我々に若干の元氣を与えてくれた。副食は副神漬の缶詰が2、3個あっただけで、お茶もなかったように思う。

バスは変な木炭バスで、発電所のある奈川渡までしか行かない。勿論登山客など我々だけである。だから大意張りでスキーを持ち込んだところ、布張りの天井をぶち抜いてしまった。運

ちゃんは物が無いから修繕出来ない、どうしてくれる、と難題をふっかけて来る始末。我々の方もスキーが折れなかったのが幸いであると、取合わなかったのも、大分もめた。今ならば運ちゃんもお客にそんなインネンはつけないだろうし、我々も心良く弁償を申出るところだが、当時はそんなエチケットは双方持合わせがなく、浅間しくも、いがみ合った。

奈川渡からの道は栄養不足の我々にはつらかった。その上、米しかないという観念は我々の足を一層重いものにした。皆ことごとくに中村をせめたてたが、無いものは無いやないか、といって平気な顔をしていた。今にして思えば、既に大人の風格があったのだろう。

疲労困憊して夕暮にやっと徳沢小屋についた。

誰もいない筈の徳沢に意外にも灯がともっていた。それは中畠政太郎だった。たった1人で正月から猟をしているとのことだった。恐らく、かもしかの密猟だったのだろう。この精悍な顔をした飛弾の名ガイドは、甲南にとっては喜多先輩時代からの古いなじみである。もちろん、我々とは初対面だったが、甲南と聞いて、旧知を迎えるがごとき笑顔で迎えてくれた。「飯を炊いて進ぜよう」との親切な申出をことわるわけにもゆかず、米だけ出したら、流石に彼も同情して、乏しい自分の食糧から味噌やわかめをだして、スープを作ってめぐんでくれた。そして猟を休んで岩魚をとって来てやるという。事程左様に、我々は気の毒な状態にあったのである。

このような状態でも、我々は翌1日の偵察の後に敢然と雪の北尾根に挑戦したのである。

明くれば3月25日午前1時、我々4人は勇躍徳沢小屋を後にして、奥又白谷にスキーを進めた。食糧は各自握り飯が2個と、テルモスが全体で1本だけである。

出発して間もなく、まだ梓川にも出ないうちに、たった2つしかない懐中電灯の1つを福井が落してしまった。

「早くしろ、早くしろ」とガミガミ言う先輩に気がねしたのか、落したライトを捜しもせず、そのままほって来てしまった。これがまた、後でひどい目に会う原因となったのである。

奥又白谷を1時間もラッセルすれば、やがて左岸に、闇の中にもそれと判る一条の白線が樋のようにかかっているのが見える。これが松高ルンゼである。恐ろしく急な狭いルンゼで、末端は大きなデブリになっている。ここで雪崩が出ればひとたまりもないが、今は数日の好天の後なのですっかり落着いている。

ルートは松高ルンゼを抜けて、奥又池に出る最後の斜面を横に見て、奥又カールの方へ出るのである。前日、奥又池迄登ったら、途中迄ラッセルがあるわけだが、それが切れてからは、

妥当なアルバイトだった。特に4峰と5峰の間のルンゼの登りは殺人的なアルバイトだった。東向き45度の急斜面は、折からの陽光を背に受けて、ワカンで腰迄のラッセルだった。兩岸に迫る威嚇的なバットレスと雪崩の恐怖がなければ、とてもあんなスピードでこの斜面を登ることはできなかっただろう。5歩毎位にラッセルを交代し、死物狂いで4、5のコルにたどりついたときには全くホッとして、今日のツアーに半ば成功したような気になってしまった。そして、とって置きのココアを気前よく飲んでしまい、握飯も半分喰ってしまった。まだ午前8時すぎだった。奥又側のすさまじい岩壁と雪崩に荒された雪面の折なすアルペンの風貌に比べ、涸沢側のベトリした雪面は一点の汚れもなく、美しい女性的な眺めだった。

さて、これからいよいよ北尾根の登攀が始まるわけだが、不安定な雪をかぶった4峰は意外に悪かった。

夏山では、一度登られたルートは、それがどんな困難なルートの場合でも、第2回目以降は第1に比べ、うんと容易になるものである。なんとなれば、そこには、先従者の記録のままのルートが横たわっているからである。そして多くの場合、打たれたピトンも残っているだろう。ところが、積雪期にあっては、この公式は必ずしも当てはまらない。積雪期に於ける登攀の難易を決定するものは、冰雪の状態と天候である。そして、この2つの要素は、毎年毎日千差万別、従って、その時々に応じて異った困難さを呈供するからである。ステップもホールどもすべて雪と氷の下にあるのだ。また嵐や吹雪も、登れるルートを登れなくするものである。

このときの北尾根は、たしかに悪い条件下にあったようだ。数日来の晴天に、雪は安定を通り越して、すっかりくさってしまい次から次からとくずれて、ステップが切れない。特にデリケートな岩場の登攀には困った。初めてアイゼンをつけた現役の人等は、本当に悪戦苦闘していた。

奥田、中村と福井、小川の2組のザイルパーティが4峰頂上についたのはもう正午すぎだった。ここで、あきらめて涸沢にでも下ればよかったのだが、ようやく調子づいて来た我々は、モリモリと斗志がわいて来た。そこで、残りの握り飯を平げて、猛然と3峰の岩壁にむしゃぶりついたのが間違いのもとだった。

特に、取つきの1ピッチ目の、奥又白側をまくところは悪かった。夏でも一寸いやなところだが、ホールドや細かいリスは、すっかり氷にとどされており、その上にざらめ雪がのっているのだから始末に悪かった。幾度か足が宙ぶらりんになり、腕だけでぶら下る。腕が疲れて来ると、一層一思いに手をはなして墜落してやろうか、と思った。どうして登ったのか判らない

が、この1ピッチに2時間もかかった。長い間山をはなれていたトレーニング不足と、体力の低下、それに、この頃から荒れ出した天气が、この登攀を一層困難なものにした。

烈風はすさまじい勢で我々を襲い、ザイルは半円をえがいて空中に浮ぶといった、仲々勇壮な光景を呈したが、私は内心大いに恐怖を感じた。

3峰の登りは実際悪かった。例のチムニーには粉雪がびっしりつまっており、掘れども掘れどもくづれて来て、上に出るのに1時間近くもかかったりした。また、その上の1枚岩でクラックに福井のアイゼンがつまてしまいでどうにも抜けなくて立往生したりで、前穂の頂上に達した時は、既に夕闇一步半前になっており、その上猛吹雪だった。

途中でトップを交代した奥田パーティは頂上で待っていることになっているのだが、どこに行ってしまったのかさっぱり判らなかった。もっとも、この猛吹雪では3,000米の頂上はあまり居心地の良いものとはいえなかった。

ところが、こちらには懐中電灯がないものだから、方向も傾斜も彼等の足跡も判らない。仕方ないから、見当をつけて明神の方向に進むうちに、猛烈なショックで岳川側に墜落した。福井がスリップしたのに引きづられたのだった。夢中でもがいているうちに吹溜りのようなところで止ったが、5、60米落ちたようでもあり2、3米のような気もする。こうなると、自分がどこにいるのか、さっぱり見当がつかない。ヤッホーを叫んでも吹雪にかき消され、福井との間にさえ聞えない位だった。

何だかよく判らないままに上ったり下ったりしている内に、幸いにも雪が止んで見通しが利いて来た。どうやら、私達は前穂の頂上から岳川側に相当下っているようだ。とこうするうちに、遙かかなたの明神岳の方で灯火が明滅するのが見えるではないか。奥又への下降点を通りすぎて明神迄縦走してしまった奥田パーティだ。ようやく連絡がとれて、こちらへ引返して来て、私達も稜線にもどって再会した時は10時近かった。それから、奥又への下降点を求めて烈風黒闇の尾根をさまよったが、似たような岩峰と夜目に見る雪渓は皆恐ろしく急で、とても下れそうにない。11時頃遂に疲労困憊して動けなくなり、稜線から少し下った雪面に穴を掘った。穴といっても50糎位の壕にすぎないが、それでも2人用のツェルトを4人でかぶって落ちついた時には、全くホッとした。偶然奥田が持っていたローソクに火をつけると明るく暖かくなった。暖かくなって人心地つく、猛烈な空腹が襲って来る。昼から一物も口にしていないのだから無理もない。黙っているわけにもゆかないから、3人でまた中村をせめたてたが、流石に大人もこのときは答なしだった。

ローソクが消えると、猛烈な寒気が我々をいためつけた。奥田は凍傷にやられたといって、一晩中足をこすっていた。我輩は太って暖かそうな中村にしがみついていたが耐え難い寒さだった。福井は初めての山行でこんなことになり意気消沈してウンともスンとも言わない。

どうやら夜が明けた頃にはひどいガスだった。視界は10米位しか利かない。疲労と寒さと空腹に、さらに一晩中妙な恰好でうずくまっていたものだから足腰が痛くてたまらないという4重の悪条件だった。奥又への下り口はどうにも見当がつかない。余り遅くなると雪崩の心配があるし、何より稜線の烈しい風に耐えかねて、8時頃適当な見当をつけて、成可く傾斜のゆるそうなルンゼを下った。しばらくして、恐しく深い大きな谷底を下っていることに気づいたときには、すでに手遅れで、今さら引返すことの出来ないところ迄来てしまった。何のことはない下又白谷へ下っているのだった。この谷は下で滝が連続している筈だ。

絶望的な気持になって遅れた福井をヤンヤンせかしているうちに、どうしたはずみかスリップして急斜面を滑落して来て中村を押し倒してしまった。中村はどういうつもりか（恐らく彼を止めようと思ったのだろう）ここを先途と福井の太もものにしがみついたから一層悪い結果になってしまった。こんどは倍の倍の運動エネルギーをもって奥田を押倒した。そして必然的に3倍のエネルギーに拡大された落体は、しっかりとつれ合って、一番下にいた我輩めがけて襲いかかってきたのである。ここで両手を拡げて発止とばかり受止めれば先輩の貫録充分だったのであろうが、如何んせん、目まいがする程の空腹と疲労に参っていたものだから、僅かに側方に退避するのがやっとだった。それでも、何とかしようと、後からグリセードで飛ばしていったが、幸いなことに、滝の少し上の平かになったところで止まった。

奥田は顔面をアイゼンでけられ又白谷の白雪を鮮血でそめた。相当痛かっただろうと思う。しかし、この事件で、ボーとしていた我々はびっくりして、一時的にはあるが元気が出て来た。

その内に、異常に気温が上昇し刻々と雪崩の危険が迫り、すでに明神東稜の側面から小雪崩が出だした。追いつめられた我々は、死物狂いで左岸の小尾根を雪を喰いながら登った。有難いことには、この小尾根を登り切ると奥又台地の西端にひょっこりとお出ることが出来て助かった。やけつくような渇きと目がまわりそうな空腹と疲労に打ち勝って、奥又池にたどりついたのは正午近くであった。2時すぎまで待ったが、異常な高温は我々を高次雪崩の恐怖から解放してくれない。仕方ないから、死ぬような思いで松高ルンゼの横の中畠ルートを攀ぢ下りて、徳沢小屋についたのは6時すぎだった。出発してから30時間ぶりで懐しい小屋に帰って来たわ

けである。何をする元気もなく、無茶苦茶に水を飲んだものである。

8時頃になって中畠が帰って来た。心配して上高地から岳川迄迎えに行ったそうである。彼は、我々がてっきり岳川へ下ったか、落ちた、と思ったらしい。この老練なガイドは我々の無事帰還を心から喜んでくれ、梓川の氷を割って手ずかみにして来たという大きな岩魚を1匹ずつ塩焼にして振舞ってくれた。その上、まだ根元に血のついているカモシカの角を1本ずつパイプにしろ、といって分配してくれたのである。こんな親切なガイドは、我輩長い山生活でも初めてだった。翌日吹雪をついて下山の途についた。もっとも、もう喰うものもなく、これ以上中畠に迷惑をかけることは、我々の気持が許さなかったのである。

真正面から吹きつける吹雪に向って梓川の川原に行くのは仲々つらいアルバイトだった。一日来苦斗した穂高の峰々は、白い帳の彼方にあり、何も見えなかった。

やっとの思いで釜トンネルの出口に雪穴を掘って外へ出たときには、疲労と安堵でボーとなってしまった。しかし、まだ安心するのは早かった。トンネルから出て約100米の間、ドライブウェーはすっかり埋っている。そして、この雪崩で固められた急斜面に、朝来の新雪がつもりすこぶる不安定な状態だった。そこをヨチヨチと横切っているうちに、福井がスリップした。叫び声にふり返った一瞬間滑落する姿をみたが、たちまち、吹雪の梓川に姿を消してしまったのである。これには全くゾツとした。あわててアイゼンをつけ、中村に確保させて下りて見ると、激流の中から顔だけ出して岩にしがみついている福井を発見した。その時、どういうわけか、宇治川の先陣争いを連想した。いや全く申訳ない話だが、子供の時分見た絵がそんな風に画かれてあったのだろう。勿論のんびり見物していたわけではなく、間髪を入れず飛込んで引張り上げた。

やっとのことで、中の湯近の橋迄来た時には、彼はもう顔面紫色で意識朦朧として胴震いしていた。零下数度の吹雪の中で、たっぷり梓川につかったのだから無理もないことである。幸いなことに中の湯温泉が近い。両側からかかえて、三人四脚でエッサエッサと中の湯に駆け込んだ。

中の湯にたどり着いたときには、ウインドヤッケやズボンはバリバリに凍っているし、腰にぶら下げていた手拭は、陸軍の兵卒のコンボウ剣のようにピンとなってしまうていた。これはいけないと思って、湯殿迄駆け込み、いい加減なところ迄脱がして湯舟にほうり込んだ。驚いて出て来た旅館の番人の老婆もこの光景には流石に驚いて一言の文句も言わなかった。

実際、我々は、もし手遅れになれば、福井も冷凍人間となって硬直して死んでしまうのでは

ないかと恐れたのである。しかし、ものの20分もするとすっかり温まって、炉ばたに坐り込んでヘラズロをたたいて、我々の心配が見当外れのものであったことを証明した。そこで、坂巻にうどんがあったことを思い出し、これから下る可きや否やでも一もめしたが、墜落ノイローゼにとりつかれた福井が泣かんばかりに頼むので、皆しぶしぶ食物の無い中の湯に宿ることになった。

翌日、坂巻で休んでいると早稲田大学の大部隊がやって来たが、彼等も辛川に落ちたそうで大騒ぎをしていた。福井も大いに屈辱感を取りもどしたことだったろう。彼等はポーラーメソッド法で北尾根を登るとかで、アコンカグアの関根氏が隊長だった。そして、我々の休んでいる炉ばたで、肉だの缶詰だのチョコレートだのと、進駐軍の放出物資を所狭しと拵げて整理しだした。味噌などもブリキ箱一杯につめてほり出してある。我々は、しばらくの間これを浅間しき目つきで眺めていたのであるが、奥田が早速その味噌でスープをつくった。目にも止らぬ早技であった。そして、まず先輩から、といって飲ませてくれた。我輩、多少気がとがめぬでもなかったが、有難く頂戴した。大へんおいしかった。——いや全く今から思えば、お恥かしい次第であるが、その時迄、乏しきに耐えて来た我々も、等しからざるには我慢出来なかったのである。とんだ共産主義を実行してしまった。早稲田の衆には全く申訳ない。(勿論、山口先生からこんな馬鹿なことを教えていただいたのではさらにない。)

世は2・1ゼネストとやらの直後、革命前夜の如き時代の物語りである。

(旧制17回卒業)

白馬 鍾ヶ岳 北山稜 (1960月)

広 瀬 健 三

われわれ甲南大学山岳部は、夏山の劔岳や、穂高で行なっている放射状登山形式をそのまま積雪期に行なって多くの新しい経験と成果を求めようと、去る3月杓子岳、双子尾根、樺平に約2週間合宿した。以下は合宿中の第一目標としていた、白馬鍾ヶ岳北山稜の登攀記録である。

白馬鍾ヶ岳北山稜といえばその上半部のトレースはかなりポピュラーなものになっているが、下半から取りつくパーティは少ないようだ。しかし一目でわかるように、北山稜の面白味と、登攀価値はむしろ下半部に集中されているといえよう。そこでわれわれはできるだけこれを末端からトレースすることにした。

行動記録

3月22日(快晴)午前4時気温-6度。樺平にはいつてから1週間目、この日は満天の星空絶好の登攀日よりである。例によりねぼけまなこで準備する。パートナーの藤安と、もくもくと食事する。アイゼンをつけ、みんなに見送られる時、いつもの快よい緊張感を覚える。樺平4時30分。前日の雨で杓子沢は適当にクラストして、われわれのアイゼンの音が静かな杓子沢に響いている。美しい星空である。目前の北山稜のシルエットをみながらアタック前の期待と不安との入りまじった複雑な気持で歩く。

われわれは北山稜の末端が大きな台地状になっているところに取りつくことにする。このあたり一帯は思ったより尾根幅は広いが、かなりの急斜面だ。登攀開始5時15分。千葉大の記録をみても、この尾根は案外時間がかかると思われるので、予定通り時を稼ぐためアンザイレンせず、ぐんぐん高度をかせぐ。尾根幅はかなり広く、ブッシュの生えた急斜面が続く。これを利用して強引にピッチをあげる。藤安は昨日からの風邪ですこし苦しそうだ。

やがて尾根はゆるやかになる。ここから第一ピーク(明確なものではない)までは、快適なナイフ・リッジが続いているが、雪庇が杓子沢側の方に大きく張り出している。一目でそれと判断できる状態なので、まず踏みはずすことはない。第一ピークを乗り越すと、やや広いナイフ・リッジが続いている。小休止。すでに太陽は頭をだし、いままでの重苦しい気分が急に晴やかになったかのようなようである。素晴らしい眺めだ。樺平のBCを見ると、キーパーがじっと

われわれの登攀を見守っている。なんとなく安心感を覚えピッケルを大きく振る。

6時25分、ふたたび登攀を開始。昨日の雨は、このあたりより雪に変わってらしく、ところどころ深くもぐり、登攀のリズムがくずれる。ここから第二ピーク（明確でない）までは尾根がところどころ4・5メートルほどの雪壁をつくっている。5米ほどの雪壁を乗り越し、細いリッジをたどると、第二のピークの上にする。6時50分。ここより北山稜登攀のポイントとなる軍艦型ピークが顔面に迫ってくる。難なくピークの下までゆく。われわれは軍艦ピークの取りつきを中央の雪の詰った急なガリーにルートを求める。急斜面の上に新雪が積もっているので、かなり登りにくく、ステップを作るはしからず、思うように登れないので、プッシュをつかみ強引によじ登る。

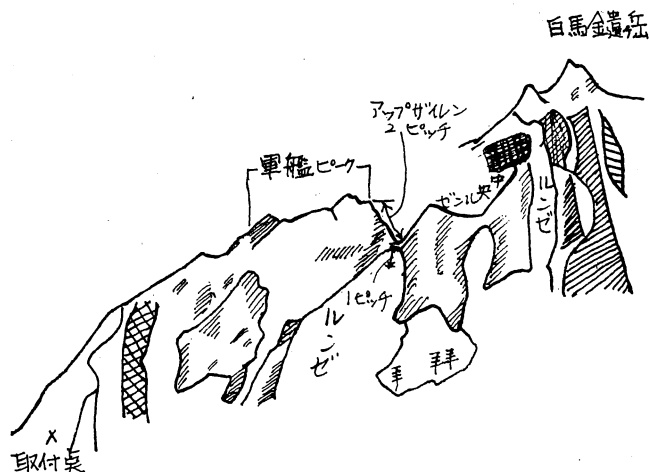
7時15分。上にでると意外に新雪は深く、ぐんともぐるのでラッセルに苦しむ。約6米ゆくとやがて雪はしまる。この間もところどころ雪壁状をなしている。このあたりより尾根は急激にやせてくる。アンザイレンをする。7時35分。トップ広瀬で小刻みなブッチで高度をあげると、尾根はほとんど傾斜がなくなり大ギャップまで続いている。ここが登攀のポイントとなるところだ。すごいナイフ・リッジにいささか驚く。尾根の左右はすっぱりと切れ高度感も申し分ない。

奥双子の頭よりスケッチ

はじめて大休止をする。

8時25分。食事をしながら尾根の状態をみる。いままで杓子側のみ張りだしていた雪庇は中央ルンゼ側にも張りだしてこの上もなく複雑で、どれが雪庇でどれが尾根だかわからない。昨日の偵察ではリッジ上にプッシュが生えているように見えたが、ぜんぜんそれはな

くすっきりしている。藤安に確保を頼んで前進する。トップはいま雪庇のうえにいるかどうかわからないので、セカンドのアドバイスに従って進む。大へん微妙なところである。案外雪庇



も堅く、助かるが、リッジ上をゆくのはどうも雪庇が気になるので、中央ルンゼ側の雪壁となつて切り込んでいるところを、慎重にトラバースする。このあたりアイス・バイルはなかなか効果を發揮してくれる。

中央ルンゼ側も吸い込まれるように切れていて、あまりよい感じではない。約5米ほど前進してセカンドを確保する。あまりザイルを出すと墜落の時、危険なので、あいかわらず小刻みなピッチでゆくことにする。尾根はやがて凸型の岩で中断された形になっているが、私はそれを持ち越そうとして時間を食ってしまう。藤安は杓子沢側をトラバース気味に難なく通過、ふたたびナイフ・リッジが続くが、雪が不安定で足もとがいまにもくずれそうである。大ギャップは、もう目と鼻の距離。これ以上やられぬといった感じのリッジをゆく。このあたりからようやく雪庇もなくなり、忠実に尾根をたどる状態になる。さすがにこの最後のピッチは悪く、一步一步四つばいになって進む。尾根はハイマツの上に雪がふんわりのっているので、ピッケルは使用不可能、ハイマツを掘りだしてゆく。大ギャップの上にする。10時30分、セカンドのくるのを待ってBCヘコールをかける。ここより大ギャップまで下降するわけだが、杓子沢側へ30米一ぱいで2ピッチ下ると絶好の懸垂ピンとなる木がある。これをピンとして、アップザイレシ、降りたところの木をピンに、さらにもう一度下降、ギャップに降りる。

正面には小ピークが2、3あるが、どうも時間ばかりかかって面白くなさそうなので、われわれはこれに取りつかず岩をピンにアップザイレシ、いったん北山稜ルンゼに降りることにする。ルンゼにはサポート隊のトレースが続いているが、あまり下り過ぎたので、コルに登るのに骨が折れた。コルから草付の不安定な壁を忠実にトレースをたどる。登りきるとふたたびコルにでる。「7時30分通過、がんばれ、伊藤」と伝言がある。なんとなく緊張がゆるみ大休止とする。12時出発。ここからいったん中央ルンゼに下って上半部にゆくわけだが、ルンゼは日を直角に受け雪崩の危険を充分感じる。北山稜を末端よりアタックするには、どうしてもここをこの時間に通過しなくてはならぬようだ。雪も腐りはじめ、なんとなく不気味なので、慎重にピッチをあげて通過する。中央ルンゼの上部に見える三角形の岩峯に向かってゆく。

コルにでたのち、さらに杓子沢側のルンゼにはいるが、これは樺平から明確にわかるもので、北稜ルンゼと並行して突き上げている。このあたりからわれわれのつぎの目標となる杓子東壁の圧倒的なフランケが手にとるように見える。ルンゼは雪も縮り、両側の岩峯も本場のアルプスを感じさせるものがあり、実に快適である。

ふたたび稜線上にでるとさすがに風も強いが、岩と雪のミックスした平凡なリッジをのんび

りゆくと頂上にでる。1時20分、帰途は双子尾根より下ることにする。ジャンクションのあたりでどっかりと腰をおろし、ついさっきまで悪戦苦闘した北山稜をゆっくり眺めていると、アタックを終えたあのいい知れぬ充実感にひたれた。帰幕は3時40分。



白馬鎚ヶ岳北山稜登攀の面白味は、一口に言って大ギャップ手前のナイフ・リッジの通過に集中され、他はとりあげて述べるほどのものはない。白馬三山のルートとして、白馬本峯主稜などあるがあまりにも混雑している今日、杓子東壁の各リッジとともになかなか捨てがたい味のある尾根といえよう。
(新制7回卒業)

厳冬期前穂北尾根Ⅳ峰新村北条ルート (1962年)

柏 敏 明

前穂高岳北尾根第四峰奥又白谷側正面壁正しくはこう呼称される四峰正面壁は 高距 約300m 70° の傾斜を有する穂高屈指のバットレスである。無雪期には数多くの人々が訪れ、ハーケン の冴えた歌声が奥又白の谷にこだまする。この壁も積雪期に於ては昭和32年3月名古屋山岳会の初登以来、松高、新村、北条、甲南の3ルートを合せても10指に満たないパーティしか登攀を試みていない。

我々は冬山合宿(北尾根でのボーラ)の一端として新村北条ルートの登攀を試みた。幸にして異状な好天に恵まれ、この登攀を完了する事が許された。

12月27日 快晴

6時に3、4のコルに設営したC3を出発フィクスド・ザイルを用いて20分程で4、5のコルに立つナダレに注意しつつモルゲン・ロートに輝くD沢を尻制動にて下降。雪はやわらかく深いので泳ぐと胸にまで達する。途中D沢ゴルジュ状の下より第1テラスにトラバースを試みるが下りすぎて取付点を間違い、オーバーハングに阻まれてしまった。ハーケン2本を浪費して退却、急がば廻れでD沢を下る。C沢の入口、滝までのトラバースは予想以上のラッセルに胸までくぐり苦闘する、1歩進むのに3回以上も踏まねばならず、息切れが激しく、C沢落口

右側の一枚岩をへずってザッテルに立った時には正直ホットした。ここより仰ぐ正面壁は朝日に映えて豪快であり、ハング帯のみが雪もつけずに黒々と光っている。

さあ、いよいよこれからが本番だと第1テラスへのトラバースを始めたが頭までもぐるラッセルと草付に乗った不安定な雪も足場もビッケルも定まらず悲鳴をあげてザッテルにもどる。強行すれば流される事は確実だ。仕方なくザッテルから続く雪稜と雪壁を登り松高ルート of T₂よりテップザイレんで取付点に下る事にする再びラッセル開始。溝を切る様にして前進する。くの字に雪稜を1.5ピッチ登り、凹角に入らずに右手のリッジを攀るハーケン2本使用し約10m登ってやうやくT₂に這い上った。「一層の事、松高ルートにしましょうか」と口に出しかけたが思い止る。ラッセルによる消耗は大変なものだ。20mのアップザイレんと10mのトラバースでようやくの事、目指す新村北条ルート of 取付点に立つ事が出来た。無雪期よりも約1ピッチ上のガリーの末端である。10時15分というのに猛烈に腹が減る。ビスケットをほぼばり熱いココア、それに1本たてる。4時間振りのタバコは旨い。それが激しいアルバイトの後だけに。

10時30分三ツ道具をセルフストベルトに付けナイロン11mmをダブルに結ぶ。登攀開始だ。先ず僕がトップで、ガリーと取組む。雪と氷と草がミックスされて嫌な所となっている。却って氷ばかりの方がすっきりするのにとブツブツと言いながらハーケンを打ち、アイゼンを蹴り込んで強引に登る。ハーケン4本を使用している30m登りガリーを出た右側のテラスでビレイする。荷物を吊り上げるが、岩角にかかってなかなかあがって来ない。続いて武田が登って来てトップ交代、2m左に引返し再びガリーを這松テラスに向って右上する。アイスパイプでホールドを切って行くので時間がかかる。このピーチは途中にハーケン1本しか打てず、極度のバランスを要求され非常に疲れた。40m一杯でカンテ状の岩の下のパンドに達したが、セルフビレイピンが打てずに苦勞する。15分程費やしてやっと2cm程入ったピンを得る事が出来た。荷物に続いて僕が登っている。引張り上げる様にして時間を稼いだ。ここで又トップ交代だが、ゴボウ抜きにすると時間が稼げるが一気に80mのぼらねばならず、息切れと腕力の消費が甚だ大である。這松を握り出しながら更に10mガリーを登って這松テラスに達した。腰までの雪をかきわけハングド of 雪の凍っていない所で食にする。除雪せずとも3人のビーバークは可能だろう。時計の針は13時15分を指している。

当初の予定では、ガリーの2ピッチに6時間以上費した時には撤退するつもりであった。結果は取付点までの思わぬラッセルに悩まされたものの以後順調に稼いだため、決行する事にす

る。五峰頂上より仲間のコールが掛る。「現在這松テラス決行する」と答えて再び苦しい登攀に帰る。

13時45分いよいよ核心部の青白ハングに取付く。僕がトップで、テラスの一番端から2 mの垂壁に取り付く。見上げる大ハングは黒々として、異状な圧迫をうける。

左手のホールドがスッポリ抜け危うくバランスを崩しかける。はいずる様に2段目小ハングの下にもぐりこむ。ヒレイピンを打ち武田を確保。なかなか登って来ない。僅か2.5 m程の所なのだが、相当に手こずっているらしい。アップの声に懸命に引き上げる。「アカンダウンヤ」ザイルをゆるめる。再びザイルをたぐると突然「スリップ」の声と共にガクンとショックが加わり引きずり落されそうになる。3度目にやっと上って来た。相当に腕力を消耗した様子で背の足りないのを嘆いている。小憩して愈々2段目のハングに掛る。ショルダーで1.5 m 稼ぎ残置ハーケンにアブミをセット。ラッセルの疲れが出て、息切れが激しい。アブミ2ヶ使用してやっと乗り越す。セカンドもすぐに上って来る。これからが核心の大ハングだ。左手フェースのハーケンにアブミをセット。今度は右手のハーケンにアブミをセット・バランスを失うとすぐに宙ぶらりになる。手がきかなくなりビレイ点に下る。夏は簡単に越せたのにチクショウ。震える手で1本立てる再びアタック正に引力との戦いだ「白を引いて」「黒をゆるめて」夢中でどなる。3本目のハーケンを打ちアブミをやっとの事でセット。落る様にして又ビレイ点に下る。武田が交代しようと言ったが最後もう1回と答えて取付くが、もうフラフラだ。あるのは、どうしても突破するのだという意志だけ、ハング帯に取付いても何時間になるだろうか。時計はショックで止ってしまった。3ヶ目のアブミを乗り越えようやく4ヶ目のアブミをセット。左足を太股まで突込みハーケンを探す。10本以上の残置ハーケンは信用出来ないので新しく1本打ち加える。7ヶものカラビナを通っているのでザイルが思う様にのびない。最後のアブミをセットし、少し余裕が出来たので3 m程下って不要のカラビナ、アブミを回収。最後のアブミに乗ってやっと乗越点に手が掛った。遂に大ハングを突破出来るのだ乗越口にアブミをセットし、自己吊上げで右手のフェースに移る。思わずため息が出た。直ちにトラバースに移るが夏でも微妙なバランスを要したこのトラバース、ツアックがキキッと鳴く。手袋を外し、リスを探す。雪と氷で手は完全に感覚がなく、時々岩を叩いて元に戻そうとするが、それも少しの間だけである。アイスパイルでベルグラをカッティングしながらそろそろ這う。リスを見付け薄刃ハーケンを差込みパイルで叩く。ピーンと金属音を残して吸い込まれていった足がミシンを踏み出す。今度は慎重に打込む。やっと1 cm入ってくれる。これで助かった。祈る

気持でアブミをセット続いてアイスハーケンを打ち、小ピナクルに右上にする。小ピナクルに立った時には、これで助かった。祈る気持でアブミをセット続いてアイスハーケンを打ち、小ピナクルに右上にする。小ピナクルに立った時には、これで助かったという気持の方が強かった。それ程に辛く苦しい1ピッチだった意外に早く武田も登って来た。僕が連続してトップ。小ピナクルからのトラバースを始める。このバンドは逆層で堅いベルグラの鎧を被り、意外にも手強い。スゴイ高度感に悩まされたのではないが、手一杯ごとにハーケンを打ち、尺取虫の如くトラバースする約20mでカンテに達した。ここを無事登れば夏の登攀終了点だ、がカンテの守りは意外に堅く何度もザイルにぶらさがる後少しの事だ。歯をくいしばって頑張る。武田よりビバークをしようと声が掛った気付いて辺りを見廻すともう薄暗かった。緊張のあまり時間の概念を忘れていたのだ。

もう1回だけと再度試みる。全く岩との闘だ。コノヤロウ、チクショウ、オレニウラミデモアルノカ様々のつぶやきが無意識に出てくる。もうホールデも定かに見えないのであきらめ、明日の為にザイルを固定して小ピナクルに引返した。奥行30cm、巾80cm位のピナクル上に、ハーケン陣を敷き体を固定、エアーマットをふくらまして座る。ツェルトを被る頃には空は星で一杯だった。テルモスのココアを飲みビスケットをかじるが、口がモサモサして食べ難い食べ物の事のみが目に浮ぶ。アイゼンを外そうと思ったが不安定な格好をしているので落してはとあきらめた。空中になげ出した足が金属的に病むがどうしても身動き一つするのも大変だ。足下200mのビバークだ。頭がさえてなかなか寝つかれない。2人共黙って100匁ローソクの炎を見つめている。時々雪をとって水をつくり2人ですする。寒い苦しい夜が続く無限の様に。突然C沢の辺りでドーンと辺りの静寂を破って雪崩れた。時々サラサラとツェルトの上をスノーシャワーが落ちる。本当の静寂を伴って夜は刻一刻と更けていった。

12月28日 快晴

いつの間に眠っていたのか？武田にゆり起される。ツェルトは穴だらけになりローソクのしずくが手の回りに固っていた。もう間もなく夜明けだ。東の空が白み始め長い夜の終りも間近かだ。慶応尾根上のC₁に灯が見える。思いきりコールする。分ったらしく、頑張れの声が返ってくる。それから2人で知っている限りの歌を歌う。朝はもうそこまで来ているのだ。太陽が蝶・大滝の稜線に全てを潤す姿を現わしたと同時に思い切ってツェルトを脱ぎ捨てアタックの準備にかかる。立つとフラフラして足元が定らない。僕がトップ昨日の所まではフィクスドザイルを利用して簡単にカンテまでトラバース、アブミを2ヶ使用し乗越し点にアイスハーケ

ンをしっかり叩き込む。武田も快調に登って来る。夏ならここからはコンティニアスで行ける所なのだが、全てに雪がついて堅固だ。武田と交代、バンドを10m程トラバースし、浮石の多い嫌な凹角を直登。33本もあったハーケンも残り5本しかもアイスハーケンのみで適当なリスがないので絶対に落られない。3m程で急に傾斜が落ち、雪面に代った。僕も最後の力をふりしぼって登って来た。登攀終了だ。時計は壊れて正確な時間は分らないが11時前だろう。コンティニアスで雪面を登る。約4ピッチを費して遂に縦走踏に出た。奥穂から槍まで白銀の衣が目にいたい。遂に終わったのだ。限りない喜びが湧いてくる。ザイルを纏め仲間の待つC3へと急ぐ。12時20分C3帰幕。30時間のアルバイトは終わったのだ。

(メンバー 武田雄三・柏 敏明)

(新制11回)

利 尻 岳 (1963年)

長 谷 川 恵 一

利尻岳 (1718m)、それは日本の最北端「稚内」より西に海を隔てる事50Kmに浮ぶ孤高の山である。

この内地の人々から全く見離された様な山の存在を最初に我々に印象付けたのは、北海道に暮した事のある大関氏 (新大8卒) であった。氏を通して利尻岳の写真や西大壁登攀に打ち込まれている北海道の各山岳会の人々の激しく、厳しい登攀記録を見るにつけ聞くにつけ、我々一人一人の脳裏に「利尻岳」の印象は強烈に焼付けられていった。

しかし利尻は遠い。時間的にも空間的にも我々にとっては、遠い遠い存在であった。この空間を飛び越す為には2つの場合が考えられる。

一方は大飛躍であり、他方は徐々に近付いていく事である。長い途とはなろうが、我々は後者を選んだのでした。

長い Step の踏出しは、利尻の話しが出てから丸1年後の1961年夏山合宿に始った。

時のチーフ森本以下5名が、知床半島に7日間、利尻岳にも7日間偵察を兼ねて訪れたのでした。彼等の感想は、約40日近い合宿の最後に利尻を訪れた身心共の疲労のハンディキャップ、ブッシュと脊尾根に加えて、孤島に独特の烈風に悩まされた為に、芳しいものではなく「積雪期以外には態々訪れる程の山 (合宿として) ではないだろう」との事で唯、南稜、仙法志稜の上部、西大壁等は聞きしに勝る迫力をもっているとの報告であった。

翌1962年の4月、新リーダー会は年度合宿計画の中、春山合宿を利尻岳で行う事に決定した。

同年10月、武田、堀田の両名が再度の調査の為に1週間利尻に渡り、船やB.Hの接渉と南稜、仙法志稜のP1までのトレースを行った。幸い船については中村運輸課長、B.Hについては松本支所長、山については鬼脇の工藤氏の協力が得られ、後は計画の実施のみとなったのである。

何分日本の北の果ての事、現地まで3日間 (汽車、船の旅) も掛り、合宿というよりは国内遠征の感が強く、計画検討も慎重に繰返えされた。

—— 合 宿 日 誌 ——

2月25日○

先発の S.L 長谷川以下3名、急行「日本海」にて大阪出発。

2月28日○→◎

本隊 C.L 武田以下10名大阪発。

先発隊「稚内」着、駅には「利礼運輸」の中村氏が出迎えて下さり、いろいろとお世話になる。氏の話しによると、立教大 Party が既に入島しているとの事、氏の御紹介により郵政会館で御世話になる。

3月1日 ○

昨夜来の北東の風で流氷が港内に押し寄せ、出航不能。この1日を利用して、Essen gasoline の調達を行った後、稚内の気象台へ行き、利尻の気象についての色々と貴重な data を戴く。

3月2日 ○

利尻「仙法志」着。海は最良の風、船は順調に進み、やがて遙かの海上に雪を纏った利尻が浮び上って近付いて来る。日本離れした「利尻岳」の偉容は、登攀意欲をかきたてる。B.H は役場の御好意により、旧診療所の一棟を貸して戴けた。

3月3日 ◎

朝、目を覚して驚いた。道路に面した窓は、町内の子供達の顔で一杯である。「動物園の檻の中だ」と苦笑する。それでも直ぐに子供達とは友達になった。神戸より発送しておいた荷物を各 tent 毎に整理する。仕事が一段落した頃、子供達が ski に誘いに来た。それではと腰を上げる。

3月4日 ◎時々⊗風強し。

本隊が到着するまで遊んでいる手はないと、4名で B.C 予定地までの偵察方々一斗罐を9個歩荷する。雪は所によっては膝までもぐる。「ボン山」の麓から真直ぐ北に route を取る。マオヤニ沢の Gorge が非常に遠くに見える。B.C 予定まで後30分位の所に depot して引帰す。「稚内」へ電話連絡して見ると案の定本隊も流氷で足止めを喰っている。

3月5日 ◎

今日も長谷川以下3名で荷上げをする。昨日の帰り、直線的な歩荷 route を作って置いた

ので、かなり楽である。今日は本隊の入島日。学校を終えた子供達と仙法志港に出迎える。

rolling が激しかったとの事であるが、仲々元気であった。今日も稚内の港は使用不能で「抜海」より乗船したとの事。B.H に全員の集結。各係毎に発送した荷物の最後の check を行っている。昨日まで広々としていたB.Hも、急に賑かになり活気に溢れている。

3月6日 ◎後①

全員で荷上げ、各自 skiにseal をつけ、荷物の上に括る。雪は締って居り、初日とはいえ快調の pitch で進む。時々雲が切れて、豪快な buttress が目に飛びこむ。B.C 予定地は仙法志稜と南稜支稜の間マオヤニ沢であったが、南稜支稜を僅かに登った所の肩状の所にB.C を建設する。その間10名が、Depot の荷物をとりに下る。長谷川（3年）・井本・水渡（2年）・横山（1年）の4名がB.C 入りする。B.C は絶好の ski-gelande 夕食までのひと時を利用して練習する。まぶしく輝く海を望んでの ski。振返れば、ローソク岩、大槍、そして絶悪の Buttress が夕映えに傲然と聳立する。

3月7日 ①

風が聊か強いが、今日も好天である。B.H からは ski で第2回目の荷上げ。東稜隊の鷯木（4年）・菅（2年）がB.C入り。ski を付けると楽に歩けるとの事であった。

B.C の長谷川、井本は route 工作。水渡・横山は、C.I 予定地の1200m peak まで double 歩荷を行う。C.I までは尾根巾も広く、簡単に歩ける。1200m peak を過ぎると、尾根は急に細くなり、30m fix-seil を張る。この分だと明日にはC.I が出せそうだ。17時の通信でその件 B.H へ連絡する。Transceiver はは、雑音が入って聞き難い。B.H から魚の贈物が上っていた。菅が、カラスに気を使いながら料理して呉れる。全くこの島のカラスは貧欲だ。

3月8日 ○

天気図では、利尻南沖に低気圧があるのに今日も快晴。北国の弱い太陽であるが、サンサンと照り輝いている。B.H からの荷上げも3回目、もう荷も残り少い。B.C の鷯木、菅は、東稜 attack B.C の偵察と荷上げに向う。ヤムナイ沢側の南稜支稜上に tent 予定地を決める。他の4名はC.I へ荷上げ、元気な井本や水渡は重荷にもめげず、折からの太陽でクサリかけた雪を Lasselle する。立教大の人達はもう大槍基部に tent を出した様だ。tent を張り終えて一息した所へ、村上（3年）、伊丹、塩路（2年）、八島、河野（1年）が上ってくる。好天を利して足を延したとの事。村上はその儘C.I 入り、B.Hより森本（4年）、

神前（2年）外3名 B.C 入り。

3月9日 ○

昨日にも増しての上天気。全くツイている。C.I の村上・横山は、荷上げの詳細を打合せに B.C に下る。B.C から7名で C.I への荷上げが行われた。これで C.I・C.II 用の荷物は、全て C.I に集結された。長谷川・井本は、C.II 予定地の大槍基部までの route 工作に出る。メガネ岩への travers に60m、その上部の急な雪壁に40m、更にそれに続く knife-ridge に50mと C.II まで fix-seil の連続である。立教 Perty は昨日 attack に成功し、今日撤収との事。しばし彼等と歓談する。大槍直下100mの所を C.II 予定地として、少量の荷を Depot する。ローソク岩がマオヤニ沢をはさんで直ぐ前に聳り立っている。60m位の高さだろう。菅と水渡が入って来たので、C.I は6名となる。明日には C.II が出せそうだ。

3月10日 ○→⊗

いよいよ今日でB.Hを引き払い、武田（3年）は一気に C.I へ、竹中（2年）、塩崎（1年）は B.C 入り。B.C からは、東稜隊の鵜木、伊丹が3名に support されてattack Base 入り。C.I からは6名が C.II 建設に向う。昨日のfix工作に依り、少々荷を背負っても安全に歩ける。連日の好天もそろそろ怪しくなって来た。C.II 予定に着く頃には、gas が濃く雪まで降り出して、knife-ridges の登高には一段と神経を使わせる。長谷川・井本・水渡の3名はその儘 C.II 入りし、一応これで南稜上に点と線を確保する事が出来た。結局、南稜マオヤニ沢側支稜に B.C、ヤムナイ沢側支稜に東稜・東北稜用 attack B.C、そして南稜1200mに C.I、大槍直下100mに南稜の attack B.C たる C.II と計4張のent が、建設された訳である。

3月11日 ⊗

Bt.C より塩路、河野の両名東稜 B.C へ入る。C.I の連中は、少量の荷上げと共に武田の C.II 入りの support を行う。B.C～C.II 間は視界が利くが、C.II より頂上にかけて濃い gas に覆われて視界は全くの零。武田の C.II 入りにより各 tent の人員配置も完了、明日から attack 体制に入れる。後は東峰 attack 隊の speed-up の為に、P.II の頭まで fix 工作をすれば万事 O.K である。本隊行動開始より6日目にして体制完備、まずは目出度い事である。猶、B.C より B.H に初の Post-runner として、竹中・八島・塩崎の3名が下った。

3月12日 ◎時々⊗

連日の行動で少し疲れた様だ。B.Cの post-runner を除いて、他の全員休養をとる。各 tent では例によって例の如く×賭博場が開かれ、card や dice に興じたり、凝った essen を作ったりして休養日を過す。この分だと予定より大分早く attack に出れそうなので、明日より少しずつ食糧を下してもらう事に決め、その旨 C.I に通信する。

3月13日 ⊗→◎

東稜 attack B.C より、鷯木他3名で東稜を attack。以下東稜隊伊丹の山日記より抜萃する。

朝5時起床、7時10分に tent を出る。ヤムナイ沢に下って東稜に取付く、(中略) 岳樺の多い支稜を通して東稜上へ。tent の対面まで1時間。その後は立教隊の trace を歩くので楽だが、スプタこと河野は体重のせいか少し遅れる。立教は、南稜 C.I より少し高い所(1300m位か)に tent を張っていた。其処から trace は消え、自分達で lasselle する。広い急な斜面を登って、殆んど直角に左折する。尾根は左は雪庇、右はエビの尻尾が出来て非常に細く、ヤバイ。大体南稜C.Ⅱの高さ辺りか。Anseilen。gas の合間から頂上の2つの Peak が食パンの様に見えて来る。南稜は登るにつれて近付くが、東北稜は一向に近付かない。12時過ぎ、頂上頂下に着いたが、雪の状態が不安定なので其処から下る事にした。(以下略)

C.Ⅱの4名は、大槍基部より P.Ⅱの頭までの fix 工作に出る。一昨日、昨日と降雪があったので、大槍までの lasselle がきつい。一旦ヤムナイ沢側の悪い traverse をして再び尾根上に帰る。大槍まで後10m程の間は全くの knife-ridge で、ひどい所は Eisen の巾もない。この間計60mの Seil を fix。大槍はマオヤニ沢側を treverse して、仙法志稜との junction に立つ。P.Ⅱの登りは、ridge 通しに40m fix する。P.Ⅱの頭からは P.I 及び Buttress が手に取る様に眺められる。P.I・P.Ⅱ間の col への下降は一気に切れ落ちて底が見えない。Bush を掘り出して、登用 Seil 40m 2本を fix して足らず、時間があるので〔武田・長谷川〕〔井本・水渡〕の2Partyに分れて大槍を登る。(別記)

3月14日 ◎→⊗

菅・塩崎・八島の3名は B.C を引き払い、東稜の attack B.C へ入る。C.I の tent site は一番風当りの強い位置に有り、マオヤニ沢側から吹きつける風に tent を潰される。他の tent は果状なし。

3月15日 ⊗風強し

各 tent とも停滞。昨日からの強風は依然として衰えをみせず、C. I の連中は潰れた tent の修理も出来ず苦しい1日を送ったとの事。体重の軽い者は小便にも出なかったらしく、春山後日談によると、連中は朝比奈氏の「穂高山冬期登山」の場面そのものの事をやったらしい。即ち、Kocher の中に排水し、その上 tent の中でその Kocher を引っくり返したという話。全くもってお粗末の一席である。

3月16日 ◎時々⊗

伊丹・塩路・菅の3名、風が止んだので東稜 B.C よりC. I へ救援に向う。tent を直した後、C. II まで足を延ばす。この強風の2日間何んの連絡もなかったので、下の tent では非常に心配していたとの事。非常に申し訳けない。夜 tent を出ると満天星空、仙法志・鬼脇の町の灯がチカチカと光って美しい。chance 到来と、attack 隊の2名を tent の奥へ寝かせて、水渡と水作りに精出す。

3月17日 ①風強し

期待通りの好天に、計画通りの武田・井本の両名東峰へ attack をかける。(別記) 本峰登頂後は東稜を下って東稜 B.C に入る。

東稜 B.C の連中は C. I の tent を、C. I の者は C. II の tent をそれぞれ東稜 attack B.C へヤムナイ沢側支稜を通して撤収し、長谷川・水渡の2名は attack 隊を支援して P. II 頭まで、南稜上の fix Seil を全て回収して東稜 B.C に入る。朝5時の通信でこの旨を各 tent に連絡して tent 出発。P. II までは、fix Seil の使用で楽に行ける。

P. II の頭で30分程 attack 隊の登攀を見守った後、fix Seil の回収にかかる。P. II からメガネ岩の最底コルまで回収を終えた頃から急に強風が吹き始め、小さな氷片が頬を叩きつける。やっとの思いで東稜 B.C へ下ると、先に下った連中は tent 建設を終えて寛いでいた。16時30分、天気図を取っている所へ、武田・井本の attack 隊無事に帰幕する。東稜 B.C には、久し振りに全員の顔が揃い賑やかな事。念願の南嶺よりの attack を果して、残る東稜、東北稜も戴きとばかり登攀意欲が横溢して居る。後1日の好天を得れば、春山即ち OK である。

3月18日 ◎時々⊗

停滞。風は無いが視界が悪いので休養とする。遅い朝食の後、竹中・塩路・水渡・河野・八島の5名が、B.C に置いてある ski を取りに下る。午後から全員で ski を楽しむ。

3月19日 ⊗時々◎風強し

停滞。天気図は低気圧の接近を示し、雨を伴った強風が吹き荒れる。終日 tent でゴロゴロと過す。

3月20日 ⊗風強し

停滞。昨日からの強風は衰える所が益々激しくなり、tent を吹き飛ばさんばかりに吹きつける。Essen の block を取るにも一騒動だ。各テントから SOS が入る毎に飛び出し、応急処置を行う。殆んどが Joint の折れである。

3月21日 ⊗時々●風強し

停滞。風は最高潮に達した。凡そ40m近いと思われる風が吹き嵐れる。張り綱がブチブチと切れ、Pole の Joint は真鍮の Pin が折れ tent は見るも無慚な型となり、まるで大きなNylon の風呂敷を頭から被った様である。話しに聞いた「利尻の風」それを身をもって体得する。さしもの強風も、夕方になって幾分衰える。天気図に依ると明日は何んとかなりそうである。早い目に寝る事にする。

3月22日 ◎→①

① 東北稜（長谷川以下2名）——（別記）

② 東稜（村上以下8名）——（別記）

予想通り数日來の強風も取り、晴天に向いそうなので以上2つの attack に出る。鶴木、武田の両名は tent 内整理の後、放置して居た、南稜 B.C を見に出かける。あの強風をまともを受けたにもかかわらず、入口が開いていたのみで被害なし。さすが細野の tent と驚嘆する。

Biwak 必至と思われた東北稜隊も、17時間の苦しい行動により無事成功した。今日の2つの attack をもって目標も全て成功裡に終了した。明日は撤収と大巾に余した Essen を開放し、思い切り食べる。

3月23日 ○

予定より10日間も早く計画が終了したので、Gasolin や Essen が大巾に残って撤収も可成りの重荷となる。手早く荷物を作り上げ、出来た者から順々に ski を付ける。伊丹、塩路は ski が滑りすぎると悲鳴をあげる。他の者は思い思いの route を取って南稜 B.C に trace を付ける。B.C から B.H へは2回に分けて荷下げする事にして、半分 Depot として残す。入島時の寒々とした雪原は、今ではすっかりその姿を変え、所々黒い地肌さえ見せて北国の遅い春を告げていた。B.H には待ちわびた様に子供達が遊びにやって来る。夜は合宿成功

を祝って、景気良く Whisky の栓が抜かれた。

(新制10回卒業)

「小窓尾根事故報告」 (1957年)

雨 宮 宏 光

1957年3月18日劔岳小窓尾根で、岳友福永隆一君が逝って7年、今度40周年記念号の出版に際し、編集者より「小窓尾根事故報告」と名付けられた原稿依頼をうけたのでありますが、当時の記録の正確な記述で、事故報告とするのは、時報第4号、追悼号の内容と重複するきらいがありますがその点お許し下さい。

「当時の部の状況」

劔西面集中を唱えて3年、3度登った早月尾根を除いて考える時、前年偵察がなされた小窓尾根をとりあげようという一種のムードが春山合宿となって現れ、更に「新人養成の繰返し」が部発展を阻害するものであるとして、学生山岳部にあっては、進歩は「飛躍」によってのみ可能であるという誤った理論を正しいと誤認していたのである。

先に謂う集中登山とは、劔西面の登攀可能なルートを徹底的に登るという事であり、限定された一つの場所で登山する事が部発展の手段、方法として最良であると結論づけられていたのであります。かように進歩のための手段、方法そのもののために登山を行い、加えて一種のムードで登山する場所を定めるという。出発点に於て既に私達は大きな誤ちをしていたと考えます。そのいずれもが「進歩」という事に対する誤った考え方に帰納するものであって、登山に於いて、一つの結論づけを行う事がいかに危険なものであるか思い知った次第です。

「1957年春山合宿」

参加者——雨宮、麻島、竹中、伊丹、福永

目的——小窓尾根より小窓王を経て小窓谷。

池ノ谷左俣より三ノ窓コル

以上の二計画を計画的ビィヴァークをもって行う予定でありました。勿論「ハイキャンプ」より再び出発する登山が最大目的であり、そのためにも、劔稜線上に至るコースとして時間的に有利な谷の完全な偵察を目論んだのであります。

「事故発生状況」

1957年3月18日零時40分小窓尾根登頂の目的をもって出発せる、麻島、竹中、福永の3名は18時頃小窓谷側のルンゼを誤って下降、暗闇の中、ヘッドランプを頼りに、竹中、福永、麻島

の順で40mザイルをスライド式に利用して11ピッチ下り、そこで一旦立止り、ヴィヴァークを3人で協議せんとした時、スリップ、数回バウンドして谷底迄落ちた。この墜落により、福永は死亡、麻島は頭部及び全身打撲、顔面擦過傷、竹中は左手首複雑骨折、右足首捻挫す。3人はそのままヴィヴァークする。事故発生時刻は19時30分頃と推定される。

「現場での処置」

スリップした3名は小窓谷にたたきつけられたのであるが、ザイルは切断していなかった。最初竹中がすぐ横にいた麻島のうめき声で彼の存在を知り、次に福永を探した所、竹中の下方5m位の所に仰向けに横たわっている福永を見つけた。直ちにザイルを引張って福永を竹中の側に引寄せたが、福永は呼べども応答なく、鼓動も完全に停止し、瞳孔反射なく、竹中は福永の死亡を確認した。時に19時04分頃と推定される。3人はその場でたまたま横にあった麻島のサブよりツェルトを出してヴィヴァークした。

3月19日

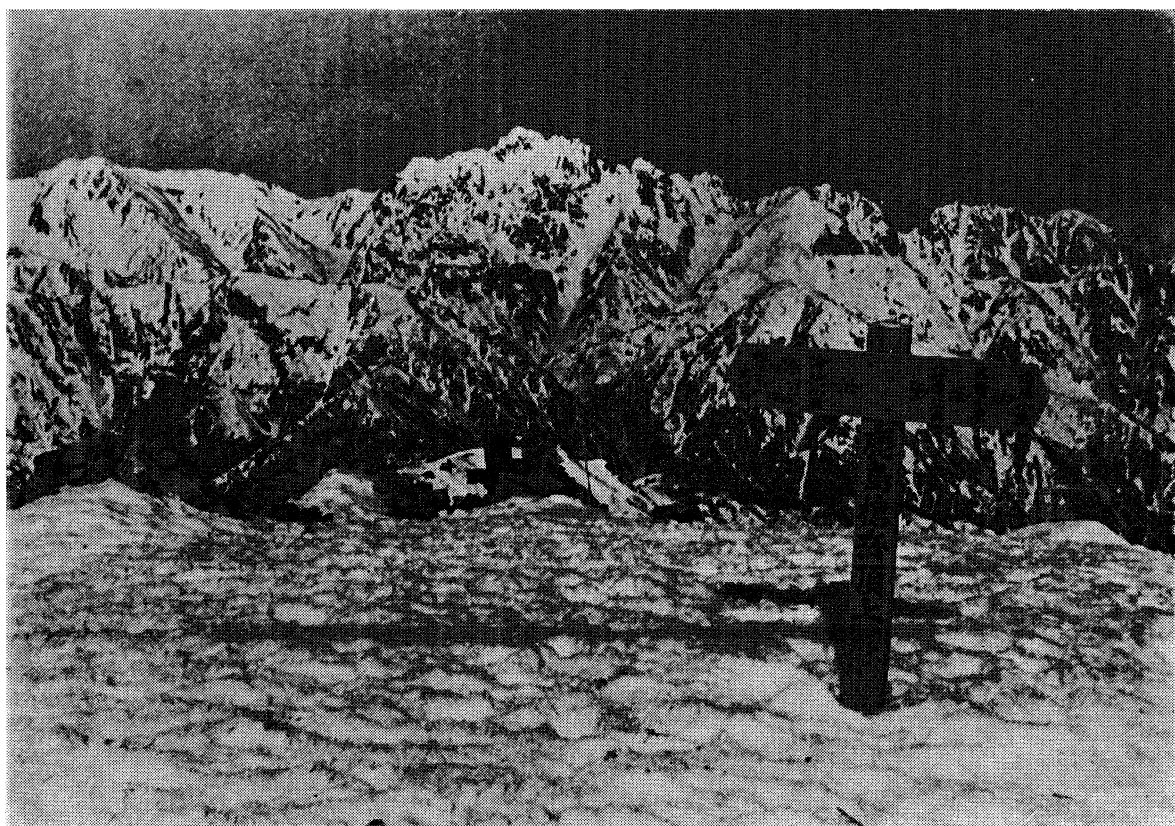
午前3時～5時頃麻島は、天幕の雨宮、伊丹に救援を依頼すべく出発、約2時間遅れて竹中も出発、午前6時40分頃大窓、小窓出合附近で雪上に眠っている麻島を竹中が発見、そこが雪崩の危険なき場所である事を確認して、麻島をそのままに、白萩川を下り、7時50分テント手前100mに達し、ここで雨宮と出合った。(以上竹中寛報告より)

3月18日、恐ろしい程の静寂と闇に耐えつつ、小窓谷はその夜明をどのように待ち望んだことであろう。身も心もうちひしがれて、ツェルトにくるまり、えぐるような寒気にふるえ、雪面の輝きをひたすらに待焦れていた君達の事を考えると、登山に於ける失敗がいかにか許されな
いものといえ、その悲惨さに、僕は泣きたいような気持になる。ひたすらに助けを待つ心に、何もしてやれなかった自分の無力に今でもすまない気持で一杯だ。傷ついた身をひきずって、雪崩におびえつつ下った白萩川のどれ程に長かった事であろう。S字峡でフィックスザイルにもたれて、「アメさん、デカが死んだ」と顔中クジャクシャにしていた疲れきった竹中の表情を、僕は忘れる事ができない。

陽炎のたつ雪面に顔を腫れあがらせて、ふうふうになって歩いていた麻島の姿、もしあれが雪山の敗北の姿なら、失敗もあれで許してやってほしいと願うのだ。

(新制4回卒業)

Ⅲ 山 岳 寮



鹿島頂上より劔岳



甲南時代のことも

西 村 格 也

僕が甲南高校（旧制）に入学したのは、大正15年の4月である。だから今から37年程前のことである。つい昨日のことのように見えるが、既にそれだけの時間が経過しているのだ。光陰矢の如しと言うが、つくづく時の経つのに早さを感じる。

入学試験を受けたのは、その年の早春だった。当時の甲南高校は7年制で、尋常科（旧制中学）が4年、高等科（旧制高校）が3年であった。大部分の生徒が尋常科から高等科に上って来るので、高科等に外部から採用されるのは極めて小数であり、僕が入学した年も文科は甲類（英語）乙類（独逸語）合せて井上宗次（大阪府立大教授）伊藤愿（甲南山岳会員昭和31年逝去）の両君に僕の3名だけだった。そんなわけで、僕は受験はしても入学出来るかどうか自信はなかった。第一甲南と言えは関西の学習院と言われ、生徒は富豪の子弟が多く、野育ちの僕には縁の遠い存在に思えた。だから遥々関東から受験に来たのだから、恐らくは2度と再び接することは難かしいであろう処の明眉な風光を満喫しておこうと言うわけで、試験が済むや否や僕は直に聞き及ぶ須磨の浦へと足を運んだ。折からうららかな春陽はサンサンと降りそそぎ有るか無きかのおだやかな波がのたりのたりのたうっている。沖には大きな帆をあげた船がゆったりと滑って行く。僕は緑の松を背にして白砂の上に大の字に寝そべり、春の日ざしを満身に浴びた。そしてしみじみと春ののどかさを身にしみて感じ、これだけで遥々やって来た甲斐があったと思った。

校長は丸山環と言われた。前に岡山の第六高等学校長をされた方で、当時の高校長中の第一

級の方として令名があった。色白の、小肥りで、頬に大きなホクロがあり、頭の大きな方だった。僕も名前だけは以前から承知していた。生徒間では「丸カン」と言う愛称が用いられており、丸山先生などと言うと、誰のことかと思う程に、「丸カン」が通用していた。

生徒監は大倉本澄教授だった。英語の主任教授で、当時の高校英語では有名な大家だった。ずんぐりとした、目の鋭い、小男だった。若い時分に米国で苦学して学位をとられた由で、あちらのベランメエ調だと胸に入ったものだった。理想の学生像として、西欧流のヤングゼントルマンをえがいて居られ、これが甲南の理想の人間像でもあったようだ。当時の所謂高校のパンカラタイプは、甲南では御法度だった。敝衣破帽、洋服に下駄と言ったものは勿論受入れられず、髪をのばせば手入をせよ、洋服を着たら靴をはけ、と言った躰だった。

英語の試験になると、物凄く沢山の単語や熟語を無数に並べられ、これには生徒は随分悩まされた。英語の時間には、クラスが16名と言う小人数の上に、大勢にあてられるので、1時間に1人で2回や3回あたることは珍らしくなく、油断も隙もあったものでなかった。ところが先生はお耳が少々遠かったので、小声でムニャムニャ言って置き最後に「……………です」と「です」だけ大きな声ではっきりと言って、堂々と椅子に腰をおろすと、先生は「よろしい」と言って次に進まれた。この辺のこつは野村恵二君（野村合名）などはどうに入ったものだった。

教務主任は神田正悌教授だった。博物の御専攻で、篤学の士だった。小柄な中肉の、一見温厚な学究的な先生だったが、仲々肚のすわった頭脳的な方で、策もあり略もある。正に機略縦横と言った方だった。教務主任と言う職務の関係もあり、校内各方面に腕みをきかして居られた。後日予算問題その他で、山岳部切っの斗士伊藤愿君初め香月、檀それに僕など一緒になって縦横十文字に切り込んだりしたが、仲々容易には陥落されなかった。一筋縄や二筋縄ではいかない方だった。丸山、神田、大倉の三先生が甲南の3本柱と言った感だったが、その中の中心的な大きな柱は神田先生だったように思う。

僕は口頭試問の際「丸環？」先生から、入校志望の理由をたずねられた。「立派な先生方がおられ、設備もいいから」と答えた。後日伊藤愿君にその話をしたら彼から、甲南の教育の理想を知らぬのかと言われた。甲南は官学の画一教育に飽きたらない、関西財界の有志が、人間の個性を尊重し、これを伸長することが教育の本義だとして、人造りの基礎をここに置き、この崇高な教育目標を達成し、国家社会に貢献せんとする雄大な理想実現の場として甲南を創立されたのであって、甲南では理事者と言わず先生方と言わず誰もがこの理想実現に非常な努力を続けて居られるのであった。根が鋭敏で、世故にもたけており且つ又関西にそだって、中学

も同志社に学んだ彼はその辺の事情にも詳であった。

学校で式典や行事があるときまって校長や理事長（当時は平生釧三郎氏一後の文相）から、この教育の理想を説き聞かされた。聞くたびに又か又かと言いながらも、人間の個性の尊重すべきこと、これを伸長拡充すべきことをたたき込まれていった。平生理事長の令息三郎君（呉羽紡常務）が同級であったし、同君がガマと言う渾名だったので、又ガマの親父さんが来たと言いながらも平生理事長の理想に燃える烈々たる斗魂にうたれずには居られなかった。

平生さんはラグビーがお好きだった。あの断乎として突進し、不幸途中で斃れるものがあったても、残った者だけで頑張ると言うあの果敢で気品のあるラグビー精神、その依って来る、イングリッシュセントルマンシップを高く評価しておられたようだ。それで甲南の廉あるラグビーの試合には、よく応援に来られた。土砂降りの雨の中に立って、平然として、熱心に激励されたこともあった。その真剣な態度には全く敬服させられた。

入学許可の通知を受けたときはさすがに嬉しかった。入学式の前日にやって来て、学校の西の丘の上にあった、甲南高校岡本寄宿舎と言う大きな門標のかかった木造2階建の寮に這入った。するとその日の午後京大法学部出身の斎藤憲吉さん（ピンセン社長）が親戚の森さんを伴い、訪ねて来られた。背後は六甲の緑の連山をひかえ、前には波静かな内海を望み、なだらかな丘陵の上に建った白亜の学舎や、広々とした運動場を見まわり、斎藤さんもすっかり気に入られ、こんな恵まれた環境で勉強出来るのは幸福と言われた。そして高校の3年間をこの教室とこの運動場との生活で終始するようと言われた。僕がその言葉通りの生活をしていたとしたら、僕と山岳部との関係は出来ていなかったわけである。

それにしても甲南高校をとりまく環境はすばらしかった。その後僕が2年生のとき、僕は六甲山の登山口に近い住吉の下宿に移っていたが、父が出張の途次神戸を通過し立寄って呉れたが、父もこの環境にはつくづく気に入った模様で、日本一つ環境だと賞讃した。僕が青春の3年間をこの恵まれた環境で、多くの愉快的な山友達を得て過したことは確かに幸福だったと思う。

斎藤さんは学校を一巡すると、僕を宝塚に案内された。気持のいい郊外電車も、今迄の僕の乗ったこともないものだった。（当時の関西の郊外電車は確かに関東のそれより進んでいたと思う）あの大きな華かな歌劇場にも一驚した。折柄大劇場では伊太利のグランドオペラが来ていた。森さんは熱心に聞き入っておられたが、音楽のわからない斎藤さんと僕には、猫に小判で、一幕聞くとすっかり飽いてしまい、2人は大浴場に飛び込んでのんびりと歌劇の終るのを

待った。

その晩は旧温泉の旅館に泊った。斎藤さんは、これからは学校の教室と運動場の往復の生活に終始するのだから、一度だけはどんな所か知らせて置こうと思い案内した。今後は来るなよと言われた。当時も宝塚少女歌劇は仲々盛んで、甲南の生徒の中にも熱心なファンがいたようであるが、根が音楽などとは関係の薄い僕には、宝塚は縁の遠い存在で、僕はもっぱらスポーツに力を入れて行った。

翌朝目をさますと時間がない。入学第1日から遅刻でもあるまいと、朝食もとらずにかけ出した。長い橋を一目散につつ走り、阪急電車に飛び乗って遅刻だけは辛うじてまぬがれることが出来た。

学校が始まって間もない或る土曜日の宵だった。檀君（甲南山岳部創立者の1人、昭和10年8月没）が寮へ訪ねて来た。そして芦屋のロックガーデンに行くから一緒に来いと言う。ロックガーデンには香月君（甲南山岳会長）がキャンプしているから、それに泊めて貰うのだと言う。春の夜の徒然なるままに、僕は彼に同行した。そして芦屋へと暗い夜道をたどって行った。穏かな、匂うような春の夜道だった。この散策は楽しかった。そしてこれが僕がロックガーデンを訪れた最初であり、僕を山岳部へ結びつける絆ともなった。

その夏（大正15年）初めて日本アルプスへ登った。葛温泉から燕一大天井―槍―上高地のアルプス銀座である。同行は、檀、伊藤、磯田、小林、山口、島の諸氏であった。始めて見る日本アルプスの山々は、高貴で雄大で美しく、全くすばらしかった。天候にも恵まれて、この山行は全く快的だった。そして僕を更に強く山へと引きつけて行った。

それまでに僕が登った山と言えば、富士山に筑波山に高尾山くらいに過ぎない。高尾山は小学校の遠足に行ったのだし、筑波山は中学時代に学友の土棟清正君にさそわれて同行したに過ぎない。富士山は中学4年の夏休みに滝ヶ原の兵舎で学校の軍事教練があり、それが終わった翌日全員で登った。午後の3時頃滝ヶ原を出発して、途中八合目あたりの超満員の岩室で仮眠し翌朝御来光を拝して、頂上に立った。関八州を遠望したときは爽快だったが、登山自体はごろごろした火山礫の上をただテクテクと歩くだけのことであって、3700mの高所に登った感慨はあったが、ただそれだけのことであった。

そんなわけで、僕はそれまでは山に対する特別な関心はなかった。それが夜の芦屋行き、夏の日本アルプス登山などから次第に山と結びついて行き、檀とか香月とか伊藤とか言った愉快的仲間たちと青春を謳歌しながら、山岳部とのつながりを強めて行った。

元来僕は日本のアルプスの西麓、飛騨の山の中で生れ、山とは関係深い人間の方なのだが、甲南にはいるまでは、自分から進んで山に登ろうなどと言った、特別に山に興味を引かれるようなことはなかった。だから檀とか香月とか伊藤とか言った諸君がいなかったら、僕と山との深い関係は生じていなかったに違いない。苦勞して汗水流して山に登ることもないではないかと言った気持だった。それがそんな諸君と人生を論じ、山など登っているうちに、他人から見ると誠に苦勞千万にみえることが、本人は一向平気で何でもなくなり、山へ山へと深入りして行った。山友達と言うものは恐ろしいものだ。

当時山岳部長は伏見義夫教授だった。地理を担当しておられた。白皙血気の青年教授で熱のこもった講義をしておられた。尤も次の時間が語学だったりすると、予習が間に合っていない連中は講義そのもので、次の時間の単語の字引を引くのに大わらわだった。またどうかして居眠りなどして舟でもこいでいる者があったりすると教壇から白墨が飛んだりした。

その年の秋、甲南の大運動会で文理対抗競技と言うのが行われた。100mとか砲丸投とか言った素人には余り面白くない種目であるが、その幾つかを選んで文科と理科の選手が対抗するのである。檀君は理科の応援団長だった。瘦型で背も余り高くはないが、眼光の鋭い眉目秀麗な男振りだった。制服の上に教練用の外被を無造作に引っかけて、大声で叱咤している。大真面目で、旗をふり頑張っている。大体相手方の文科の方では、文理対抗なんて意味がないと言って問題にせず、応援団すらないのだから、張合のないこと甚しい。だのに彼は一生懸命だ。声をからして指揮している。檀とはそんな男だった。やると言ったら誰が何と言ってもとことんまで頑張り通す強靱さを持っていた。

檀君には小橋君と言うファンがいた。理一の生徒でありながら文学青年をもって任じ、歌を好み、寮歌や応援歌を自作して歌っていた。これが檀公檀公と言って檀君の処へよくやって来ていた。檀応援団長が高らかに歌っていたのも小橋君の作だった。

檀君は明朗なスポーツマンで、誰からも愛されていた。運動神経が発達していて、何をやっても器用にこなした。ロッククライミングもスキーもあざやかだった。ラグビーをやっては名スリーコーターとしてあざやかなキックや疾走振りをみせていた。

彼の家は阪神国道をへだてて住吉神社の前にあった閑静な落付いたお家だった。家には瘦せ型で眼光慧々たる、落付いた法律家の御尊父と、スラットした綺麗なお母様と、小柄ながらガッシリした大阪高校生の兄さんが居られ、いかにも円満で楽しい御家庭のように拝察された。

香月君はその頃から小肥りで、仲々茶目気が多かった。やたらとポケットの多い洋服を作っ

い、これは便利だと得意がったり、転んでも絶対雪がはいらないと言う、胸までとどくズボンを作ったりしていた。肥っているにも拘らず仲々器用で、ロッククライミングは学生山岳界の第一人者だった。ラグビーの試合ともなると、その猛烈なタックル振りは天晴見事なものだった。

彼は朝は遅くまでよく眠った。どんなにあたりが騒がしくても平気で寝ていた。我々は「寝る子は育つ」「丸々と肥る」と言って冷やかした。然し夜は何時まででも平気で起きていた。言わば典型的な宵っぼりの朝寝坊だった。夙川の堤防をおりたすぐそばの彼の家で、夜おそくまでよく論談した。彼は物凄い宵っ張りなので、夜はいくら遅くても平気だった。腹がへるとチーズを厚くはさんだサンドイッチや湯気のホカホカ上る天井などを御馳走になった。山男は大食だからと言って大きな井を2個ずつ出されてびっくりしたこともあった。余りおそくなると、よく奥の離れ座敷に泊めて戴いた。

彼は山に対して烈々たる情熱を燃やし続けて居たし、甲南山岳部創設に対する功は高く評価されていたと思う。

伊藤愚君の家は山蔭にあった。それで故郷の名産として、日本海の荒海でとれる蟹が自慢だった。僕等はしばしば御馳走になったが、味はたしかによかった。伊藤君は実にしっかりした男だった。理論家でもあり、実践家でもあった。また猛烈な頑張り屋だった。1500m競走など走らすと、たいした練習もしないのに専門家の選手連に互して、真っさおになっても最後まで頑張り、堂々と入賞したりしていた。体は余り頑健と言う方ではなかったが、人の2倍くらいの大きな荷物をかついで、ハアハア大きな息をはきながらも、一步一步と力強く歩を進めていた。僕等は彼にコッテ牛と言う尊称を奉った。彼自身も、俺は精神力で頑張ると言っていた。

この頑張りにはあらゆる方面に見られ、白を黒と言いつける論理と、弁舌と、心臓と、この頑張りで、着々と仕事を進めて行った。彼はまた確固たる人生観を持っていた。命長ければ恥多し、50、60まで生きる必要はない。俺は人生を太く短かく生きるのだと言っていた。彼は幾多の華々しい足蹟を残して、若くしてこの世を去ったが、彼としては思う通りの人生を送って満足だったと思う。

ロックガーデンは芦屋駅から近く、出入りが便利だったし、また変化に富んだ岩場であってロッククライミングの練習場としては格好だった。山岳部では毎日曜日のように出掛けて練習した。僕も段々と之に参加するようになり、自然と山岳部の人間となっていくた。然し僕が山岳部としっかり結びついたのは冬のスキーを通じてである。

僕とスキーとの関係は大正13年の正月、僕が中学三学の時に遡る。その頃父が飛騨の神岡に居り、その前年神岡に始めて富山からスキーが這入り実用的であるし又スポーツとしても仲々面白いから練習にやっ来ていと、東京にいた僕に言われ、冬休を利用して出掛けて行った。大体12月下旬には3、4尺の雪は欠かしたことの無い処なのだが、その年は生憎と年末まで全々積らなかった。処が大晦日の晩から降り出した雪が一夜で3尺程も積った。早速庭で父からキックターンや平地行進などの手ほどきを受け、近くの六郎の緩斜面に行って暗くなるまで滑った。真暗になると斜面に電燈がともされ、滑った。尤も滑ると言うより、転んだと言った方が適当かも知れない。それでクタクタに疲れてしまって、その日は家に帰りつくと、晩飯も食べずに、翌朝まで死んだように寝てしまった。そんな練習を4、5日もやったので、スキーの面白さだけは知っていた。

その頃のスキーは未だ両杖ではなく、物干棒のような長い一本杖で、スキーはアルパインスキーのリリエンフェルトだった。靴に合わせてバッケンの調整が出来、スキーの裏面には溝はなかった。

そんなわけで、その冬、氷ノ山に行くと言うので僕も欣然参加した。これは檀、香月、伊藤君らが R. C. C. の西岡氏等の一行に同行したものだった。僕が1日おくれて夕刻東京から着くと、皆が部落のはずれまで迎えに出ていて呉れた。西岡氏等は仲々のベテランだし、僕等はスチームボーゲン一つ出来ないビギナーである。夕闇迫る山腹で、遙か彼方においてきぼりをくって、チクショーと思いもしたが、スキーの醍醐味は充分味わえたとし、今後の山行きにはスキーは絶対に必要であるから、これを先ず練習しようと話し合った。

幸い、体育の上林先生が富山高校の内山一雄先生のお知合いであった関係で、その3月の春休みには内山先生に教えて戴くことになった。内山先生は御専門が体育であったし、その研究に欧州まで外遊された権威者だった。背の低い瘦型の小男で、どこか田舎のお百姓と言った感じが、あり、朴訥な話し振りで、親しみやすい方だった。場所は宇奈月スキー場で、先生はわざわざ富山高校山岳部員2名を助手につれて来て下され、初歩から実に懇切丁寧に教えて下さった。後年僕も頼まれて人にコーチしたりなどしたが、そんな時にはこの時の内山先生の懇切な御指導振りを思い出して、それを手本とするように心がけた。

この時の合宿は、宿舎は豪勢な温泉旅館だし、旅館は当時のこととて積雪期は割合とすいていた。クタクタになってスキー場から帰って来ても、一風呂あびて夕食をすますとまたもや元気を回復して、トランプや花札などをやり、夜も仲々楽しかった。女中もひまなのでよくやっ

て来ては花札をやった。そんな時に活躍するのは香月君だった。彼は仲々博才があり、花札の名手だった。「香月」の若旦那など、冗談を飛ばしながら、仲々もてた。スキー技術としてはステムボーゲンを徹底して教えて載いた。短期間ではあったが、お蔭で、ステムボーゲンに対する自信のようなものが植えつけられた。テレマークとかクリスチャニヤと言った技術も教えて載いたが、自信をもって使いこなすまでには至らなかった。

やがて新学期になって（昭和2年4月）僕も2年生に進んだ。そして山への関心、山岳部との結びつきは益々強固なものになっていった。この年の山岳部の委員長は松本甫さんだった。温厚な学研的な紳士で、お父様は京大の教授で、銀閣寺のそばに住んで居られた。この夏は、なるべく多くの日本アルプスの山々を歩き度いと思い、葛温泉から烏帽子、黒部五郎、三保蓮華、槍、穂高、上高地のコースを選んだ。一行は檀、松本、野田、山口、土岐の諸君に僕の6名だった。葛から一気に烏帽子までの登りは辛かった。三保蓮華の下りでは膝がガクンガクンになった。然し何と言ってもアルプス中央道の眺望はすばらしかった。槍の西鎌尾根で風雨にあい、そのまま肩の小屋まで逃げ込んだ。この登山での感激は小槍の登頂だった。その感激は若き日の思出として躍動している。天候がはっきりしないので、穂高行きは取り止めて、梓川ぞいに上高地に下った。

その冬は越後の関温泉の笹尾でスキーの合宿を行った。神奈山の下りですっかりボーゲンに自信をつけた。この時に参加した伊藤芳郎君がゲレンデで端正なフォームでクリスチャニヤをこなして居たのが目に浮ぶ。又この合宿では伊藤愿君が1人で小箱の蜜柑を1箱見事に平げて皆を驚かせたりした。

3年生になる（昭和3年4月）と高校の最高学年である。この頃には伊藤愿君は既に学生山岳界にその人ありと知れわたった第一人者となって居り縦横無尽に活躍していた。

夏には檀淳、野田真三郎の両君と共に、黒部から剣立山の登頂を試みた。途中小黒部で徒渉の個所を間違えて、違った沢を登り、途中の尾根で一泊せざるを得ないはめに陥入った。幸い天候に恵まれていたので、翌日難なく尾根を下って、徒渉場所をもとめてことなきを得たが、もし荒天に出合っていたらどんなになっていただろうと、今思い出してもゾッとする。登山には天候の影響の大きいことをつくづく感ずる。

教練の教官に田村元一中佐が居られた。当時は中等学校以上の学校には現役の陸軍将校が配属されており、これが学校教練の指導に当たっていた。それで学校の先生方に山岳部を理解して

戴く必要があると考えた我々は、或る日曜日に田村先生を芦屋のロックガーデンに招待した。先生は熱心に説明を聞かれた後、慣れない手つきでザイルを捌き、我々と一緒になって岩壁をよじ、チムニーを登り、懸垂を試み、終日ロッククライミングに興ぜられた。靴が滑ってお困りの様子だったが、ロッククライミングと山岳部とに対する認識は深められたようだった。我々は引き続き諸先生を御案内した。

昭和3年の春には六甲山頂で大キャンピングをやり、その際伊藤忠兵衛理事を御招きした。赤々と燃え上るキャンプファイヤーを囲んで、この実業界の精鋭からのお話はつきなかった。夜がすっかりふけてから伊藤理事は腹が減ったと言われ、罐詰の残りを集めて残り火にかけて煮つめ「美味いぞ」と言って我々にも勧められた。「僕は若い時分苦労して育ったのでこんなものが好きだ」と言われた。食べてみると仲々美味だった。この若い理事の旺盛なファイトと食欲には一驚した。翌日は大きな体をゆさぶりながら、有馬まで我々と一緒に歩かれた。

戦後公営事業委員会の委員をして居られる時、金木戸発電所の建設問題について、三井金属の山本副社長に随行して伊藤委員をお訪ねしたとき、自ら飛騨山中の現地まで足をはこれば直に開発を許可されたがその迅速明快な決断には深く感謝している。今も金木戸発電所は神岡鉱山の主要発電所として、亜鉛鉛の生産に大きな役割を果たしている。

その年の暮京都大学の笹ヶ峯のヒュッテが完成し、各高校の山岳部が招待された。僕は檀君と共に之に出席した。田口駅で下車して、当時既に会名高かった木原均先生を初め京大山岳部の方々に始めてお会いした。この時早大OBの元オリンピックスキー選手の麻生武治氏が来て居られ颯爽たるスキー振りを拝見した。笹ヶ峯は附近に妙高、火打、焼等の一日行程の山が取り囲んでおり、これらを登りまわるのには恰好の所である。その時は火打に案内された。麻生さんはシールもつけずワックスだけで同行されたが、その体力馬力には敬服した。

翌春3月積雪期の槍岳に登頂した。一行は伊藤、檀、大島、吉田、湯川に僕の6名だった。前日未だ明るい内から床について、夜半前から起きて、一の俣の小屋を出発した。一同ランタンの明りをたよりに、新雪をふんで登高した。雪は深かったが、交替でラッセルにしながら順調に進んだ。槍沢の登りもたいして苦労は感じなかった。肩の小屋についたのは明けだった。小屋は内部も吹き込んでいたが、ここで小憩して、スキーもアイゼンに履きかえ、頂上に向った。途中小雪がまいていたが風はおだやかで、やがて頂上に立った。曇天で視界は零だったが、積雪期の槍の頂上に立った感激は入った。下りの滑降の爽快さは忘れられない。

このようにして僕の高校3年間は、山岳部の生活を通じて大変豊かなものとなり、多くの親

しい友達に恵まれてその後の人生を楽しいものにした。長い人生の流れの中からみれば3年間と言うほんの僅かな期間ではあるが、高校3年間の山岳部の生活は幾多の思出を残し、人生に裨益する処甚大なものがある。今後の山岳部がすこやかに伸び、部につながる方々が御多幸でありますように、心から祈念して止まない。その為には先ず部員各位がお互に協力して助け合い、頑張り合って行くことだ。部には色々の人が、人にはそれぞれの考えがあり行き方がある。それを一色に塗りつぶすのは、そう言う行き方もあろうが、それは考えものだと思う。登山意識の高い人も低い人も、高度の技術を要する山登りをしようとする人もそうでない人もいる。そういったいろんな人の混然たる集りが山岳部なのである。前者を行くものは華々しい、兎角これに眩惑され勝になる。然し後者を軽視すると大衆から遊離したものになり、大衆から遊離した学校山岳部は力弱きものになろう。創立40周年を迎えた甲南山岳部が今後ほんとに大きく、健全に発展することを衷心から願って筆を擱く。

(旧制4回卒業)

自分のこと、山のこと

楠 木 正 夫

この正月鈴蘭小屋で甲南大山岳部 O.B や現役の方々に会い、山岳部40周年記念号を発刊するから是非何か書く様との要請があった。その後気にかかり何か大きな負債を負っている様で早く片付けないと気が重い。で駄文を綴ることとする。

自分のこと——自分は甲南時代バスケットボール部に席を置き、又大学時代もバスケット、サッカー、ラグビーとそれぞれの部に臨時雇的に引張り出されていたので、本部的に山と取り組んだ事は一度も無い。

戦死した弟義昭(旧高昭16年卒)が山岳部に属していて、戦後芦屋ロックガーデンで山岳部の慰霊祭が有った時、弟の遺児と共に自分もそれに出席してもらい、その後いつとはなしに弟義昭の代りに甲南山岳部 O.B の名簿に名を連ねられる様に成った。

そんな訳で伝統ある甲南山岳部の一員として、ましてや大先輩として偶されるのは誠に心苦

しい次第です。が自分としては光輝ある甲南の名をけがさぬ様心掛けて山に又事業に精進しています。

山のこと——自分と山とは非常に古い仲だ。甲南小学校の時土曜日全校で裏山へ行くのが毎週の行事だった。尋常科の初年は近所の悪童共と苦樂園から奥池方面を遊び廻った。其後尋常科の終りから高等科にかけては専らバスケットに心をうばわれ、他の事には手が付かず、おかげで大学入試も一度美事アウトと成った。

大学時代はバスケットも半分遊びで試合にのみ出て、平常の練習などやった事も無いので、ひまな日に一番安上りの六甲へ登った。3年間に六甲の間道のすべてを歩き尽したので地図がぼろぼろに成ってしまった。以上の様に自分としては山岳では無く低山をさまようのみであった。

大学卒業後今で言うアルプス銀座の様な処へ夏に行ってみた。即ち昭和11年白馬へ、昭和12年立山から黒部針の木徒走、昭和13年槍穂高とまだあまり開けない日本アルプスの夏を味わったがその後夏山はやめて、もっぱらスキー行きに専心している。

スキーのこと——昭和4年2月入学試験の連休を利用して始めて本格的にスキー行をした。竹中鍊一君（S5）、西村確二君（L7）と3人で神鍋スキー場へ。第1日に大雪が降り北のカベから直滑行をするも腰までもぐって全然滑らない。3人で1日雪をふみつけるのに全精力をついやした。其後2日同じ事の繰返しで、スキーとは実につまらんものだと感じ3日間で広い神鍋のゲレンデに自分等3人と最後の日に1人のスキーヤーが来場したのみで、今から見るとその様な事だ。勿論スキーもイタヤか水ナラの単板で、スチールエッジなどは見られない。

其後しばらくスキーにも御無沙汰している。大学卒後昭和9年暮から10年正月にかけて神戸の連仲と数名で菅平へ。これからスキーが病み付きと成った。神鍋の時と異り雪の量は適当だし、前年来た名手シュナイダーの名付けたシュナイダースロープや猫岳等と新しい視野が開けた。

昭和11年正月は始めて甲南山岳部 O.B 連の乗鞍冷泉小屋台宿に参加し、位ヶ原よりの帰路冷泉小屋近くで新調のイタヤスキーを樹に撃突さして折ってしまったのを今でもおぼえている。とに角直滑降以外出来ないスキー技術だった。

昭和12年正月も前年同様冷泉小屋で暮から正月を過ごす。

昭和13年正月。同様冷泉へ。この度は帰路を大丹生越で平湯へ入り一泊し、高山へ出た。同行島、福井の両君等であった。平湯は秋以来入湯客無く私等数名が4月振りのお客であった。

一昨年正月高山駅で平湯行スキーバスが数台満員で出るのを見てびっくりした程、当時は飛弾側の冬はひっそりしていた。

昭和14年正月。喜多又太郎君等数名で万座から白根を越えて発哺へ。帰り焼額竜王を滑る。白根越で大吹雪に会い山頂近くの無人小屋で2時間以上ふるえて過し、のぞきの下降でひどい目に会いとっぷり暮れてから発哺へたどり着いたのも思い出の一つだ。

昭和15年正月。冷泉小屋、門川、武田、山口 兄弟、中村、島の諸君等10名程。甲南山岳部の合宿に合流する。

昭和14年4月。遠見小屋から五竜方面へ喜多又太郎（L8）、神沢得之助（S12）、灰谷彬（L12）の三君と。

昭和15年正月。冷泉へ。この年弟義昭再度応召し、遂に帰らず。

昭和16年正月。位ヶ原山荘。立派に小屋が出来た。当時の先輩や部員の努力の結晶だ。山口兄弟、林、藤田兄弟、湯川、伊藤兄弟、赤松等の諸君と。戦争も益々広範囲に拡大し若い人々は次々と応召し、物資も不足勝と成って来たが、まだここ迄はかなり良かった。

昭和16年2月。沢田君（S7）外と鹿沢へ、丁度浅間が小爆発を起し、美事な噴煙を写す事が出来た。

昭和16年3月。甲南には関係なく発哺の住友寮へ数名で行く。

昭和17年正月。位ヶ原山荘。山口兄、北川の諸君等数名。

昭和17年3月。位ヶ原山荘。門川君等数名。いよいよ戦争も熾烈と成り長いスキーをかついで汽車に乗るのも遠慮せねばならん時代と成って来た。

でスキーも大野川や伊吹山麓に預けて、相棒も無く1人で正月をスキーで楽しんだ。そんな時代が戦後も続いて今日の様な猫もしゃく子もの時代に成るとは考えられなかった。自分としては幸い応召もせず、昭和11年の正月から今年迄、戦時中に1回と35年に結核療養中との2回家でお正月を迎えた以外は、山の美味な空気を吸って1年間の穢を落す事が出来た 幸者である。

戦後の事も書き度いが、あまり長く成るので一部のみ記す事とする。

昭和25年正月。位ヶ原山荘。自分の外に近くの東大農学部実習小屋に、江原、名村、野本の三東大生と小屋番とでお正月を過した。一般にはまだスキーをする迄の心のゆとりが少かった時代である。

昭和30年から33年の正月には京大スキー部 O.B の福田芳郎君（昭和24年文科1年修.京大卒）と主として志賀

高原や野沢で正月を過した。この頃から次第にスキーブームと成って来た。

古いアルバムをひもとき乍ら、ここ迄書いて来たが、無精者の為写真丈は張り付けて有るが誰が誰だか判らない。名前と顔が一致しない。何しろ現役の諸君の生れる頃の話しだから。が何よりも心を打つのは弟義昭始の写真中の半数近い人々が戦死其他で今は亡い事だ。改めてこれ等諸兄の瞑福を祈らないわけには行かない。

遺族の方々や又は戦災等で当時の写真を失くされた方々で、自分と戦争行を共にされた方は、すでに古いボヤケタ写真ですが、連絡下されば当時のアルバムを持参し昔を語るよすがとし度いと思います。又一部原板も保管されているものも有りますから焼増しする事も可能かと存じます。

最後に——山もスキーもブームです。少くとも甲南山岳部の1人1人が秩序ある行動をし、他人に迷惑をかけない様心懸けて、それを1人でも多くの人に浸透する努力をおしまないで下さい。

では又

(旧制5回卒業)

伊藤愿さんの思い出

田 口 二 郎

この正月私は長年手をつけたこともない、ガラクタの書架をひっくり返して、昔の、といっても昭和の初期から8、9年までのことだが、当時甲南高校や京都大学から発行された山の雑誌を探し出した。せっかくの休みにもっと気の利いた読みものが有りそうなものだが、実はそれには、伊藤愿さんのことを調べるといった下心があった。

故人の思い出を書くに当って、私は社会に出てからの愿さんについて、余りにも知らぬことに初めて気がついた。愿さんは、昭和7年に京大を卒業しているが、暫くしてから北京に渡り、京大のヒマラヤ計画の下調べのため、単身渡印した昭和11年から12年にかけての時期を除けば、終戦後引揚げて来るまでの生活の本拠はずっと北支にあった。初め松方さんや浦松さん

が関係していた太平洋問題調査会の研究員として渡支したが、やがて北支の最高経済顧問だった平生釆三郎氏の秘書になって、大陸時代の愿さんは大いに羽根をのばしたらしい。引揚げの前は、青島の領事をしていた。社会に出てからの愿さんを一番良く知っているのは、京大の今西さんや西堀さんやそれに加藤泰安君や支那時代の愿さんの面倒を良く見て、愿さんと房子夫人との仲人役ともなった松方さんであろう。愿さんはちょっと東北人みたいな重厚さを持っていた反面、非常に人懐こい方で、会ったら忘れられない一風変わった魅力の持主だったから、壮年時代の故人については、いくらでも語り手がいると思う。日高さんも会報に、愿さんのことを懐しみ惜まれて書いておられた。

私も戦後、外地から帰ってきたのだが、昨年11月、愿さんが2カ年の斗病の甲斐なく遂に他界されるまでに、幾度御会いしただろうか。いつぞや東横線の日吉の家に泊りがけでお邪魔した時、飼っていた山羊が犬にかみ殺されたとかで、愿さんは庭に絞々と電灯を引いて、山羊の皮を剥いていた。「みっともないから、夜にしてくれ、といったんですよ」と夫人は苦笑していたが、当の愿さんは、昔、上高地や南股で兎を剥いた時そのままの如何にも楽しそうな顔付だった。帰国してから、安本から建設庁に行き、講和条約が出来て勤務先の渉外部が解散と決ったので、身の振り方に頭を悩ましていた頃、お会いすることがあった。或る土建屋からとても面白い話があるのだが、自分の役所とのコネクションを目当てにした泥沼商売かも知れぬから、気が向かん、しかし、金はある所にあるものだね、というような話を聞かせた愿さんは飄々として、大ていなことにはめげない筈なのに、この時ばかりは、戦後私達大かたの生活を揺さぶった嵐にもまれて憂鬱そうだった。しかし間もなく大蔵省にポストがあって、在籍のまま亡くなられた。愿さんには、今いったような潔癖なところがあった。京大を卒業して直ぐに大阪朝日に入ったが、社会部の警察署廻りが嫌いで直ぐ飛び出した。私の父の処に相談に来て、高文を受けることに決め、1年許り打ち込んで勉強し見事にパスした。学校時代は、山専門だったから、高文に受かった時には、私達も驚いた、頑張りも有名だったが、頭も良かった。

私が欧州から引揚げて来て間もなく一足先に大陸から帰っていた愿さんが、鎌倉を訪ねて来て下さった。10年振りの再会である。しかし、愿さんを見て一番喜んだのは、私の老母だった。息子を2人失くし、娘達もかたずいて淋しく暮した母にとって、愿さんの再現は、平和で良き時代であった一昔前の、暖い日陽のさす環境の中で親しく行き来した人の懐しい訪れを味わした。

京大生の頃、愿さんは私達の阪神魚崎の家によく泊りがけでやって来た。両親、兄弟、妹達

の、共通の友人となって、私達は愿さん、愿さんと従兄のように親しんだ。昭和10年頃、私達が魚崎を引き払って鎌倉に帰って来てからも、それは愿さんが印度から帰国した年だから、昭和12年だったと思うが、帰国したその足で長谷の家に訪ねて来てくれて、それから間もなく、近くの浜辺の旅館の離れを借りて、2、3カ月滞留したことがあった。ぶらりとやって来て、よく母を誘って釣に出掛けた。私は当時、サラリーマン1年生で大森に下宿していたが、土曜日に帰ると、夕方頃愿さんが母と釣竿を下げて帰って来て、勝手口で手を洗っていた光景などいま思い出す。愿さんの話好きは、すでに伝説になっているから、書くに及ばないが、うちに来ても、愿さんの話相手は1人去り、2人去り、遂には母1人になってしまうことが多かった。

印度で、横文字に刷った名刺の「^{ゲン}愿」を「ジェネラル」の略字と間違えられ、大変な歓待を受けたという話や、フランス語のパーティに出て飯がまずかったという、如何にも英語のうまいような語を、私の母は深更に及んで何度聞かされたかわからない。

私は愿さんに山の手ほどきを受けた者だし、先輩の愿さんは、よく私達甲南の山の合宿にもやって来た。山の新知識や愿さんの抱負など、誰よりも多く聞いたはずである。それなのに私の記憶から、登山家としての愿さんの姿が、私の望むように、思うように出てこないのは、家族つき合いということが、私の愿さんに対する気持の強い基調になってしまっているのも、強いて山の友人として、故人に焦点を合わすことに、若干の努力を必要とするからであろう。

しかし、愿さんを登山家として見直すために、古雑誌を少し丹念にひもといた時に、私は故人が持つことの出来た、ちょっと日本人放れした独創性と線の太さに、今さらのように驚かされた。愿さんの足跡を辿って見ると、その時代としては画期的な着想と実行とが次々に発見されて私を驚かす。これは必ずしも私の身びいきのせいとは思われないのである。それは、時代にして昭和の初期から7、8年頃までとって良い。

戦後、昭和26年、愿さんは「米国土木事業の行政、技術研究のため、3カ月、欧米に出張を命ず」との辞令を手に入れて、半年専ら欧州に遊び、スイスでは昔とった杵づかで、マッターホルンとヴェッターホルンに登って来た。しかもマッターホルンは、独りで登ってしまった。こう書くと、何でも人並みのことをすることを嫌った愿さんが、スイスでは「マッターホルン単独行」を決行したのか、と誤解を受けそうだから、愿さんのためにも記して置きたいが、私の手許にある愿さんの登山手記を読むと、他のパーティについて、何となく独りで頂上まで攀ち登ってしまったのは、予約した案内人との連絡の手違いがその原因であって、その手違い

は、愿さんがもともとフルゲン尾根を希望したのに、案内人はその尾根を恐ろしがって、遅延作戦に出たことから起ったものらしい。若しフルゲン尾根を登っていたなら、日本人ではその経験者はないのだから、面白い土産話が聞かれたに違いない。ともあれ、その案内人とは料金のことで不快感をなめさせられたらしく、ゲリンデルヴァルドは感激だったが、ツェルマットは失望だった風に、房子夫人に書いていられた。6カ月の旅に愿さんは九十九通の便りを留守宅に寄せている。堅人だったが、愛妻家でもあった。それから後、マナスル遠征の実現に必要であった官庁との折衝に、役人だった愿さんは惜しまず力を貸された。しかし欧州から帰った愿さんは、体も少し不調であつたらしく、「ヒマラヤは、もうこんどは過ぎるなあ、次は南米かアフリカに行きたい」等といったことを思い出す。しかしその愿さんの心の底に、山への思慕がどんな形で宿っていたか、若い頃の、山への、ヒマラヤへの情熱を知っている者には、病床にあってもそれが埋火のように燃えていたとしか考えられない。

私が初めて愿さんを、というより愿さんの存在を知ったのは、もう30年も昔の昭和の初期の頃だ。

私達のいた甲南は、初めは中学だけだったのだが、大正の後期に、7年制の高校に昇格したもので、高校生になったといっても、丸帽が2本の白線に変っただけのこと、生徒の大かたは阪神の住宅地帯から小学生のように徒歩で登校するいわゆる、ボンチ達であった。今でこそ違うが、当時の阪神間には、映画館や都会的な娯楽設備ひとつなく、全く田園的な雰囲気、そこで育った甲南の生徒の気質は大都会の学生とも地方の官立高校の生徒とも違ひ、武骨ではないが、といって洗練されているわけでもなく、至極のんびりしている一方、スポーツには達者だったという手合が多かった。たまたま学校の裏に芦屋のロックガーデンがあったので、早くより、藤木九三氏らのRCCの人達の影響を受けて、芦屋の岩場を大人よりも巧みに登り降りする少年のグループが出て来た。この少年達はやがて高校生（勿論旧制の話）になる年頃になるのだが、それよりも2、3年前に、甲南は高校に昇格した。処がクラスが定員に満たなかったので、毎年、小数の欠員を外の中学からの志願者で埋めていた。私はまだ低学年だった私の幼い眼にも、他校から来た上級生が、甲南生え抜きの彼等と同級のボンチに並べ、おしなべてずっと大人に映ったことを覚えている。この人達が柔道部や弁論部を作って、ボンチの甲南も、一寸高校らしくなった。

甲南の尋常科（中学のこと）に入った頃、好奇心から大講堂の弁論大会をのぞいたことがある。顎が四角に張って大人ばい風貌の人が「人生とは何ぞや」とか難しい講演題目をかかげて

壮重に落ち着き払って話していた。後年、それを話して笑ったが、その弁士が同志社中学から来た愿さんだった。私は当時、愿さんと交っていたわけではなく、年令からしても中学の1年坊主と青年の違いがあったのだから、当時の愿さんの姿を鮮明に思出すことは出来ないが、愿さんという人は、甲南に移ったその年から、誰もが一目おく、老成したアンビシャス人といった印象を、与えたように思われてならない。この愿さんも甲南に来てから初めて山登りの世界と接触した。そして最初、愿さんの手をとったのは既に芦屋で岩の味を知っていた同じクラスの香月とか檀といった甲南ボーイ達だった。大正15年のことである。処で、ホームグラウンドの芦屋では、どのチムニーもナイフエッジも猫のように登り降りしたこの連中も、漸く青年期に入った許りなので、それまでは遠出をしたことがなかった。大正15年の夏、愿さんを変えた甲南ボーイ達は生れて初めての日本アルプス入りをして、燕、槍ヶ岳を縦走した。結局実現は出来なかったが、穂高行も計画の中にあって、出発前には「藤木先輩の御宅に厄介になって穂高に就いての知識を得ることに懸命だった」（甲南高校山岳部報創刊号）

愿さんは仲々凝性だったが、この日本アルプス処女行では、夜間撮影に熱中して、当時山などに持ち歩く人の少なかったマグネシウムで、皆を大いに閉口させたらしい。梓川の寒い河原に皆を並ばせて、何度やっても点火せず、その一幕は結局失敗に終わったが、天幕に引上げてからも、マグネシウムの効能について専門知識？を長々と開陳してゆずらなかったという。

愿さんが初めてスキーを履いたのも、大正15年の暮のこと「仲間と早く練習せずんば、優秀なる登山は不可能なり」と最初はただ履き方の練習のため、2回許り六甲ゴルフリンクスに出掛けた。明けて昭和聖代正月3日より兵庫県下、氷の山の麓の鉢伏方面へ練習に出掛け、冬学期になると、何事にも熱心なる愿はしばしば学校をさぼりスキー場に出席した……今日はクリスチャニアを練習せり、明日はテレマークを復習せん」（甲南高校山岳部報告2号、香月慶太氏）と大いにつま込んで勉強した。

昭和2年、愿さんにとっては高校2年目の夏が来た。1年間芦屋でみっちり岩登りの経験を積んだ愿さんは、心秘かに期する所があって、仲間の烏帽子、槍ヶ岳行や南アルプス組に加わらず、穂高行を発表した。

夏に皆と計画して果さなかった穂高行きだった。しかし今回の目的は月並な縦走ではなく、2年前に早大一行によって初登攀が行われ、それ以来どのパーティも通過した実績のない北穂高の滝谷であり、また4年前に慶応の人達が初めて登った小槍であった。

昭和2年暮発刊の甲南高校山岳部報創刊号はまるで、伊藤愿、単独行の記念号と言っても良

いものだった。もっとも編集責任者の愿さんは、石川欣一氏や藤木九三氏から原稿を御願いしたりして、部報を世に出すために、大いに工夫もしたし、苦勞をなめたらしい。しかし、改造や中央公論等の月刊雑誌が五拾銭の時代に、一地方高校の登山報告が定価を堂々と八拾銭と謳って、大阪、神戸の書店に並べられ、しかも大いに買手がついたのだから、今日考えると時代も若かったし、愿さんのように情熱とアンビションに燃えた若者に応える場所は、山にも世の中にも何時でも用意されていたわけだ。

滝谷を独りで登り、槍の肩に廻って、小槍のトラヴァースに、単独行を記念する1本のハーケンを打込んだ愿さんは、まだまだ力が余って「ちょうど槍の肩にいた、山の親友、北野祥太郎を誘い、何処かに出掛けようとした。その矢先、穂高の遭難を知って」、屈強な2人は今田重太郎に頼まれ、「重太郎を先頭に、雨の穂高を人夫3名、鮮人2名と走り出した。南岳の三角点で時計を見て驚いた。殺生小屋から南岳まで、普通、2、3時間の行程を、42分で飛ばして来たのだ。ちょっと休んでまた駆け出した」

この単独行は、大げさにいわして貰うなら伊藤愿の名前を天下に馳せることになり、その年の秋には、大阪の放送局は、この高校2年の若者に、「厳肅なる山の姿と犠牲者」なる講演を依頼して、放送した。放送局としても愿さんが年は若いが、一かどの大人の風格を備えていたればこそ、安心して依頼したのだろうが、その愿さんが内心に秘める所はまだまだムシャウな青春の情熱であったに相違なく、さきに述べた甲南高校山岳部報に、愿さんは、その奔放な気持を次のハンス・モルゲンターラーの詩に托して謳っている。

「有難いことに、若い時には気軽なものだ。私はしばしば1人で出掛けた。それが軽はずみだって？そういう君の言葉こそ軽はずみじゃないか」

昭和3年の春、愿さんは初めて積雪期の日本アルプス一槍、穂高をたずねた。しかも2回に亘って、初めは、今田重太郎と2人で槍ヶ岳を極め、第2回目には甲南の仲間と、再び上高地に入り槍ヶ岳、前穂高に登っている。ところで重太郎と槍ヶ岳をすませて、更に涸沢にスキーを乗り入れた愿さんは、間もなく、しかもごく身近かなところで、登山界を震駭させる大事件が起ろうなどとは、予想もしなかったに違いない。愿さんの手記を次に借りよう。「沢のスキーデボからプリズムで眺めると前穂高北尾根の第五峯に4人の姿が見えた。……自分達は北穂高に向ったが濃霧で引返しスキーデボで休息していると、慶応の人達が3人降りて来るのに出遭、大島亮吉氏の遭難を知った」

北アルプスの積雪期の初登頂は、大かた大正10年から14年の間に行われているが、(山岳第

30年第2号、日本山岳会30年、黒田孝雄氏) この時代を大島亮吉氏の名前と離して考えることは、まず不可能であろう。私は愿さんが当時の登山界第一線の檜舞台であった穂高、この高名な登山家の劇的な結末に、偶々立会人みたいな立場におかれたことは、それまではただガムシヤにひたむきに岩を攀じスキーを滑らせていた彼に、複雑な感銘と教訓を与えずにはおかなかったものと考え。それは愿さんにどういう心境の変化をもたらしただろうか？

最近加藤泰安君から聞いたのに次のような話がある。昭和3年の夏、同君がまだ中学の4年か5年だったか、ともかく涸沢にキャンプしていた。ひどい雨続きで閉込められていた或る日の夕、上の方でホーイ、ホーイと調子外れの呼び声が旺んに聞えた。面倒なので外に出なかった処、間もなく霧雨の中から肩巾の広い男が姿を現わして、会いざまに、初対面の泰安君に向かって「君は万国山岳救援信号を知らぬのか」(注、ドイツ、オースタリー山岳会制定になる)と叱りつけた。それが愿さんであった、とそこまで話して、私達は思わず声を出して笑ってしまったが、自分でそれを信ずる正論は押し通さずにはおかないのだが、そのやり方が少し野暮たくて如何にも稚気があるので、結局誰もがそのいい分を通させてしまう、といった若い当時の愿さんの面目がありありと眼に浮ぶような話だった。

しかし、この話を思出すたびに、私は昭和3年の穂高行と相前後する頃から、愿さんが、パウルケの「アルペンの危険」をドイツ語辞書と共に座右の書として、肌身離さず持ち歩くようになり数々の山の洋書と取り組んで、内面的な山の世界の勉強に転じ初めた事実を併せ考えないではいられない。誠に、山を始めて、早くも3年に、愿さんは若さ1本、檜の単独行やただのレコードメーカーに倦き足らぬ心境に入り始めたようである。それには愿さんが生得の独創的なものへの趣向や登山界一般の激しい進展からの刺激もあったろうが、大島亮吉氏の遭難が愿さんの心に登山界の過去を将来とわけ距てる象徴的な事件として、時と共に深く印象されて行ったのではないか、愿さんの登山求道に転機的な影響を与えたのは大島氏の悲劇ではなかったのか、しかとした立証も持たずに私は何となく、こうした解釈にとらえられる。

春の檜、穂高から帰った愿さんは、5月に学校をサボって檜、薬師、立山の大縦走に乗り出した。

RCCの辻谷幾造氏と2人で、数名の人夫を連れて行ったこの縦走は、5月の下旬とはいえ、未だ雪深く埋れた高度3000mの尾根筋に、何日も続けて行動するという意味で、登山の形式内容共に画期的なものだった。つまり、それまでの積雪期登山が、谷から頂であり、それが終って一般風潮は積雪期のヴァリエーション・ルートの開拓に進もうという時に、人の念頭に

なかった積雪期の縦走という方向に眼を向けたのである。

勿論、愿さんのそれからの山登りは、この形式の追求に終わっているのではない。昭和4年5月、京大の高橋健治、西村格也両氏と行った雪の早月尾根、同年の夏、私の死んだ兄貴の一郎と初めて登ったジャンダルムの飛驒尾根、昭和6年10月、京大パーティのリーダーとして鹿島槍カクネ里等。その時代の人達に与えられ、またその人達にしか与えられなかったヴァリエーション・ルートの開拓の機会を、十二分に鑑賞享受して、実績を後世に残している。しかし愿さんの登山遍歴に素晴らしい開眼の機会を与えたのは、今述べたスポーティな新登踏の開拓を通じてではなく、昭和5年5月の雪の縦走ではなかったろうか。これについては、私はかなりの確信を持って、そうだといえる。というのは、愿さんの年代記もここまで来ると、私自身も年令的に成長して、山の世界を通じて、愿さんと直接に接触し始めるところまで来るからである。大縦走から帰った愿さんが、一つの宿命的な課題に取憑かれたことを、山岳部のルームに群がる私達餓鬼連にも知らされるようになった。課題というのは——ビヴァークの問題だった。縦走してわかったことは、夏小舎が使えぬ場合があること、また、突発の吹雪に強制露営を余儀なくされる危険があること、これに対処するには、軽量で嵩の張らない装備が当然必要になってくるのだが、もとよりナイロン等は夢にも浮ばぬ時代のことだから、当時考え得る最良、最軽の防備といえ、ツェルトザックと毛皮の寝袋の二つにつぎていたといつて良い。それでは、ツェルトザックという限られた防備で、どの程度の安全が保証されるだろうか。さてこの疑問を裏に返せば、高所の気象とそれが人体に考える影響はどんなものかという問題が提起される。

パウケルの「山岳の危険」からその一章を訳出して雪崩に取り組んでいた愿さんの研究心の銚先は、甲南後期から京大初期にかけて、山岳気象と雪中露営の問題に向けられた。

甲南高校山岳部報第2号の「アルペンクリマに就いての一断片」、関西学生山岳連盟創刊号の「雪中露営の諸問題」、この二つの労作は、愿さんが沈潜していた山の世界の最も重要な断面を物語る。愿さんよりも、高校の年輪で一廻り若かった私達が、昭和4年頃から、春の横尾や岳川に天幕を張って、誠に無味乾燥な気温や温度をノートする、气象台ゴッコをやらされたのも、この時代の愿さんの情熱の発露であったろう。

しかし愿さんが、ビヴァークや気象の問題に熱中している中に簡単な装備で高所の雪中で安全に長時間滞在出来るならば、冬山の規模を縦にも横にも、素晴らしく深く掘ることが出来る筈だという啓示に到達したとしても、それは全く論理的な結論であらう。

私は愿さんのビヴァークに対する異常な関心の中に、当時のエヴェレスト登山の中心問題、即ちノース・コルより高所に二つ目の天幕を張ることが出来るか——という問題が投影されていたかどうかは知らない。しかしこの頃からの愿さんの視野の中には海外の大きな山々が浮び初め、京大に入った愿さんの手に依って、間もなくパウル・パウアーの「ヒマラヤに挑戦して」の訳本が上梓されたところも、当然の成り行きとして納得出来るのである。

「ヒマラヤに挑戦して」は登山界の注目を浴びたが、その半ばは訳者がその序文で端的に評したように、「これは如何にして、ヒマラヤ遠征を行うかの、新しいテキストブックである」という訳出の実践的意図のためであった。

昭和6年暮から正月にかけて、京大は、富士山においてわが国最初のポーラーメソッドによる登山を行った。愿さんが京大3年生の時である。

この時、愿さんは隊長の西堀さんと2人で、富士山頂に寝袋だけで三晩寝た。愿さんとしては、これは雪中露営の一実験であったろうが、当時誠に勇気の要する試みであった。しかしそれよりも画期的であったので、京大パーティの用いた隊員と運搬のリレー式活用だった。1日に往復できる富士山に、多くの人間と日数を費して行った京大の行事は、幾多の批評を呼んだがやがて愿さんの手で、主催者側の意図するところがアサヒスポーツに発表され、それ以来、極地法は海外遠征へのキャッチ・フレーズともなった。

登山をはじめてからそれを文字通り激しく追求して飽くことを知らなかった愿さんが、大学を今西さんや西堀さんのいた京都に求めたのは、私には当然のように思えるし、またその人達と共に行った富士登山は、愿さんの世界をさらに高い高原に持って行くための梯子のような役割をしたことと思う。

その新しい世界の彼方には、ヒマラヤがその細かい氷のひだをキラキラさせて輝いていたことであろう。

早くもその当時、その氷のひだを最も確かな眼で、見初めた人達の1人であった愿さんは、残念ながら、遂にそれに手をもって親しく触れることなしに他界した。

私は愿さんと余りに親しかった故に、登山家としての愿さんの足跡を記す場合に均衡を失しておらぬかとそれを非常に怖れる。しかしそれにも拘らず私は筆をおく前に、友人加藤泰安君から聞かされた、今西さんの次の述懐を、愿さんにとっては、山の先輩であり、良き友人でもあった今西さんの次の言葉を同氏の許可を待たずして、ここに結びの言葉として引用する不慮な衝動を抑えることが出来ない。

「新しい形式が極地法でなければならぬことは、自分達にも良くわかっていた。しかし、如何に実現するか、これについての具体案を示して実行に移したのは、誰あろう愿だ。自分達が愿から教えられたところはまことに多い」

(1957年2月25日鎌倉にて)

伊藤愿氏略歴

昭和5年12月日本山岳会入会、会員番号1265

昭和31年11月27日死去

(旧制8回卒業)

昭和7年の涸沢の思い出

近 藤 実

昭和7年の夏と言えば私は高校2年、満17才で今ならばハイティーンというところ、少年から青年に移る頃で心身共に未熟な筈だが、自分では無論一ぱしの大人の積りでいた。

山に夢中な頃で、芦屋の岩場ではかなり訓練を続けていたし、前年の12月には田口君や故伊藤新一君等と鹿島槍のカマ尾根を登ったり春の東尾根を覗いたりしていたからもう一人前の登山家気取りで其の頃の涸沢合宿に参加した時の得々たる気分を思出させる。

尋常科の少年達をつれて槍の肩で1週間ばかり幕営生活をした後涸沢の合宿が始まった。

リーダーは当時高校3年の足立君で他の3年生諸君は大学入試準備の為に参加出来なく、したがってアクティブメンバーは吾々2年生以下の者である。他に O.B. として西村雄二君が参加していた。

近頃の穂高は全然知らないが、夏は大変こみ合っていると聞いている。当時は学生の登山熱もかなり盛んな頃ではあったが、まだまだ涸沢のカールボーデンは静かなものであってせいぜい数パーティが這松の間に幕舎を見せているだけであった。

毎日ザイルパーティを数組ずつ出してあちこち登りに出かけたのだが、当時此の附近で未だ手がつけられていない所は北穂の第一尾根が前記の第4峰バットレスしかなかった。先ず手始めに第一尾根を北穂から下降することにした。年下の山口君をパートナーとして出かける。第

1日は時間が足らず途中でもどり、2日目に第4テラスまで降りた。此の下の20mばかりのフェースを降れば大体この尾根をマスターすることになるのだが、此処がなかなかむづかしい。最後に懸垂しようとするときハーケンが抜けかけて随分驚かされた。

結局このフェースを残して帰ったが、1週間後、伊藤兄弟が左端のリッジを登ってこのコースを完成したのであった。

扨て四峰のバットレスは午後から五峰の頂上に寝具を担ぎ上げ這松の中に野営地を作ってから、其の夕刻偵察に出かけてみる。この岩壁は御存知の通り朝の間しか陽が当たらないので、夕方になって五峰よりの雪渓から見上げると黒々と陰鬱な印象を与えながら威圧的に聳え立っている。

まだ誰も手を触れていない岩壁ということは、青年にとって確かに魅力がある。夕陽に映えた断雲がのしかかるようなスカイラインに輝いている。頭の中で登攀ルートを画いて野営地に帰った時はそれでも何か自信に満ちた気分になっていた。岩登りの小さなテクニクについて或る程度の自信があり、体力にも恵まれていたので、ルートの偵察で自分の能力の範囲にあると確信すると不安が一掃されたのである。

翌日は、予定通りの登踏をとって登り続ける。少しガブリ気味になったフェースではナーゲルシュエを蹴いで裸足になった。下のテラスでは山口君が岩角にビレイをしながらのんびり上を見上げてまだかいというような顔をしているがこちらは小さなリッベを股に挟んだままホールドを探すこと30分。が、とにかくやっとこれを乗り切った。

其の後ピッケルをさし込んだサブルックや靴を次々引き上げたが、ルックはザイルを解いた途端に落石で飛んでしまった。これが後で甲南山岳部最初のアクシデントの原因となったのだから妙なものである。

登攀が終り登攀道具をまとめた後、ピッケルがないからアイゼンをつけてゆっくり涸沢幕営地にもどってくるともう夕食時で仲間達が揃って祝ってくれた。大きな登攀というのでもなく多少アクロバティックなスリルをまだ人の手をつけていないところで味わったに過ぎないので面映い位のものだったが、そこは若気の至りで結構嬉しそうな表情に溺れたに違いない。

扨てアクシデントの事を簡単につけ加えておこう。例の落ちたルックの中に私の上衣が入っておりそのポケットに帰途の旅費を含めた全財産が入っている。ピッケルもスイス製の私に手頃な代物だったから惜しくて仕方がない。翌日山口君と伊藤収二君を伴って探しに出かけた。四峰五峰間の又白側、雪渓は狭くて急だが前々日から何回もグリセードしているので全く楽な

気持で私が先頭になって滑り出した。30mばかり滑った頃、叫び声が聞えたので振り返ると山口君がスリップして見るまに下のベルグシュルンドに落ち込んでしまった。えらいことになったぞと思いながら見当をつけたシュルンドに達して下りて見ると意識はあったが、顔面と腕に数カ所の切創と打撲傷を蒙って血を流しながら茫然としている。ルック探しどころではないので、アンザイレンして慎重に涸沢にもどった。

上高地で医師に傷を縫合して貰うために翌日足立君がつきそうて山口君は下山する。

私は其の日、西村君と1日を費して遥か下方のベルグシュルンドからルックとピッケルを探し出した後、彼等の後を追った。

上高地の幕営地では故岡本部長が尋常科の小さい連中を連れて来ておられる。誰が山口君をつれてもどるかが問題となった。私が責任者であることは間違いないのだが、御当人は青年血気にはやって山に来る以上この位の傷でバタバタするなというようなピィックな気持にあふられている上に、当時まだ残っていた明神の東壁をやって見たくて仕方がない。なるべく足立君に責任を押しつけて山に残りたい気配が濃厚である。併し其の夜、岡本部長からしんみりと悟されて翻意し山口君に附いて芦屋にもどった。この間のいきさつに就いて、其の後ひらかれた遭難批判会で散々やっつけられたことは申すまでもない。

思えば登山一途に生き、山で死んでもいいと本気で考えた十代の終りは、其の野放図な生き方と、短い時間に燃えつくす情熱というあの青春の相貌を遺憾なく備えて居り、俗事にまみれた中年の頃に其の素朴な姿をあるなつかしさを以て回顧出来るものである。

(旧制9回卒業)

「北穂第一尾根の思い出」

伊 藤 収 二

編集子からの課題は「北穂第一尾根登攀の思い出」ということであったが、その前後のことも書かせて貰おう。その時小生は尋常科4年で年令から言うと今の高校1年相当という若輩であったが、昭和7年という年は40日間山にいたおかげで、岩登りの腕前は油がのりきっていたように思う。それが証拠に足ならしのため行った槍沢生活での唯一の収獲、小槍の登攀でさえ階段を登るようにすいすいであった。丁度早稲田の連中が新入生訓練で合宿しており、我々の前に登っていたのでそれを見ていたがすごく時間がかかる。これは相当手ごわいのかと思った。いざとりついてみるとあまりに簡単なので甲南は関東の大学の連中とはちがってロックガーデンという手頃な練習場にめぐまれているおかげと今更ながらあらためて認識させられた記憶がある。

この槍沢生活は7月13～20日までで近藤実リーダー山口省太郎、比企能というメンバーであった。

その間よくもまあ降ると思う程雨ばかり降られて前述のように小槍が唯一の収獲で上高地に下山。21日に上記メンバーの中に足立がリーダーで、松野、押淵、山口（良）、山岡に村上、西村両先輩が加わって総勢8名で涸沢合宿に行った。この合宿中は槍沢生活とは異なり快晴つづきで近藤、山口（良）のコンビが北尾根第4峯のいわゆる甲南ルートの開拓、北穂第1尾根の上からの往復という成果をあげたが、小生はジャンダルムの飛弾尾根、北穂第三尾根というここ1、2年甲南の先輩によって開発された岩場をトレースした。7月一杯で涸沢合宿は解散し、鹿島のかくね里に入っていた兄が上高地へやってきて兄弟2人で上高地に残った。手始めに徳沢に泊って中又白谷を登る。これはどういうわけか部報に記録がないが案外快適な Climbing であった。直前に東大の連中が初登攀したので値打ちが落ちたと思って部報に出さなかったのかもしれない。谷というよりルンゼで意外にも奥又白の池の所へ出た。奥又の池は広い穂高岳の中でも最も気分のよい所で、初夏か秋にこのルートで奥又白池を訪れることをおすすめしたい。暴風雨警報が出ているのに、涸沢に入ったら夜半に天幕をふきとばされる目に会った。先の合宿の時は点々としていた天幕も一切なくなって兄弟2人だけとなっていた。

14日まで涸沢にいたわけであるが、先ず最初にジャンダルムのフェースをねらった。頂上への直登コースは前年同志社の児玉勘次氏が登攀したときいたのでヴァリエーションとして第一テラスへの直登コースを選んだ。雨で一度失敗したが、7日に成功した。大体兄弟2人だけだからトップを交替して可成り早かったと思う。2時間の快適なクライミングで、テラスの出口が悪かったが丁度兄がトップの番の時で登り切った。次に北穂第1尾根をねらった。近藤、山口が上からの往復に成功したが、最後を残しているし、前年兄としては田口（二）とのコンビで第2、第3尾根の初登攀に成功しているので残った第1をやリたかったのである。第1尾根というのは尾根というより壁に近く、その北寄りのクラック尾根の方が尾根らしい。しかし当時は誰れも行っただことがないので、このことはわからず、クラック尾根の方を tributary ridge と称して2次的に見ていたのである。B沢を降りマクラック尾根の下を廻れば第1尾根かと思ったが、そうではなかった。第1尾根の方はずっと短かったのである。第1尾根の下部のフェースは手に負えそうになかったので、第2尾根よりのルンゼを登って第4テラスに出て登った。近藤君の撃退されたこの登り口は難しかった。丁度小生がトップの番であったが、ワソビッチで2、30分かかったように思う。2人で40分費いやした。5時間40分 one at time ばかりの岩登りで今度の山行で一番しんどかった。

13日は待望の前穂のバットレスを初登攀した。岩がもろく、快適だったのは第3テラスから上部だけで、気負っていた割にあっけなかった。岩場だけでは4時間足らず、天幕を出てから前穂頂上まで7時間余り、それでも予想していたより早くついた。先人未登なのでかかる時間に見当がつかず途中でビバークする覚悟さえしていったのである。

8月14日には上高地に降りたが、まだ物足らず明神岳のバットレスを試登した。天気が悪くずれてきたので途中から引き返した。梓川の近くの下り、深い熊笹の中で突然大きな動物が動いた時は、熊かと思って一瞬心臓が止まる程ギクッとした。相当悪場をやってきたけれどもこの時程恐かったことはない。しかし熊ではなくて徳沢牧場から迷ってきた牛であったのはお笑いであった。家を出る時持って出た40円という大金を使い果し下山することにした。松本で切符を買ったら2人で9銭しか残らなかった。急行にも乗れず飲まず食わずで家に辿りついたのは夏休みも残り少ない8月20日で家や山の友人は遭難でもしたのではないかとそろそろ心配しかかっていた所であった。

予定以上居残っても金があったのは食費をきりつめたからであった。合宿で残った食糧を置いて行って貰ったがいくら2人でも20日ももつわけがない。当時シャケ缶（大）が下界で3個

50銭位であったから上高地では1缶30銭位であったろう。(上高地で米が1升40銭)これにシ
ョーユを無茶苦茶にかけて佃煮のようにからくしたのを専らおかずとして用いた。1缶買えば
3人だからずい分もった。やむなく小屋に泊る場合でも素泊りで自炊、おかずはヒドラカシャ
ケ缶であった。だから送金してもらわなくても予定の20日以上過せたのであった。

(旧制11回卒業)

“若き日の思い出に寄せて”

赤 松 二 郎

山岳部40周年記念号に思いがけなく私にも原稿を求められて、「荒沢パットレス登攀の思い出」なる課題を頂いてみるとそれが一体昭和何年頃の事であったかと言うことすら私の記憶の遥か片隅に遂われた事柄となっていた。此の事実は今更の様に時の流れを感じている。戦争によって余りにも変ってしまった世の中の為に握提とした生活に戦中戦後の20余年が経ってしまった。その間山に対して郷愁を抱きつつも全く無縁な日を送らざるを得なかったし、又今後もそれが続くに違いないのが現在の私の状態である。その私にとってこの原稿を書くと言う課題は昔の良き時期を思い出す一刻を与えてくれた事となり、正に私にとっては一服の清涼剂的効果がある事を感謝します。

然し戦災で山の写真や記録等、私の一生の前半の思い出を総て焼失した今となっては当時を思い出す方法がない。それ所か今や子供達に雪の中に寝たとかスキーなら教えるぞ等と自信ありげな事を言っても証拠を見せてくれなければとてもそんな事は信じられないと言われている有様である。そこで編集子に御願いして当時の部内雑誌を送って頂いた所、何とそれには福デ
ン(福田泰次君)の印があった。現在の山岳部に我々の頃の部内雑誌がないと言う事も戦争による山岳部の歴史の断絶を意味するのであろうか? 此の記念号は戦前の O. B. にとっては古き良き時代の思い出となろうが一世代が回轉した近頃の若い人々にとっては親父共の繰り言で「関係ない」と言うことになるかも知れない。

とも角その様な訳で送って頂いて手にした部内雑誌の第8巻を見ると、それは1936年の夏山

から1937年の春山までの当時の我々の動きが記録されてあった。即ち荒沢バットレスの登攀は昭和11年の夏、当時私は旧制高等学校理科1年であった事になり今の学制で言えば高2の年令に相当する。読み進むにつれて当時の光景が初めはぼんやりと、そして次第に其れがくっきりと思い出されてくる。其の時カクネ里に2週間、一転して劔岳池の谷に廻り約10日、其の間よく雨にも降られたけれどよく行動しているのも若かったから出来た事であろう。その中で走馬燈の様に思い出されるのはカクネ里が比較的規模が大きく幽邃であり、人の気配が殆んどなく文字通り、自然の懷に抱かれたと言う感じがすばらしかった。這松こぎが大変だったり、湿った木で焚火をするのが上手になったり etc. 所が尾根一つ隔てた荒沢となると全く生き物は見られず荒涼としており、急傾斜で一気に落ちて行く細長いV字谷は地形的にもカクネ里のU字谷と対象的で2人の少年を圧倒するものであった。然しカクネ里と白岳沢の出合近くに設営したベースキャンプを出て天狗尾根の一角に1枚のツェルトザックでビバークした夜遥かに大町辺りの灯がチラチラと明滅するのが眺められ下界との懸隔を意識し乍らもバットレスを充分偵察して勝算を胸にする我々2人には明朝から始まる登攀を楽しみにいつしか数時間の眠りをとったに違いないと思ったが、記録によれば夜が更けるにつれて温度が下がり寒くてよく寝られなかったとなっている。其の時のパートナーであったボンチ（関暢四君）とも長い間会う機会もなく数年を経ておるが、その夜は或はその頃一種の流行であった？ 哲学、芸術、人生、アルピニズム等々の生煮えのわけの分らぬ論議をやったかも知れない。

さて其の翌朝ビバーク地点から荒沢に下り、予め偵察した通りのルートを忠実に辿り荒沢の頭に達するまで約5時間半程でさぞ手強い事であろうと意気込んで計画したバットレスも簡単に登ることが出来てむしろ拍子ぬけの態であった。技術的にも困難な所は全くなかったと憶えている。かえって印象に残っているのは草付や岩の間隙に咲いている高山植物の可憐な姿だった。其の後一転して劔の西面に入った生活も面白かったが、今から思っても私個人として印象的な登行だと思っているのはその年の冬、徳沢から1日で往復した明神岳の東尾根、2度入った白出沢、槍平から槍を登った帰りのすばらしいスキーの滑降、遠見尾根からカクネ里天狗尾根と何れも積雪期のものだが、此の様に言いだすと何れもこれも皆と言うことになる。

所で近頃大変残念に思うことは、登山人口の増加と共に多くなった遭難事故であるが、その何れもが基本ルールを身につけておらぬことに起因した人災である様に見受けられることである。自然の暴威は想像を絶する場合がある。私の経験でも積雪期の富士山の突風、カクネ里天狗尾根のアドバンスキャンプで見舞れた雪嵐、穂高小屋で4日閉ぢ込められた時の季節風等々

其れに対処し得るものは、充分な準備、地形、気象、雪の性質、などのたゆまざる研究と実技の訓練で得る体力と適確な判断力とを養う事であろう。我々の頃にも遭難と紙一重と言う事もあったがそれが事故となって現れなかったのは、単なる偶然だけではなかったと思っている。若い人々の自重を願ってやまない。

.....

此処まで書き終って編集案の内容をよく見直して見ると1936年春の白出沢の生活についても少し触れなければならぬと思い少し付加えさせて頂く事にする。

之は部内雑誌第7巻のⅡが手許にないので記録の詳細は不明であるが、確か、穂高ジャンダルムの積雪期に於ける完登を目的として、その前の冬から始めた一連の計画で白出沢森林帯の端にキャンプを設け、喜多豊治、加藤弘三、島良之の諸先輩と一緒にであった。それに2度共ガイド中畠政太郎が行動を共にした。然しジョーム（加藤）さんは戦死、ムキムキ（島）さんは大学卒業を前にして手術中にノボカインに対する異状体質で数分にして他界され、その時手当てに最後まで努力した多田先輩（当時岩永外科）も戦死されたと聞いて居るし其の他戦争で物故された方々を思い起すと胸の痛くなる思いで一杯である。

さて白出沢の下から見上げるジャンダルムは鋭どくそそり立ちちょっと日本放れした姿だとよく言ったものだ。そのジャンの飛弾尾根を喜多、加藤、天狗コルから奥穂高には私と島、中畠とがサポートする意味も含めて同じ日に行動を起したのであった。縦走のルートは大体夏道を辿ったが、ジャンのドームやロバの耳の辺りは信州側に雪庇が大きく出ておりナイフエッジが続き私にとっては良い経験になった。飛弾尾根攻撃パーティとの連絡は遂につかぬままジャンダルムをすぎ、後刻通過するパーティの為に大きくステップを切開いて残し乍ら奥穂高へとさしかかる頃から天候の悪化は歴然としており、我々は穂高小屋への道を急いだ。果して夕方より激しい吹雪となり喜多、加藤の飛弾尾根パーティは遂に引き返し途中から日が暮れて、下降の途中で小雪崩に遭ったりして苦難の退却をした事は後で知った事であった。それから4日間の間断のない嵐の中を穂高小屋に閉ち込められたのであった。前年の秋に非常用に上げておいた石油缶のビスケットと紅茶と砂糖が此の間の唯一の食料で甘いばかりの食物も如何に苦しく、人間は食塩無しではたまらなくなる事を味わったものだ。

嵐も過ぎて快晴の5日目は雪の落付きを待つ為に下らず、雪の滝谷を偵察する為に涸沢尾根をかなり下がって北穂の飛弾側を心ゆくまで満喫した。その時私が撮った涸沢尾根を背景にして気取ったポーズのムキムキの写真が今でも目に浮ぶ。翌日早朝雪崩をさけて一直線に下った

白出沢に残した輪かんじきの跡、榎林のキャンプ、わなをかけてとった兎のカレーライス、等々思い出は果していない。山の姿は今でも変わらないであろう。然しそこに集る人々は変ったかに見える。それでも本当に山に魅せられ山を愛好する人々の心は変らぬ筈だ。山を通して友情のきづなを深め、自己啓発の場としての山は今も昔しも変らぬ事を信じて居る。

(旧制14回卒業)

私の甲南山岳部生活

伊 藤 文 三

こと「山登り」に関しては、全く浦島太郎的存在になってしまっている現在、この記念部報の誌面を汚すことは、いささか気がひけるけれども、山岳部の生活を除けば何が残るかといいたような甲南時代を過したものとして山岳部思い出の駄文を弄することをお許し願いたい。

現在のようにゴールデンウィークといって祭日のかたまった月もなく、結局山といえは、春休み、夏休み、冬休みに、2月の入学試験のための2日休みにでかける位で、ずぼらなわれわれは日常の体育訓練などした記憶なく部室でだべってばかり、律義に日曜日毎にでかける芦屋ロックガーデン、たまに六甲保壘岩、道場位が訓練といえは訓練だが、訓練といえる程のしろものでなく、実にのんびりとしたもの、今にして思えば既に末期とはいえ、全く《よき時代》に甲南山岳生活をしたものと思う。(昭和8年から昭和15年まで)

尋常科1年生の夏(昭8年)は、教師が監督で参加する一般募集の夏山として白馬岳にでかけた。今もそうらしいが当時も白馬岳というと女学生登山者が多く、眼をギョロリとさせた当時1年先輩のフクデン(福田君)と、すごくオッサンに見えたビッチェウ(坂野氏)が、われわれの世話をまめに特に女性の前でやってくれた記憶がよみがえる。授業中脱線して山の話ばかりしておられた山岳部長の故岡本先生がリーダーだったと記憶するが、先生の山登りスタイルはいっこうに眼に浮ばない。その冬は乗鞍鈴蘭小屋での一般募集スキー合宿に参加、はじめてスキーをはいた。アールベルグスキー術華かなりし頃で、まっすぐ滑べると叱られ、毎日毎

日全制動ばかりやらされた。しかし冬山にはいる前に、スキーをたたきこまれるということは、なかなかよいと思う。最近はやみやたらにすぐワカンをはいて登るようだが、なだれの危険がない限り、出来るだけスキーを使うのが賢明で、しかもスキーが上手だと、へばり方も違って来る。甲南の連中はその点小さい時（中学）からスキー練習をしているので、他の大学山岳部の連中よりスキーはうまくて冬山でうらやましがられたものだ。山岳部員でも1、2年生は一般募集（監督教師参加）の山行きしか参加させてもらえなかったが、3年生の夏（昭10年）いよいよ本格的夏山入りで劔二股生活をした。先に乗越にたどりついた誰かが「オーイ、メッチンいるぞ!」と叫ぶと、今までアゴを出していたのに急にファイトを出して登りだしたのが、今は東京ガスでおさまりかえっているムラン（村上君）である。彼だけがというわけではなく、山にはいると、いかに女性にめぐり会うことが今と違って当時少なかったかという逸話である。二股まで行けそうもない、ではといって乗越小屋に泊るのは宿泊料あほくさい、といって小屋の前の空地に堂々とテントをはるよう指示されたのがO.Bとして参加していたコンタン（近藤氏）。今じゃいくらコンタンの心臓をもってしても不可能だろう。このはじめての夏山で食糧係をおおせつかり、1日1日の副食費50銭以内と厳命され苦労したことをおぼえている。その冬は穂高温泉から槍平にはいり、槍岳に登った。中学3年生で冬の槍に登頂できたのも甲南にいたおかげであろう。

春（昭11年）は、弥陀ヶ原でスキーを楽しみながら立山、劔と登ったが、雷鳥沢のプレーカブルクラストに泣かされ、弥陀ヶ原の濃霧で、天狗平小屋のすぐ近くにおりながらなかなか小屋発見できず、リングワンダリングもあり得ると濃霧のおそろしさを痛感させられた。4年生（昭11年）の5月、九州修学旅行があったが、急性腸炎という診断書を提出、フクデンはおばあさんが悪いといって2人で旅行をさぼり、（彼は山へ行くため学校をさぼる理由としてしばしばおばあさんが悪いを用いたので、遂に教師がおばあさんはまだ死なないのかねと質問したとかいう話であった。）こっそり鹿島の部落を訪ねた。三の沢から東尾根を登るつもりだった。大谷原出合附近から雪あり、東尾根登攀記録は暗記する位読みかえしていたが、経験不足はいかんともし難く、実地はこうもわかりにくいものかととまどいながら、漸く三の沢をみつ、左のルンゼにとりついたがやたらにわるく、丁度天候悪化したので引返した。根性がなさすぎるかもしれんがともかくあきらめよく引返すことをおぼえた。これも場合によっては難しいことかもしれない。4年生の夏は、南アルプス北半分、仙丈から北岳を経て塩三岳伏見峠まで縦走した。この縦走中出合ったパーティは殆どなく無人の両股小屋で、猟師といった方が適

切な、連れていった人夫が1時間足らずの内に20匹余りのイワナを釣ってきたので、ササで串焼きにして喰べた味はわすれられない。縦走が終ってから、あこがれの涸沢にはいったが、穂高の岩登りの名所？を見学？して歩いた程度でこれといった岩登りをした記憶がない。冬はタイショウ（赤松氏）（高1）フクデンの3人で徳沢にはいった。今では想像できないかも知れぬが徳沢小屋には他のパーティはいなかったように思う。いわゆる冬山とは朝2時頃おきて3時ころ出発、なるべくスキーを使って、スキーデボーで夜が明け、午前中の明るい内に登攀午後2時すぎ沢がかげってからなだれの危険をさげ下山、デボーで薄暗くなるというのが常道という観念があった。徳沢を暗い内に出発し涸沢で夜が明け、北穂高沢の左の尾根を経て北穂に登ったが、まさに冬山らしい冬山を経験したわけだ。この時冬としてはめずらしく好天にめぐまれ、目的の北穂に早く登ってしまって日数があったので、徳沢小屋の眼前にさんぜんと輝く明神東尾根に魅せられ、予定してなかったが、たいした予備知識なく、たいしたことあるまいと、しかし念のため偵察行もやり2時起きしてでかけたが、尾根にとりついてから逆層になやまされ、雪を払っての木の下と、3人のザイルパーティのため意外に時間をくい、コルについた時は、真くら、果して沢をおられるか、くらくて傾斜が実際以上急に見え、夜のため凍っているのではないかとフクデンが《死ぬ死ぬ》と絶叫したが案外難なく下りられてあとで大笑いとなった。しかしバカになった懐中電燈を頼りに森林地帯のスキーは全くなさげなく、へばりにへばり、もっとスキーの練習をしておくんだとフクデンと2人で、スキーのうまいタイショウをうらやましく思ったりした。春は甲南のホームグラウンドの南股にはいり、第一隊がA.Cから杓子のフェースに登っている間に、われわれは八方尾根から唐松に登り、第一隊と交替でA.Cにはいった途端、天候がくずれだし時間ぎれとなりどこも登らず撤回した。高等科1年生の夏（昭12年）は岳川のどんづまりにテントをはり、コブ尾根、畳岩尾根など登ったがどのパーティにも会わず、（現在では考えられないだろう）ずっと降りつづいた雨の後だったので、木がズイまでしめっており、マメなタイショウが1日かかって漸くたきびに火をつけた。ラヂウスの使用は積雪期以外全く思いも及ばなかったわけだ。フクデンとコブ尾根を忠実に登ったが、コブを下ってからの尾根は急なガラガラな嫌なアルバイト、《スエハ、ヤクザカ、カンタロウサンカ》と当時流行していた歌の一小節を、くりかえしくりかえし調子はずれた唄を歌いながら登っていた彼の姿が目にかぶ。つまらんことをよくおぼえているものだ。岳川生活を終えて、尋常科3年、4年生を迎えて涸沢にはいったが、どこに登ったかはっきりした記憶がないところを見ると、そんなに悪いところは登らなかったようだ。

冬は、ワシヲさんと2人で鎌尾根を登るべく鹿島部落から西股小屋（当時西股出合の手前の台地にあった）にはいったが、1週間吹雪かれ小屋から一步も出られずホームシックになり引返した。冬山の天候の悪さをつくづく味わされた。春には、甲南はじめての極地法らしい極地法を採用して遠見尾根―天狗尾根―鹿島槍登攀をした。小遠見の第1キャンプと天狗尾根ドーム下の第2キャンプといかに連絡するか珍案妙案議論百出したが、ハンディトーカーという便利なものなど当時は想像できなかった。この合宿解散後、タイショウ、フクデンと再び鹿島部落を訪ね、完全に埋っていた西股小屋にはいり、三の沢から東尾根を登った。4年生の5月こっそりやってきて引返した点をあらためて見たが、どうもとんでもないところにつけていたようで、あっさり引返したのは実力相当で賢明だったわけだ。2年生の夏（昭13年）は、あたりさわりのない涸沢合宿で、合宿解散後、春山のジャンダルム飛弾尾根登攀のための偵察と称してフクデンと残り、中又白完登、下又白引返したりして、再び涸沢にはいり、岩小屋に泊ろうとすると（勿論当時涸沢には山小屋はなかった）岩小屋の前に2人組のパーティがおり、甲南のかたでしようと話しかけられ、ぎょっとした。なぜ甲南とわかったかと聞くと、なんとなく甲南山岳部らしい感じだという。映画監督の山本嘉次郎が京都の先斗町を着流しで歩いているとやり手ばあから、ちょいとそこのカツドウヤサンと呼びかけられ、ぎょっとしてなぜわかったかときくと、なんとなくブーンと嗅いめますがな、といったということだが、われわれも甲南山岳部の臭いがブーンとしたらしい。後日、この話かけたのは、後に東大で一緒になった松高の山崎君とわかった。（彼は戦死したが奥又白四峯正面松高ルートを松高時代初登攀している。）冬は、上高地ホテルの木村氏のところに厄介になり、お正月はウサギ肉のスキヤキに茶ワン酒のご馳走になったが、山の方は岳川からジャンダルム往復しただけで西穂には行けなかった。高等科2年生の春（昭14年）、つまり山岳部での最後の山行き（3年生になると大学入試受験準備と称して山岳部公生活の第一線をしりぞく慣習だった）は、先年トヨハチ（喜多氏）パーティが果さなかったジャンダルム飛弾尾根登攀をめざした。このため夏にフクデンと残って偵察したし、又秋にトヨハチと小鍋谷から西穂に登り上高地に下ったりして万全を期していた。先年のトヨハチパーティと同じとこ白出沢の森林帯にベースキャンプをはった。ワシヲさん、グリーン（福井君）、O.B.としてトヨハチ、それに人夫の中畠政太郎の5人である。彼は秩父宮が穂高縦走した時の案内人で（戦前では、宮様のおともをしたということが世間的にどんなに名誉なおそれおいことだったか今の人は想像できない位だが）、酔えば、妃殿下の手をにぎった日本人はおらぬだろう、俺くらいだ（前穂の縦走路で手をもって確保したわけ

(と自慢する好人物で超一流ガイドであった。天候を見定めてグリンスピンドルに A.C 設置グリンと 2 人で泊り幸運に翌朝登攀日和、尾根をしばらく登り、ルンゼを右にトラバースして飛弾尾根主稜に取付く。トヨハチの記録によれば、このルンゼ青氷で悪く危険を感じ尾根を登りつめ壁につきあたり引返しているが、積雪のコンディション良く、丁度アイゼンの歯のいい位の快的さで、年によってこんなにも違うものかと、トヨハチパーティの年のことが信ぜられない位で、アンザイレンする必要もなかったが一応コンティニアスで進み、3 本出ている支稜の一番下の支稜に取付いたが、下部はガラガラの岩が雪のためしまって、かえって安全な位。岩登りが快適で頂上から下って引返す地点あたりになかなか到達しなかったが、これはジャンダルム飛弾尾根といって岩登りの面白いのはほんの上部で、下の方まで往復する物好きはおらず、下から登るとさすがに登り甲斐のある大きな尾根だった。しかしアイゼンの歯をきかせての岩登りは快調で、西穂よりの尾根を登っていたトヨハチ、ワシヲさんパーティとヤッホーをかわしつつ、頂上で感激の握手、明るい内にと穂高小屋に急ぎ(勿論小屋は閉鎖)、真暗くなった白出沢をベースキャンプに下る。登攀後の A.C 徹収作業はいやなものだが、徹収下山中、アイゼンの歯をスポンにひっかけて前のめりに 30m ほど転落、つまらんミソをつけてしまった。

ふりかえてみると、夏の白馬岳から積雪期のジャンダルム飛弾尾根登攀にいたる実に順調な山登りをして来たが、未だに自慢できるような高度の技術を要する登攀は甲南時代してないような気がする。穂高にも数回はいいながら、いわゆる熟練者向きルートと称せられているような岩登りもありやった記憶がない。結局岩登りらしい岩登りは、東大にはいつから、高校時代あまり岩登りをやってなかった連中をつれて奥又白池にテントをはり、前穂、四峰(明大ルート)、三峯の各バットレスを登り、はじめて岩登りらしい岩登りをした始末。また積雪期登攀として、浪高 O.B の佐谷氏と荒沢出合にテントをはり、荒沢バットレス南山稜に登ったが(昭16年)、荒沢バットレス積雪期登攀は浪高が数回アタックして果さず、O.B の佐谷氏が小生を道ずれにして果したという曰くつきで、一応注目の初登攀となったが、彼の執念があったからこそ登れたものであり、ヒマラヤを含めて初登攀成功には執念が必要か、又小生についていえば、甲南時代の基礎訓練と経験の集大成の結果成功したものと思う。

甲南山岳部の歴史のうちの一時期を知るための参考にと私の登山経歴を誌したが、山の思い出は山の仲間の思い出であり、又いついつまでも山はわれわれに生きている。昨年夏、家内、子供(娘 3 才と 5 才)とで鹿島の部落を訪ね、ハイキングのつもりで三の沢の出合まで子供と

一緒にでかけた。人っ子1人おらぬ雪溪に立ち、ふもとはいくら変わっても山は変わらず、いろいろな思い出が次から次へと浮んできた。年をとっても、無理をしてでも、山のにおいをかがずにはおられないようになってしまっているのかもしれない。

(旧制15回卒業)

奥又白谷、前穂東壁の思い出で

福 田 泰 次

昭和9年それは私が尋常科3年になった年であり、又我が甲南山岳部が再建の第一歩を踏み出した年でもあった。

その夏喜多又先輩指導の基に約1週間の潤沢合宿を終了した我々は上高地丸西旅館（現在の白樺荘当時50銭で泊めて呉れた蚤の出る木賃宿）に引揚げて来た。丁度それと入れ代りに田口二郎先輩（当時東大学生通称アツチャン、アツ公、後のマナスル隊員）が上高地に入ってきて来られ、誰か部員の内では希望者があれば山へ行こうとの事。全員漸く上高地へ下りて来た所で帰心矢の如し、一向に希望者が無い。其処へ何を思ったか小生「連れて行ってもらいます」と申し入れたのだから田口先輩もいささか驚いた様子、まさか中学3年の坊主が申出るとは思わなかったのに今更断る事も出来ず、やむ得ず頼りにもならぬ坊主にザイルのジツヘルを託して、当時としては相当大物の前穂東壁登攀とは相成った。

さて部員全員上高地を引きあげた後田口先輩と2人上高地に残ったのだが、先輩一向に山へ行こうとせず、連日飲み続けている。当時の上高地の学生キャンプは相当なもので、積雪期屏風岩の ATTACK を敢行した中村譲二氏等の屯ろしていた松高のテント等はデッカい1斗樽がデーンと据えてあった様な具合で、そうした連中の所を毎日飲み廻っているのだから始末が悪い。上高地の主常さんの所もそう言ったたぐいが朝から1升瓶を前にして漬物位をさかになにチビリチビリやっている。小生等も飲めもせぬのに御つき合いで常さんの小屋に坐り込み何時間も何時間も連中のクダをまいているのを聞いているのだからたまらない。かれこれ1週間もそのような生活が続いた後の或る朝。先輩えらくジョンボリと梓川の岸边に立って流れをじっと見つめ

て御座る。何時になく顔色も青ざめ様子がおかしい。さてはとうとう御乱行の末の投身自殺かと、小生いささか慌てふためき「先輩どうしたのですか、元気を出して下さい」と言ったかどうか、

とにかく事情は明らかになった。先輩前夜いささか銘酩の末、オヤジゆずりの金時計（デッカイやつで当時としては相当な代物）チョッキもろとも「エイッ」とばかり梓川に投げ捨ててしまったと言う。これは大変と2人して探し始めはしたものの、何せ何処で投げ捨てたのやらも定でないと言うのだから始末が悪い、河童橋から清水屋の前辺りまで、と言っても随分と長い、何じょう探し出せよう筈もなくとうとうあきらめ、漸くこの一件で先輩も酒に見切りをつけ、いよいよ山へ御出発と相成った。御蔭でこの山行は時計無しで夜明けと共に歩き日暮と共に眠ると言う始末。

さて梓川明神側と沿い右岸を奥又白出合へ、

当時は道も無く山鳥が飛び立つロビンフッドが出て来そうな原始林、出合森林帯ヘテントを張り、早速奥又白へ偵察に入る。当時松高ルンゼは未だ明かでなく、始めは本谷をつめ大滝にブツカリ、左側岩壁を試みるも相当悪そう、結局引返して現在の松高ルンゼより取付く事に決める。

翌日より再び雨、対岸より徳沢牧場の牛が梓川を渡渉して来て（当時新村橋は無かった）キャンプを荒され大あわてと言う様な事情もあり、食料もそろそろ底をついて来た頃、ようやく雨もあがり、アタック敢行。

未明テントを出て現在の松高ルンゼより取付き右側のブッシュ尾根をつめる、猛烈なヤブ漕ぎの後、ようやくカールに達す。（当時この尾根は全然切開きはなかった）

V字雪溪の右側（C沢）をアイゼンを付けて登る、傾斜もキツくなって来たので、安全の為アンザイレンし、中央ガリー（サネ尾根）を越え左側雪溪（B沢）にトラバースせんとした際、田口先輩がベルグシュルンドに落ち相当慌てる。小生この時始めてジツヘルなるものをした。左側雪溪をつめ岩壁（Cフェース）に達す。壁を左側より取付き数ピッチにしてテラス（第一テラス）に達す。上部の岩壁（Bフェース）は可成り威圧的に我々にのしかかっていた。これを左側より乗越し上部テラス（第二テラス）に出る。随分気持の良い広いテラスだ。テラスを中央部ヘトラバースして行きクラック状のサウンドロックに取付く、（Aフェース）この頃より天候も悪化して来、夕暮も迫り辺りはうす暗くなって来た。外へホリ出されそうない寸感の悪いオーバーハングをハーケンを打って乗切る。後はガリー状の所を頂上へ。疲労困ぱ

いの後前穂頂上に達した時には既に日没。吊尾根鞍部より直接洞沢えグリセードを飛ばし、夕食後再び夜道を、横尾の谷に下る。横尾の出合は暴風雨の為相当荒れて居り、徳沢に下る予定の道を誤り（後のマナスル隊員も道を間違えた）一股小屋にたどり着いた時には既に午後10時を大分過ぎて居り17時間のアルバイト後、奥又白谷より前穂東壁を完登する事を得た。

この山行は当時中学3年であった私にとって非常に貴重な経験であったと同時に、その後今日に至るまでの私の山岳観に対する基本になったものであると信じている。以上当時の山及び人の状況を知る一助ともなうと思ひ敢えて駄文を記した次第。

（旧制15回卒業）

杓子東壁登攀裏話し

福 田 泰 次

杓子東壁を当時私達は杓子のフェースと呼んでいたが、何時も双子尾根に登る度にあの頂上直下に左側に飛び出しているデカイ雪庇の下にストンと落ちている氷壁。アイツを何時かは登ってみたいと言う欲望を密に持っていた。此の登攀に際しても初登攀とかなんとか言う、さして気負い立った気持からではなく、双子岩ACから眺めたあの美しいサンシロ平にスッキリと垂直に落ち込んでいる杓子の氷壁に魅せられて「よしあいつを一チョウやろうじゃないか」位の気持で出掛けたのだった。

昭和12年3月23日午前1時30分アタックの朝は明けた。くそ寒いそして睡眠不足気味のねむたい朝一身ぶるいしながらシュラフから首を出し「どうか天気が悪い様にと祈りながら」そっと外を見る。「星空は美しい天気は良いぞ」こんな時に唯一人張切っているのは何時の山行でもリーダー1人だけ。しぶしぶシュラフから抜け出し、ラデイウスに点火、誰もが経験するあのいやなアタックの朝の感じ。調子の悪い（良い？）事にゾウ（武田氏）が鼻血を出す「どうもコンディションが悪い」との当人の申立て、しめしめ或はアタック中止かのハカナイ望みも絶ち切られ、午前4時リーダーを先頭にテントからはい出す。

このデッパツが又傑作である。ともかく減茶苦茶に寒いのでテント内で完全武装をととのえた。御丁寧な事に狭いテントの内で無理して苦心さんたん、ようやくワカンまで足にしぼり着け、ヨッコラしようと外に出た所、何んたる事雪質はパンパンとてもワカンでは無理、切角つけたワカンを外しフウフウ言いながら冷え切った手であの面倒くさいアイゼンへの着け代え作業、この一件で一行すっかり意気銷沈、睡眠不足気味も加ってポソリポソリとランプの光を頼りに暗闇の杓子沢へと入って行った。

然し杓子沢に入り太陽と共に輝く峯々を望んだ時、猛然とフーイトが湧き出し、今日はやるぞと6時15分鐘北山稜へ向う喜多、武田パーティと分れ、威圧的に我々を取囲んでいる杓子の壁を目指し更に杓子沢をつめる。

さて又又リッジ（Dリッジ）への取付が振っていた。冬の明神東稜や大山北壁での経験で余り早くからザイルを着けると余計時間を食うと言う心配から無理してザイル無しで相当急なロンゼをつめて行く。何時の間にやら斜面は加速度的に傾斜を増して行き、私達が気が付いた時には2人は蒼氷の垂直のチムニーに取付いていた。何んと言う事なしにトップにガーヤン（山口氏）セコンドに私と言うオーダーになってしまって居り、然もザイルは私のルックに入っている。とても取出してアンザイレする所の騒ぎでない、やっと切り開いた4つの孔（ホールド、ステップ）に手足をのせているのがやうやくの事。

トップのガーヤンはともかく全身の力を振りしぼってステップを切っている、その直下に私がへばり着いていて、10分、20分、30分と全く同じ姿勢でガンパっているのだ。冷え切った手足はケイレンして来るが、垂直の氷壁だ全然動く事も出来ぬ。トップの切る氷が首筋にパラパラと入り込んで来る。震え上る寒さにただじっと我慢しているだけだ。下を見ると吸いこまれる様に垂直の氷壁が無気味に杓子沢へ落ち込んでいる。ジリジリとトップが登るにつれて私も進むがケイレンした手足が言う事をきかぬ、おまけにトップのガーヤンは山岳部内でも可成りの大男セコンドの小生は小男、全然ステップのディスタンスがちがう、加うるにザイルが着いて居ない、何とも言えぬ嫌な感じ、ザイルが着いてないと言う事はこんなに恐いと言う事をこの時初めて経験した。

最後のオーバーハング気味の雪庇を乗切るのが大変だった。ナントかしてトップのガーヤンは抜け出した物の、セコンドの小生約30分近く同じ姿勢で待たされ、冷え切った手足は全くケイレンしなともならぬ。何度試みても駄目、おまけにザイルは私のルックの内、仕方なくガーヤンがルックに入っていた雪崩紐を取出し下ろしてくれる。心細いかな僅か5耗にも満たぬ

細引きに全体重をかけグッとオーバーハングを乗切るときの気持なんとも形容し難いものがあった。所がやっと這い出た雪稜がなんと全く急峻なやせ尾根、またがっているのがやうやうでとても休む所ではない。やっと両足で雪稜をはさみ込み雪面に顔を押し着けハズむ呼吸を静める。

ともかくこの1時間半の苦闘に全精魂を使い果してしまった感じ、時に9時30分。後は雪稜をワンアットアタイム、コンティニイアスを混えて登攀12時40分ピークに達す。杓子東壁は一般に取付附近が垂直の壁に阻まれて居り、私達のこの山行は肝心の最大の悪場をザイル無しで乗切ると言う結果になってしまったのであった。

私達が双子岩AC撤収の日、丁度猿倉側から登って来られた伊藤新一先輩をリーダーとした東大パーティが同じくこの杓子東壁を狙って居られ、居合せた甲南パーティのゾウ氏にルートの説明を求められた所、しごくアッサリと「ああ、あそこの壁を真直ぐ登りました。大した事はなかったです。ハイ」てな具合で至極簡単明瞭、甲南の連中は変わるととの大評判を取った次第。

この様にして当時私達はささやかな楽しい山行を続けて行った。

十 年 一 昔

阿 部 純 一

甲南山岳部の創立40周年おめでとうございます、と書きながら考えてみると新制の大学山岳部が発足してから早や10年の月日が過ぎ去ったことになる。

10年前たった4人で劔の夏の合宿、これが記念すべき第1回の合宿で全日程ほとんど雨嵐だっただけよけいに印象に残っている。続いて八方尾根での中、高、大の家族的なスキー合宿、そして春に初めて多少なりとも大学の山岳部らしい合宿を行ない唐松五龍へと登った。この時に砂川君が盲腸炎にかかり、八方尾根の上から大町までかつぎ込んで手術に立会った事等もあってよく頭に残っている。ブタ小屋のような部室で、朝から部室にこもって部の在り方、進み方についての大議論、しゃべり疲れては部室前でフリーテニス。それぞれ一国一城の主のような顔をした面々が自信満々で、だれがリーダーだか分らぬような調子でハッスルしていたのを想い出す。しかし、真面目に考え実行して来たのは事実で、これが旧制時代からの伝統を引きついで今日の山岳部の基礎となったと確信している。

登山（山岳部活動）が人間（人格）形成の場であるとすれば、考え、実行し、これを反省する、と云う行為は実に適切な訓練の方法であり、且つ大学の山岳部として好ましい在り方ではなかろうか。ただ外面的に厳冬期にどここの壁を登ったとか、このような合宿をやったと云う現象だけにとらわれて部の発展云々は言えないのではなかろうか。最近の山岳部の活動は時報を通じてだけしか知り得ないのであるが、現役の皆さんそうしてOBの諸兄からの寄稿の中にも健全なご意見を発見し本当の意味で発展しつつあるなと感じた次第です。

10年の期日でもって過渡期を終り（少し長いと思われるが発足時から1つの単位として考えていた）次の新しい発展期を迎えてガンバッテ下さい。

（新制2回卒業）

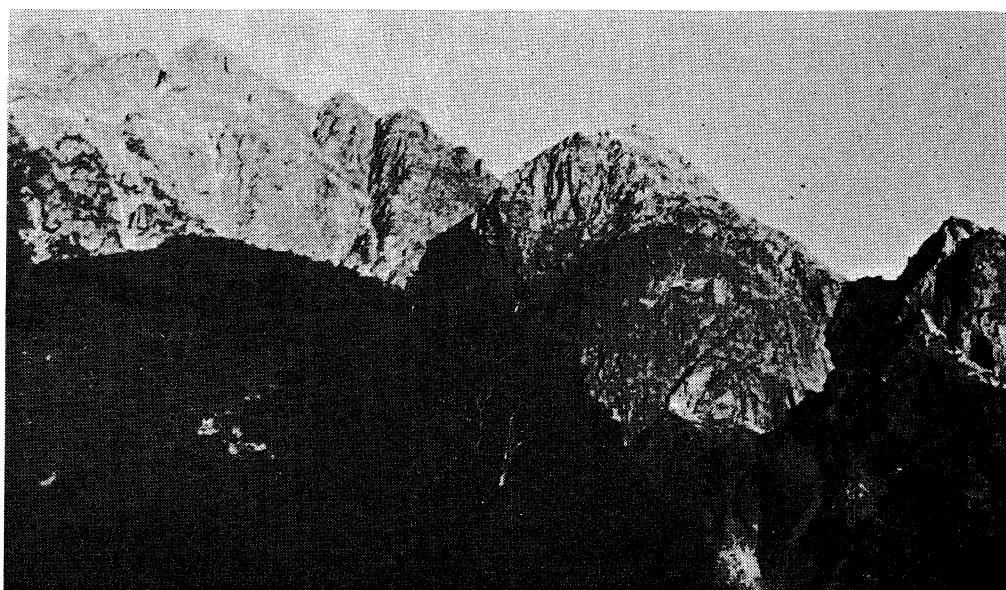
白馬 鎗ヶ岳 北稜

広 瀬 健 三

後立山連峯は私にとって大変思い出深い山である。思えば始めて雪の杓子岳に入ったのは中学3年の春だったと記憶している。山麓の村、細野部落のあの明るさと素朴さ、（今はその素朴さも年々薄れつつあるが）そして魅力的な白馬三山の山様にすっかり魅せられてしまった。大学山岳部の大先輩に交って一廉の ALPINIST 気取りで杓子岳を ATTACK した自分の姿を思い出す時、吾ながら何か微笑ましい気持ちに成るのである。ATTACK を終え、樺平から仰いだ杓子岳東壁、白馬鎗のヒマラヤひだは私に強烈な印象を与えた。その時、自分の小さな心に激しい登攀意欲が湧いたのを今でもはっきりと思い出す。「あの手強そうな壁の何処かを将来必ず登ってやろうと」それから数年経ち、何時の間にか私も大学山岳部の中心部員と成った。幸い、ここゲピートは当時に成っても余り POPULAR なものに成らず残っていた。早速、仲間に春期の白山三山 VARIATION ROUTE の集中 ATTACK を提案した処、快諾を得た。白馬鎗杓子東壁の各 ROUTE を同時に数 RARTY が取りつく様子を頭に浮かべる時、私の心は踊った。結果は合宿後半、天候に恵まれず目的の半分しか遂行出来なかったが鎗ヶ岳北稜の ATTACK は期待通り素晴らしく、小生の長い山岳部生活の中でも思い出深い登攀と成った様である。

（新制7回卒業）

Ⅳ 主要登攀記録



穂高奥又白池より四峯

主 要 登 攀 記 録

年 度	登 攀 山 岳 名	パ ー テ ィ ー	備 考
1927年 7 月	小 槍 (単独行)	伊藤 愿	恐らく単独による初登攀ならん
1927年 7 月	穂高滝谷 (単独行)	伊藤 愿	第二登及び単独による初登攀ならん
1927年 7 月	南アルプス白峰三山	香月・前田	甲南に珍らしい南アの記録
1928年 8 月	常念・槍・双六・薬師立山縦走	伊藤 愿 他 1 名	当時としては残雪期の北ア縦走は相当なものであったと考えられる
1928年 7 月	南ア・駒・仙丈・北岳・農鳥縦走	香月・植田	
1929年 3 月	岳沢より西穂登頂 (単独行)	伊藤 愿	単独による積雪期初登攀ならん
1929年 3 月	槍・前穂・西穂	伊藤 愿・檀・西村格・香月・湯川	甲南が組織的に積雪期北アに足を入れた第一歩
1929年 5 月	劔岳早月尾根・ハッ峯	伊藤 愿・西村格也	恐らく第二登と思われる。しかも積雪期としては初登攀と考えられる
1929年 7 月	錫杖烏帽子岩	楠木・秋馬・水野・井上	
1930年 5 月	白馬鎚	西村格也・西村雄・田口一	
1930年 7 月	穂高ジャンダルム飛弾尾根	伊藤 愿・田口一郎	初登攀
1931年 3 月	白馬小蓮華ヶ尾根 南股より白馬鎚南山稜	西村雄・水野・多田・近藤・田口・西村	初登攀
1931年 5 月	鹿島槍東尾根	田口一・田口二・伊藤新	5 月における初登攀?
1931年 7 月	穂高滝谷第二尾根 穂高滝谷第三尾根	田口二・伊藤新・関・佐山・田口二・伊藤新	滝谷に第一二三四尾根の名称を附したのは恐らく甲南が最初であろう。尚第三尾根はこのとき初登攀された
1931年12月	鹿島槍・鎌尾根	田口二・近藤・伊藤新	第二登攀
1932年 3 月	南股より牛首ダイレクト	田口一・他 7 名	初登攀
1932年 7 月	鹿島槍北壁メインリッジ	伊藤新・関集三	第二登攀
1932年 7 月	前穂北尾根四峰 奥又白側バットレス	近藤実・山口良	初登攀 甲南ルートとして知られている
1932年 7 月	前穂バットレス	伊藤新・牧	第二登攀
1932年 7 月	ジャンダルム第一テラス 北壁	伊藤新・牧	初登攀

1932年 7月	北穂滝谷第一尾根	伊藤新・牧	初登攀
1933年 3月	不帰第二峰(唐松沢より)	田口一・伊藤新	初登攀
1933年 4月	鹿島槍・東尾根	田口二・近藤・伊藤新	積雪期初登攀
1933年 7月	劔岳三の窓チンネパリエーションルート	関集三・伊藤収二	
1934年 7月	前穂バットレス	田口二・福田泰	徳沢よりラッシュ
1935年 7月	池の谷劔尾根ドーム	奥山・山口雅	初登攀
1935年 7月	鹿島槍北壁バリエーションルート	喜多豊・植田忠	
1936年 3月	白出沢よりジャン飛弾尾根 天狗よりジャン奥穂縦走	喜多 他	
1936年 7月	鹿島カクネバットレスバリエーションルート	中村成・福田	
1936年 7月	鹿島槍荒沢バットレス	赤松二・関暢	
1936年 7月	劔岳池の谷劔尾根完登	福田・関暢	初登攀
1936年12月 1937年 1月	明神東尾根	赤松・福田・伊藤	
1937年 3月	白馬杓子東壁	山口雅・福田	初登攀
1937年 3月	白馬鎚北山稜	喜多・武田	
1938年 3月	遠見尾根一天狗尾根一鹿島槍ボーラー	中村・赤松・福田・伊藤文・鷲尾・宇尾・福井	甲南として最初のボーラメソッド
1939年 3月	白出沢よりジャン飛弾尾根完登	伊藤文・鷲尾・福井・喜多	1936年より3回のアタックにより成功
1939年 7月	池の谷より小窓尾根 池の谷側バットレス	赤松・小川・福井	初登攀
1940年 7月	北千島ホロムシロ シュムシュ遠征	中村・関・赤松・福田・村上・鷲尾・宇尾	
1941年 3月	不帰第一尾根	伊藤新・小川	初登攀
1941年 3月	鹿島槍・荒沢バットレス	伊藤文・他1名	

(以上福田泰次氏の資料より転載)

1941年 この間、戦争の激化・終戦、等の事情により部活動も停止の止むなきに至った。
 1946年 (個人的山行は続けられたが資料の入手が困難)

以下戦後の部活動は合宿の所在地のみにとどめ詳細は次回にゆずることとする。

47年	春 夏 冬	穂高涸沢 - 北尾根 涸 沢 乗 鞍	56年	春 夏 冬	早月・小窓尾根 涸 沢 早月尾根
48年	春 夏 冬	鹿島東尾根 涸 沢 乗 鞍	57年	春 夏 冬	小窓尾根 (福永隆一君遭難) 劔岳二股 乗鞍・杓子・双子尾根
49年	春 夏 冬	乗 鞍 涸 沢 北鎌尾根	58年	春 夏 冬	乗 鞍 劔岳二股 早月尾根
50年	春 夏 冬	乗 鞍 涸 沢 (新制高校 第1回合宿) 乗 鞍	59年	春 夏 冬	奥大日岳 劔岳二股 乗 鞍
51年	春 夏 冬	乗 鞍 涸 沢 遠見尾根	60年	春 夏 冬	白馬鍾北山稜 劔岳二股 槍ヶ岳—横尾尾根
52年	春 夏 冬	な し 涸 沢 遠見尾根	61年	春 夏 冬	杓子岳東面 劔岳二股 明神東稜—前穂
53年	春 夏 冬	遠見尾根 劔 沢 (大学第1回合宿) (以下大学としての記録) 八方尾根 (中・高・大・合同合宿)	62年	春 夏 冬	杓子双子尾根 穂高・滝谷・奥又白 前穂北尾根 西穂
54年	春 夏 冬	八方尾根・五龍岳 劔 沢 乗 鞍	63年	春 夏 冬	北海道利尻岳 劔岳二股・東大谷 北鎌尾根—横尾尾根
55年	春 夏 冬	杓子双子・白馬主稜 劔岳二股 乗鞍・大天井岳			

V 会 員 短 信



劍
尾
根

伏見 義夫

只今香月会長名をもって近況のおたずねに接したが、本日（3月6日）は偶然にも、私が満七十歳を迎えました誕生日であります。よくも今日まで生きながらえましたことは、全く辱知諸君のご庇護のおかげとひたすら感謝いたしています。目下大阪商業大学と京都女子大学に勤め、昔ながらの地理学を講じています。昨秋は拙稿「上代河内の変遷」を発表いたしましたが目下は引きつづき「中世の大阪平野」について調査を進めています。幸にも健康に恵まれていますので、成就いたします日の近からんことを自から祈っている次第であります。

（初代山岳部長・山岳会名誉会員）

山崎 鉄治

私が甲南を去って新潟に移ったのは昭和15年のことで算えらうともう24年も前のことであり、今年は還暦を迎えて新潟大学でも古顔の一人になりました。私が甲南に在職していた頃は支那事変は始っていましたが、まだまだ良い時代であって、思い出と言えば楽しいことだけが残っており、さまざまな出来事や、いろいろの人がなつかしく思い出されて住時を偲んでいます。

甲南には忘れ得ない好い印象を持っており甲南に職を奉じたことをいつまでも誇りに思っていますが、一番感心していることは先生と教え子の結び付きの強い点と卒業生の美しい母校愛で、これは7年制であったことや生徒数が少なかったことも一因でしょうが、学校を囲む環境に恵まれていたことも見逃す訳には参りません。今でも毎年のように甲南の卒業生が新潟に来ると尋ねて来られ私も大きな楽しみにしています。私は大部分の人の顔も名前も覚えていますから、会えば昨日別れた人のような気がして話が尽きません。こう言うことは他の学校の場合には到底考えられないことです。私は終戦の翌年一度甲南を尋ねて見ましたが、その時でも生徒の白線姿を見ると、知っている生徒に会えはしないかと言う錯覚を起した程親しみを感しました。

この文を書いていると山岳部のメンバーの顔が次々に浮んで来て懐旧の情に堪えません。

私が昔山岳部に関係していたことが子供達に大きく影響しまして、いづれも大の山好きで社会人となった今日でも方々の山に出かけて親を心配させています。しかし甲南山岳部の伝統のように一度も事故を起さないのは、甲南魂が私の子供達にも伝っているのかも知れません。甲南山岳部が大きく飛躍し、我国登山界で大きな地歩を占めるようになったことを影ながら喜んでおり、その発展を祈っております。機会を得たら旧知の方々にお会いしたいと思っています。

す。

(前山岳部々長・山岳会名誉会員)

松 井 武 敏

中部山岳地帯の近くに住みながら雑務に追われて、登山はごぶさたがちですが、甲南の卒業生にお会いすると、山岳部員であった方々のご消息をいつも尋ねては懐しく思っています。3月末からアメリカ、ヨーロッパをまわってくる予定です。甲南時代にきたえた身体と精神で、海外遠征を夢みたりしていますが、なかなか意のままにはなりません。甲南山岳部の発展を祈りあげます。

(前山岳部々長・山岳会名誉会員)

吉 松 二 郎

山岳部40周年おめでとう。私にまで何か書けとの御指名でしたが、高校時代はラグビーや陸上競技をやっており山岳部の創立さえ知らなかった位です。大学を卒業してから昭和5年スキーを始め、冬山から夏山をもやるようになり終戦直後3年程山岳部のスキー練習に乗鞍に附添っていったことがあるので指名にあづかったのかと存じます。その後、大学ラグビー部が出来、その方で忙しく山岳部とも疎遠になりましたが、それでも暇を作っては冬のスキーや夏の山には行っておりましたが、それもここ10年位出かけない様になりました。今冬高校のスキー合宿に恐らくこれが最後になるかも知れないと思い附いて行きました。併し10年ぶりのことスキー用具もちがっており、2日程はもとのカンを取りもどすのにかかり、やっとどうにか滑べれる様になったと思うと、矢張り年のせいか体がいうことをきかなくなりました。それでも毎日は何んとか元気に過しています。

(旧制2回卒業・山岳会名誉会員)

山 本 三 郎

春の日和が心良く感ぜられるようになりました。先輩、現役諸兄には、御元気で御活躍のこととお慶び申し上げます。このたび40周年記念号が発刊されますことは、甲南山岳会の歩みを知るとともに、今後の発展のために大いに役立つものであることを心から期待しております。

大学創立当初、夏山、冬山、春山と、私も重いリュックを背にして、部員の最後尾について歩きましたが、思い出の中には、涸沢で雨に苦しめられたテント生活1週間、杓子尾根で雪眼になって泣き暮した春山合宿、2年続いた劔岳事故救援など、北陸路や信濃路を通るたびに思い出します。漠然とした嬉しい思い出より、苦しんだ当時のことが昨日のことのよう、そしてその時のメンバーが何時までもその時の姿で思い出されます。

一般学生を相手に白馬、立山、木曽駒、火打、妙高等を歩いています。山岳部員と共に過した貴重な経験が、尊い教訓として生きていることを感謝しています。最近山に行く人も多く層も厚くなってきて、所謂岳人と呼ばれる人達は「かもしか」や「雷鳥」のように特定の山に季節外れに集中したり、或は海外に山を求めることが多くなってきましたが、自分達の山が空かん、空びんで一杯になり、道標がとてつもない方向を指しているのを見るとき悲しい気がします。山での小さな親切運動は山を美しく誰からも愛され親しまれるものとなりましょう。

雪の訪れと共に40日間程、信越方面へスキーに出掛けるのが通例ですが、今更上手になろうという慾もなく、ただ雪の上に立って生命の洗濯をしているだけです。1年中白くなる時もなく過している時が最高の御機嫌です。

千曲川の水がぬくもり、麓の木々が芽を出し菜の花が咲き乱れる畑の遠くに、北アルプスの白銀が映える頃は、いよいよ新学年を迎えるのだと気が付くのです。

(前山岳部々長・山岳会名誉会員)

井 上 正 憲

体重90kg高血圧で療養中です。寓居の窓から真白な剣のホル、三の窓チンネを眺める度に若き日のライデンシャフットリッヒな山を想う心がよみがえってきます。(旧制8回卒業)

松 野 茂 雄

甲南山岳部創立40周年を心からお祝い申し上げます。過日久方ぶりで東京甲南山岳会に出席、現役の竹中君を交え若い人達ばかりでビックリしました。創立40年ともなれば、それもそのはず。齢五十になんなんとすれば、当時を偲べば30年前と言う事になりますが、雪や氷や、岩と闘ったのも、ついこの間の様な気がしつつ、ヒマラヤ遠征計画の情熱に聞き入りました。目下三菱化成から出向して三菱モンサント化成に勤務し、一昨年暮から企画部を担当しております。家族は妻の外、聖心女子大生、聖心高校生とこんど武蔵中学に入った坊主を含め総勢5人みな健在、会員、部員諸氏の御健康と会の健全なる発展を心から祈ります。

(旧制9回卒業)

近 藤 実

甲南山岳部40年記念号を出すために、山岳会の在阪諸兄や現役諸君は大変苦勞されたと思う。小生も寄稿を依頼されて、多少の時間をとられたが、ある意味では楽しい作業であり若返りに役立ったと思われる。

今年で私も五十才になり昔風に言えば、人生も終る処だが、仕事の方は案外マメにやっている。子供が大学1年と高校2年で好き勝手な事をやっているが、後5年もすれば片附くから、どこかで呑気な開業でもしようと考えている。昨年春から水野君に強くすすめられ道具まで寄贈を受けてゴルフを始めたが、さっぱり上手にならない。 (旧制9回卒業)

山 口 省太郎

近頃は息子にひかれてスキーに出かけています。又昨年はヨーロッパに出張しましたので、グレンデルワルト、ツエルマット、シモニーを廻って来ました。

グレンデルワルトでは田口一郎氏のお墓にお参りすることができました。

(旧制10回卒業)

伊 藤 収 二

新聞によれば「山の等級制来春に実現か」と言う見出の下に、私達兄弟が初登攀した北穂第一尾根が5級(きわめてむずかしい)となっているのに気をよくした。しかしキリンも老いたればドバに等しく、ロックガーデンの物故者追悼会に出る元気もなかった。東大山の会からも毎冬大山スキー行を誘われるが行ったことはない。今年2月出張のついでに20年ぶりで札幌薄岩スキー場でスキーをはいた。停止回転には不便はないが、スピードには弱いことがわかった。留守宅東京都、仮宅神戸市、勤務地大阪市という三大都市を又にかけての生活は当分つきそう。ゴルフだけは人並にやっているが、松野、奥山、山口雅、水野の諸氏のように上手でない。全国でちがうコースを100以上廻ったこと位がジマンである。 (旧制11回卒業)

武 田 六 郎

お蔭様で元気にやって居りますが雑用に追われています。4月にはロンドンで開催される醸酵関係の学会に出席する予定です。 (旧制13回卒業)

赤 松 二 郎

戦争と共に山とも緑がなくなりと申すのも貧乏ひまなしで兎角するうちに年ばかりくって昔は日曜毎に行ったスキーにも今の大群衆を見てはそれだけでシンドーなって、戦後スキーをしたのは24年、25年、30年の各一度ずつです。今でもやり度いとだけは思いつづけております。

(旧制14回卒業)

鷺 尾 顕

甲南を出て既に24年となったが、山への愛着は甲南時代と少しも変わりません。時間がないため出かけられないのが実情、年に1、2回一般でスキーに行くのが精一杯。甲南のすぐ近くに住みながら仕事に追廻されて山岳会の案内をいつも受けているのに殆んど出席もできずに残念です。仕事はニチボーの二次製品（トレパン・シャツ・ブラウス・レース・メリヤス等）販売を担当、地方代理店へのディーラスヘルプに目下の処忙殺されています。再三原稿の依頼があり簡単な近況で申訳けありませんが、取り急ぎペンを走らせた次第。（旧制15回卒業）

福 田 泰 次

仕事はイモノ屋をやっている。大学を出て三菱重工へ入社以来20年この方金属を溶かしては固めている。この溶かすと言う字は昔は溶かすと言ったがこの方が真実らしい。女房等は鉄をコークスを燃して溶かすのだと言ってもなかなか了解してくれぬ。溶かすと言う以上塩か砂糖の様に水か薬を加えて溶かすと考えてしまうらしい。

戦前は航空機のエンジンを、戦後は自動車のエンジンを作っているが、ともかくこの「溶かして固める」と言う簡単なプロセスがなかなか難しい。学位論文を取るなら熱と流体は扱うなど言われているが、その両方を扱っているのだからかなわない。結局20年この方やっても未だサッパリ分らぬと言うのが正直な所。

毛唐の方では少しは分っているのかと思って見にも行ったが、五十歩百歩と言う所なので、結局アルプス見物の方に主力を置いた。本戦の方の地位は課長、道楽の山登りの方では部長を務めている関係上、年に1、2度はアルプスへ行っている。一寸腰かけのつもりで住んだ京都に早や20年近くも住んでおり、日曜日には頼まれもせぬのに北山、西山に5万分の1の地図の誤りを調査に出掛けているが、大体は誤りがなく「よく調べやがったものだ」と感心して帰って来る始末。そのくせ山以外では歩くのが随分おっくうになってしまい、会社自家製の小型車で走り廻っている。然し自分で作ったものに自分で乗るのはなんとなく頼りなく、とても上高地辺まで出掛けて行かうと言う気になれない。今度部史の一部を書かされエンジニアである小生全く文才なく弱り果てて、技術論文ではないがデーターの羅列に終った事をお詫びします。然し書いている中に色々と昔を思い出し一度昔の連中では是非集まって見たい気持に駆り立てられている。誰か京都に遊びに来る人があったら是非電話をしてみてください。

電話 自宅 西山局 92-2967 会社 86-3111（三菱重工工業京都製作所）（旧制15回卒業）

福 井 実

東京勤めになって6年目になります。何しろ忙しいばかりで皆さんにも失礼しています。よろしくお伝え下さい。山にもスキーにも、（又ラグビーにも）全く御無沙汰で。

（旧制17回卒業）

国 府 三 郎

ヒソクしています。会費は今後共お払い出来ない程ポケットマネーに不自由していますので会から追い出されても仕方ないと思っています。これも池田くんのおかげと感謝しています。

（旧制18回卒業）

熊 谷 治

最近は何どころか年に一度スキー出かけるのがせい一杯の現状で京都に住んでいる関係上諸先輩にもご無沙汰致しております。よろしくお伝え下さい。

（旧制19回卒業）

加 賀 昌 朗

比良の暮雪を望むびわ湖湖畔石山市にある新日本電気大津事業所でバタバタ日を過しています。昔いっしょに山へ行った方々ともう一度いつてみたいと思いますが、仲々実現せず子供が大きくなったらブラブラ行ってみたいと思っている今日此頃です。現役の方の御健闘を祈ります。

（旧制20回卒業）

福 井 享

卒業以来甲南にも山にもすっかり御無沙汰で原稿を書く資格も無くなりましたので近況だけ御報告致します。現在中部電力株式会社本店に勤務、入社以来十有余年になりますが、ずーと名古屋住いです。当社の管内には中部山岳地帯がすべて入り、仕事の都合上アルプスの各川筋にはよく入りますが、白銀の顔を頭上に眺めるだけで卒業後まだ一度もピッケルを持たず残念に思っています。甲南山岳会の例会には出たいと思いつながらもなかなかその機会がなく、皆さんにお会いすることも出来ませんが中部地区の山へ入られるときは名古屋を通過されることと思いますので、ぜひご連絡ください。尚住所が変りましたのでよろしく。

新住所 名古屋市千種区徳川山町5丁目7番2の402)

（旧制24回卒業）

米 山 悦 朗

仕事以外5月頃までスキーで忙しい様でして原稿を書く暇がないと申しております。スキー

には来年は長男を連れて行くと張切っております。

長男、博（35.10.19生） 長女 美保（38.3.23生）皆様によりしくお伝え下さい。（代筆）

（新制4回卒業）

北 方 龍 一

30年に新制5回として卒業して以来、早いもので九星霜まさに一昔にならんとしています。日頃はご無沙汰のしっぱなしで、たびたび合宿報告や山岳会の通知をいただきながら何時も出席の機会にめぐまれず残念です。最近山のはうも仕事の関係で遠ざかってしまい、スキーのみにて、わずかに昔日を偲んでいるありさまで。今年の正月は細野へ入ったのですが、名木山等は雪の影すら無く、したがって、リーゼンコースも全々で、初心者も兎平まで登って来るものだから、リフト等は戦時中の配給所のような光影でした。ケーブルも、朝乗る為には、午前3時頃に整理券をもらわなければならないと言うことでしたが、幸い東急ホテルに、阿部、米山の二先輩が滞在中で専ら、こちらの方で便宜を計ってもらいました。小生も、今年から少々時間的に余裕が出来そうな見通になって来たので、又山もやりたいと思っています。差当、積雪期の単独行は少々無理故、縦走で途切れている、烏帽子——鹿島槍から歩いてみたいと思いますが、平の小屋も、釣橋も、エンピで崩れる砂を堀に入った河原の温泉も黒四ダムの底に沈んだとか。今は渡があるそうですね。住年、この当りは実に岩魚の多い所で、小屋の親父等、一間竿で見るまに4、5尾釣上げて、夕食に喰わしてくれたものです。間もなく、関電の大町トンネルも開放されるでしょう。山の形態も、年々変って、我々の馴染めぬものになっていくのではないかと何故か悲哀を感じます。しかし八方のケーブルや、第一ケルン直下まで通じるリフト等、我々時間的に余裕の無い者にとっては実に有難い面も多々有ります。現在は芦屋市大原町17番地、阪急芦屋マンション21号に起居しておりますので、近くへ御越の折には是非御寄り下さい。 TEL は ③ 0733（直通）です。

（新制5回卒業）

吉 田 哲 史

年明けから広島—東京を往来、大変遅れ申訳けありません。36年5月から広島に住んでおります。仕事の関係で大山、三瓶山へは、たびたび参りますが山の随筆等を読むことで最近はおぼろ釣にこり、四国、山陰、九州方面に足をのばしております。会社の仲間に関学、神大山岳部のOB等もあり、話に華を咲かせております。山の報道をみるにつけ、何卒安全第一にますますのご活躍を祈っております。来広の折は是非お立寄り下さい。（新制6回卒業）

芦 田 匡 平

三洋電機ラジオ事業部技術課勤務。入社して4年、スキー以外山らしい山へも行っていないが一昨年の5月、久しくアイゼンをつけて奥大日岳に登り、劔の峰々をなつかしく見廻して来た。常の日に楢円のボールにエネルギーをはたし、グランドをかけずり廻っている次第。おりあれば又山へさそって下さい。
(新制6回卒業)

牧 野 宏

卒業後3年東京ですごしました。同期の^{ホシ}田中と同じアパートでの共同生活、何だか山の合宿のような生活が続いておりました。ホシにはもっぱらエッセン係をまかせてしまったりで世話をかけすぎたので今春より賄付の寮(越谷市)に入りました。山岳部を劣等生で卒業してからも山の成績はカラケシダメです。尾瀬沼や赤城山のハイキング程度でお茶をにごしています。青白い顔ではカッコ悪いのでこの4月の飛び休や、5月始めに海水浴を始めております。会社の運動会では1500m走ったりしました。勤めは小網という酒、食料品の大間屋に御世話になっております。朝は6時半すぎに寮を出て早起きは三文の徳をしようと勤勉(自称)にやっております。神戸に帰りましたら又、山仲間に入れて下さい。
(新制7回卒業)

竹 原 佑 爾

この度創立40年記念号が発行されますことをお喜び申し上げます。又編集に当られて居られる方々のご苦心を謝しております。小生東京の方で学生生活を送っていた関係上皆様ともつい疎遠になり、久しくご無沙汰して居りますことを申し訳なく思っております。いつの日か皆様と相まみえて、お話しを致したく思っております。甲南山岳会のより一層の発展を祈って居ります。
(新制8回卒業)

Ⅵ 会 員 名 簿



五
龍
岳

い先なしPDF 評価版

い先なしPDF 評価版

い先なしPDF 評価版

い先なしPDF 評価版

い先なしPDF 評価版

編

集

後

記

- この時報は甲南山岳部創立40周年の記念号として上梓されたものです。
- 部がよりよく発展して行くためにはよき伝統を正しく認識して継承することもその大きな要因であるといわれています。永い年月を経て培われて来た甲南山岳部の伝統がこの時報の行間に見出せるなら記念号のもつ意義は非常に大になると思います。
- この観点より編集の重点を戦前の部活動に求め、日本山岳史に残る幾多の輝かしい足跡を当時の部報より抜粋し主な登攀記録として本書の中核としました。
- 当初の予定ではこの登攀記録の思い出を今や社会の第一線で活躍されている諸先輩に現在の時点で執筆していただき過去から現在への変遷を求めたかったのですが、編集子の不勉強のため果せなかったことを申し訳けなく存じております。
- 「部の歩み」は記念号にして初めてできた甲南山岳部々史と言うべきもので、半世紀近くを経た部の流れを見るにつけ今更ながら歴史と伝統の偉大さを知らされる思いがします。
- 山岳寮には例の如く思い出、紀行、雑感等を取り入れました。主な登攀の思い出もこの欄に入れさせていただきました。
- 主要登攀記録は福田泰次氏の労作で前の時報に発表されたものを再録しました。戦後の記録は又後日評価されるべき性格のものでしたので詳細は省略しました。
- 会員短信は全会員のご寄稿を期待し原稿締切も大幅に延期致しましたが、残念乍ら少数のご寄稿に止まりました。本来ならたとえ一行でも全会員の短信が記載できれば、これだけでも記念号としての価値は高くなると思われるのですが……。
- 写真はできれば往時のものと考え、福田泰次氏より貴重なアルバムを拝借いたしました。古さが出すぎてうまく印刷にのらないので断念し、あらためて比較的新しい阿部公義氏の写真を掲載いたしました。
- 山岳部々報創刊号（1927年刊）で創刊の辞を述べられた初代部長伏見義夫先生に40周年号の発刊の辞をたまり、巻頭を飾っていただけましたことは誠に感謝の他はございません。
- 記念号と同時に企画され目下山岳会の全力を挙げて努力中であり、ヒマラヤ遠征計画について少しは触れるべきかと存じましたが、当然近い将来に遠征の成功に伴う記念号が予定されるでありましょうから敢えて今回はとりあげませんでした。
- 記念号としては非常に内容の限定された狭義のものとなった点、気懸りですが総合的なものは来る50周年号にまきたいと思います。
- 編集子といたしましては前に故福永隆一君の追悼号を編集いたしましたいきさつ上、今回もこの大任をお引きうけいたしましたのですが、不勉強の程おおい難く、あまつさえ発刊が著しく遅延いたしました責を深く感じております。
- 終りに臨み創刊号より現在に至る時報（これは唯一のコンプリートセットです）をお借し下さいました香月会長をはじめ諸先輩各位のご援助に対し厚くお礼申し上げます。 （柏 秀樹 新制3回卒業）

甲南学園山岳部々歌（山の歌）

黎明の御空に聳ゆる峯は
瓔珞纏う久遠の姿
連る山脈渺茫として
紺青の空玲瓏に照り
栄と希望に心は躍る
これこそ我等が憧れの山

嗚呼永劫の時の歩みに
変らで立てる無音の峯よ
嵐は去りて白日の下
陽炎燃えて頂上に舞う
我等が叫び虚空に響き
蔽に立つ山岳の霊

静かに夕陽落ち行く辺り
あかがね輝う山端の梢
黄昏漂う谷間の木蔭
星の光の漏るる岩窟
自然を己が揺籃として
彷徨う我等が憩いの褥

